

—茨城県土浦市—

屍替遺跡

—田村・沖宿土地区画整理事業に
— 伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第10集

2007

田村・沖宿土地区画整理組合
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

—茨城県土浦市—

屍替遺跡

— 田村・沖宿土地区画整理事業に
— 伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第10集

2007

田村・沖宿土地区画整理組合
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会



灰替遺跡航空写真



第1号火葬墓



第7号住居跡（鍛冶工房跡）



第7号住居跡（鍛冶工房跡）の鍛冶炉

例 言

- 1 本書は、土浦市田村沖宿土地区画整理事業に伴う、同市沖宿町に所在する尻替遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は沖宿町字尻替2904ほかである。
- 2 調査は田村・沖宿土地区画整理組合の委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。
- 3 本遺跡の調査期間は平成1992（平成4）年2月12日～6月19日で、調査面積は約6,900㎡である。
- 4 発掘調査は関口 満が担当し、調査員として吉澤 悟、胸沢悦郎、調査補助員として星野保則があたった。
- 5 本書の編集は小林孝秀（専修大学大学院）が担当し、関口が補佐した。
- 6 本書の執筆は縄文時代の遺構・土器を福田礼子、石器を窪田恵一、古墳時代の遺構・遺物を黒澤春彦 小松葉子 関口、火葬墓・土壙墓を吉澤、近世以降の遺構と遺物を福田、その他を関口が行なった。
- 7 整理の分担は下記のとおりである。

実録 雨宮瑞生 加藤博文（石器）、関口（縄文時代の土器）、吉澤（火葬墓と土壙墓出土遺物）、黒澤 小松（古墳時代の遺物、近世以降の遺物）

須貝和子 浜田久美子 富田シズエ 小松崎廣子 松川さち子 川田光子 大野美津子
遠藤成江 椎名まさ子

遺構図版作成 関口 小松

遺物図版作成 窪田（石器）、関口（縄文土器）、黒澤 小松（古墳時代の遺構と遺物、近世以降の遺構と遺物）、吉澤（火葬墓と土壙墓）

写真 関口（現地調査） 黒澤（遺物）

- 8 本調査報告書の作成には下記の方々よりご協力・ご助言を賜りました。記して感謝の意を表したい。

茨城県教育委員会 茨城県県南教育事務所 田村沖宿土地区画整理組合（株）川鉄商事
（株）清水建設 穴沢義功 大沢正巳 瓦吹 堅 中山英樹 平井昭二 森本岩太郎

- 9 本遺跡の出土資料や図面などの記録資料は土浦市教育委員会が保管する。本遺跡出土遺物には遺跡の略称としてTO11を記してある。
- 10 本遺跡の遺構・遺物に関わり以下の科学分析を実施している。土壙墓内土壌中のリン酸分析、火葬墓内人骨の鑑定、鍛冶関連遺物の金属学的分析及び放射化分析。
- 11 本遺跡の発掘調査報告書は全11集の予定である。各集共通の事項や考察、科学分析は第11集の総集編に掲載予定である。

凡 例

- 1 尻替遺跡の遺構番号は報告書刊行にあっても基本的に現地調査時に付けたものを踏襲している。一部整理作業の過程で遺構名称を変更したものもある。
- 2 遺跡内の遺構の表記は次のものを用いた。
S I…竪穴住居跡 S B…掘立柱建物跡 S K…土坑 S D…溝跡 S X…竪穴遺構
S E…井戸跡 C T…火葬墓 土墳…土墳墓 P…ピット 炭…炭焼き窯
- 3 土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を用いた。
- 4 各遺構の実測図は原図（20分の1）を使用し、縮尺3分の1を基本としたが、大きさによって2分の1、4分の1を用いた。
- 5 遺構実測図中の標高はすべてm単位で示している。
- 6 遺構実測図中の「K」の表記は攪乱の意味である。
- 7 遺構実測図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。また、接合関係にある遺物は、各々実線で結んだ。
- 8 遺構実測図中の破線は推定線を示す。
- 9 遺構及び遺物実測図中の網掛けの指示は下記のとおりである。
遺構：焼土  粘土  床面の硬化範囲・ピット底面のあたり痕 。
遺物：繊維を含む土器  赤彩  炭化物・煤の付着  黒色処理 。
須恵器  陶磁器の灰釉・透明釉  陶磁器の鉄釉 。
砥石の砥面 。
- 10 遺物実測図の縮尺は3分の1を基本としたが、遺物の大きさにより縮尺を変えたものがある。
- 11 遺物実測図中心線の1点鎖線は回転（復元）実測を示す。
- 12 土器観察表について、図版番号は実測図中の番号である。表中のAは口径、Bは器高、Cは底径を示す。（ ）の数値は現存値であり、[] は回転復元径である。胎土中の半透明・透明の鉱物は石英、不透明・白色の鉱物を長石とした。焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
- 13 色調は原則として外面、内面の順で記してある。
- 14 土器観察表中の備考のNoは実測台帳の通しNoである。

調査者名簿

試掘調査 石川 功 土浦市教育委員会社会教育課
中澤達也 土浦市教育委員会社会教育課臨時職員

発掘調査

調査主任 関口 満 土浦市教育委員会社会教育課

調査員 黒澤春彦 土浦市教育委員会社会教育課

井上敏昭 土浦市教育委員会臨時職員

小松葉子

福田礼子 土浦市教育委員会臨時職員

雨宮瑞生 筑波大学大学院

加藤博文 筑波大学大学院

吉澤 悟 筑波大学大学院

駒沢悦郎 東洋大学大学院

窪田恵一

小林孝秀 専修大学大学院

調査補助員 星野保則 専修大学

事務担当 秋元照子（～H5.3.31）中村博子（H5.4.1～）

事務局 土浦市教育委員会社会教育課（H5.4.1から文化課）

発掘調査参加者（10日以上）

浅川和代 安達浩二 伊勢山こう 岩瀬いま 岩本よし子 大久保さだ江 大槻陽子
大竹きみ子 岡村美樹 小倉はる 貝塚雪枝 加藤博司 川島敏子 川又茂子 倉田俊夫
郡司征子 坂本みつい 桜井久代 清水せつ子 清水たまの 鈴木きみ 鈴木秀雄
鈴木みね 土肥すえ 細野重雄 野口八重子 安田トミエ 横浜長一郎

整理作業参加者（10日以上）

青木光恵 阿部秀子 天谷瑛子 石浜敏子 石山晴美 五十嵐耀子 遠藤成江 大坪美知子
大野美津子 川田光子 小松崎廣子 佐久間郁子 椎名まさ子 島津恵美子 須貝和子
田辺利子 富田シズエ 長嶺道子 中村節子 浜田久美子 松川さち子 村井律子

土浦市遺跡調査会組織 (平成5年度まで)

会 長	永山 正	土浦市文化財保護審議会長
	須田直之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	青木利次	土浦市教育委員会教育長
理 事	茂木雅博	土浦市文化財保護審議会委員
	大塚 博	土浦市文化財保護審議会委員
	雨具 宏	土浦市建築指導課長
	横田紀夫	土浦市耕地課長
	内海崎保生	土浦市耕地課長
	野口幹雄	土浦市区画整理課長
	小川和博	日本考古学研究所
監 事	藤枝 正	土浦市教育委員会教育次長
	二野屏昌男	土浦市教育委員会教育次長
	鶴町喜美雄	土浦市教育委員会教育次長
	瀧ヶ崎洋之	土浦市企画課長
	廣田宣治	土浦市企画課長
幹事長	田中紀夫	土浦市教育委員会教社会教育課長
	福田統太	土浦市教育委員会教社会教育課長
	竹本喜一郎	土浦市教育委員会教社会教育課長
	宮本 昭	土浦市教育委員会文化課長
幹 事	久松一夫	土浦市教育委員会教社会教育課副参事
	岩沢 茂	土浦市教育委員会教社会教育課課長補佐
	加倉井藤雄	土浦市教育委員会文化課主査
	石山淳一	土浦市教育委員会教社会教育課担当係長
	飯村 甚	土浦市教育委員会教社会教育課主幹
	石川 功	土浦市教育委員会文化課主事
	黒澤春彦	土浦市教育委員会文化課主事
	中澤達也	土浦市教育委員会文化課主事
	関口 満	土浦市教育委員会文化課主事
	塩谷 修	土浦市博物館学芸員

目次

口絵1	尻替遺跡航空写真 第1号火葬墓
口絵2	第7号住居跡(鍛冶工房跡)
	第7号住居跡(鍛冶工房跡)の鍛冶炉

例言

凡例

調査者名簿

土浦市遺跡調査会組織

目次

第1章	調査経過	1
第2章	調査	1
第1節	地区設定	1
第2節	基本層序	3
第3節	遺構確認	4
1.	試掘調査及び表土除去	4
2.	遺構調査	4
第3章	遺構と遺物	7
第1節	縄文時代	7
1.	竪穴遺構	7
2.	土坑	9
3.	遺構外出土遺物	11
第2節	古墳時代前期	21
1.	竪穴住居跡	21
2.	竪穴遺構	105
3.	掘立柱建物跡	106
第3節	古墳時代後期	109
1.	竪穴住居跡	109
第4節	平安時代	129
1.	火葬墓	129
2.	土塚墓	136
3.	土坑	139
第5節	近世以降	141

1.	掘立柱建物跡	141
2.	竪穴遺構	141
3.	溝跡	145
4.	井戸跡	148
5.	炭焼き窯跡	154
6.	土坑	155
7.	ピット群	160
第6節	古墳時代以降の遺構外出土遺物	162
第4章	総括	165

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図…………… 2	第31図 第5号住居跡入り口ピット………… 42
第2図 遺跡周辺地形図…………… 3	第32図 第5号住居跡炉…………… 42
第3図 調査エリア図…………… 4	第33図 第5号住居跡出土遺物(1)………… 44
第4図 遺構配置図(古墳時代) …… 5	第34図 第5号住居跡出土遺物(2)………… 45
第5図 遺構配置図(縄文時代・平安時代・ 近世以降) …… 6	第35図 第5号住居跡出土遺物(3)………… 46
第6図 第4号彫穴遺構・出土遺物………… 8	第36図 第6号住居跡…………… 49
第7図 第1・3号土坑…………… 9	第37図 第6号住居跡出土遺物…………… 49
第8図 第1号土坑出土遺物…………… 10	第38図 第7号住居跡・鍛冶炉・鍛冶関連ピ ット・出土遺物…………… 51
第9図 遺構外出土遺物(1) …… 12	第39図 第7号住居跡鍛冶関連遺物出土状況… 52
第10図 遺構外出土遺物(2)…………… 14	第40図 第8号住居跡炉…………… 54
第11図 遺構外出土遺物(3)…………… 15	第41図 第8号住居跡…………… 55
第12図 遺構外出土遺物(4)…………… 17	第42図 第8号住居跡遺物出土状況………… 56
第13図 遺構外出土遺物(5)…………… 19	第43図 第8号住居跡出土遺物(1)………… 57
第14図 第1号住居跡遺物出土状況(1)… 22	第44図 第8号住居跡出土遺物(2)………… 58
第15図 第1号住居跡・炉…………… 23	第45図 第9号住居跡…………… 61
第16図 第1号住居跡遺物出土状況(2)… 25	第46図 第9号住居跡遺物出土状況………… 62
第17図 第1号住居跡出土遺物(1)………… 26	第47図 第9号住居跡出土遺物(1)………… 63
第18図 第1号住居跡出土遺物(2)………… 27	第48図 第9号住居跡出土遺物(2)………… 63
第19図 第1号住居跡出土遺物(3)………… 28	第49図 第10号住居跡…………… 66
第20図 第2号住居跡…………… 31	第50図 第10号住居跡遺物出土状況………… 67
第21図 第2号住居跡遺物出土状況………… 32	第51図 第10号住居跡出土遺物(1)………… 68
第22図 第2号住居跡貯蔵穴…………… 32	第52図 第10号住居跡出土遺物(2)………… 69
第23図 第2号住居跡出土遺物…………… 33	第53図 第10号住居跡出土遺物(3)………… 70
第24図 第3号住居跡 …… 34	第54図 第12号住居跡…………… 72
第25図 第4号住居跡炉2…………… 35	第55図 第12号住居跡出土遺物…………… 73
第26図 第4号住居跡・貯蔵穴…………… 36	第56図 第13号住居跡…………… 75
第27図 第4号住居跡遺物出土状況・掘り方… 37	第57図 第13号住居跡遺物出土状況………… 76
第28図 第4号住居跡出土遺物…………… 38	第58図 第13号住居跡出土遺物(1)………… 77
第29図 第5号住居跡…………… 41	第59図 第13号住居跡出土遺物(2)………… 78
第30図 第5号住居跡遺物出土状況………… 42	第60図 第13号住居跡出土遺物(3)………… 79

第61図	第15号住居跡・遺物出土状況	82	第94図	第17号住居跡出土遺物(2)	124
第62図	第15号住居跡出土遺物(1)	83	第95図	第20号住居跡竈	125
第63図	第15号住居跡出土遺物(2)	84	第96図	第20号住居跡	126
第64図	第16号住居跡	85	第97図	第20号住居跡出土遺物	127
第65図	第18号住居跡・遺物出土状況	87	第98図	第1号火葬墓	130
第66図	第18号住居跡出土遺物	88	第99図	第1号火葬墓出土遺物(1)	131
第67図	第19号住居跡・遺物出土状況	89	第100図	第1号火葬墓出土遺物(2)	132
第68図	第19号住居跡出土遺物(1)	91	第101図	第2号火葬墓	133
第69図	第19号住居跡出土遺物(2)	92	第102図	第2号火葬墓出土遺物	134
第70図	第19号住居跡出土遺物(3)	93	第103図	第3号火葬墓	136
第71図	第22号住居跡・遺物出土状況	97	第104図	第3号火葬墓出土遺物	137
第72図	第22号住居跡出土遺物	98	第105図	第1号土城墓・出土遺物	138
第73図	第23号住居跡・遺物出土状況	100	第106図	第8号土坑・出土遺物	139
第74図	第23号住居跡出土遺物(1)	101	第107図	第3号掘立柱建物跡・第3号竪穴遺構・楕列	142
第75図	第23号住居跡出土遺物(2)	102	第108図	第2号竪穴遺構・出土遺物	144
第76図	第24号住居跡・竈	103	第109図	第1・3号溝跡	145
第77図	第24号住居跡出土遺物	103	第110図	第2・4号溝跡・出土遺物	147
第78図	第25号住居跡	104	第111図	第1号井戸跡	148
第79図	第1号竪穴遺構・出土遺物	106	第112図	第1号井戸跡遺物出土状況	149
第80図	第1・2号掘立柱建物跡・出土遺物	107	第113図	第1号井戸跡出土遺物(1)	150
第81図	第3a号住居跡・遺物出土状況	110	第114図	第1号井戸跡出土遺物(2)	151
第82図	第3a号住居跡竈	111	第115図	第1号井戸跡出土遺物(3)	152
第83図	第3a号住居跡出土遺物	111	第116図	第1号井戸跡出土遺物(4)	153
第84図	第11号住居跡竈	113	第117図	第1号炭焼き窯	154
第85図	第11号住居跡・遺物出土状況	114	第118図	第2号炭焼き窯	155
第86図	第11号住居跡出土遺物(1)	115	第119図	第6・14・22～28・45号土坑・出土遺物	156
第87図	第11号住居跡出土遺物(2)	116	第120図	第29～35号土坑・出土遺物	157
第88図	第14号住居跡竈	118	第121図	第36～44号土坑・出土遺物	158
第89図	第14号住居跡	119	第122図	ビット群	161
第90図	第14号住居跡出土遺物	120	第123図	古墳時代以降の遺構外出土遺物(1)	163
第91図	第17号住居跡竈	121	第124図	古墳時代以降の遺構外出土遺物(2)	164
第92図	第17号住居跡・遺物出土状況	122			
第93図	第17号住居跡出土遺物(1)	123			

写真図版

- P L 1 尻替遺跡発掘調査航空写真
- P L 2 尻替遺跡調査前状況（国土地理院1961年撮影航空写真）、試掘調査状況
- P L 3 第4号堅穴遺構、第1号土坑、第3号土坑
- P L 4 第1号住居跡、第1号住居跡遺物出土状況
- P L 5 第1号住居跡土器埋設炉、第1号住居跡遺物出土状況、第1号住居跡間仕切り溝
- P L 6 第2号住居跡、第4号住居跡
- P L 7 第4号住居跡遺物出土状況、第5号住居跡
- P L 8 第5号住居跡土器埋設炉、第5号住居跡入り口ビット土層、作業風景
- P L 9 第6号住居跡、第7号住居跡
- P L 10 第7号住居跡鍛冶炉内土層、第7号住居跡鍛冶関連ビット、第7号住居跡鍛冶炉等
- P L 11 第8号住居跡、第8号住居跡遺物出土状況
- P L 12 第9号住居跡、第9号住居跡遺物出土状況
- P L 13 第10号住居跡、第12号住居跡
- P L 14 第13号住居跡、第13号住居跡遺物出土状況
- P L 15 第15号住居跡、第16号住居跡
- P L 16 第18号住居跡、第19号住居跡
- P L 17 第22号住居跡、第23号住居跡
- P L 18 第24号住居跡、第24号住居跡土器埋設炉
- P L 19 第1号掘立柱建物跡、第2号掘立柱建物跡
- P L 20 第2号掘立柱建物跡柱穴土層、第1号堅穴遺構遺物出土状況、作業風景
- P L 21 第3a号住居跡、第3a号住居跡遺物出土状況
- P L 22 第11号住居跡、第11号住居跡遺物出土状況
- P L 23 第11号住居跡遺物出土状況、第11号住居跡遺物出土状況、第11号住居跡竈
- P L 24 第14号住居跡、第17号住居跡
- P L 25 第20号住居跡、第20号住居跡竈
- P L 26 第1号火葬墓土層、第1号火葬墓遺物出土状況、第2号火葬墓土層
- P L 27 第2号火葬墓遺物出土状況、第3号火葬墓土層、第3号火葬墓遺物出土状況
- P L 28 第1号土壙墓、第1号土壙墓遺物出土状況、第8号土坑遺物出土状況
- P L 29 第3号掘立柱建物跡・横列、第2号堅穴遺構、第3号堅穴遺構
- P L 30 第1号井戸跡、第33号土坑遺物出土状況、第1号炭焼き窯
- P L 31 第1号土坑出土土器、第4号堅穴遺構及び遺構外出土土器（1）、遺構外出土土器（2）
- P L 32 遺構外出土土器（3）、遺構外出土石器、遺構内及び遺構外出土石器
- P L 33 第1号住居跡出土遺物（1）
- P L 34 第1号住居跡出土遺物（2）、第2

- 号住居跡出土遺物
- P L 35 第4号住居跡出土遺物、第5号住居跡出土遺物 (1)
- P L 36 第5号住居跡出土遺物 (2)、第6号住居跡出土遺物、第7号住居跡出土遺物、第8号住居跡出土遺物 (1)
- P L 37 第8号住居跡出土遺物 (2)、第9号住居跡出土遺物、第10号住居跡出土遺物 (1)
- P L 38 第10号住居跡出土遺物 (2)
- P L 39 第12号住居跡出土遺物、第13号住居跡出土遺物 (1)
- P L 40 第13号住居跡出土遺物 (2)
- P L 41 第13号住居跡出土遺物 (3)、第15号住居跡出土遺物 (1)
- P L 42 第15号住居跡出土遺物 (2)、第18号住居跡出土遺物、第19号住居跡出土遺物 (1)
- P L 43 第19号住居跡出土遺物 (2)、第22号住居跡出土遺物
- P L 44 第23号住居跡出土遺物、第24号住居跡出土遺物、第1号堅穴遺構出土遺物、第1号掘立柱建物跡出土遺物、第2号掘立柱建物跡出土遺物
- P L 45 第3a号住居跡出土遺物、第11号住居跡出土遺物 (1)
- P L 46 第11号住居跡出土遺物 (2)、第14号住居跡出土遺物、第17号住居跡出土遺物 (1)
- P L 47 第17号住居跡出土遺物 (2)、第20号住居跡出土遺物、第1号土墳墓出土遺物、第1号火葬墓出土遺物 (1)
- P L 48 第1号火葬墓出土遺物 (2)、第2号火葬墓出土遺物、第3号火葬墓出土遺物
- P L 49 第2号堅穴遺構・第2号溝跡出土遺物、第1号井戸跡出土遺物 (1)
- P L 50 第1号井戸跡出土遺物 (2)、第27号土坑出土遺物、第33号土坑出土遺物

第1章 調査経過

1989（平成元）年

3月から4月にかけて本事業に関わる試掘調査を実施。尻替遺跡部分については4月19日に調査を行なう。調査の結果、古墳時代の住居跡や溝跡などが確認された。

1992（平成4）年

2月12日 調査を開始する。遺構確認のための精査を行なう。

2月26日 調査区内に基準杭の設置を行なう。

3月3日 確認された遺構の検出を開始する。調査区北側の遺構から着手する。

3月16日 古墳時代前期の第4号住居跡覆土から鍛冶関連遺物が出土。

3月19日 古墳時代前期の第7号住居跡の床面から鍛冶炉などが確認された。

3月25日 穴沢義功氏が来訪し、鍛冶関連遺構の調査方法について指導を受ける。

3月31日 第1号火葬墓の調査に伴って鉄製鋤先が埋納されていることが判明。

4月21日 第7号住居跡の床面に50cmのメッシュを組み、鍛冶関連微細遺物の検出のため床面土壌のサンプリングを行なう。

5月20日 古墳時代後期の第14号住居跡床面は粘土層中に作られていた。この頃以降、近世以降の遺構を主体的に調査する。

6月10日 遺跡の航空撮影を行なう。

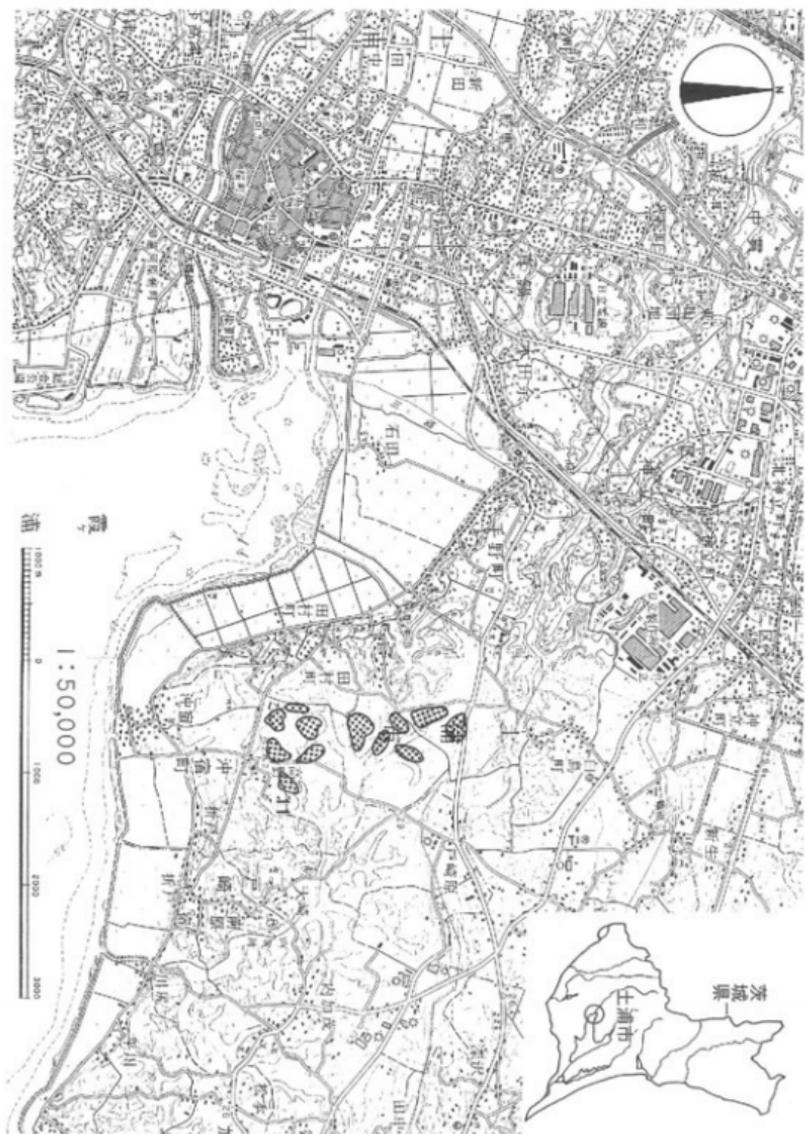
6月19日 調査終了となる。

8月19日 発砲ウレタンを用いて第7号住居跡床面の鍛冶炉の取り上げを行なう。

第2章 調査

第1節 地区設定

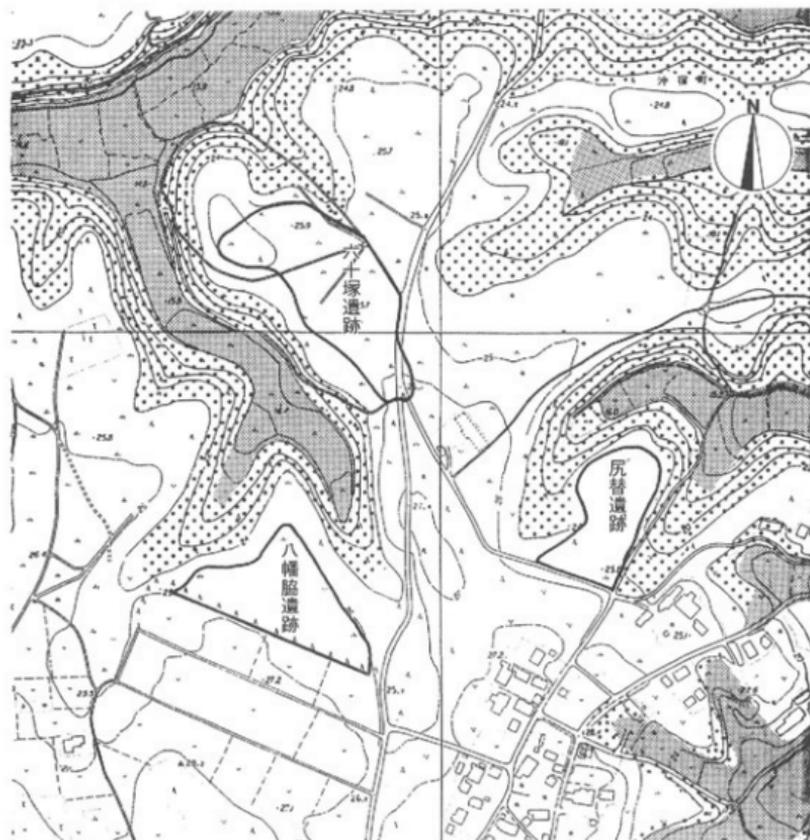
発掘調査では日本平面直角座標を用い調査地区を設定した。基準杭は調査開始時に20m間隔で設定し、この大グリッドを4m間隔の小グリッドに分割して用いた。先の大グリッドについては特に名称を付してはいない。小グリッドの名称はアルファベットと算用数字を用い、西から東へA・B・C・・・、北から南へ1・2・3・・・とし、「A-1区」のように呼称した。そして、「B-25区」は日本平面直角座標第Ⅳ座標系、X=8,880m軸、Y=38,600m軸である。



第1図 遺跡位置図 (国土地理院発行 1/50,000 に加筆)

第2節 基本層序

当遺跡は細尾根状の台地に占地しており、台地上の平坦部と傾斜地からなる。そのため、台地上の基本的な層位は、上層に黒褐色から暗褐色の表土（耕作土）が約30～40cm程堆積し、その下に関東ローム層が見られ、粘性の強いローム層や粘土層に至る。そして、台地の傾斜地では関東ローム層はほとんど見られず、表土下に粘性の強いローム層や粘土層が見られた。当遺跡では、表土下の関東ローム層上面や粘土層上面が遺構確認面となった。そして、台地上平坦部でも場所によっては関東ローム層がほとんど存在しない状況が確認されている。



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

谷底平野
 傾斜面

第3節 遺構確認

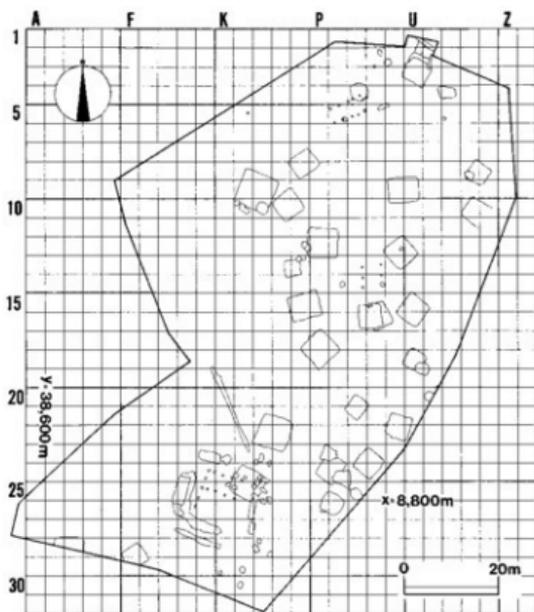
1. 試掘調査及び表土除去 (PL2)

1989 (平成元) 年4月19日に重機による試掘調査を実施した。調査トレンチは、尾根状の台地中央部におよそ南北方向でトレンチを1本設定し、遺構確認を行なった。トレンチの規模は、幅は1.5m、長さ110m、深さ30cm程度であった。遺構の確認面は関東ローム層上面を基本とした。調査結果、トレンチの南側で住居跡や溝跡と思われるものが確認され、住居跡覆土からは土玉が数多く出土した。本調査にあたっては、当遺跡の調査範囲には台地平坦部に傾斜部も若干加えている。表土除去は重機を用いて行なった。

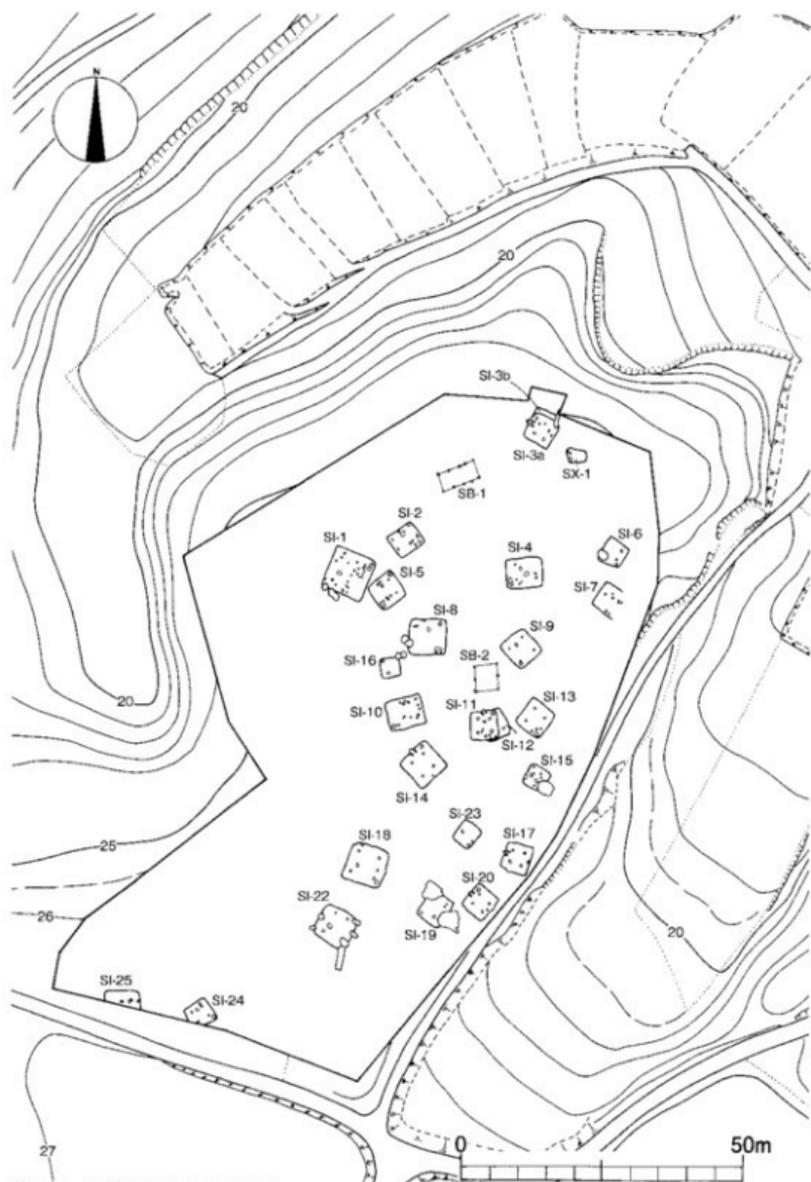
2. 遺構調査

住居跡の調査は、主軸方向を勘案して土層観察用ベルトを十字に設定して、遺物や床面を検出する方法を原則とした。住居跡内の地区設定は十字のベルトを基に4分割し、時計回りに1~4区とした。土坑などについては長軸方向で半載することを基本とした。床面や底面などの検出作業は覆土の変化や遺物の出土

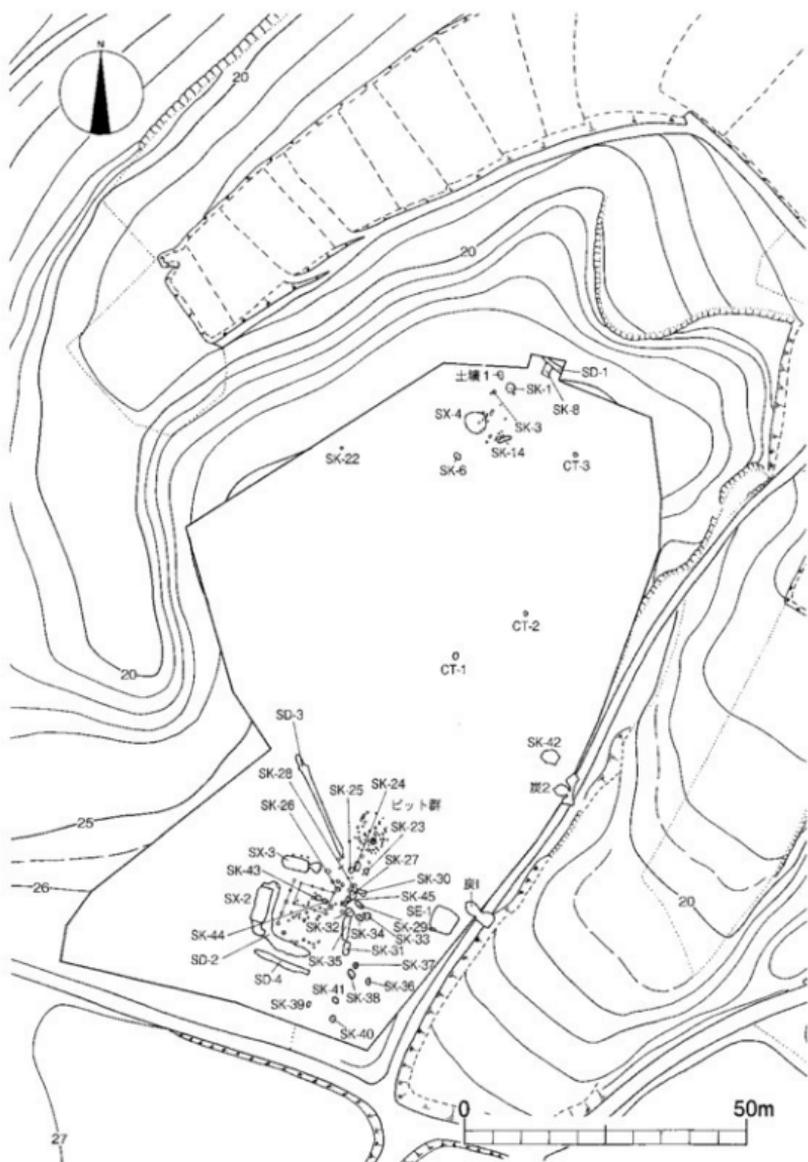
状況に注意して掘り下げを行なった。土層観察は色調、含有物の種類と量、締り・粘性などを観察し記録した。土層観察ベルトを除去した後、遺物の出土状況を写真や図面で記録した後、遺物の取り上げを行なった。その後、竈、柱穴、貯蔵穴などの付属施設を調査して完掘した後、写真や図面などで記録した。写真撮影は、ローリングタワーや脚立を用いて35mmカメラを基本として撮影し、補助的に120mmカメラも用いた。カメラのフィルムは35mmモノクロ・リバーサル、120mmモノクロを使用した。



第3図 調査エリア図



第4図 遺構配置図(古墳時代)



第5図 遺構配置図（縄文時代・平安時代・近世以降）

第3章 遺構と遺物

灰替遺跡は標高25~26mの台地上及び緩傾斜地に位置し、西方に八幡脇遺跡、北方に六十塚遺跡が存在する。本遺跡からは縄文時代の竪穴遺構や土坑、古墳時代前期や後期の竪穴住居跡25軒（内1軒は鍛冶工房跡）、平安時代の火葬墓や土墳墓、近世の掘立柱建物跡や竪穴遺構などが検出されている。検出された遺構・遺物の中心的な時期は古墳時代前期である。

第1節 縄文時代

縄文時代の遺構として竪穴遺構が1基と土坑が検出されている。

1. 竪穴遺構

第4号竪穴遺構〔SX-4 (JISK-5)〕(第6図 P L 3・31・32)

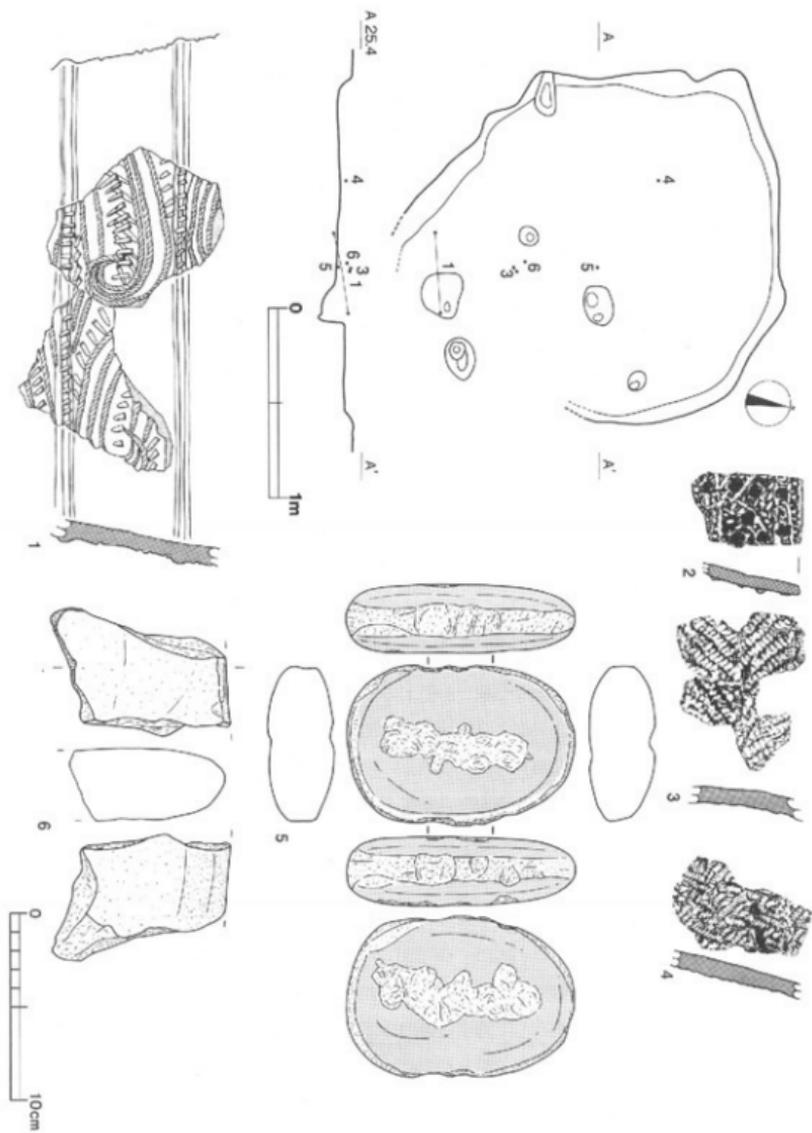
位置 R-4区より発見された。

形状・規模 4.0×3.65mの不整形円で、壁高は10cmを測る。床面はやや軟質、ピットは6基発見されたが配置が不規則で明瞭な柱穴を特定し難く、深さは17~57cmであった。

出土遺物 復元可能な土器が1点、破片は3点、石器が2点出土している。1は復元土器で胴部中位片である。遺構南側より90cm程離れて出土し、2片が接合した。沈線を沿わせた隆帯文を巡らせ、その間に3条の撚紐を渦巻き状に押圧する。渦巻き文間の空白部に半截竹管状工具による刺突を充填し、隆帯文上にも連続させる。2は角頭状の口唇部を呈し、口唇部直下には刺突を連続する。口縁と平行に沈線を巡らせ、この間を斜行文と刺突で充填し円形貼付文を付す。平行沈線上には円形竹管文と円形貼付文を交互に連続させる。3は0段多条の単節縄文を羽状に施文する。4は直前段合撚か。1~4は胎上に繊維を混入する。

5は磨石類で遺構のほぼ中央部底面直上より出土した。両平坦面に集中敲打による凹みと擦痕を有す。側縁部も全周にわたり敲打痕が見られ、側縁部3面に集中敲打による凹みが観察された。形状は楕円形で大きさは12.0×8.5×3.5cm、重さ475g、石材は安山岩である。6は石皿の一部で片面が皿状に凹む。大きさは9.0×5.5×3.8cm、重さ223gで石材は砂岩である。

所見 当遺構は当初第5号土坑として調査を開始したが、その形状が平坦な底面を有し柱穴状のピットも確認されたことから、竪穴遺構として扱った。出土土器より前期前半に比定される。



第6图 第4号竖穴遺構・出土遺物

第4号竖穴遺構出土石器

図版No.	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
5	磨石環	SK-5Y	120	8.5	3.5	475	安山岩	石17
6	石皿	R-4区	90	5.5	3.8	223	砂岩	石27

2. 土坑

調査区北側より2基発見された。

第1号土坑〔SK-1〕(第7・8図 PL3・31)

位置 T-2区より発見された。

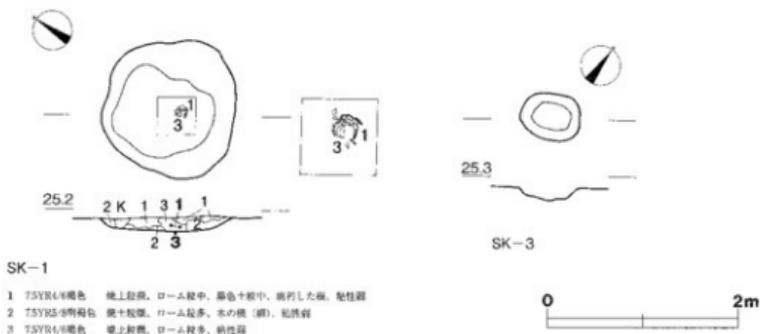
形状・規模 平面形は不整形円形152×147cm、深さ16cmを測る。坑底は平坦で壁はわずかに外傾する。坑底、壁はやや軟質であった。

覆土 3層に分層された。遺物は2・3層中より出土している。

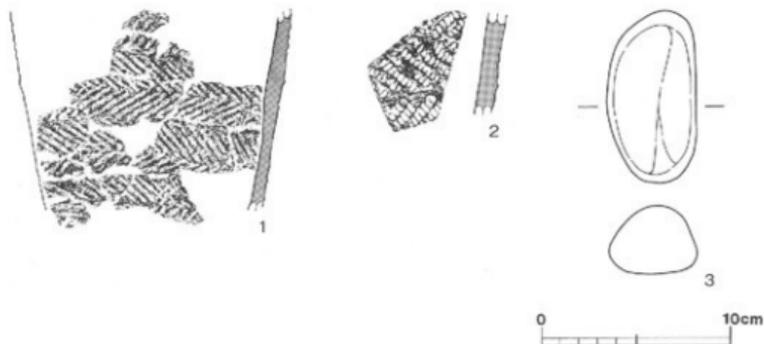
出土遺物 1は胴部片で約1/4残存し復元可能であった。やや薄手の土器である。0段多条の単節縄文で羽状構成を持つ。その出土状況は坑底中央よりやや南側で出土した。全体として輪切りにした土器胴部を正位に置いた状態で検出された。同一個体の口縁部や底部などは出土していない。2も1と同様の施文となるが同一個体ではない。1・2は胎土に繊維を含む。

3は1の土器中から直立して出土した円礫で、擦痕等が見られない自然礫である。形状は楕円形で、大きさは9.1×4.7×3.7cm、重さ236g、石材は砂岩である。

所見 当遺構は浅い皿状の底面を持つ土坑である。底面に土器胴部が置かれ、その中には自然礫が意図的に入れられたと考えられる。どのような意図を持ってこのような行為が行なわれたかは不明である。出土土器から前期前半に相当する遺構と思われる。



第7図 第1・3号土坑



第8図 第1号土坑出土遺物

第1号土坑出土遺物

図版No	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
3	礎	SK-1	9.1	4.7	3.7	236	砂岩	石40

第3号土坑〔SK-3〕(第7図 P L 3)

位置 S-2・3区より発見された。

形状・規模 平面形は円形で61×48cm、深さ13cmを測る。坑底は多少の起伏が見られ壁はわずかに外傾する。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 出土遺物がないが覆土の状況から縄文時代の土坑と判断した。

3. 遺構外出土遺物

a 縄文土器

遺構外からの出土は約600点であった。各群の内容と量比は下記のとおりである。

- 第1群土器 縄文時代前期前半の土器・・・・・・・・・・・・・・・・(36.2%)
- 第2群土器 縄文時代前期末葉の土器・・・・・・・・・・・・・・・・(57.3%)
- 第3群土器 縄文時代中期前半の土器・・・・・・・・・・・・・・・・(0.2%)
- 第4群土器 縄文時代中期後半の土器・・・・・・・・・・・・・・・・(0.5%)

第1群土器 (第9図 P L 31)

縄文時代前期前半の花積下層式・岡山式に相当する土器である。遺構が当該時期に相当するため、遺構検出グリッドより多く出土している。調査区北半の東側からもまとまって出土した。文様から以下の2類に分類を行なった。すべて胎土に繊維が混入する。

第1類土器 撚紐の押捺により文様が描かれるもの。(1)

第4号竪穴遺構出土土器と同様の文様である。数条の撚紐が渦巻き状に押圧され中心の空白部に半截竹管状工具による刺突が連続する。

第2類土器 直立して立ち上がる器形で、地文にループ文、羽状縄文、付加条などの縄文が多用されるものを一括する。器形と文様により以下のA～Eに分類を行なった。

A. 集合沈線による口縁部文様帯を有するもの。(2・3)

2・3は同一片である。口唇下に刺突列が連続する。集合沈線による鋸歯状文が巡っており、下半は0段多条の単節RL縄文が施文される。2は補修孔が穿孔される。

B. ループ文が施文されるもの。(4・5)

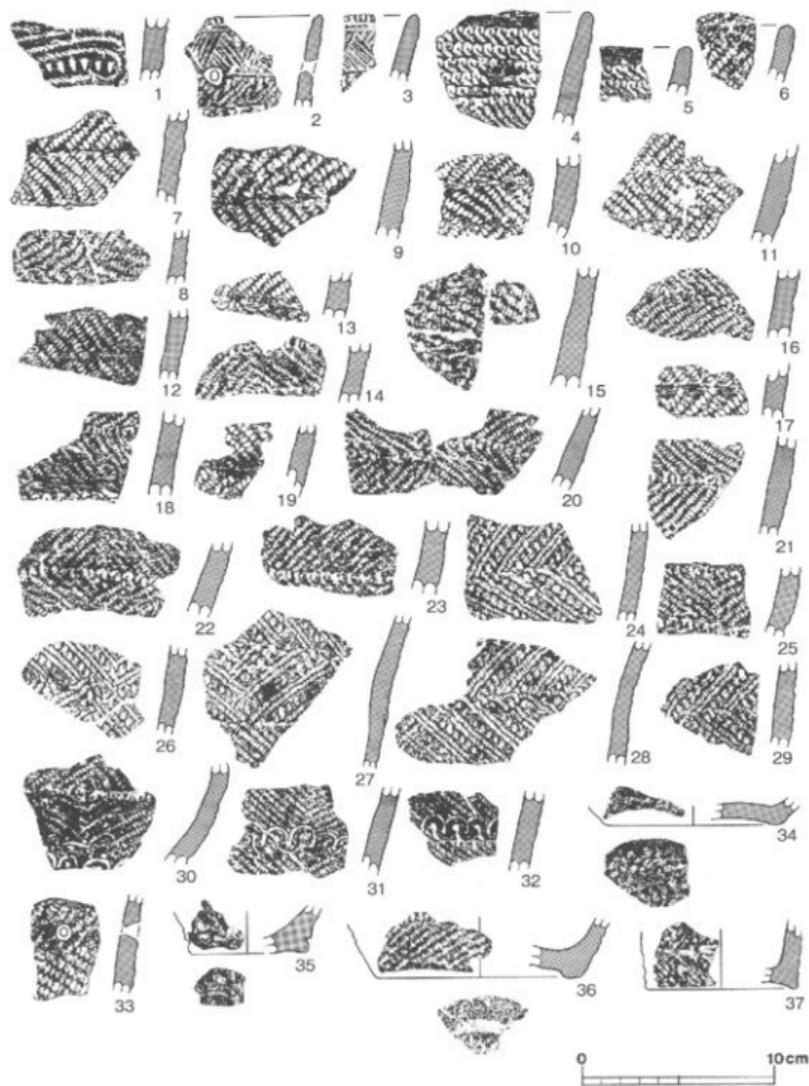
ともに口縁部で、口唇直下に狭い無文帯を有し、多段にわたるループ文が施文される。4は0段多条の単節RL縄文、5は0段多条の無節L r 文。

C. 羽状縄文が施文されるもの。(6～11・13～33)

6のみが口縁部でほかは胴部片である。6は口唇部に縄文が見られ、胴部は単節縄文が羽状施文される。7～11・14～16・18・20～23・25は0段多条の単節縄文が羽状施文される。16・18・20～23・25は結束される。14・18・20・22は羽状縄文が菱形構成となる。14は20～22・25と同一片と思われる。24はL_R^LとR_L^Rを結束したものである。26～29は同一片である。26・27は菱形構成となる。30～32は0段多条の単節縄文が羽状施文され、30は結束で半截竹管状工具によるコンパス文が横位に1条巡る。30は菱形構成となる。33も0段多条の単節縄文で、補修孔が穿孔される。

D. 斜縄文が施文されるもの。(12)

1点のみの出土である。0段多条の単節縄文が施文される。



第9圖 遺構外出土遺物(1)

E. 底部を一括する。(34~37)

34は外面と底面に縄文が施文されるが判然としない。0段多条の単節縄文か。底面は上げ底状である。35は外面0段多条の単節RL、底面にも圧痕が観察されるが原体は不明である。36・37は外面0段多条の単節縄文の結節で、36は底面が上げ底となり、原体不明の圧痕が観察された。37も上げ底で底面は無文、直立する器形である。

第2群土器 (第10・11図 P L32)

縄文時代前期末葉の興津式・粟島台式などに相当する土器である。本群は調査区から最も多く出土し、特に北半部からまんべんなく出土した。器形と文様から次の4類に分類を行なった。

第1類土器 貝殻文が施文されるものを一括する。文様によりA・Bに二分した。

A. 縄文原体側面圧痕と貝殻文が組み合わされて描かれるもの。(第10図1・第11図60)

1は口縁部は約1/6、胴部中位まで残存する。口縁部が外反し胴部が緩やかに膨らむ。文様帯は口縁部と胴部に二分される。口縁部文様帯は縄文原体側面圧痕で弧線と斜行文が描かれる。斜行文に隣接し細沈線が引かれているのは側面圧痕の下書きであろうか。斜行文の下方空白部には指頭痕状の圧痕や、頸部にはヘラ状工具による三角文が見られた。胴部はアナグラ属の貝類腹縁による波状文が施文され、その上に無節の結節縄文が施文される。60は同一片である。

B. 貝殻文が施文されるもの。(第11図54~59)

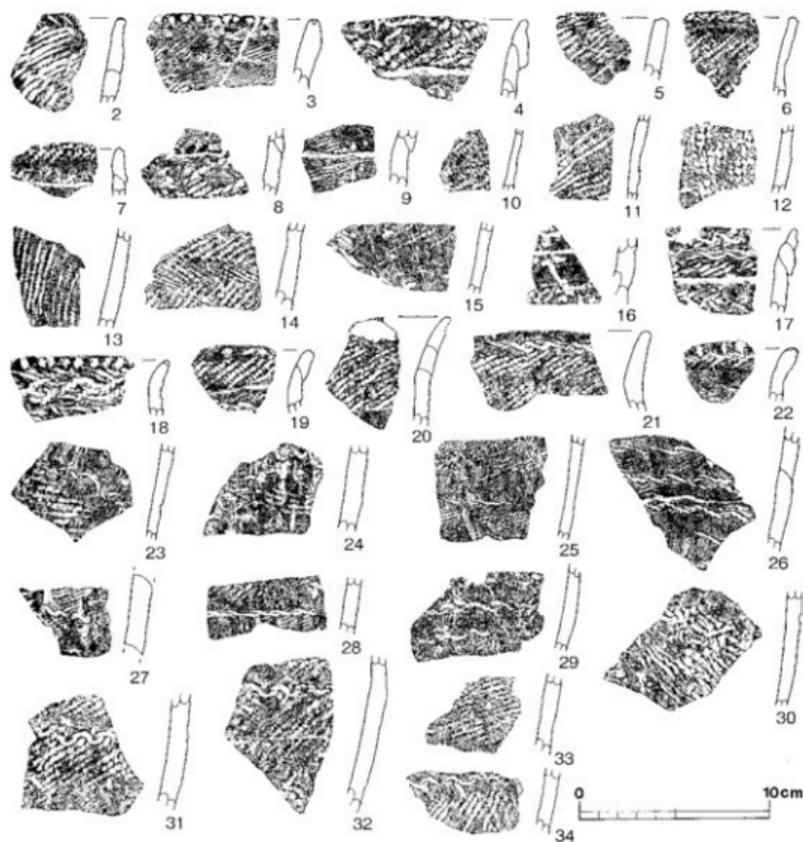
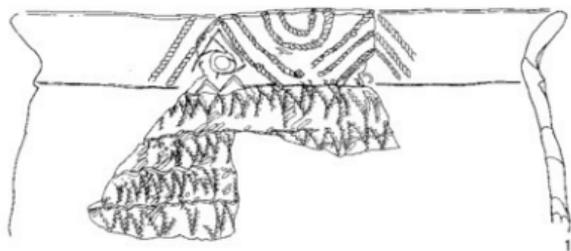
54・55は口縁部で、54は波状縁である。54は角頭状を呈する口唇部で外反気味の器形となり、貝殻腹縁による波状文が施文される。55は丸棒状の口唇部端に刻文が施文される。刻文下は貝殻腹縁を縦位に押捺する。

56~59は胴部片である。56は有段状を呈し貝殻腹縁を横位に押捺する。57~59も同様の文様が施文され、59は縦位にも押捺される。

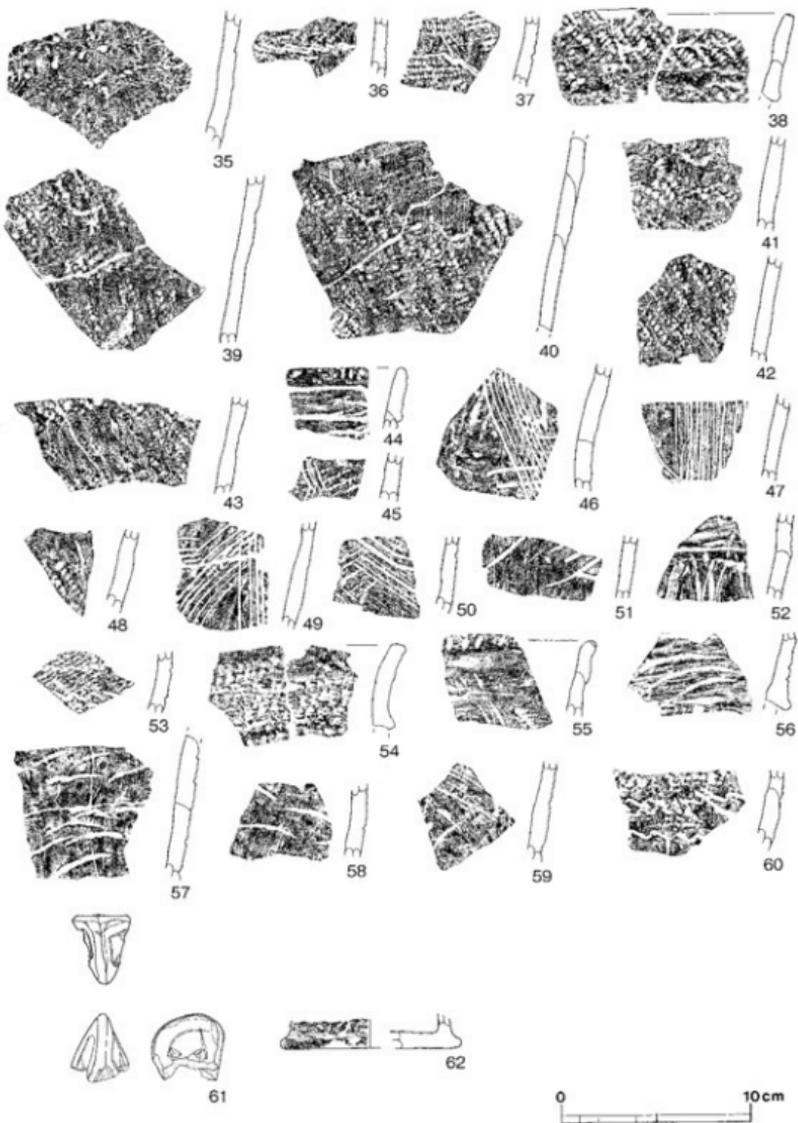
第2類土器 多様な縄文が施文されるものを一括する。原体の種類により次のA~Dに分類を行なった。

A. 斜縄文が施文されるもの。(第10図2~5・7~10・16・19・20)

2~5・7・18・19は口縁部である。2のみ波状縁で口唇部に刻文を施し、無節LRが施文される。3は口唇部端に竹管状工具による刺突を連続させ、無節LRが施文される。4の口縁部は有段状となり、0段多条の単節LRである。5は角頭状の口唇部を呈し、0段多条の単節LR縄文が口唇部にも施文され、裏面は平滑に磨かれる。7の口縁部は有段状であり、単節LR縄文が施文される。器形はいずれも直立気味である。19・20は先端の尖る口唇部で、19は口縁部が有段状で、単節RLが施文される。20は口唇部が刺離し、無節LRが施文される。ともに器形はやや外反気味である。



第10圖 遺構外出土遺物 (2)



第11図 遺構外出土遺物 (3)

8・9は有段状を呈する口縁部直下の破片と思われる。ともに無節LRが施文され、8は0段多条と思われる。10は薄手である。16は0段多条の単節LRが施文され、上方は原体押圧であろう。

B. 羽状縄文が施文されるもの。(第10図14)

胴部破片で0段多条の単節縄文による結束である。

C. 結節縄文が施文されるもの。(第10図17・18・22~32・34、第11図36・37・39~43・53)

17は先端の尖る口唇部を呈し、器形は直立する。口唇部に縄文原体が押圧され、口縁部は有段状を呈し、胴部は無節RIが施文される。22も平縁で丸棒状の口縁部がやや外反する。口唇部は刻文状に縄文が施文される。縄文は単節RLと思われる。

23・25・27・28は無節Lrで、23は0段多条か。24・30は無節RIである。31・32・36・37は0段多条の単節RLである。36と37は同一片と思われる。34は0段多条の単節RLである。26は結節が多段にわたる。40~43は同一片と思われる。単節RLの結節で、43は外面に整形時のケズリが残される。裏面はタテミガキされる。

D. 異条縄文が施文されるもの。(第10図6・11~13・15・21・33、第11図38)

6・20・21・38は口縁部である。6は角頭状の口唇部を呈し、端部に縄文が施文される薄手の土器である。20は口唇部直下が剥落しており、下半は無文となる。21は丸棒状の口唇部を呈し、胴部は異条縄文の結束と思われる。38は口唇部の端部に刻文を有し、口縁部は有段状となる。6・38は直立気味、21は外反する器形である。

11・12・15は薄手の胴部破片である。

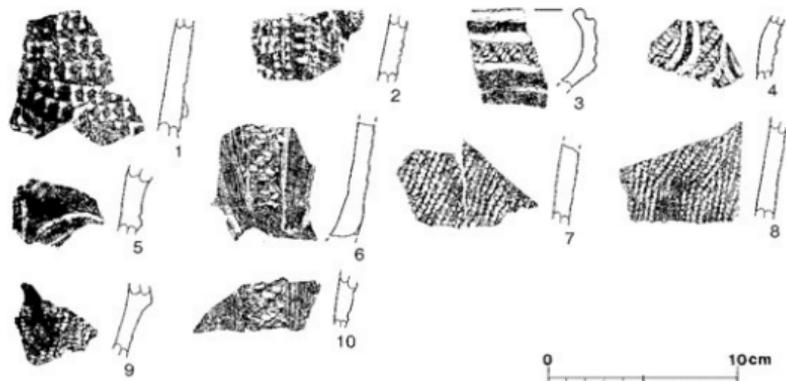
第3類土器 沈線文・条線文が施文されたもの。(第11図44~52)

44は平縁である。丸棒状の口唇部を呈し、器形は直立する。地文は無文で沈線により窓状区画が描かれ、区画下は有段状を呈する。窓状区画が閉じる側にだけ口唇部刻文が見られた。

45・48は地文縄文である。45は単節LRで半截竹管状工具による鋸歯状文が縦位に描かれる。48は単節RLで沈線文が垂下し無文帯を形成しているようである。46は集合沈線による曲線文が描かれ、沈線が一部交差する。47は垂下する集合沈線に対向して弧状文が描かれ、裏面はタテミガキがなされる。49も同様の文様となろう。50は集合沈線による鋸歯状文、51は1本引きの沈線文で斜行文が描かれ、裏面はタテミガキがなされる。52は対弧状文の後に沈線文が描かれる。

第4類土器 把手部・底部である。(第11図61・62)

61は把手部で頂部内側の幅の広い面に沈線による区画文が描かれ、三角刺突文が施文される。62は無文で底面は良好に磨かれる。底面との境に刻文がわずかに見られ、胎土に石英・雲母を多量に混入する。



第12図 遺構外出土遺物(4)

第3群土器(第12図1・2)

縄文時代中期前半の阿玉台式に相当する土器で、量的に最も少ない時期である。調査区北半より散発的に出土するだけであった。

いずれも胴部片である。1は弧状の隆帯文が貼付され、地文に半截竹管状工具による押し引き文が連続する。2は垂下する隆帯文に接して弧状の隆帯文が貼り付けられ、1同様に半截竹管状工具による押し引き文が連続する。ともに胎土に石英と雲母を多量に混入していた。

第4群土器(第12図3～10)

縄文時代中期後半の加曾利E式に相当する土器で、調査区全域より散発的に出土した。

3は平縁で口縁部は内湾する。口縁下に沈線文が1条走り、平行沈線文内には単節RLが充填され、以下は無文となる。胎土に石英と雲母を多量に混入する。

6は底部近くの胴部片である。4は地文が単節RLで平行沈線による曲線文が描かれる。沈線内は磨り消される。5は地文が無文で垂下する対弧状の隆帯文とこれに連絡する横位対弧状隆帯文が貼付けられる。隆帯文の両側には沈線文が沿う。4は胎土に石英と雲母を、5は石英を多量に混入する。7～9は同一片と思われる、単節LRが施文される。9は曲線的な隆帯文が付される。10は6と同様の文様であろう。

b 石器 (第13図 PL32)

尻替遺跡からは縄文時代の石器が52点出土した。大半は後世の遺構内か、あるいは遺構確認面からの出土で数点が該当時期の遺構内から出土している。以下器種別に詳述するものとする。

a) 石鏃 (第13図1~7)

7点出土した。器形の違いから2種類に大別した。1・2のグループは先端から脚部付根付近までは直線的、脚部端までは曲線を描き内側に湾曲するように側縁を整形した形状で、挟り込みが10mm以上にも及ぶもの。この器形は草創期のいわゆる「長脚鏃」と思われる。2点とも完形品であり良好な資料といえる。1は頁岩製で2はフォルンフェルス製であり、以下に述べるもう1種の石鏃群とは石材の面でも異なる。

3~7は先端から脚部に向かい側縁を直線的に整形して基部の挟り込みがほとんどない三角形のグループである。チャートを主要石材として使用している。3のみが完形品ではかば欠損品である。後者の石鏃は前期の遺物となろうか。

b) ビエスエスキュー (第13図9)

1点出土した。対峙する四側縁全体に調整加工が入っている。その剥離の大半はステップフラクチャーである。チャート製のものである。

c) 石錐 (第13図8)

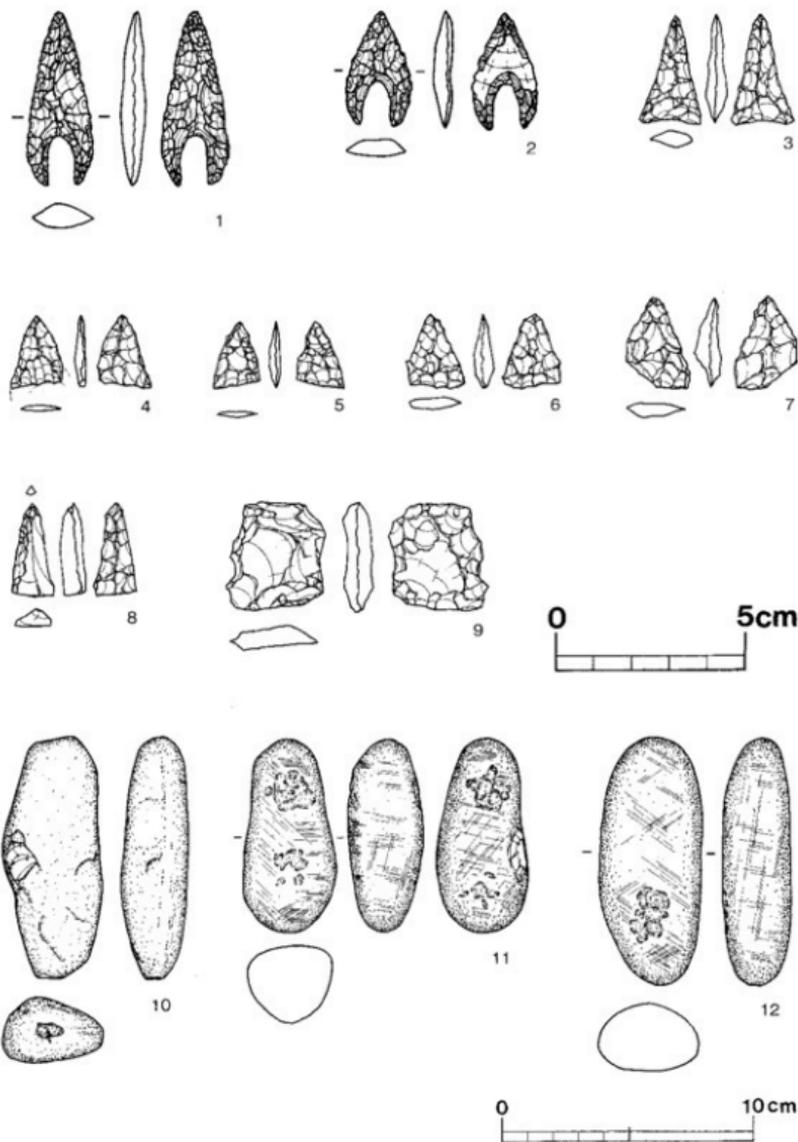
1点出土した。握み部を折損して失い錐部のみである。先端部の稜線の摩滅は見られない。チャート製のものである。

d) 敲打器 (第13図10~12)

6点出土したうち3点を図示した。10は棒状礫の一端に敲打痕が残る。器体の一部に剥離痕が見られる。11・12はそれぞれ器体の全面に軽度の擦痕が観察され、平坦面の一部に敲打により生じた凹みがある。10は砂岩製、11・12は安山岩製のものである。

e) その他の石器

上記以外の石器では、二次加工剥片が2点、折り面のある剥片が4点、剥片24点、砕片2点である。石材構成ではチャートが15点、黒曜石が13点、珪質頁岩・頁岩・安山岩・蛋白石が各1点となっている。



第13図 遺構外出土遺物 (5)

縄文時代遺構外出土石器

図版No.	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	石鏃	SI-1、No38	3.6	1.7	0.65	2.9	頁岩	石37 長薄鏃
2	石鏃	一括	1.7	2.2	0.5	1.6	フォルンフェルス	石36 長薄鏃
3	石鏃	SI-11、No138	2.7	1.6	0.55	1.49	チャート	石34
4	石鏃	SI-2、No27	1.8	1.3	0.3	0.56	チャート	石35
5	石鏃	SI-2、No138	1.6	1.2	0.3	0.49	チャート	石31
6	石鏃	U-62K	1.8	1.4	0.5	1.16	チャート	石33
7	石鏃	Sk-41	2.3	1.5	0.65	1.83	チャート	石32
8	石鏃	SX-1、1区	2.45	1.1	0.6	1.65	チャート	石39
9	ピース・エスキュー	SI-3、2区	2.8	2.5	0.7	6.21	チャート	石38
10	敲打器	V-7区	12.83	5.05	3.45	307.8	砂岩	石39
11	敲打器	T-4区、No1	10.16	5.0	3.93	273.5	安山岩	石23
12	敲打器	U-10区	13.5	5.41	3.68	409.5	安山岩	石28

第2節 古墳時代前期

本遺跡で検出された古墳時代前期の遺構は、堅穴住居跡が2軒、堅穴遺構が1基、掘立柱建物跡が2棟である。本遺跡の中で最も土地利用が盛んな時期と言える。これらの遺構は台地上平坦部に展開している。特筆すべきは堅穴住居跡の内の1軒からは鍛冶炉などが確認され、鍛冶工房としての性格を持つことである。

1. 堅穴住居跡

第1号住居跡〔SI-1〕(第14～19図 P L 4・5・33・34)

位置 調査区北寄り。標高25m付近。L・M-8・9・10区にまたがる。

規模・形態 主軸長7.7m、幅7.7mの正方形を呈する。面積59.3㎡で当遺跡の最大規模を有す大型住居。一部攪乱で壊され確認できないが、四周にベッド状遺構を持つ。

主軸方位 N-66°-W

壁 約30cmの高さでほぼ垂直に立ち上がる。南東側のコーナーには攪乱が入り壊される。

床 主柱穴に囲まれた内区はよく踏みしめられるが著しく硬化しているわけではない。外区は10cmほど高く、幅1～1.2mのベッド状になる。

壁溝は西壁下と北東コーナー下に検出された。幅20cm、深さ10cm程である。特に、炉に対面する東壁中央ではいわゆる間仕切溝となり、幅は約35cm、深さは22cmと壁溝より深くなる。付近はベッド状遺構がさらに一段高くなり顕著な盛り上がりを見せることから、入り口部はこの東辺にあったものと推定する。

ビット P1からP3は主柱穴である。1ヶ所は攪乱のため検出できないが元は4本で構成されていたものと思われる。いずれも径30cm～44cmの円形を呈し、深さ75～80cmと深い。覆土最上層には炭化物・焼土粒が多く混入する。

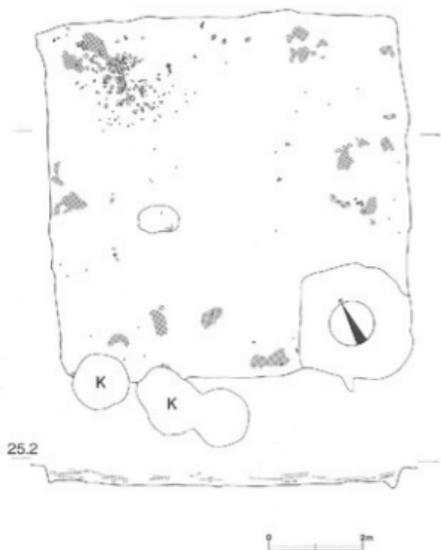
P4は貯蔵穴で入り口右側コーナー寄りに設けられている。径80cmの円形を呈し、深さ22cm。断面形は半球状を呈する。覆土は炭化粒を中量、ロームブロック小粒を多く含む締まりのゆるい土である。その他、性格が不明な多数のビットが住居内に検出された。おおむね小型・円形で、径10～20cm、深さ20cm前後のものが多くある。

炉 内区中央やや西寄りに検出された。最深部では床面を18cmほど掘り窪め、底面は赤変・硬化し、非常に凹凸がある。85cm×55cmの楕円形を呈する。炉内部には残存部の最大径が64cm(13)、同50cm(14)もある大型壺の胴部破片2点が、接合帯で割れた状態で外面を入り口側に向け埋設されていた。これら以外に住居内から同一個体片は出土していない。また炉の奥側には、覆土を切って掘り込まれたビット(径26cm、深さ16cm)が1個検出されている。

覆土 外区一帯に点状に広がる焼土ブロックが検出されている。壁際では厚く住居中央部で薄い堆積状態を示す。炭化物も少量見られること、住居の四周に検出されることなどから上層解体時に消却処分したものかも知れない。

遺物 細片が住居中に散乱しており、特に北コーナーでは支柱穴の真上一帯に焼土ブロックと共に集中している。代表的な例を壺(4)や小型甕(6)に求めると、かなり床に近いレベルの破片と焼土最上位出土片とが接合関係を持つことから、焼土と土器は時間差なく投棄されたものと推定する。

土器以外の出土品として、44の鉄鏝や45の不明鉄製品が出土している。そして、石製品として46・47の砥石があり、刃物を砥いだような痕跡が残る。

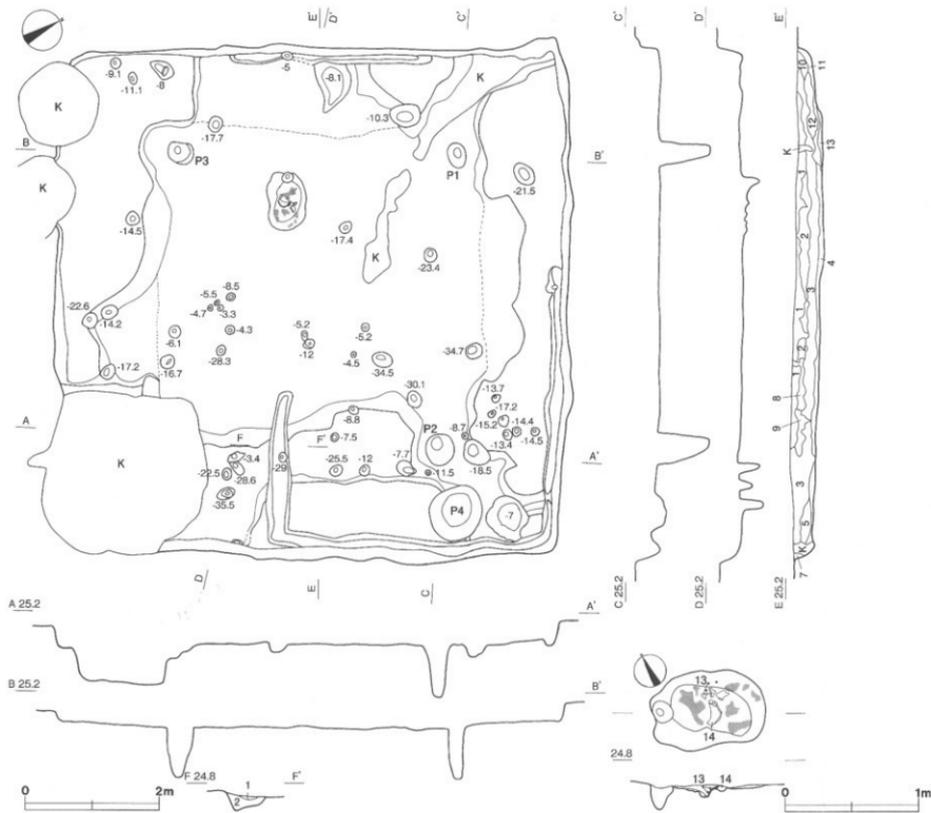


第14図 第1号住居跡遺物出土状況(1)

所見 当住居跡に明瞭に伴う遺物は炉跡に埋設された壺(13・14)である。覆土の遺物集積域から出土した甕(1・3・5・7・9)、小型甕(2・6・8)、壺(12・15・16・17)、高杯(22)等もさほど時間差のない個体と推測する。これらから当住居跡を4世紀後半のものとする。群を抜いたその規模から、ある時期、集落の中心的存在だったことは疑う余地がない。

第1号住居跡

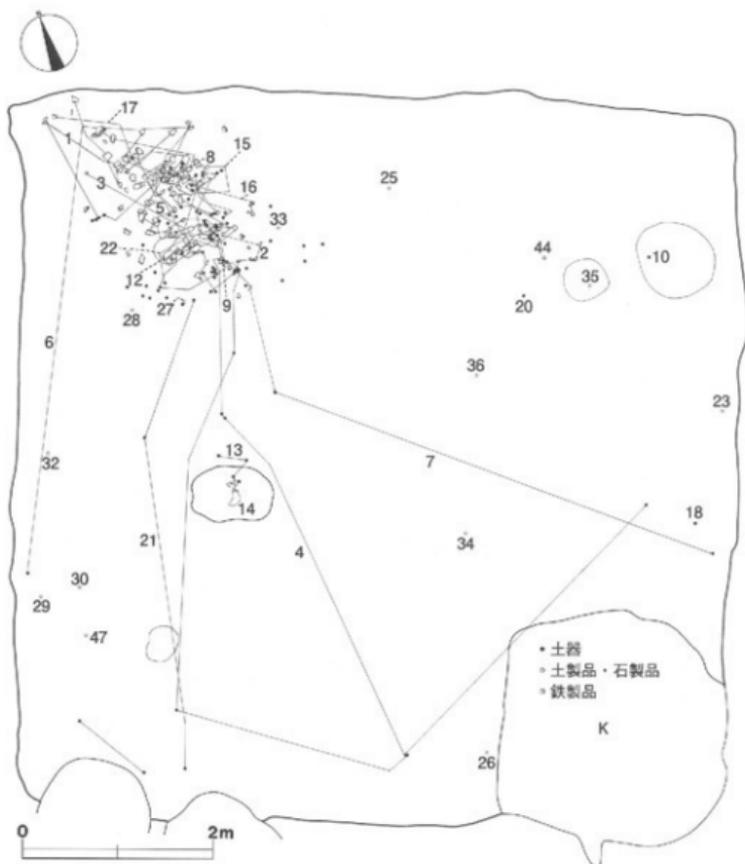
図面No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 構成	胎土	色葉	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	A:146 B:(68) C:182	覆土 70% 普通	長石○、石 英・雲母△	にぶい橙 明赤褐色	口縁部外面はハケ目の後ナデ、沈線が二条出る。 内面はハケ目の後ナデ。口唇部は丸い。胴部外 面上半ハケ目。下位ヘラ削り。	No.4 壺甕ブロック
2	甕 土師器	A:128 B:42 C:117	覆土下位 60% 普通	長石・石英・ 雲母△	橙	口縁部・胴部ハケ目。胴部ヘラ削り。下底の一 部にハケ目。内部上位に輪槽痕。口縁は内湾気 味に立上る。胴部下位に線を待つ。	No.3 壺甕ブロック
3	壺 土師器	A:(128) C:(33)	覆土 30% 普通	長石△、石 英○	明褐色	口縁部外面上端に沈線、ヨコナデ。	No.5 壺甕ブロック
4	壺 土師器	B:(76) C:(170)	覆土下位 70% 普通	石英・小石 ○	明褐色	外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。底面ヘラ削りに よりやや凹む。	No.10



第15図 第1号住居跡・炉

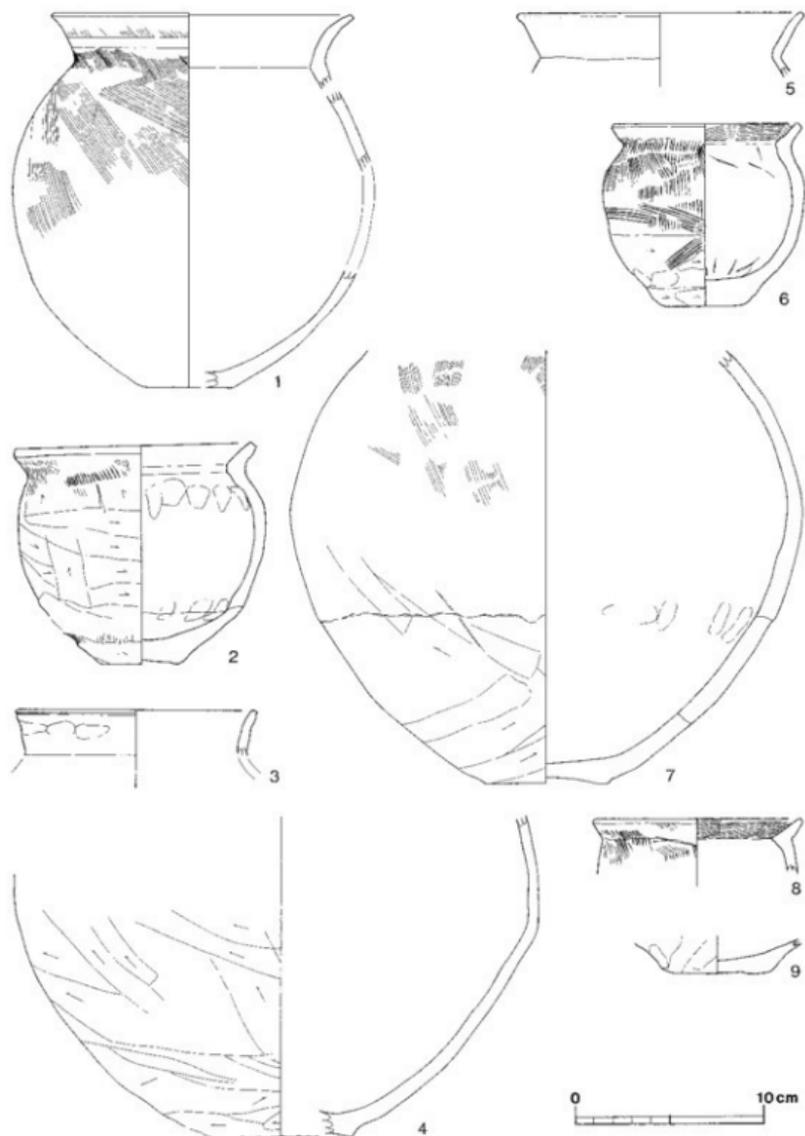
- 1 雑居 ローマ屋敷跡、居宅中・小プロコナ中層
- 2 雑居 居宅中層、ローマ屋敷跡
- 3 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 4 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 5 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 6 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 7 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層

- 8 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 9 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 10 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 11 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 12 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層
- 13 雑居 居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層、居宅中層

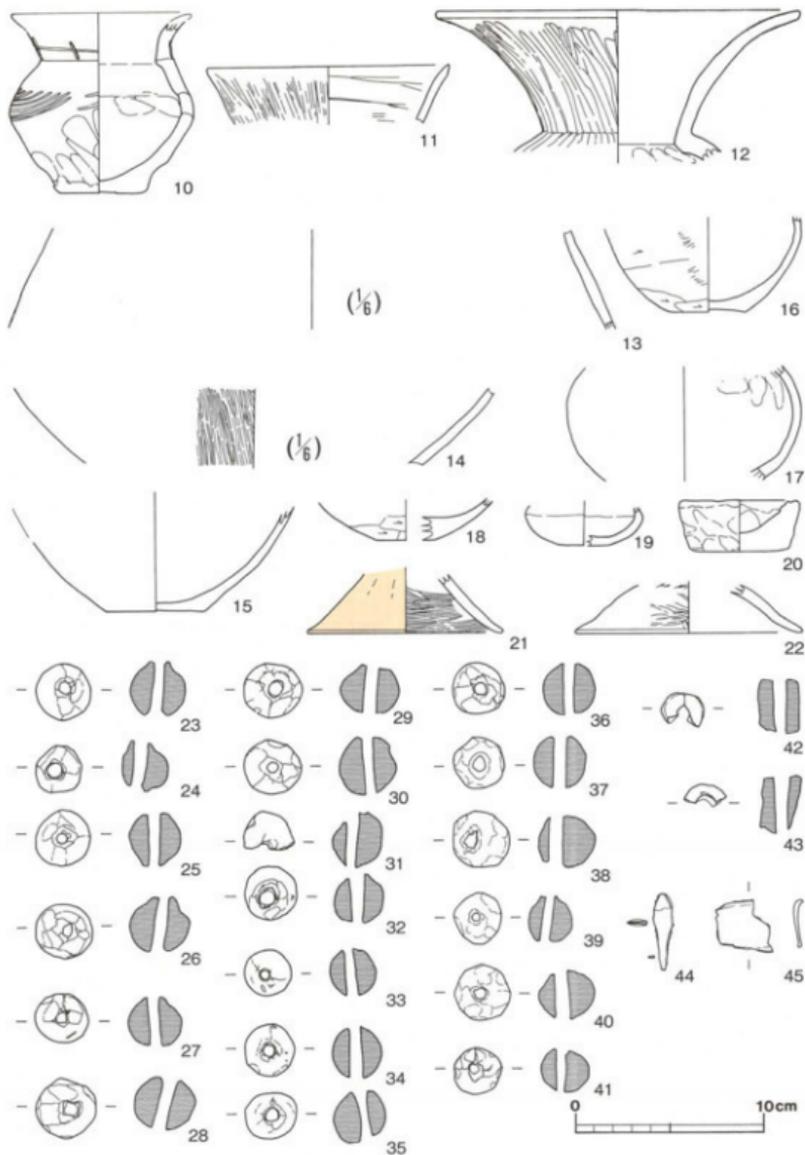


第16図 第1号住居跡遺物出土状況(2)

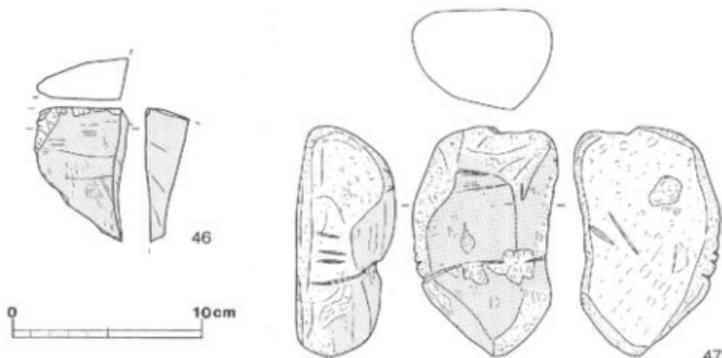
図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
5	泥 土脚器	A : [15.2] C : (3.1)	覆土 25% 普通	砂粒○	橙	口縁上位、口唇部に沈線。ヨコナテ後、一部タ チミガキ。	No.6 廃棄ブロック
6	壳 土脚器	A : [10.0] B : 4.4 C : 9.7	覆土下位 70% 普通	小石○	にぶい橙	口唇部粗い面取り。頸部屈曲し外反する。口縁 内面・頸部外面ハケ目。頸部上半部ハケ目、下 半部ヘラ張り、内部ヘラナデ。	No.9
7	覆 土脚器	B : (6.6) C : (23.0)	覆上下位 30% 普通	長石○、石 灰△	赤褐 明赤褐	外面頸上半ハケ目の後ナデ、ヘラ張り。内面ヘ ラナデ。底面ヘラ削りによりやや凹む。	No.11 廃棄ブロック
8	泥 土脚器	A : [15.2] C : (3.1)	覆土 20% 普通	砂粒○	明赤褐 にぶい橙	口唇は丸みを持つ。口縁内面後位ハケ目。頸部 は屈曲する。頸部外面ハケ目。	No.8 廃棄ブロック



第17图 第1号住居跡出土遺物(1)



第18图 第1号住居跡出土遺物(2)



第19図 第1号住居跡出土遺物(3)

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 状況	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
9	壺 土師器	B: [5.8] C: (1.6)	覆土 100% 普通	長石・小石 ○	明赤褐 にぶい橙	底面中央はやや凹む。外面荒れる。内面ヘラナ デ。	No7 廃棄ブロック
10	壺 土師器	A: (9.5) B: 4.3 C: 9.0	覆土中位 70% 普通	砂粒○	明赤褐	口縁部に刻目6ヶ所。口縁ヨコナデ。胴部中位 にミガキ用ヘラによるタタキ調整。下通は指通 によるナデ。底部はやや平底。	No15
11	埴 土師器	A: [12.8] C: (3.0)	覆土 30% 普通	長石○	橙	外縁失る口唇部。外面沈線状のミガキ。	No19
12	壺 土師器	A: [19.4] C: (7.4)	覆土下位 60% 普通	雲母・砂粒 △	にぶい黄橙	胴部が屈曲し、口縁部は口唇が鋭く外反する。 口唇部面取り。口縁部外面ミガキ。内面ヘラナ デ。	No16 廃棄ブロック
13	壺 土師器	C: (10.3)	伊内 40% 普通	長石○	にぶい黄 にぶい橙	大型土器の胴部破片。外面ミガキ。内面ヘラナ デ。底部集ける。	No18
14	壺 土師器	C: (7.8)	伊内 25% 普通	長石・石英 ○、雲母△	橙 にぶい橙	大型土器の胴部破片。外面ミガキ。	No17
15	壺 土師器	B: 5.2 C: (5.5)	覆土 70% 普通	雲母・砂粒 △	橙 にぶい橙	内湾気味に立上る。内面にヘラナデ。	No12 廃棄ブロック
16	埴 土師器	H: 3.7 C: (5.0)	覆土中位 60% 普通	石英・雲母・ 砂粒○	にぶい黄橙	胴部下端ヘラ削り。底部やや上げ底。内面に割 離見られる。	No14 廃棄ブロック
17	埴 土師器	C: (6.0)	覆土中位 30% 普通	砂粒△	にぶい橙 にぶい黄	丸く湾曲する胴部。外面ヘラナデ。内面ナデ。	No13 廃棄ブロック
18	埴 土師器	B: [3.0] C: (2.0)	覆土下位 50% 普通	小石○	橙 にぶい橙	外面ヘラ削り。底部はやや平底。	No20
19	埴 土師器	H: (1.8) C: (2.8)	覆土 30% 普通	砂粒△	橙	胴部は上下に潰れた器形。器面は荒れる。底部 平底。	No21
20	手捏ね 土師器	A: (7.8) H: (5.2) C: 2.7	覆土 50% 普通	砂粒○	にぶい橙 黒褐	底部が厚手。口縁は積み上げている。内面は焼 きれ黒色を呈する。	No23

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
21	器台? 土師器	C:(31) 深径:10.1	覆土 40% 普通	砂粒△	赤 明黄褐色	外面赤彩。腹部ヨコナデ。内面ハケ目。	No.1 魔塞ブロック
22	高坏 土師器	C:(25) 高径:12.0	覆土下位 30% 普通	砂粒○	にぶい黄褐色	脚部から屈曲して開く唇部。外面丁寧なミガキ。内面に深い線を付し、やや締らむ。	No.2 魔塞ブロック

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
23	土製品	土玉	2.8	2.9	22.9	覆土	完形	No.24
24	土製品	土玉	2.7	2.4	13.5	覆土	完形	No.25
25	土製品	土玉	2.8	2.7	20.4	覆土	完形	No.26
26	土製品	土玉	2.7	3	21.6	覆土	完形	No.27
27	土製品	土玉	2.5	2.9	16.4	覆土	完形	No.28
28	土製品	土玉	2.9	3.2	23.8	覆土	完形	No.29
29	土製品	土玉	2.9	3.1	21.1	覆土	完形	No.30
30	土製品	土玉	3.0	3.0	20.1	覆土	完形	No.31
31	土製品	土玉	2.7	2.6	11.5	覆土	1/2	No.32
32	土製品	土玉	2.6	2.8	17.2	覆土	完形	No.33
33	土製品	土玉	2.5	2.5	13.4	覆土	完形	No.34
34	土製品	土玉	2.7	2.6	18.1	覆土	完形	No.35
35	土製品	土玉	2.6	2.7	16.6	覆土	完形	No.36
36	土製品	土玉	2.7	2.8	19.6	覆土	完形	No.37
37	土製品	土玉	2.4	2.5	13.6	焼土層上	完形	No.38
38	土製品	土玉	2.4	2.5	13.6	焼土層上	完形	No.38
39	土製品	土玉	2.4	2.5	13.6	焼土層上	完形	No.38
40	土製品	土玉	2.4	2.5	13.6	焼土層上	完形	No.38
41	土製品	土玉	2.4	2.5	13.6	覆土	完形	No.578
42	土製品	管状土師	2.8	2.3	9.0	ビット	2/3	No.40
43	土製品	管状土師	3.1	2.2	5.8	覆土	1/3	No.39

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
44	金属製品	銅	4.0	1.0	0.1	1.8	鉄	No.610 北部出土
45	金属製品	不明	2.6	2.6	2.5	5.9	鉄	No.626 東端出土
46	石製品	砥石	7.05	4.85	2.1	60.0	凝灰岩	石2
47	石製品	砥石	12.1	7.3	3.25	68.0	輝石	石1

第2号住居跡 [SI-2] (第20~23図 P L 6・34)

位置 調査区北寄り。標高25m付近。O・P-7・8区。

規模・形態 主軸長4.6m、幅5.5mの横長方形。総面積25.3㎡である。

主軸方位 N-37°-W

壁 北壁は25cmほどの高さで斜めに傾斜している。他壁は直立気味ではあるがいずれも20cm内外の高さしかなく上部は削平を受けている。

床 西壁、南壁二辺に沿ってL字状に幅1.2から1.3m、高さ3~9cmのベッド状遺構が見られる。これらはローム層を掘り残して造られている。特に西南コーナー周辺で残りがよい。他方、入り口周辺は盛り土でベッド状を呈している。このベッド状遺構を除く床は長辺3.4m、短辺3mの10㎡あまりの長方形を呈し、炉が設けられ、ベッド部に比べ硬化している。

壁溝は東壁際以外で検出された。幅20cm、深さ2~7cmと浅い。

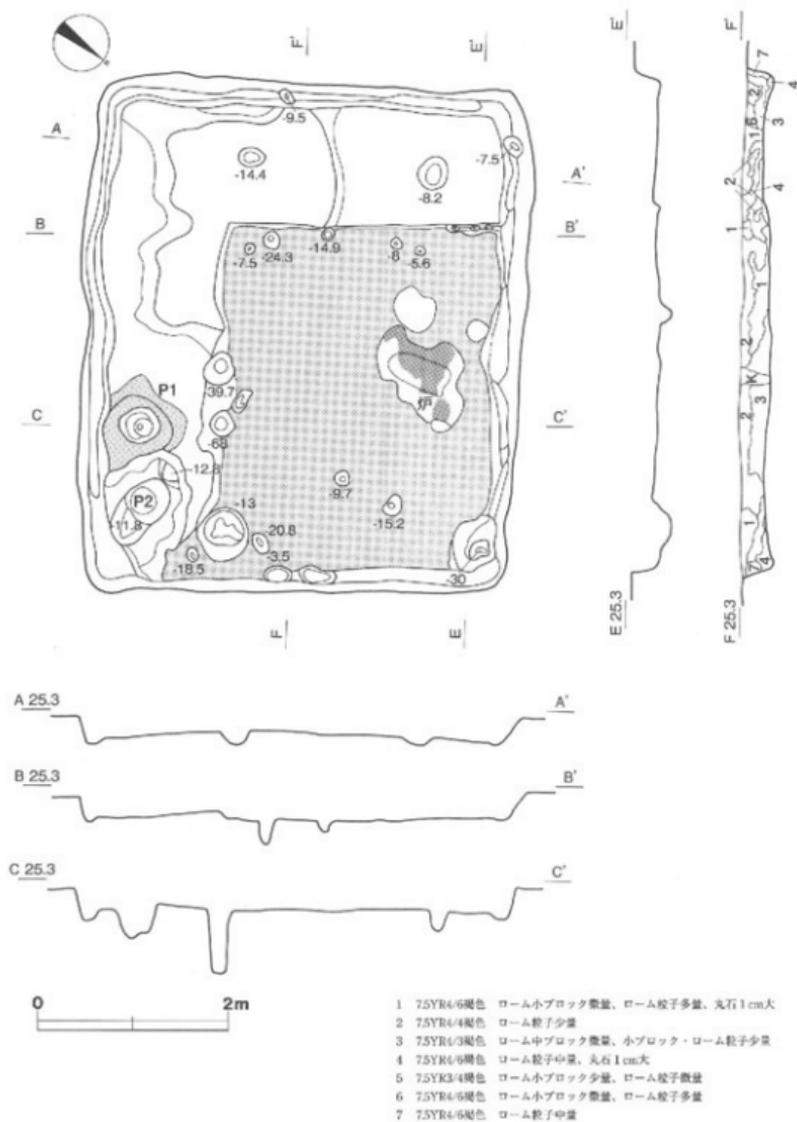
ピット P1は入り口ピットと考える。掘り方の中心は住居壁より65cm離れる。径40cm内外、深さ38cmピットの周囲が顕著に硬化している。P2は貯蔵穴で、入り口右側に設けられている。上端では長軸長80cm、短軸長45cmの楕円形を呈するが、完掘すると浅いテラス状の段を有する形となり、本体は径45cm、深さ50cmの円柱状である。覆土中位より壺(3)が出土しており、住居覆土中の遺物と接合する。従って、住居廃絶時には貯蔵穴は開口しており、廃棄遺物が埋め戻し時に入り込んだものと思われる。主柱穴については、西辺のベッド上や東壁際のピットなど可能性はあるがいずれも浅く、柱穴と呼ぶのはためらわれる。他にもベッド状遺構の内側に小型のピットが見られるが機能は不明である。

炉 入り口に対面する住居中央部や奥に検出された。西側は攪乱で一部壊されるが1m×0.9m程の範囲で焼土の分布があり、3~5cm程の深さに焼土が堆積している。

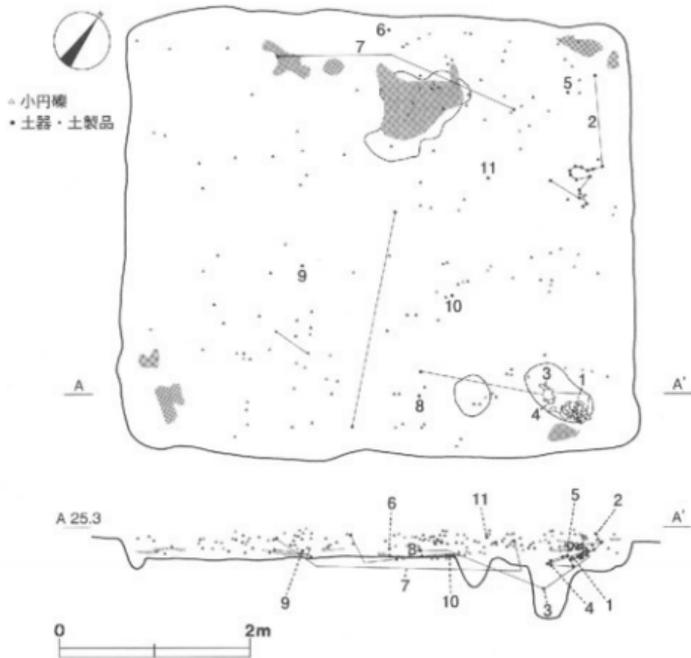
覆土 非常に層位が乱れており人為的埋め戻しを行なったものとする。本住居跡の四隅には焼土の堆積が見られ、炭化材も検出されておらず量的にも少量ではあるが、ほかからの廃棄と見る

第2号住居跡

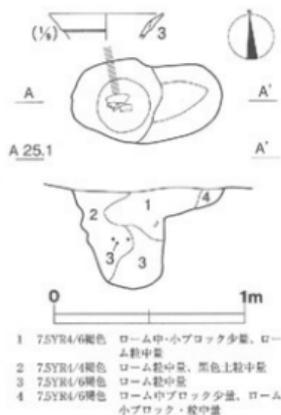
照像No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 状況	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A: 14.6 B: (6.8) C: 18.5	貯蔵穴内 50% 普通	長石ひ、雲 母○	にぶい澄	L線部外面ヨコナデ、内面ハケ貝。胴外面種かなハケ貝、内面ナデ。口縁は外反。胴部外面下手ヘラ削り。胴部に雁付香。	No.42
2	壺 土師器	A: (12.2) C: (13.9)	壁上位 30% 普通	石英・雲母・ 砂粒○	澄	口縁部外面ミガキ、内面ハケ貝後ミガキ。胴部外面ヘラ削り後ミガキ。内面ヘラナデ。	No.43
3	甕 土師器	A: (18.4) C: (4.1)	貯蔵穴内 25% 普通	長石・砂粒 ○	にぶい黄澄	内外面の渦線激しい。二重口縁部の口縁部。	No.46
4	埴 土師器	A: (16.1) C: (4.1)	貯蔵穴上 20% 普通	雲母・砂粒 ○	澄 にぶい澄	外面ミガキ、上位ミガキ後ナデ。口縁は直線的に外傾し、先端付近で僅かに内傾。	No.44



第20図 第2号住居跡



第21図 第2号住居跡遺物出土状況

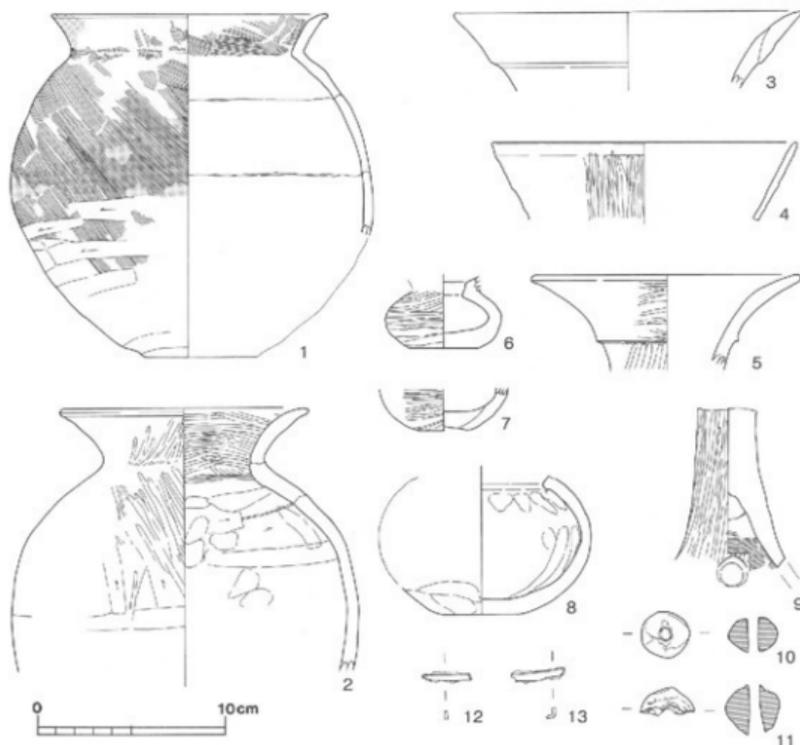


第22図 第2号住居跡貯蔵穴

と住居四隅周辺に分散しているなどのあり方が不自然であるため、当住居の上屋解体時の片付けに火を使用したものかと考えておく。

遺物 覆土中～上層に土器細片が散乱している。その用途・来歴は不明だが指頭大の円礫も多数含まれる。なお、焼土層上位の埋め戻し土から出土した土器細片が約3m離れた第5号住居跡出土の窠(第34図3・8)と接合する。

所見 明瞭に当住居に伴う遺物はないが、貯蔵穴から出土した窠(1)などを廃絶の時期からさほど離れていないものと見なし、4世紀後半の住居跡かと考える。



第23図 第2号住居跡出土遺物

図版No	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
5	壺 土脚器	A : [14.2] C : (5.1)	覆土上位 20% 普通	長石・石英・ 雲母○	にぶい橙	口縁外面ミガキ、口縁は二重口縁で大きく外反。 頸部ミガキ。内面ヨコナア。	No.47
6	ミニチュア 土脚器	B : 3.6 C : (2.8)	覆土中位 90% 普通	雲母・小石 △、長石・ 石英○	橙	胴部は扁平で頸部は強く括れ、口縁部は外反す る。平底の底部。外面ミガキ。	No.49
7	増 土脚器	B : 2.6 C : (2.2)	覆土上位 50% 普通	長石・石英 ○	明赤陶	外面ミガキ。内面ナア。底部上げ底。	No.48
8	増 土脚器	B : 4.0 C : (7.3)	覆土上 60% 普通	長石・小石 ○	橙 にぶい橙	胴部上位の一部に弱いハケ目。下層に弱いヘラ 削り。	No.50
9	高坏 土脚器	C : 8.6	覆土下位 95% 普通	長石△、雲 母○	にぶい褐	外面ミガキ。内面ハケ目。脚部やや開き気味、 中実柱状で長く細に続く。脚と胴の境に推定4 箇所の穿孔。外面に蓮付着。	No.41

単位：cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
10	土製品	土瓦	1.8	2.6	10.2	覆土	完形	No.51
11	土製品	土瓦	2.6	2.9	6.8	覆土	1/2	No.52

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
12	金属製品	不明	2.5	0.4	1.5	0.6	鉄	No.628 3区出土
13	金属製品	不明	2.8	0.5	1.5	0.8	鉄	No.628 3区出土

第3b号住居跡 (SI-3b) (第24図)

位置 調査区北端。標高25m付近で確認され第3a号住居跡および第8号土坑と切り合い関係にあり、当住居が古い。U・V-2区。規模・形態 方形を呈すると思われるが主軸方向・規模ともに不明である。

主軸方位 不明。

壁 最下部の3~8cm余りを残すのみで詳細は不明。

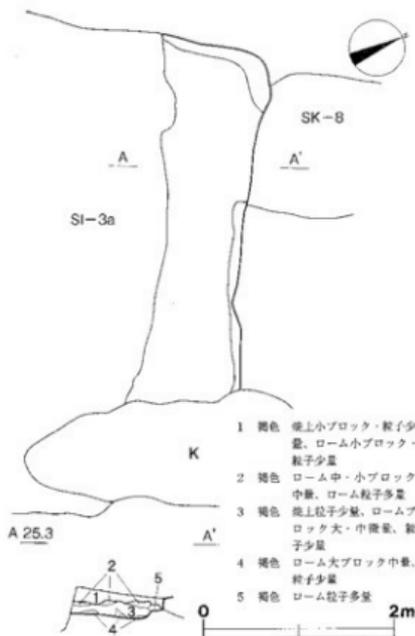
床・覆土 第2層上面に硬化面が検出され、これを床と判断した。しかし、この下部に15cm程の厚さで第3層が堆積し、最下部にはハードロームのブロックが含まれるなど、これもまた人為的堆積土と見ることができ。床が2枚構築されていたものか、第2層以下が床下の掘り方覆土となるのか現状では判断し兼ねる。後者の例は第4号住居跡に見られる。

ピット 検出されなかった。

炉 検出されなかった。

遺物 図示できるものはない。

所見 時期決定のための遺物に欠けるが、第2層下部からの出土遺物等を総合的に判断して4世紀代の住居跡ではないかと考える。



第24図 第3b号住居跡

第4号住居跡〔SI-4〕(第25~28図 PL6・7・35)

位置 調査区北寄り。標高25m付近。T・U-9・10区にまたがる。

規模・形態 主軸長5.4m、幅6.5mの横長方形。面積35㎡を測る。

主軸方位 N-6°-W

壁 削平を受けており、立ち上りは10cm内外で非常に浅く、外傾している。

床 明瞭に検出された。壁溝は途切れつつも全周する。幅10~20cm、深さ4~5cmである。また壁沿いに幅40~50cm、貯蔵穴付近では幅160cm程に広がる溝状遺構が確認された。深さは7~2cm程しかない。当初は覆土と勘違いして掘り進んだが、他の事例からみて床下の掘り方であろう。内部の土は貼り床のようにロームや褐色土ブロックの混入が顕著である。

ピット P1~P3は主柱穴である。元来は4本柱と思われるが、1本は検出できない。P1はやや大きく径45cm、深さ19cm、他は径25cm、深さ10cm程である。これらに囲まれる内区の復元面積は9.5㎡である。P4は貯蔵穴である。住居の南西隅に掘削され、長軸長84cm、短軸長70cmの楕円形を呈する。深さは45cmで、壁はバケツ状で底面には浅い段を有する。

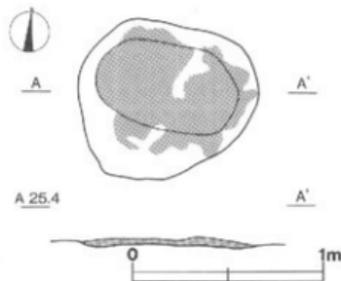
そのほか比較的深いピットが数ヶ所検出されているが、良好な並びを想定できず性格は不明である。入り口については、貯蔵穴との関連から南側を想定することができる。

炉 内区のやや北西寄り(炉1)とほぼ中央(炉2)の2ヶ所に検出された。後述するように調査当初には床面に鍛冶遺構が設けられている可能性があったため炉の近辺も精査したが、鍛冶剥片などの集中はみられず、鍛冶炉に特徴的な還元状態を示す箇所もなかった。

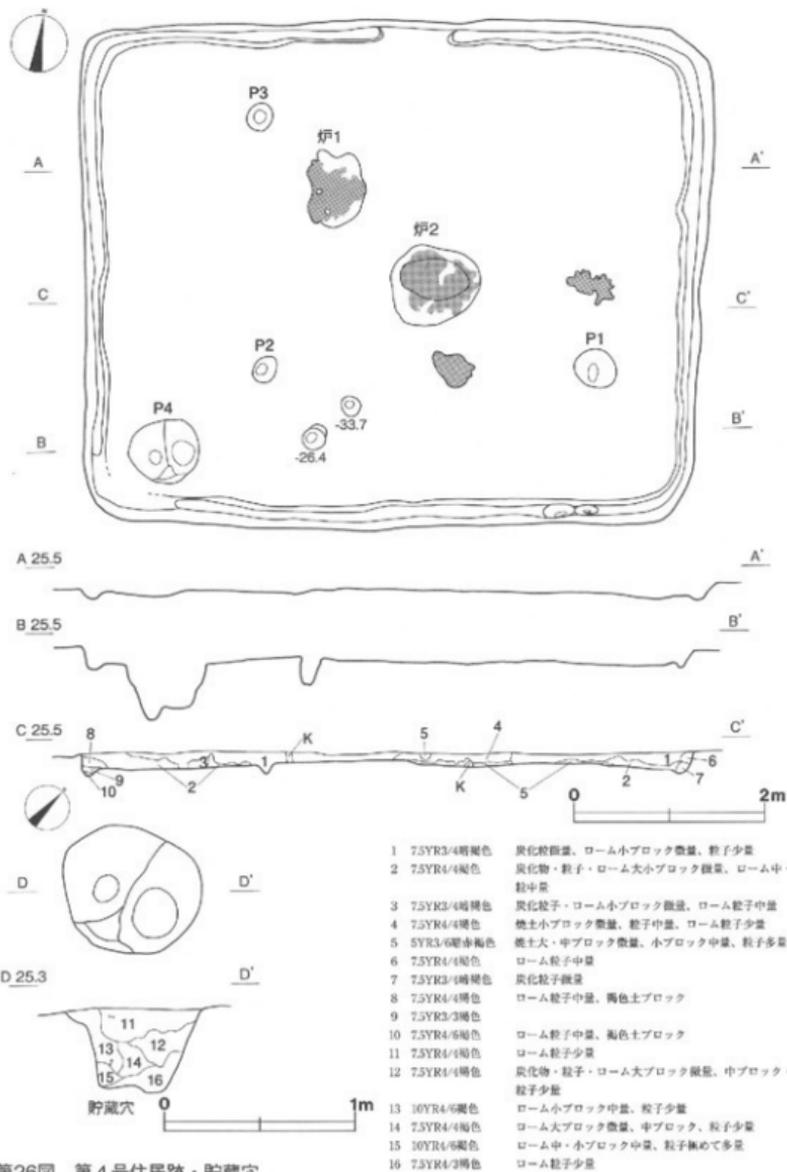
炉1は不整楕円形で5cmほどの厚さで焼土が堆積していた。炉2は炉1に比べると焼土の分布範囲も広く、床に約3cmの深さの掘り込みも検出された。約30cm離れ南側に1ヶ所、また1m離れて東側にも1ヶ所小規模な焼土の分布がある。

覆土 残存状態が悪く、本来の埋土の状況をどの程度反映しているのか不明である。

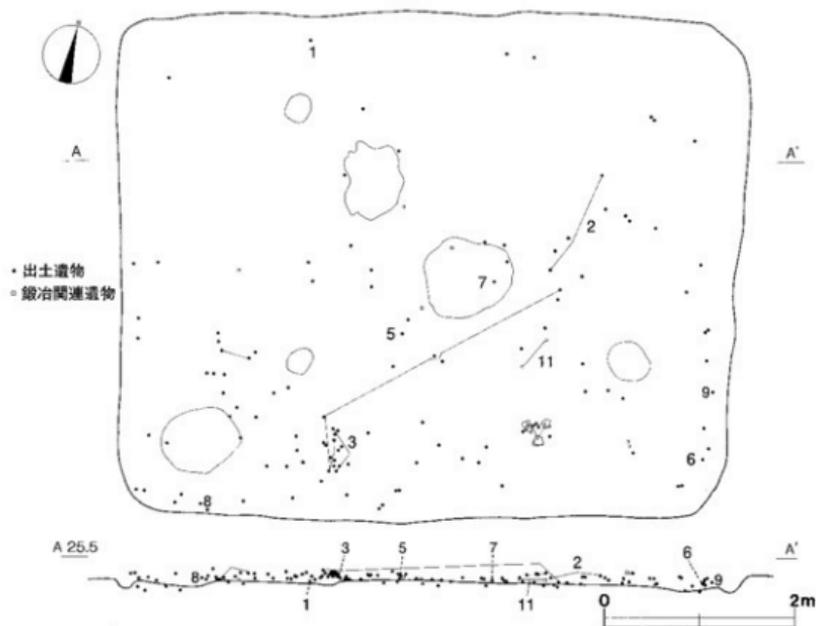
遺物 覆土中に遺物細片が散乱しており廃棄遺物と考える。この中から調査開始時に輪の羽口(10)が検出され、覆土上層の土壌サンプルの水洗い選別を行なった結果、少ないながら鍛冶剥片や鉄片が選別され(鍛冶関連遺物の検出・選別方法については第7号住居跡の記述を参照)、鍛冶遺構の可能性が考えられた。覆土下位でも11の羽口が出土している。このような状況から、床面近くに50cmメッシュを組んで方眼毎の土壌を採取し水洗い選別を行なった。すると、若干の鍛冶剥片・粒状滓などが採取されたが、特に鍛冶関連遺物が集中する傾向はみられず、鍛冶炉な



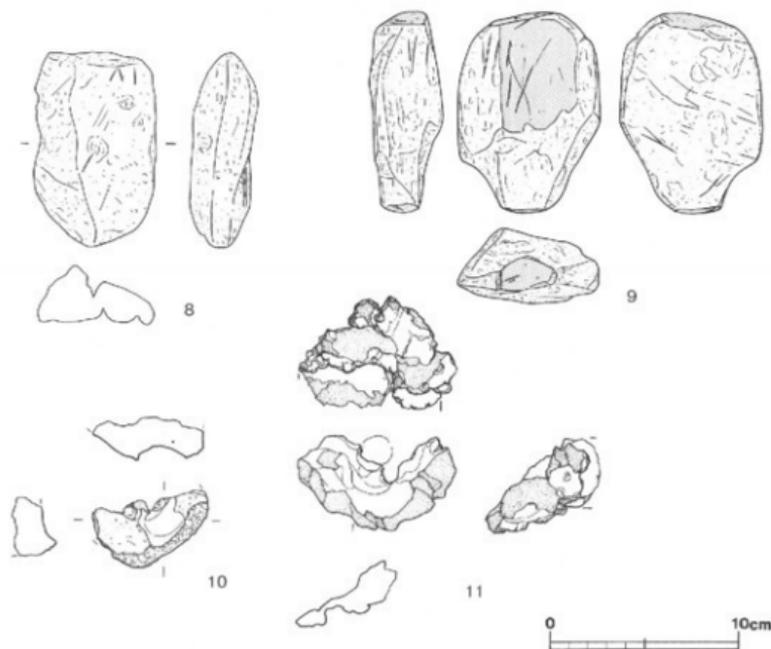
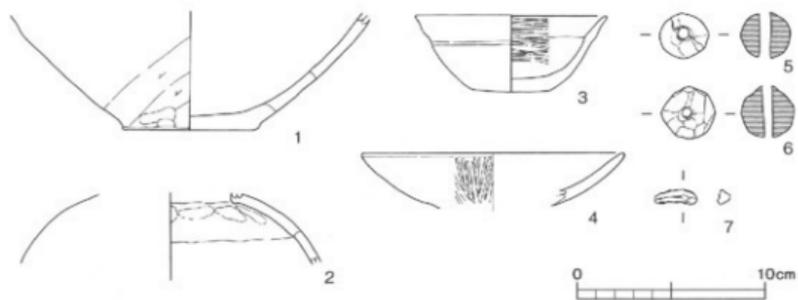
第25図 第4号住居跡炉2



第26図 第4号住居跡・貯蔵穴



第27図 第4号住居跡遺物出土状況・掘り方



第28図 第4号住居跡出土遺物

ども検出されていない。一つの方眼での鍛冶関連遺物の検出最高数値は、砂鉄2.5g、鍛造剥片1.8g（鍛造剥片②0.7g、同③0.7g、同④0.3g、同⑤0.1g）であった。全方眼採取試料の中で粒状滓1点、鉄滓0.9gが検出されている。

このほか、不明鉄製品（7）や軽石製砥石（8・9）が出土している。

上記鍛冶関連遺物については、鍛冶作業を行っていた第7号住居跡からの廃棄物であると考ええる。また床上から出土した土器細片が第5号住居跡内の土器とも接合する。

所見 覆土中の遺物を総合的に判断して4世紀後半の住居跡と考える。なお、本遺構出土の羽口(11)については、金属学的調査と中性子放射化分析を実施している（別に報告する予定である）。

第4号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 形状	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	B: (6.8) C: (6.0)	覆上下位 20% 普通	長石・石英・ 雲母○	にぶい褐 にぶい橙	平底の底部。外面へら削り。	No.59
2	壺 土師器	C: (4.6)	覆土中位 40% 普通	長石・雲母 ○	明赤褐 橙	胴部内面に御願圧痕、胴部内面に輪積み痕あり。 外面にハケ目なし。	No.61
3	鉢 土師器	A: [(10.2) B: 4.2 C: 4.0]	覆土 60% 普通	長石・石英・ 雲母○	橙	底部は平底で口縁部に向かい覆く。口縁部の内 外面に横を持つ。内面はミガキ。	No.63
4	高坪 土師器	A: (14.0) C: (2.8)	貯蔵穴内 30% 普通	長石・石英・ 雲母・砂粒 △	にぶい橙 橙	やや内湾する胴部から口縁部が外傾する。内外 面は丁寧なミガキ、やや内彎気味に立上る。碗 状の丸い杯部。	No.58

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
5	土製品	土玉	2.7	2.8	19.9	覆上	完形	No.64
6	土製品	土玉	2.45	2.6	14.5	覆土	完形	No.65
10	土製品	羽口	4.2	6.1	24	覆上	先端部	No.644
11	土製品	羽口	5.8	8.5	76.0	覆土下位	先端部	No.641 分析資料

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
7	金属製品	不明	2.2	0.7	0.7	1.7	鉄	No.611 棒状
8	石製品	砥石	10.35	6.35	3.0	27.0	軽石	石4 刃物傷あり
9	石製品	砥石	15.5	7.55	3.7	54.0	軽石	石5 刃物傷あり

第5号住居跡〔SI-5〕(第29~35図 PL7・8・35・36)

位置 調査区北寄りで第1号住居跡に隣接する。標高25m付近。N・O-9・10・11区。

規模・形態 主軸長5.4m、幅5.4mの正方形。面積29.2㎡。

主軸方位 N-38°-W

壁 20~30cmの高さで傾斜して立ち上がる。かなり削平されている。

床 奥壁を除く三方にベッド状遺構が検出され、内区へ緩く傾斜している。幅約1m、残存状態の良好な部分での高さは5cmほどである。内区の床は全体的に踏み固められて硬化していた。この硬化範囲は入り口部に伸び、入り口ピットの周囲にも及んでいる。炉の南側床上には被熱し赤変した箇所が見受けられたが掘り込みなどはない。

壁溝は東南コーナー周辺で一部途切れるが全周しており、幅20~30cm、深さ10~15cmの明瞭な掘り込みを有する。

ピット P1~P4は支柱穴であり、硬化した床の縁付近の四隅に径17~24cm、深さ40~52cmの規模で掘削される。なお機能・性格は不明であるが、P1-P4、P2-P3をそれぞれ結ぶ線上に浅いピットが並ぶ。

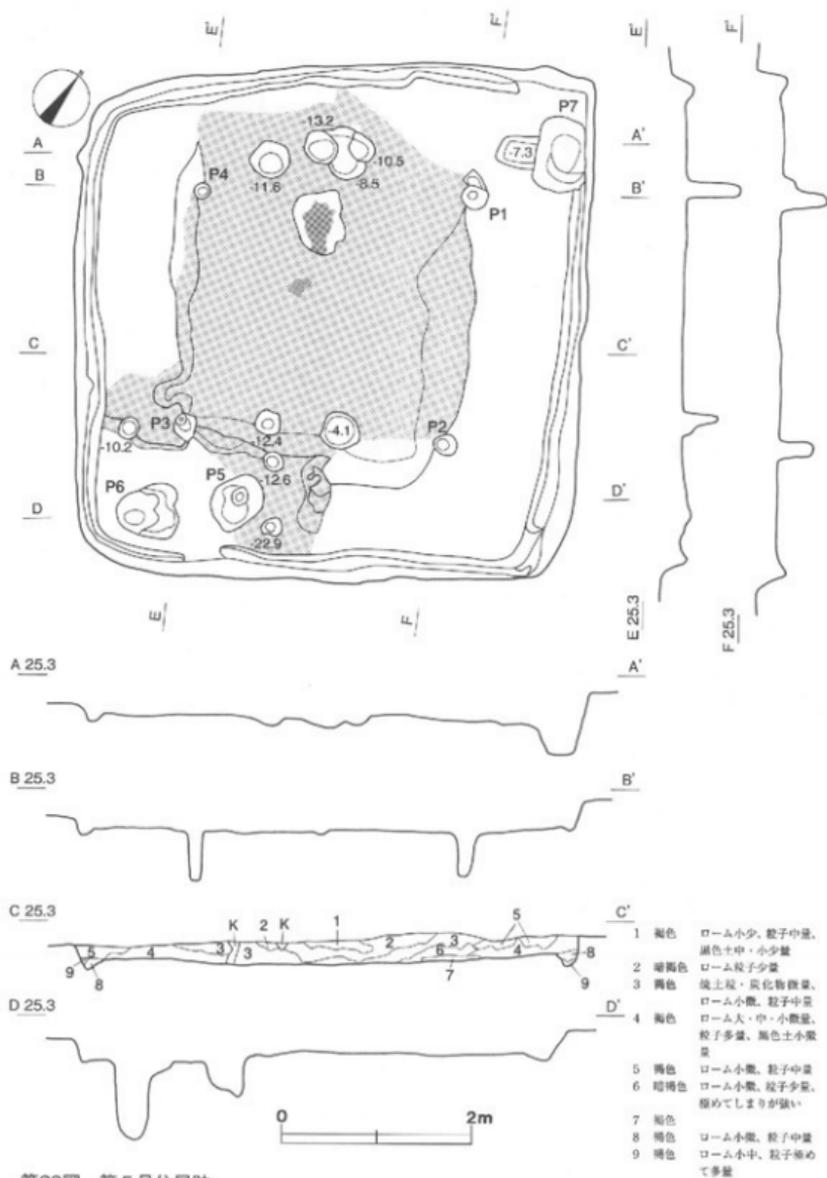
P5は入り口ピットである。掘り方は長径57cm×短径52cmの不整円形を呈し、深さ33cmで、固く締まった土で充填される。壁から80cm程離れ、住居の中心線上より左に寄って設けられる。中央には径15cm程の柱痕が検出され、約20°南側に傾斜する。

P6は貯蔵穴である。入り口ピットの左側に設けられる。上端では長径66cm×短径50cmの楕円形を呈するが、深い掘り込みは径45cm程の円形で、深さ83cmのこれが本体と考える。壁は直立し底面は丸底である。東側にはテラス状の平坦面を有する。

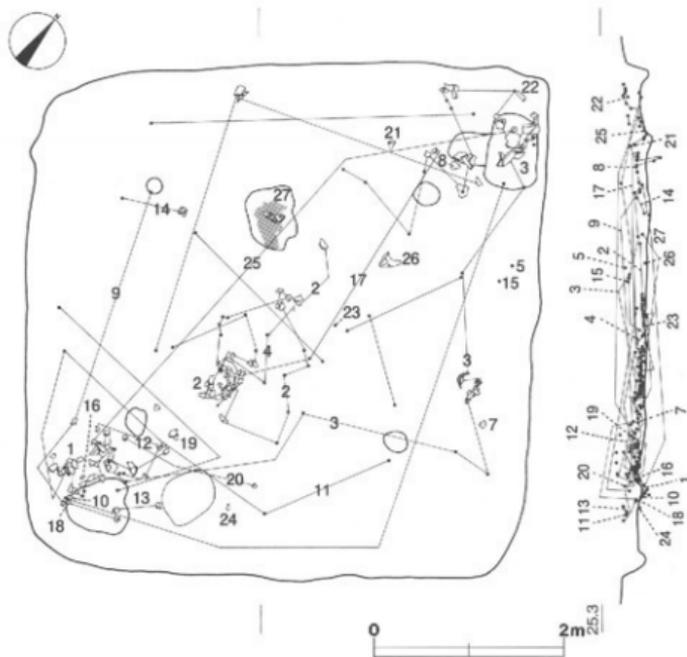
P6と対角線上の北コーナーに検出されたP7も貯蔵穴と考える。長軸80cm×短軸54cm、深さ38cmで住居壁と一体化している。底面は平坦である。この底面から20cm余り浮いて出土した壺(3)破片は、住居内で広範囲な接合関係を持ち、貯蔵穴の開口時に人為的に埋め戻し土とともに混入・廃棄されたものと解釈する。

炉 内区中央奥寄りに検出された。平面形は不整円形で住居の主軸方向に長軸を持ち長径70cm、短径50cm程である。内部には高坏(27)のI縁部片が、外面を入り口側に向けて埋設されていた。類例が第1・24号住居跡に見られる。大きな相違は第1号住居跡のものが大型の壺胴部片を埋設するのに対し、当跡のものは高坏を選択している。杯部のカーブを長く活かすためであろうか、杯部片(1/3)を斜めに割り、I縁部を斜め下方に埋設される。完形品からこのような大型破片を切り出すのは難しいと思われ、すでに破砕している土器を再利用したもののようである。住居内から脚部は発見されていない。

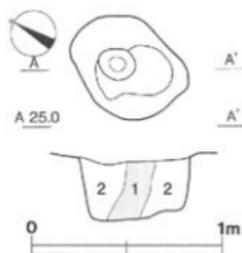
覆土 主に床を覆う第3・4層は共にローム粒子を多量に含む褐色土であること、この中に上記



第29図 第5号住居跡

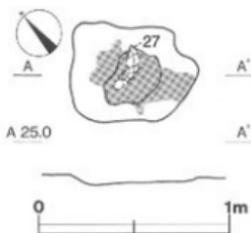


第30図 第5号住居跡遺物出土状況



- 1 75YR4/4褐色 ロームブロック少量、粒中量、褐色土ソフトブロック中・大少量（柱状）
- 2 75YR4/6褐色 ロームブロック大・中中量、ローム粒多量

第31図 第5号住居跡入り口ピット



第32図 第5号住居跡炉

の裏(3)の破片が混じることなどから人為的埋め戻しの結果と考える。

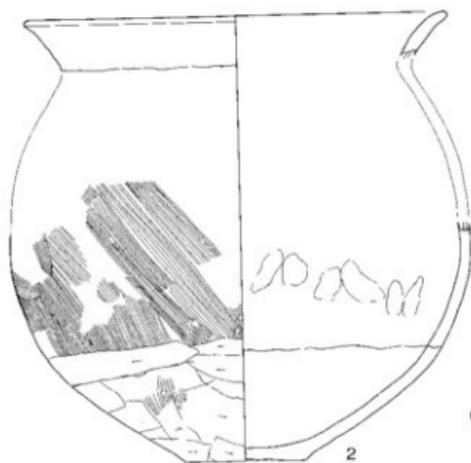
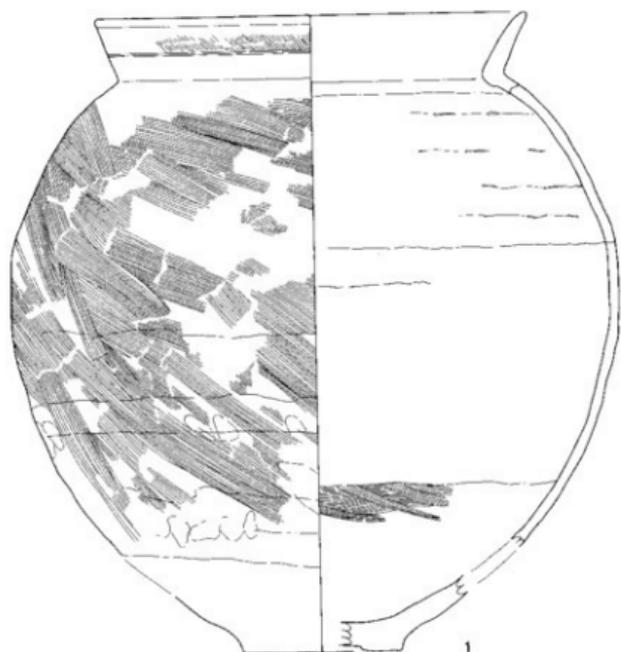
遺物 床近くからまとまった破片の出土を見せた裏(1・2・3)を見ると、1はP1の上はかなり細かい破片が散乱している。P1内部からは破片の出土を見なかったことから、当施設がまず埋められたものと考えられる。同一個体片が約3m離れた第2号住居跡の覆土中から出土している。2は住居中央床近くで集中出土したが、破片は細片で平面的にも2mあまり離れて散乱している。3はビットの項で述べたように投入土に混入したものであろう。1・2・3は住居廃絶時にはほぼ同時に廃棄されたと考えられるが、当住居に伴うかは不明である。他の出土遺物の中には第4号住居跡床出土の廃棄遺物と接合するものもある。このことは第2・4・5号住居跡が関連を持っていることを示している。

27は鳥帽子形の土製支脚で、完形品である。炉から1m離れた床上に横転していた。本来は複数個所有していたものであろうが当跡からは単品の出土である。

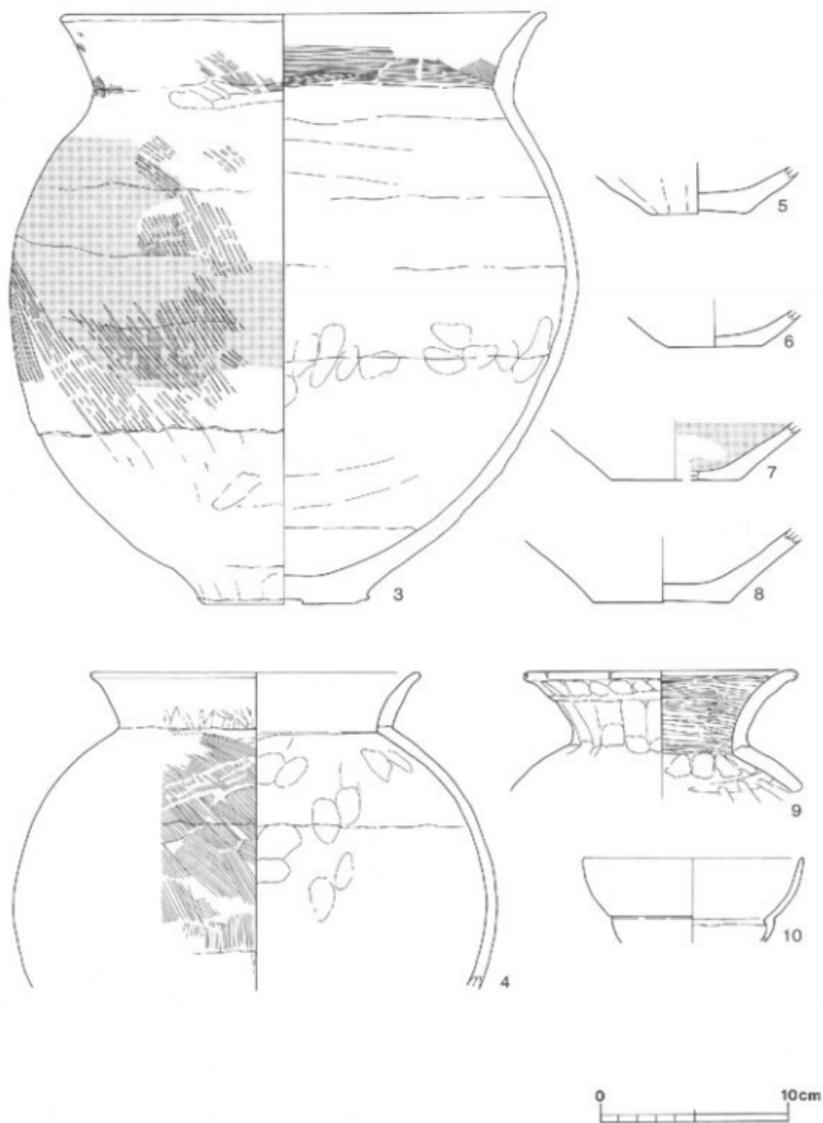
所見 当住居跡に伴うと考える遺物は炉跡出土の高杯(26)、支脚(27)等である。廃棄遺物も総合的に判断して4世紀後半のものとする。

第5号住居跡

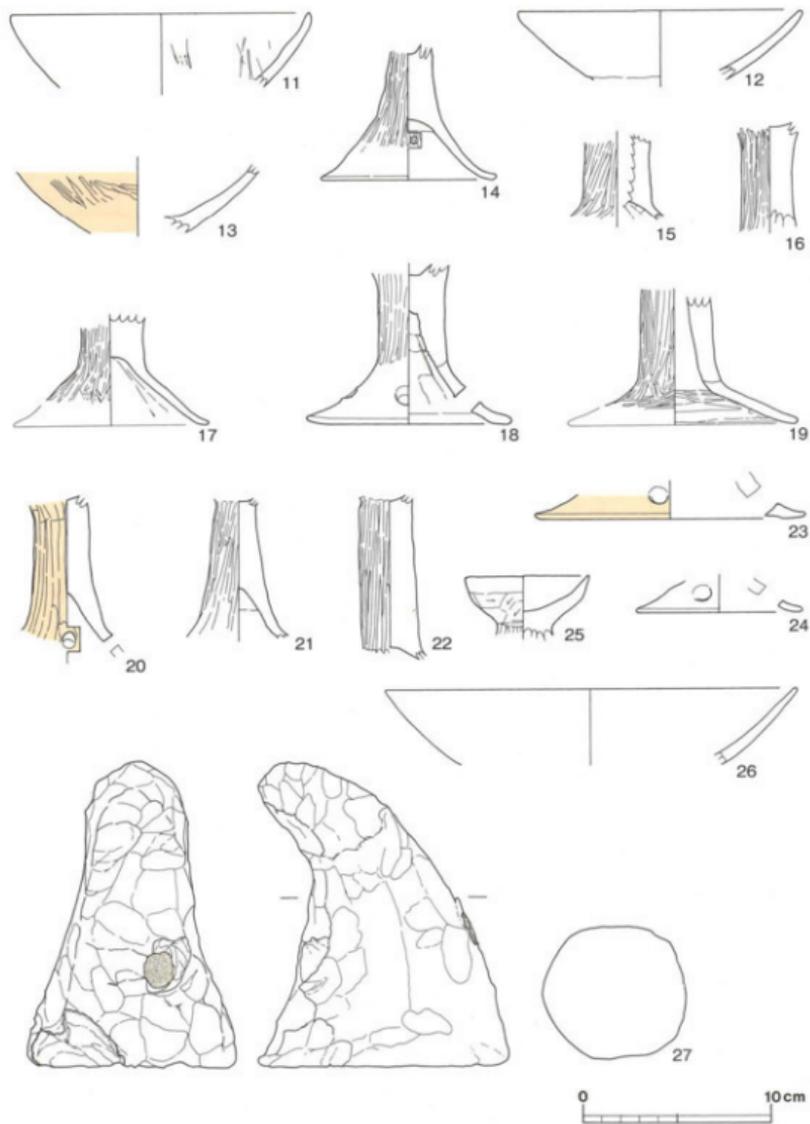
図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 状況	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕土師器	A : (22.8) B : (8.2) C : (33.8)	覆土下位 50% 普通	雲母△、長石・石英○	橙	底部上底で前部くの字状。口縁部外傾。胴部と口縁部の外面はハケ目。胴部内面上半ナデ、下半にハケ目。炭化物付着。	No.81
2	甕土師器	A : (22.5) B : (6.4) C : (31.3)	覆土下位 40% 普通	長石○、石英・雲母△	にぶい橙	平底。前部の字状。口縁部はやや外反。胴部中央ハケ目。下位へラ削り。外面はナデ。器面荒れる。	No.89
3	甕土師器	A : 25.6 B : 9.1 C : 31.3	覆土中位 80% 普通	長石・雲母○	明赤褐色	底厚上げ底。頂部は緩やかに屈曲。胴部はハケ目と細かなナデ。胴部と口縁部内外面はハケ目。器面荒れる。	No.82 SI-2破片と接合
4	甕土師器	A : (17.4) C : (16.8)	覆土中位 40% 普通	長石○、雲母△	濁灰 灰黄褐色	口唇部丸い。前部の字状。胴部外面ハケ目。	No.83
5	甕土師器	B : (5.2) C : (2.1)	覆土上位 60% 普通	雲母・白色 粒子△	にぶい黄褐色 濁灰	底部から緩く開く。底面中央へラ削りによりやや凹む。外面にはへラナデ。	No.88
6	第十師器	B : (3.0) C : (1.6)	ビット1 60% 普通	石英○	にぶい橙	平底。底部から緩く開く。被熱のせい口唇部荒れる。	No.87
7	甕土師器	B : (6.8) C : (2.7)	覆土中位 60% 普通	石英・雲母△	橙	平底。底面へラ削り。底部から緩く開く。内面に炭化物付着。	No.85
8	甕土師器	B : (7.2) C : (3.3)	覆土中位 60% 普通	白色粒○、小石○	明赤褐色	平底。底部から緩く開く。内面へラナデ。器面荒れる。	No.86 SI-2破片と接合
9	甕土師器	A : (14.5) C : (6.3)	覆土上位 70% 普通	小石△	明赤褐色 にぶい黄褐色	口唇部に3~4cm間隔で割目あり。口唇部肥厚。口縁部は外半し、外面の口唇直下に二重口縁を意味した段状の跡のみあり。	No.90
10	埴土師器	A : (11.8) C : (4.5)	ビット内 30% 普通	雲母△	橙	口縁部下に屈曲あり。内唇気味に立上る。内外面丁寧なナデ。	No.92
11	高杯土師器	A : (16.0) C : (3.9)	覆土上位 30% 普通	石英△、砂粒○	明赤褐色	杯部。内湾気味に立上る。内外面荒れる。	No.78



第33図 第5号住居跡出土遺物(1)



第34図 第5号住居跡出土遺物(2)



第35图 第5号住居跡出土遺物(3)

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
12	高坏 土師器	A: (15.0) C: (3.6)	覆土上位 30% 普通	細砂粒△	橙	坏部。縦く外傾する。内外面荒れる。	No.76
13	高坏 土師器	C: (3.3)	覆土上位 30% 普通	石英○	にぶい褐色	坏部。内彎気味に立上る。外面に赤彩の痕跡あり。	No.72
14	高坏 土師器	C: (7.0) 胴径: (9.2)	覆土下位 80% 普通	石英・小石 △	にぶい褐色	脚部。胴部外面に貫通しない孔1つあり。内面巻き上げ状痕跡かに残す。上端にソケット状の凹みあり。	No.66
15	高坏 土師器	C: (4.0)	覆土上位 50% 普通	石英・雲母 △	にぶい黄橙	中央柱状の脚部。脚はラッパ状に開くと思われる。	No.74
16	高坏 土師器	C: (5.2)	覆土 50% 普通	白色粒○	にぶい黄橙	小実柱状を呈す脚部。上端に坏部状面残る。	No.71
17	高坏 土師器	C: (5.7) 胴径: (10.4)	覆土上位 50% 普通	小石・白色 粒△	黒褐色 にぶい黄橙	中央柱状の脚部。脚部はラッパ状に開く。	No.67
18	高坏 土師器	C: (8.4) 胴径: (10.9)	覆土下位 80% 普通	小石○	橙	中央柱状の脚部。脚は縦くラッパ状に開く。小均等な4孔。上端にはソケット状の凹みあり。	No.75
19	高坏 土師器	C: (6.7) 胴径: (11.2)	覆土中位 70% 良	小石△、白 色粒○、緻 密な胎土	明赤褐	脚部で外面ミガキ。裾内面ハケ状工具による弱いナデ。中央柱状。裾は大きく開く。	No.68
20	高坏 土師器	C: (7.7)	覆土上位 100% 普通	長石・石英 ○	橙	一部中央柱状で縦に縦く。脚と裾の間に孔。器面は荒れているが、外面に僅かに赤彩の痕跡あり。	No.73
21	高坏 土師器	C: (7.4)	覆土上位 90% 普通	石英・小石 △	明褐	器身の中実で脚部がやや広がる柱状の脚部。	No.69
22	高坏 土師器	C: (8.3)	覆土上位 100% 普通	長石・石英・ 雲母△	にぶい黄橙	中央柱状を呈す脚部。上端・下端がやや円む。部分的に器面が荒れる。	No.70
23	高坏 土師器	C: (10.8) 胴径: (14.4)	覆土下位 20% 普通	長石・雲母 △	暗赤 にぶい橙	脚部。孔あり。外面に赤彩あり。	No.79
24	高坏 土師器	C: (1.8) 胴径: (8.8)	覆土下位 30% 普通	小石○	にぶい黄橙	脚部端は縦くやや反返る。透かし孔あり。	No.80
25	高坏 土師器	A: (6.5) C: (3.1)	覆土下位 70% 普通	長石・石英 ○	明赤褐	坏部は内彎気味に立上る。下縁は削り。口縁にコナデ。非常に小形の坏部。	No.91
26	高坏 土師器	A: (21.3) C: (3.9)	覆土下位 % 普通			坏部。口径の大きな坏部。縦く外傾する。	No.633

単位: cm

図版No.	器種	器種	最大径	最大高	重量	出土位置	残存率	備考
27	土師器	支脚	16.2	11.0	1450.0	伊東掘	ほぼ完形	No.468 中央に貫通孔

第6号住居跡 [SI-6] (第36・37図 PL9・36)

位置 調査区北東端、標高25m付近で、地形は西から東に傾斜している。X・Y-8・9区。

規模・形態 主軸長4.3m、幅約4.2mのほぼ正方形で面積18㎡である。

主軸方位 N-57°-W

壁 最下部の10cm余りを残すのみである。傾斜も弱く旧状をとどめていない。

床 西隅には攪乱、東隅は削平を受け残存状態が悪い。特に中央部は硬化しており、その南東端では約8cmの高まりが見られ、入り口部と目される。炬跡の周辺には焼土塊の散乱があるが、床が焼けたものではなく覆土最下部の堆積物であろう。壁溝は検出されなかった。

ピット P1～P3が主柱穴である。元は4本柱と考えるが攪乱のため1ヶ所確認できない。径20～30cmの小型円形ながら深さは40～50cmと深い。内区の面積は約32㎡となる。

P4は貯蔵穴であり、入り口左側に設けられている。径56cm程の円形を呈し、深さ26cm。底面は丸底で壁は緩く傾斜する。入り口付近にあるピット2ヶ所のいずれかは入り口施設に関わるものと考えられるが特定はできない。

炉 内区中央やや奥に主軸方向に長軸を合わせて検出された。長軸50cm、短軸20cm余りの範囲が赤変して検出された。明瞭な掘り込みはない。

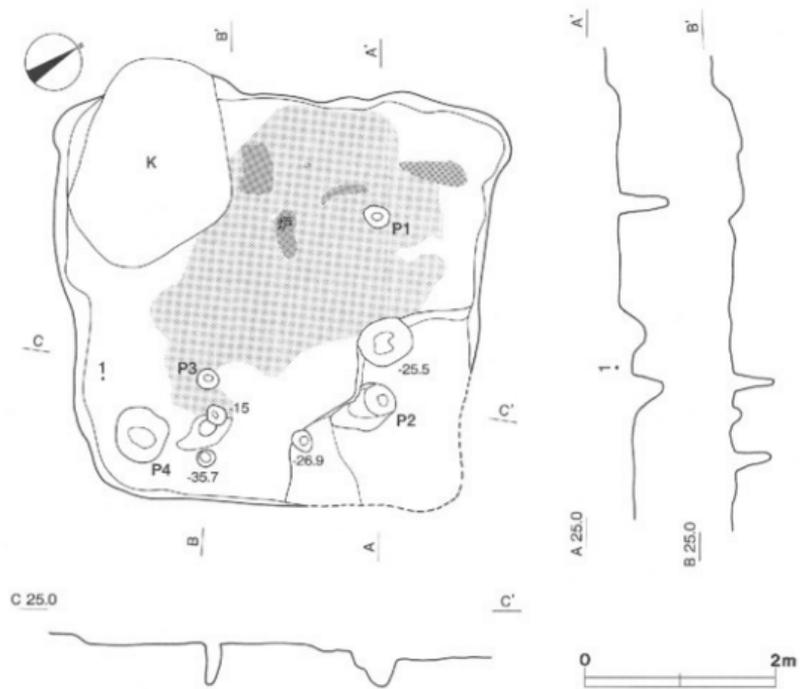
覆土 ほとんど残っていない。

遺物 ごく細片が散乱するのみである。2の壺口縁部は攪乱内から出土した。

所見 時期決定のための遺物を欠くが、構造から見て当期の住居跡である。

第6号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存 状態	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	蓋 土師器	A: [18.4] C: (4.7)	覆土下位 30% 普通	白色粒△	明赤褐色 に白い赤褐	口縁部中央に弱い沈線。内面に弱い稜を持つ。 外面に僅付着。	No.93
2	壺 土師器	A: [18.1] C: (7.1)	攪乱 80% 普通	灰石○、砂 粒○、小石 △	に白い黄褐色	折返し口縁で、排状浮文を3ヶ所貼り付ける。 胴位のハケ目の後ヘラナデ。頸部は縦位のハケ 目。内面は横位のハケ目の後ヘラ削り。	No.94



第36図 第6号住居跡



第37図 第6号住居跡出土遺物

第7号住居跡〔SI-7〕(第38図 P L 9・10)

位置 調査区北東端で、舌状台地の東側谷津を臨む標高25m付近。X・Y-10・11区。

規模・形態 東壁は削平され、南・北壁も旧状をとどめていない。復元主軸長は約5m、幅は不明だが、炉の位置から考慮すると幅約6mの横長方形を呈する住居と考えられる。

主軸方位 N-36°-E

壁 残存する西壁で、10cmを測るのみである。

床 西壁から3mの幅で残存しているが、ほかは削平を受けている。硬化面は全く見られない。

ピット 7ヶ所の小ピットが確認されたが主柱穴らしきものは見られず、4本柱の住居ではない可能性もある。南壁際には楕円形の浅いピットが検出され、炉と対称的な位置関係から間仕切溝の可能性もある。そのすぐ東のものは入り口に関連したピットの可能性がある。

鍛冶関連ピット 鍛冶炉の東側に存在する。平面形は29cm×25cmの不整形を呈する。深さは5cmを測る。覆上の外側は鍛造剥片を少量含む明褐色土層、内側は焼土を少量含む鍛造剥片を多量に含む暗褐色土層である。当ピットの周辺には鍛造剥片が濃密に分布し、金床石を備え付けたピットと思われる。中央には風化した片岩のようなものが見られた。

炉 北側の焼土が炉の残骸で、本来は南北方向に長軸を持っていたものと考え。現状では2ヶ所に固くなった焼土が点在する。

鍛冶炉 鍛冶関連ピットの西方にある。規模は18cm×13cmの楕円形を呈し、外縁部は幅3cmにわたり被熱によるロームの硬化が見られる。特に西側では焼土化した部分が点在し、南側では面的に焼土が広がる。この焼土の内側には一部重なるように細かい鉄滓を含む土があり、この内側には暗青灰色から青灰色の粒子を多量に含む褐色土層を検出した。青灰色の粒子は鍛造剥片ではない。底面の深さは6cm位と浅く焼けた面は見られず、鍛冶工程で炉内の碗形滓を取り出す際に底面が削り取られてしまったものであろう。このように、鍛冶炉外縁部に赤変部分の偏りが見られる理由としてファイゴの羽口の設置位置が関係していると思われる。

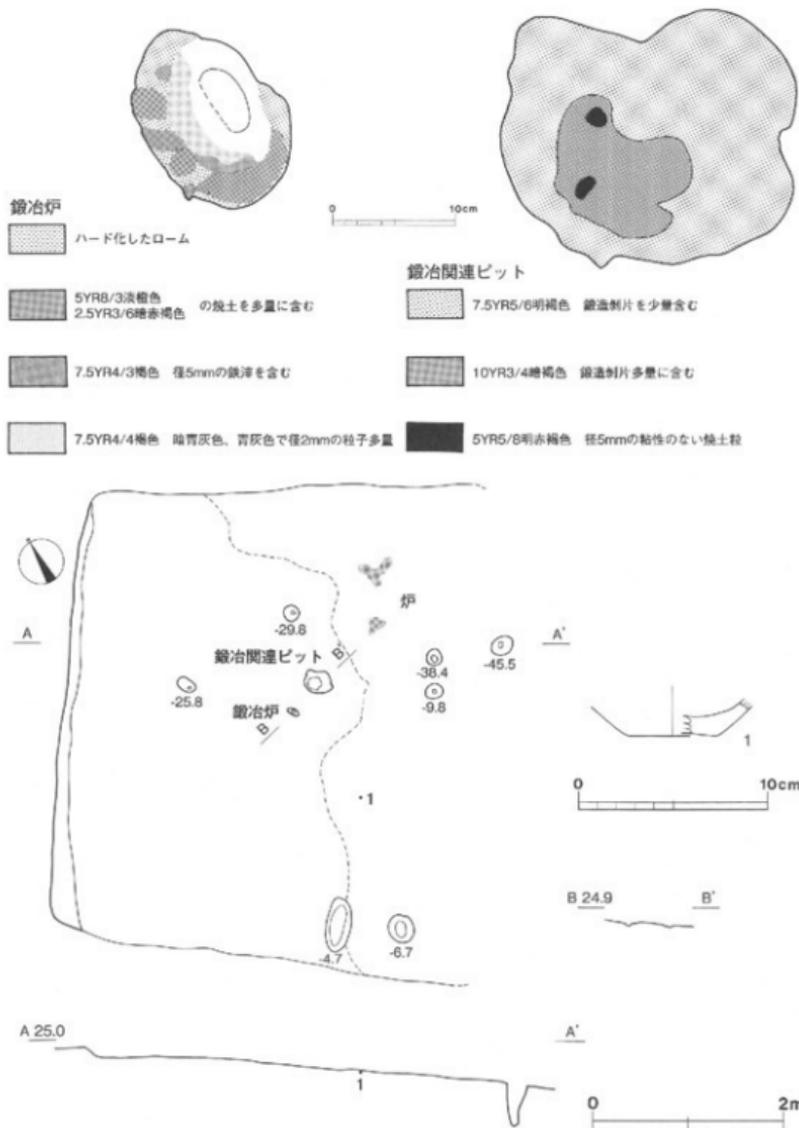
覆土 西壁際に残るのみであった。

遺物 本遺構出土の土器は小片が覆土中から出土したのみであった。このほか、覆土中から床面にわたり鍛造剥片・粒状滓・鉄滓小片などの微細な鍛冶関連遺物が出土した。

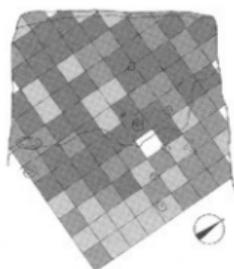
鍛冶関連遺物の調査 鍛冶関連遺物の検出にあたっては、床面近くに50cm方眼の試料採取区を設定し、方眼ごとの土を採取して水洗い・選別を行なった。水洗いは採取試料を洗面器に入れ、

第7号住居跡

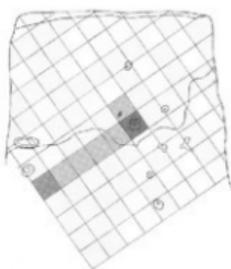
図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 構成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	焼 土師器	B: (4.8) C: (1.6)	覆土 40% 雲造	石英粒△	にぶい焼	底面はナゲラれやや上げ底となる。内面はナゲラれている。	No.96



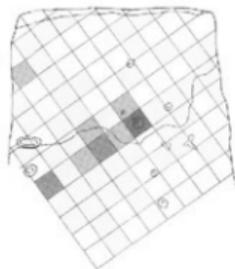
第38図 第7号住居跡・鍛冶炉・鍛冶関連ピット・出土遺物



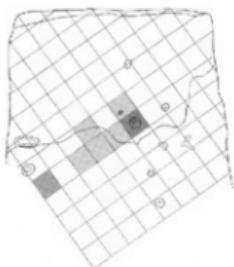
砂鉄
(0.4mm 未満)



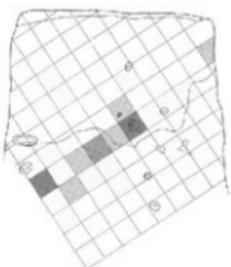
鍛造剝片②
(0.4mm 以上 0.8mm 未満)



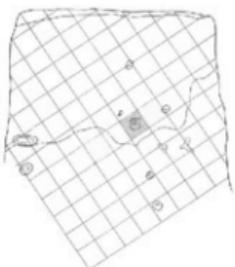
鍛造剝片③
(0.8mm 以上 1.5mm 未満)



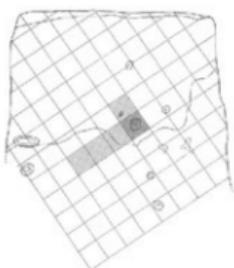
鍛造剝片④
(1.5mm 以上 2.0mm 未満)



鍛造剝片⑤
(2.0mm 以上 4.0mm 未満)



粒状滓合計
(0.4mm 以上 7.0mm 未満)



鉄滓合計
(0.4mm 以上 7.0mm 未満)

(砂鉄、鍛造剝片、鉄滓)

(粒状滓)

- 0.1g 未満
- 0.1g 以上 1.0g 未満
- 1.0g 以上 3.0g 未満
- 3.0g 以上

- 1 個
- 2 個
- 3 個以上

第39図 第7号住居跡鍛冶関連遺物出土状況

水によって余分な土壌を洗い流し、残った砂鉄・鍛造剥片・粒状滓などの鍛冶関連遺物を乾燥させ、磁石を用いて砂・小石などと分別・採取した。鍛冶関連遺物の選別にあたっては、6種類の網目(①0.4mm、②0.8mm、③1.5mm、④2.0mm、⑤4.0mm、⑥7.0mm)のふるいを用いて種別・大きさごとの選別を行なった。一応の区分としては、①のふるいを通過したものは砂鉄として扱った(その中には微細な鍛造剥片も含まれる)。そして、鍛造剥片・粒状滓・鉄滓については、先の②～⑥の5種類のふるいにかけて区別された資料をそれぞれ採集区ごとに集計した。鍛造剥片や滓鉄は重量によって、粒状滓は個数で集計したうえ、それを便宜上の数段階の区分で色分けし第39図の鍛冶関連遺物の出土状況図を作成した。

鍛冶関連遺物出土状況 上記の調査の結果、第39図のような分布状況で砂鉄・鍛造剥片・粒状滓・鉄滓が検出されている。この図に反映されている鍛冶関連遺物は床面近くの各試料採集区土層と、鍛冶炉や鍛冶関連ピット内土層から検出された資料を合算してある。その結果、同遺物は鍛冶関連ピット付近からの出土が目立ち、そのほか同ピット南側や鍛冶炉付近からもまとめて検出されている。鍛造剥片の大きさごとの出土状況は、鍛造剥片②・③は床面全体から出土しているが、鍛冶関連ピットや鍛冶炉そしてその南側からの出土が目立つ。そして、鍛造剥片④・⑤は床面全域にわたる分布は見られないものの、先の鍛造剥片②・③と同様の傾向を示す。鍛造剥片⑥は鍛冶関連ピットでのみ検出されたため出土状況図は作成していない。鍛冶関連遺物の検出最高数値はいずれも鍛冶関連ピットの存在する区域からのもので、鍛造剥片②で53g、同③で75g、同④で60g、同⑤で51g、同⑥で0.4gあった。粒状滓は同③・④・⑥合計で8個であった。また、鉄滓は1.0g検出された。

上記のことから、鍛冶関連ピットを中心とする場での作業の結果、濃密に鍛冶関連遺物が排出された様子が窺える。この鍛冶関連ピットとした遺構は、金床石を据えた場所と考えられる。また、鍛冶関連遺物が鍛冶関連ピットの南側で比較的にまとめて検出されていることについては、本住居が南側に傾斜する立地にあることが要因と考えられる。

所見 当跡は鍛冶作業を行なった工房としての性格を持つ遺構である。一般的な炉とは別に鍛冶炉を設け、金床石を据えたであろうピットが隣接している。住居の構造・出土遺物から古墳時代前期の4世紀後半の鍛冶遺構と考えている。鍛冶炉や鍛冶関連ピットの位置関係から、主要な鍛冶作業は入り口に対面する位置で行なわれたことが想定される。そして、鍛冶作業の結果排出された不要物は約9m離れた第4号住居跡に投棄されている。

なお、本遺構の鍛冶炉内出土の鍛造剥片・粒状滓については、金属学的調査と中性子放射化分析を実施している(詳細は総集編で報告する予定である)。そして、鍛冶炉と鍛冶関連ピットについては発泡ウレタンを用いて、遺構の取り上げを行なった。

第8号住居跡 [SI-8] (第40~44図 PL11・36・37)

位置 調査区ほぼ中央部で、標高25m内外の台地上。O・P・Q-11・12・13区。

規模・形態 主軸長6.4m、幅6.5mの正方形。面積41.6㎡の比較的大型の住居跡である。

主軸方位 N-2°-E

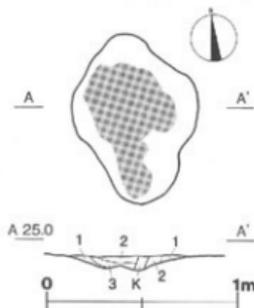
壁 上方は削平を受ける。緩い傾斜で約20cm立ち上がり、住居の最下部を残すのみである。

床 内区は全体的によく硬化しており明瞭に検出された。一方、外区の東・西・南壁側で幅1.3mにわたり硬化していない部位が帯状に巡る。特に東・西壁側では床面との間に緩いスロープがあり、ベッド状を呈する。また、貯蔵穴周囲にはテラス状部分があり硬化している。さらに入り口部も非常に固く締まっており、ベッド状遺構から連なって3cmほど盛り上がった箇所もある。壁溝は検出されなかった。

ピット P1~P4は主柱穴である。P3は上部を攪乱されているが他は遺存状態がよい。径30cmほどの円形を呈し、深さ75~85cmと深い。内区の面積は17.2㎡である。

P5は入り口ピットと考える。壁から60cm離れ、住居の中心線上から右側に寄って設けられる。径38cmの円形で南側に傾斜した掘り方であり、深さ39cmを測る。周辺は硬化し、特に北側は盛り上がっている。P6は貯蔵穴で、入り口右側コーナーに設けられる。上端はおよそ100cm×70cmの楕円形を呈する。深さは80cmで、壁は急にすぼまり、底面は平坦だが狭い。隣接してP2が掘削される。P7は住居北東隅にあり、貯蔵穴と考える。80cm×60cmの隅丸方形を呈する。深さは30cm弱でP6に比べ浅い。底面は丸みを帯びる。

炉 内区中央やや奥寄りに検出された。住居の主軸方向に長軸を持ち、90×66cmの楕円形に窪められていた。底面は被熱・赤変し凸凹している。またこれとは1~2m離れた内区に2ヶ所焼土が検出され、若干窪んで一部の底面が焼き締まっていた。

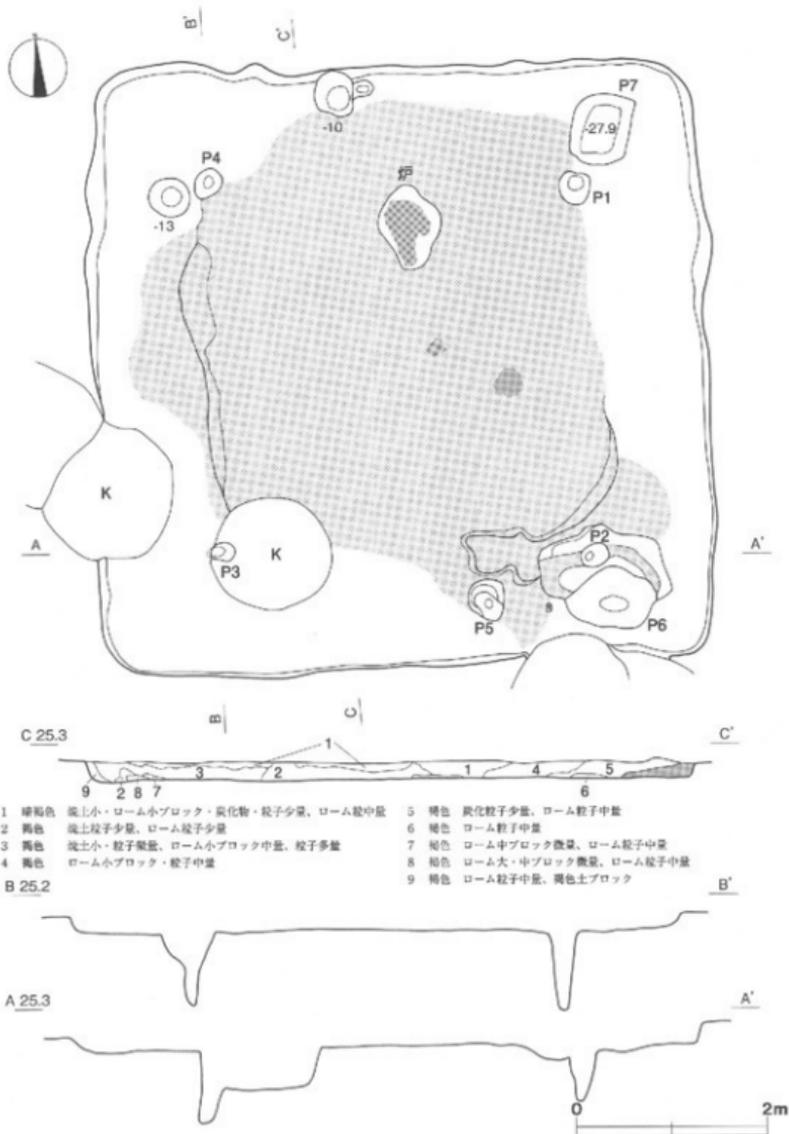


- 1 明赤褐色 灰土粒子多量、ローム粒子多量
- 2 暗赤褐色 灰土中・小量、砂多、ローム中・小量
- 3 暗赤褐色 灰土中・小量、砂多、ローム中・小量、ローム粒子多量

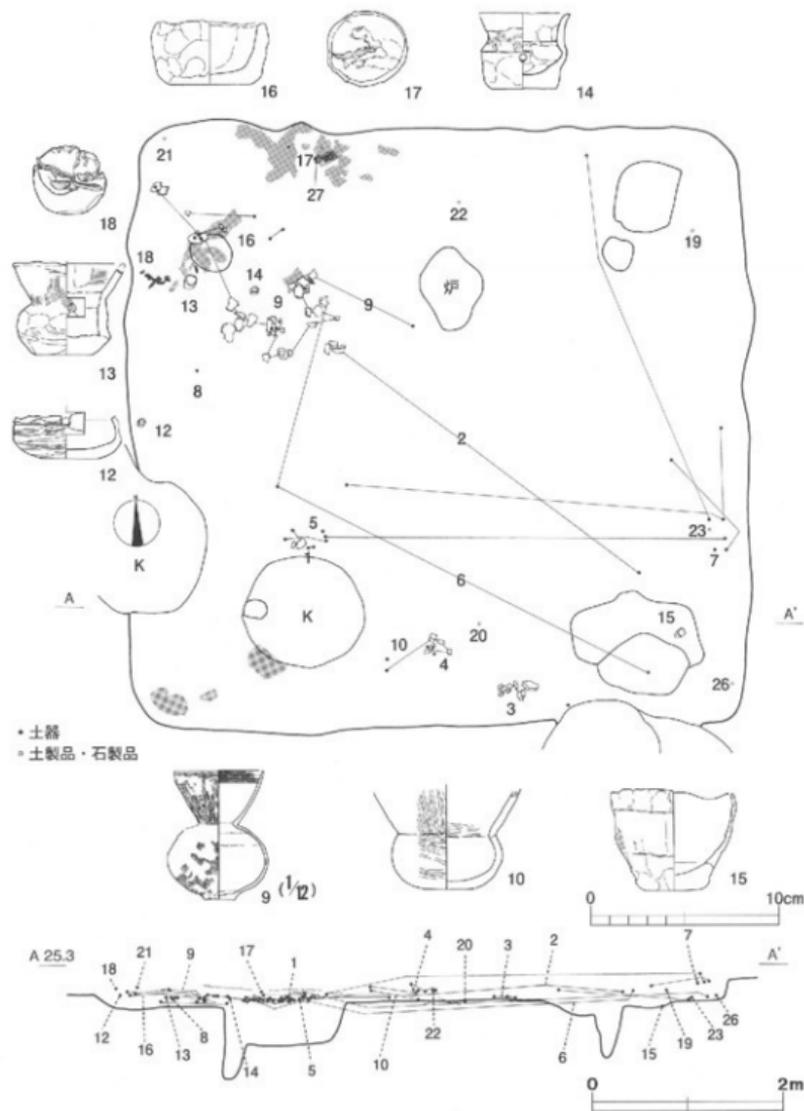
第40図 第8号住居跡炉

覆土 削平を受けており、旧状をとどめていない。主として北・東外区の壁際に流れ込む焼土が堆積し、少量ではあるが炭化材(27)も検出された。焼土は床近くまで堆積する箇所もあり、上屋の解体に火を使用した痕跡かと考える。

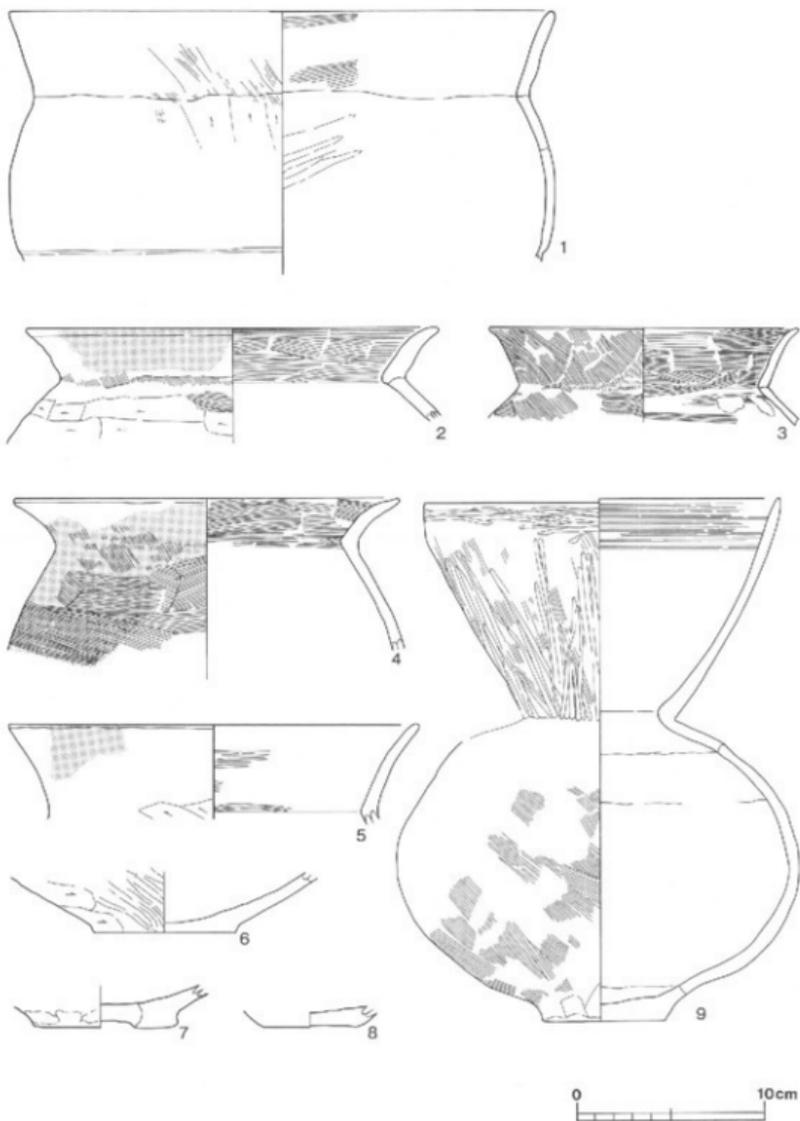
遺物 覆土上位で出土した埴形土器(9)は、同一個体片が焼土に混入しており、焼土とともに投入されたと思われる。また、ここで特徴的なのは小型の祭祀用品の出土が多いことで、小型丸底の埴(10・11・12)、粗製小型壺(13・14)、手握ね土器(15・16)、土製円盤(17・18)などがある。特にこのような土製円盤は模造鏡とも考えられ、前期土器に伴う珍しい例である。これらは覆土上位からの出土が多く、9と



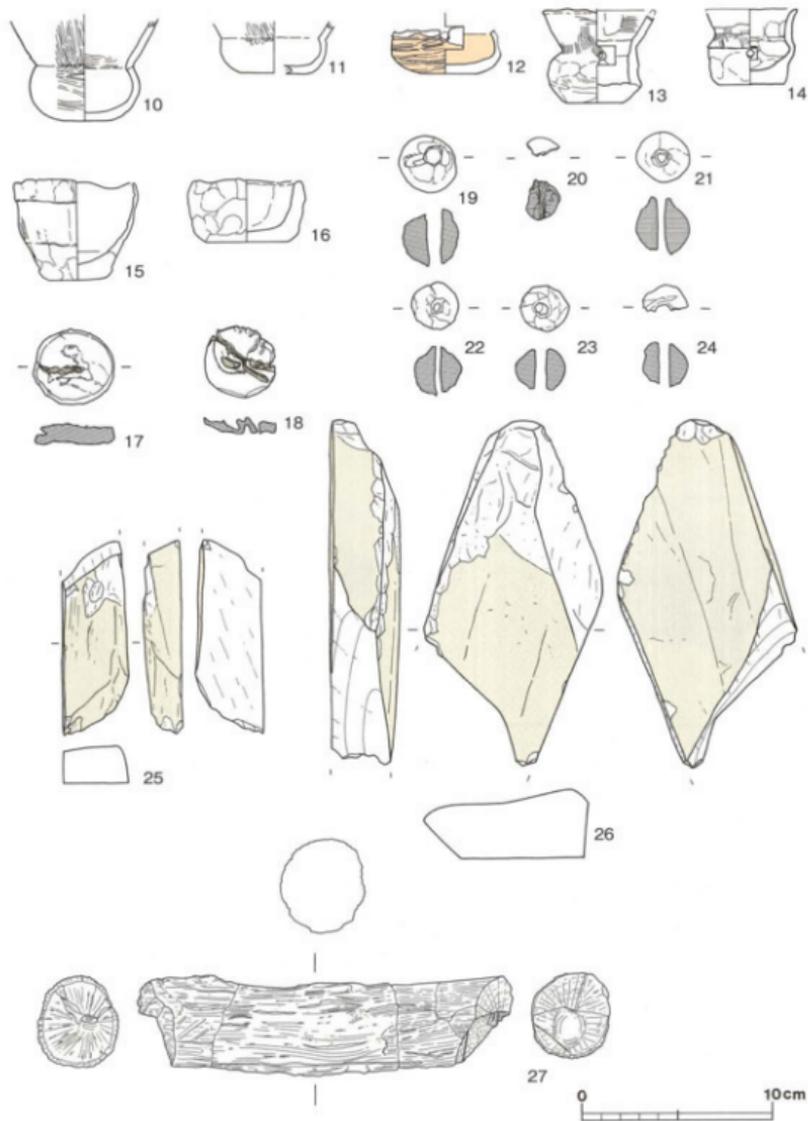
第41図 第8号住居跡



第42図 第8号住居跡遺物出土状況



第43图 第8号住居跡出土遺物(1)



第44図 第8号住居跡出土遺物(2)

第8号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	A: 29.0 C: (13.2)	覆土中位 10% 普通	小石○	にぶい橙 にぶい黄橙	内面は口縁部に深いハケ目、胴部にナデ。外面は口縁部に深いハケ目、胴部に横位のヘラ削り。口縁部は幅広く、胴部は狭い。	No.99
2	壺 土師器	A: 21.8 C: (6.1)	覆土中位 40% 普通	白色粒○	にぶい黄橙	口縁部の内外面にハケ目。口縁部外面にはヨコナデ。胴部に深いハケ目の後ヘラ削り。炭化物付着。	No.104
3	壺 土師器	A: (16.4) C: (5.1)	覆土下位 50% 普通	石英・小石・ 白色粒○	にぶい赤褐 明褐	内面は口縁部と胴上部にハケ目。外面は口縁部にハケの浅いヨコナデ。胴部外面にハケ目。ハケ目はいずれも縦削。	No.98
4	壺 土師器	A: 10.4 C: (8.0)	南部上位 20% 普通	石英・石○、 白色粒○	灰褐 にぶい褐	内面は口縁部にハケ目。外面は口縁部にヨコナデ、胴部にハケ目。炭化物の付着あり。	No.103
5	壺 土師器	A: 21.8 C: (5.3)	覆土中位 25% 普通	長石・雲母 ○、石英○	橙	内面は口縁部に深いハケ目の後、ナデ。外面は口縁部にヨコナデ。炭化物付着。	No.102
6	壺 土師器	B: 7.6 C: 2.9	覆土中位 70% 普通	長石・雲母 ○、石英○	明赤褐 にぶい褐	底面ヘラ削り、ミガキ。内面はナデ。	No.101
7	壺 土師器	B: 7.7 C: (1.8)	覆土上位 90% 普通	石英○、長 石○	にぶい褐	底部中央が高台状に上げ底となる。外面ヘラナデ。	No.100
8	壺 土師器	B: (5.0) C: (1.1)	覆土上位 50% 普通	長石△	にぶい褐 にぶい橙	底面ヘラ削りでやや上げ底。外面ナデ、内面は剥離している。	No.105
9	埴 土師器	A: 18.8 B: 7.8 C: 27.7	覆土上位 30% 普通	小石△、長 石・石英○	明赤褐 赤褐	内面は口縁部にヨコナデ。外面は口縁部に深いハケ目のあとミガキ、縁はヨコナデ。胴部に深いヘラ削り。	No.106
10	埴 土師器	B: 2.5 C: (5.3)	南部下位 50% 良好	長石○	明赤褐 赤褐	体部が潰れ、口縁部が外反する。口縁部が大きい。内外面丁寧なミガキ。内面に剥離あり。	No.108
11	埴 土師器	B: (3.5) C: (2.5)	覆土 30% 普通	細かい長石 ○	明赤褐 にぶい褐	体部が潰れ、口縁部が外反する。外面口縁部ミガキ。底面は平面。	No.109
12	埴 土師器	B: (2.4) C: 2.8	覆土上位 100% 普通	細かい長石 ○	赤褐	体部が潰れ、底面は平面。外面ミガキや剥離が見られる。体部上位に焼成後の穿孔の痕跡あり。内外面赤彩。	No.107
13	小壺 土師器	A: 5.9 B: 3.0 C: 5.0	覆土上位 90% 普通	長石○	にぶい橙	内面は口縁部にハケ状工具によるナデ、胴部ヘラ削り。外面は口縁部にハケ目、胴部にヘラ削り。胴部の内外に穿孔途中の痕跡1ヶ所。	No.466
14	小壺 土師器	A: (4.8) B: 5.6 C: 4.0	覆土 90% 普通	長石を含む	にぶい黄橙	胴部に3mmの小孔。胴部上位に粘土帯の痕を残す。底部にハケ目。器面は荒れる。	No.465
15	手捏ね 土師器	A: 6.5 B: 3.2 C: 5.3	P5クラス 95% 普通	長石・雲母 ○	にぶい橙	内面はヘラナデ。外面は口縁部を折返し、胴部ハケ目の後ヘラナデ。下位はヘラナデ。勝手に仕上げる。器面荒れる。	No.110
16	手捏ね 土師器	A: (5.7) B: (4.4) C: 3.3	覆土上位 50% 普通	長石・雲母 △	灰黄褐	底面から直に口縁部が立上がる。指痕によるナデ。	No.112

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
17	土製品	円盤	4.2	3.9	18.7	北西壁際	完形	No.111
18	土製品	円盤	3.9	3.7	9.7	北西壁際	完形	No.471
19	土製品	土玉	2.9	2.9	21.0	覆土	完形	No.113
20	土製品	土玉	2.2	1.7	2.9	覆土	小片	No.115
21	土製品	土玉	3.2	2.8	18.0	覆土	完形	No.116
22	土製品	土玉	2.7	2.5	13.0	覆土	完形	No.114
24	土製品	土玉	2.4	2.4	5.0	覆土	1/2	No.117
23	土製品	土玉	2.2	2.6	11.4	覆土	完形	No.118

図表No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
25	石製品	砥石	10.15	3.4	1.95	108.0	緑色凝灰岩	石6 26と接合 2区一括
26	石製品	砥石	18.3	8.9	3.65	680.0	緑色凝灰岩	石7 25と接合
27	炭化材	加工木	19.6	4.2	4.9	—	炭	No.643 切屑痕あり

同様に投入土に混入していたものと推測される。投入土とはこの場合、上屋の解体と片付けに伴うものであったと思われる、上記の遺物はこの作業に付随する祭祀に使用された遺物であった可能性もある。

25・26は接合する緑色凝灰岩製の砥石である。27は加工痕の残る炭化材である。

また、覆土下位から出土した土器片が第10号住居跡覆土中位の出土遺物と接合する。

所見 出土遺物はおおむね当住居の廃絶時期を表すと考え、4世紀後半の住居とする。

第9号住居跡〔SI-9〕(第45～48図 P L12・37)

位置 調査区ほぼ中央で、標高25m内外の台地上。T・U-12・13区。

規模・形態 主軸長5.5m、幅5.5mの正方形。面積30㎡。

主軸方位 N-41°-W

壁 上部は削平を受けており、特に南・西壁側では壁溝の立ち上がりしか残っていない。残存状態のよいところで20cmほどの高さである。

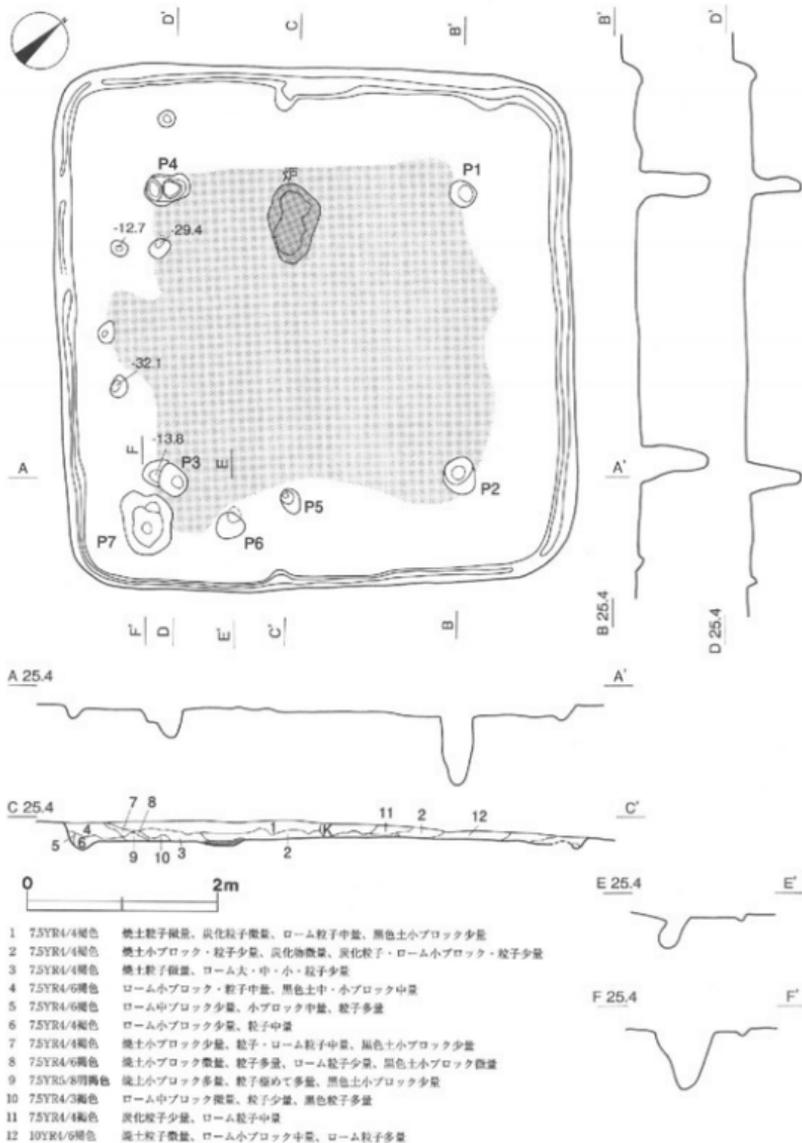
床 平坦で明瞭に検出された。特に内区及び入り口・貯蔵穴付近は非常によく踏み固められている。壁溝は幅12～26cm、深さ6～10cmの規模で全周する。

ピット P1～P4は主柱穴である。径26～34cmの円形を呈し、深さ50～70cmである。これらに囲まれた内区の面積は9.3㎡となる。P4は2個連結した形状である。P5は炉跡に対面して設けられ、40cmの深さを持つ。P6は深さ30cmと浅めだが壁方向へ25°傾いており入り口ピットと考えられる。壁から80cm離れ、住居の中心線上から左に寄って掘削される。

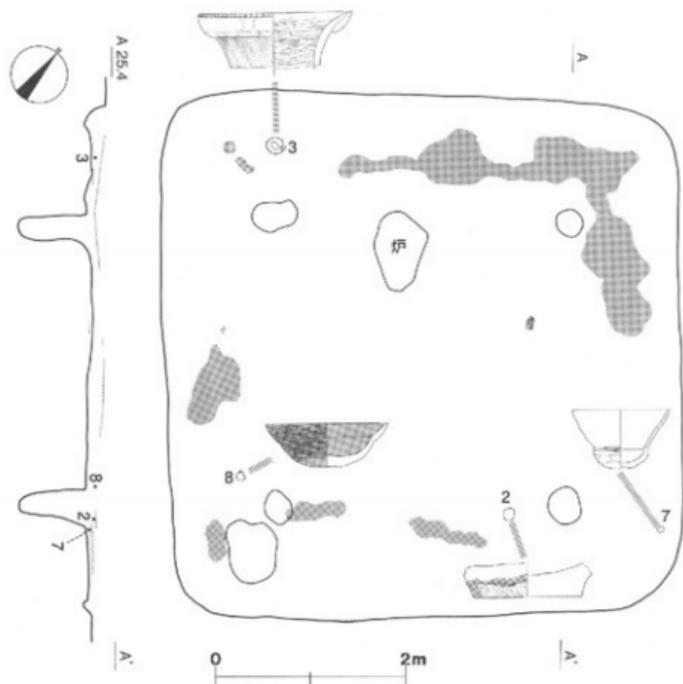
P7は貯蔵穴で、入り口左側コーナーに掘削される。検出面では楕円形を呈したが、緩い傾斜を有しており実際の掘り込みは径35cmほどの円形である。深さは約60cmを測る。上層にローム粒を含む褐色土、下層には暗褐色土が堆積し、上縁から覆土上層にかけては焼土の面的な堆積も見られた。

炉 内区中央寄りに、住居の主軸方向に長軸を合わせて85×50cmの楕円形の焼土分布が見られた。床をわずかに窪ませている。

覆土 東コーナーを除く外区一帯に多量の焼土の分布が検出されている。北壁近くの焼土分布域はその床面硬化範囲と重複している。焼土は壁際では厚く堆積し、住居内側に行くほど薄い。内区ではごく少量の炭化材が出土し最下層の埋土にも少量の炭化粒が散っているが焼土塊はほとんど検出されなかった。量的に考えて上屋を焼却処分したものと思われる、焼土中には暗褐色の間



第45図 第9号住居跡

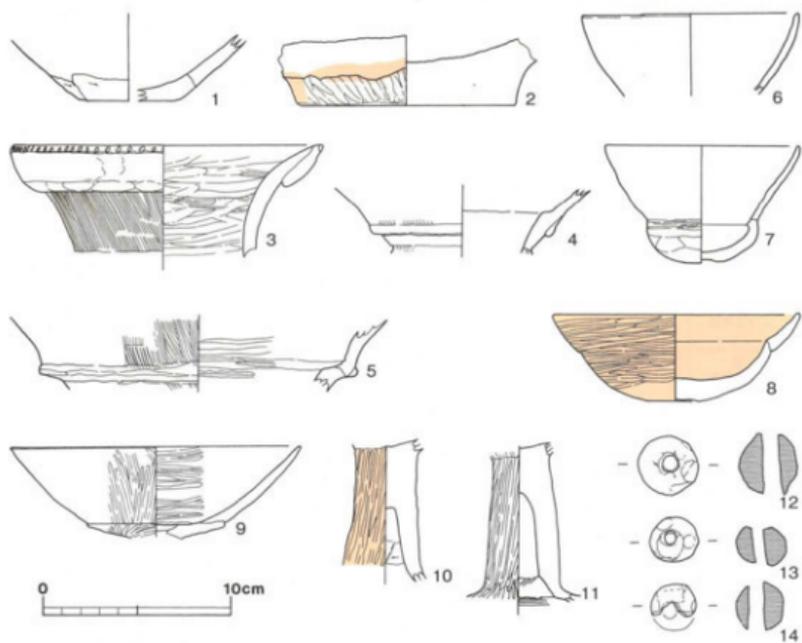


第46図 第9号住居跡遺物出土状況

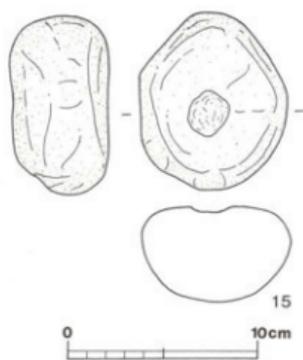
層が挟まれることから、焼却が数度にわたった可能性もある。

遺物 焼土層上面のレベルに散乱している。2は大型壺の底部だが輪積ではがれ厚い皿状を呈している。外面には赤彩が施されており、はがれた接合面でもその顔料が識別できるの。3も頸部の接合帯できれいに割れ、口縁部を下にして出土した。

所見 P6を入り口ピットと考え、その傾斜から復元すると当初の住居壁の高さは150cm余りとなり、調査時にはその90%が失われていることになる。明瞭に当跡にともなう遺物はないが覆土出土遺物を総合して4世紀後半の住居と考える。



第47图 第9号住居跡出土遺物(1)



第48图 第9号住居跡出土遺物(2)

第9号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 構成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壳土師器	B: (5.6) C: (3.2)	覆土 40% 普通	長石・大き い石英○・ 雲母○	にぶい赤褐色	外面横位のヘラ削り。	No.123
2	埴土師器	B: (11.6) C: 2.8	覆土中位 20% 普通	長石・石英・ 雲母○	にぶい黄褐色	底部はかなり厚く、大形の壺と思われる。外面の裾れ面付近に赤彩痕あり。	No.124
3	埴土師器	A: 16.8 C: (3.7)	覆土中位 100% 普通	石英△・長 石○	にぶい黄褐色	口頸部に削目。内面はヘラ削りの後ミガキ。外面は口縁部にハケ状工具によるヨコナデ。腹部縦位の丁寧で繊細なハケ目。口縁は折返し。	No.127
4	埴土師器	C: (3.2)	覆土 90% 普通	長石・石英・ 雲母○	澄 明赤褐色	二重口縁部の口縁部。内面に膝をもち、外面には粘土帯貼付けによる段が見られる。	No.126 焼土層上
5	埴土師器	C: (3.8)	覆土 10% 普通	長石○、石 英・雲母○	にぶい橙	二重口縁の外面に縦位の繊細なハケ目。	No.125 焼土層上
6	埴土師器	A: (11.6) C: (4.2)	覆土下位 30% 普通	長石○、石 英・雲母○	にぶい橙	内外面ハケ目。	No.119 焼土層上
7	埴土師器	A: (10.25) B: 2.0 C: 6.3	床直 70% 普通	長石○、石 英・雲母△	澄	口縁部が過大な作りとなる。口縁部の内外面はナデられる。体部下半はヘラナデ。	No.129
8	埴土師器	A: (3.1) B: 2.3 C: 4.6	床直 60% 普通	長石・石英 ○、雲母・ 小石○	にぶい橙 にぶい黄褐色	外面は口縁部に横位のミガキ。底部上げ底。口縁部折返して内湾気味に立上がる。内面の割鑿著しい。内外面赤彩。	No.128 焼土層上
9	高坏土師器	A: (15.4) C: (4.8)	覆土 30% 普通	緻密	にぶい橙	坏部の底部付近に膝を持つ。内・外面ミガキ。	No.120 焼土層上
10	高坏土師器	C: (6.9)	床直 100% 普通	長石・石英 ○、雲母・ 小石○	にぶい黄 褐色赤褐色	柱状の脚部で1/2が中空。内面横位のヘラナデ。外面丁寧なミガキ。赤彩の痕跡あり。	No.121
11	高坏土師器	C: (7.6)	覆土 100% 普通	長石・石英 ○、雲母・ 小石○	にぶい橙 にぶい褐色	柱状の脚部で内部は中空。頸部は屈曲して開く。頸部内面ハケ目。外面ミガキ。	No.122 焼土層上

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
12	土製品	土皿	3.1	3.2	29.0	床直	完形	No.579
13	土製品	土床	2.0	2.6	10.7	焼土層上	ほぼ完形	No.580
14	土製品	土玉	2.5	2.4	14.0	貯蔵穴	1/2	No.581

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
15	石器	釵形器	9.3	7.05	5.0	520.0	チャート	石8 釵形による凹みあり

第10号住居跡〔SI-10〕(第49~53図 P L13・37・38)

位置 調査区中央で、標高25m地点。N-15、O・P-15・16区。

規模・形態 主軸長5.3m、幅6.4mの横長の方形。面積33.9㎡。

主軸方位 N-16°-W

壁 上部は削平を受け、約20cmの高さを残すのみである。緩やかに傾斜する。

床 平坦で明瞭に検出されたが入り口部を除いてほとんど硬化面が見られない。また貯蔵穴から入り口部施設一帯では他に比し全体的に高くなる。壕溝は検出されなかった。

ピット P1~P4は位置的にみて柱穴かと思われる。総じて径20cm内外と小型だが、P3だけは径48cmと大きい。深さもP1・P4(4~5cm)、P2・P3(30~50cm)でばらつきがある。他にも性格不明のピットが多数掘り込まれ、この中には柱を受けるものが含まれると思われる。一応の目安としての内区面積は12.6㎡となる。

P5は入り口部にかかわる施設と考える。壁から約90cm離れ、竪穴中心線より左に寄って掘削されている。径24cm、深さ約11cmで、周囲は踏み固められ硬化している。

P6は貯蔵穴で、入り口左側コーナーに設けられ、P3に近接して掘られている。隅丸方形を呈し平面規模は70×60cm、深さ52cm、西・北側にかけて平坦部を持ち、また入り口側にも8cmほどの浅い方形のテラスを有する。底は狭い丸底で下部の壁はほぼ直立、上方は緩く傾斜する。埋土はローム粒子・ブロックを含む土がほぼ平行に堆積する。

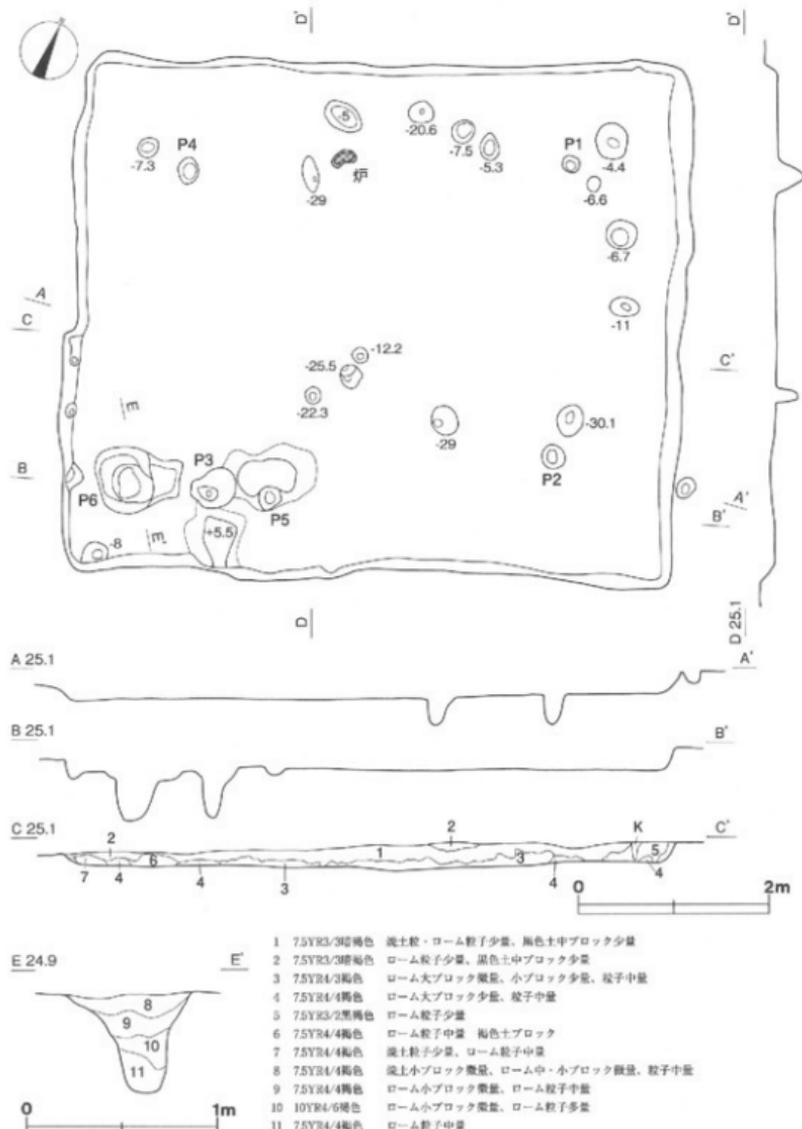
炉 住居奥側、P1とP4を結ぶ線上付近に、焼土の分布と不整形の浅い掘り込みが検出された。非常に小規模で焼土の量も少ないが、これを炉とした。

覆土 上部は削平され、旧状をどの程度とどめるのか定かでない。床を覆っているのはローム粒子を中量含む褐色土(第3層)である。

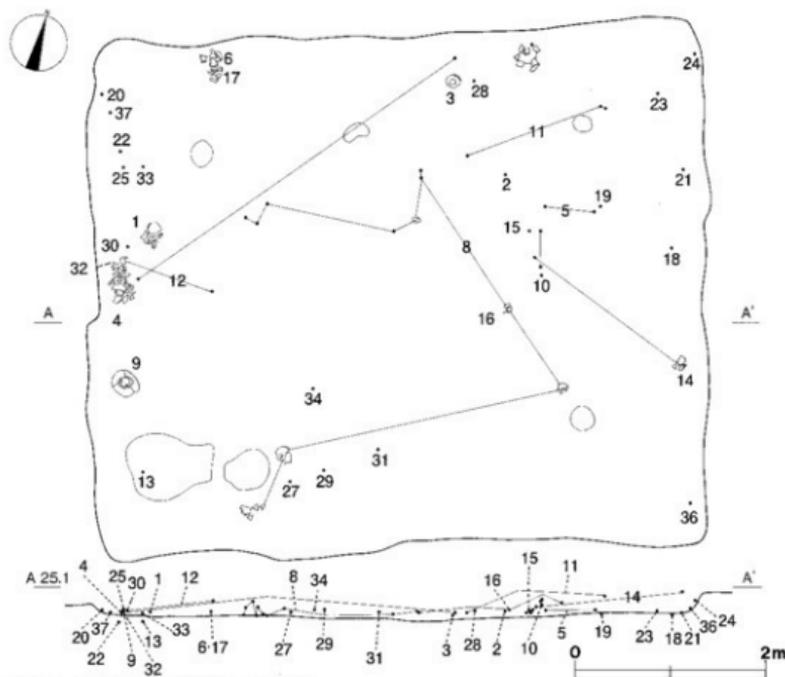
遺物 廃棄遺物片が覆土中に散乱しており、西壁と北壁際に小片の集中がみられる。この中で8・9等の壺は第3層中からの出土で、埋没過程の初期に入り込んだものであろう。また第1層下部から出土した甕(2)と接合する破片が第8号住居覆土下位から出土している。両住居の距離は約8mである。

18~34は土玉で26の外面には繊維圧痕が見られる。35は刀子状の鉄製品である。

所見 覆土下層出土の遺物を総合的に判断して4世紀後半の住居と考える。



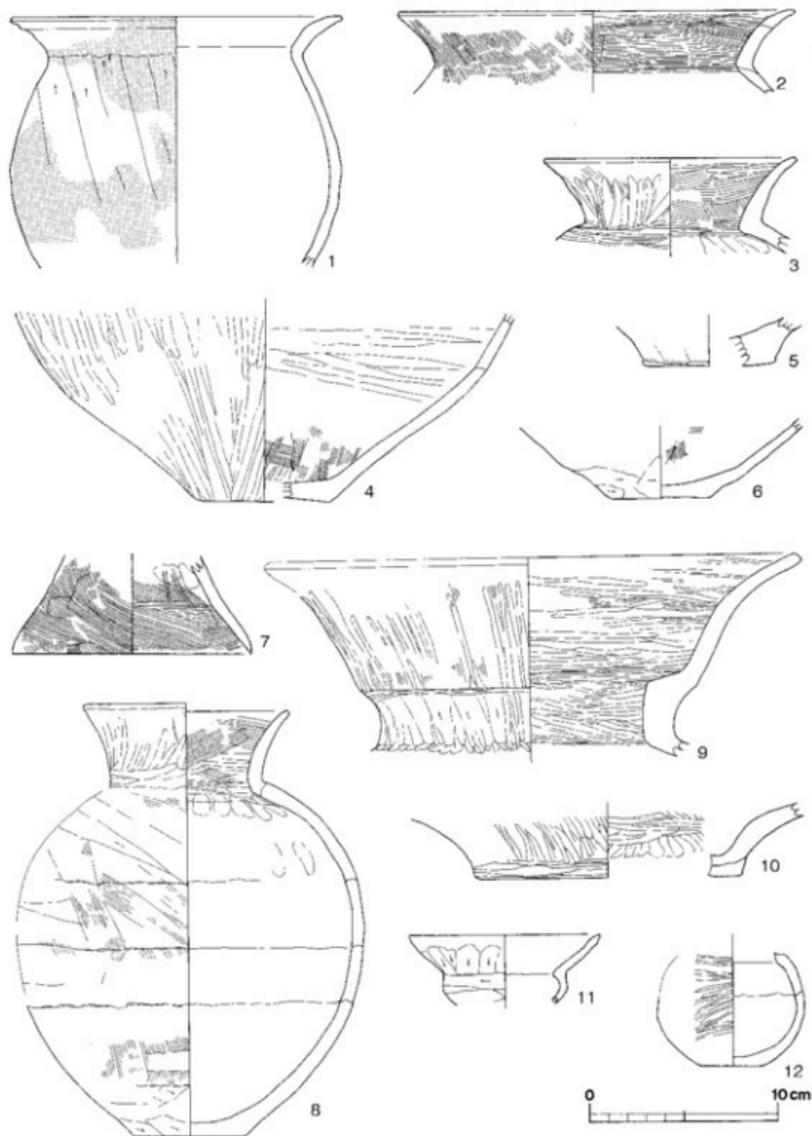
第49図 第10号住居跡



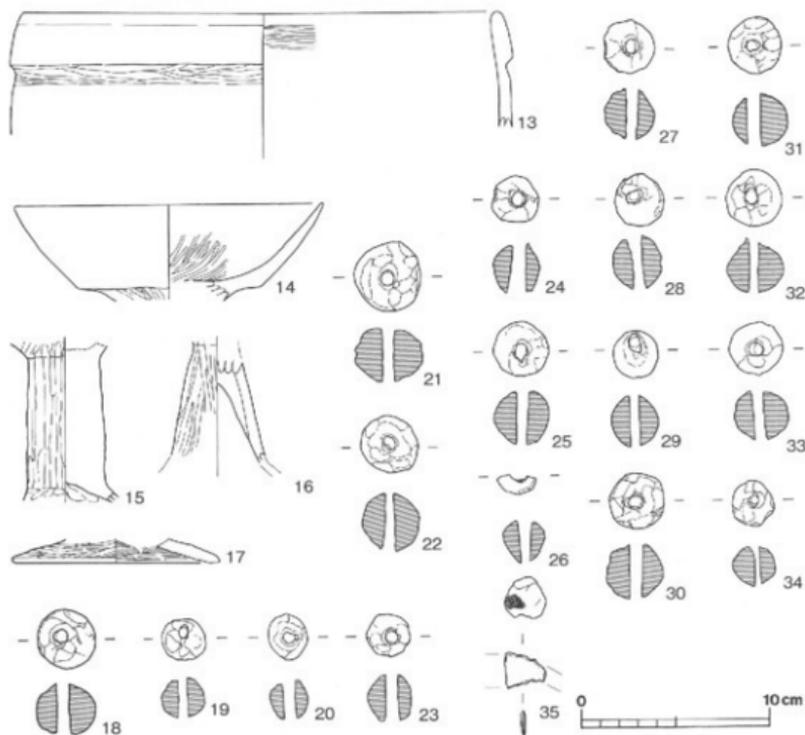
第50図 第10号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 構成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	A : (19.6) C : (13.3)	覆土下位 30% 普通	長石○、石 英・雲母・ 小石○	にぶい赤褐色 にぶい橙	胴部は丸く、頸部は強く屈曲し口縁部が湾曲して外反する。内・外面はヨコナデ。外面ヘラナデ。外面に灰化物付着。	No.135
2	壺 土師器	A : (21.0) C : (4.3)	覆土中位 30% 普通	石英・雲母・ 小石○	にぶい橙 灰褐色	胴部は強く屈曲し、口縁部は湾曲して外反。内面は口縁部にハケ目。外面は口縁部にハケ目の後上位ヨコナデ。胴部ハケ目。	No.137
3	壺 土師器	A : (16.4) C : (5.1)	覆土中位 100% 普通	長石○、石 英・雲母○	にぶい褐色	胴部は強く屈曲し、口縁部が外反する。内面緑なハケ。外面はハケ目のあと緑なミガキ。	No.139
4	壺 土師器	A : 7.6 C : (14.8)	覆土下位 50% 普通	長石○、石 英・雲母○、 普通	にぶい褐色	大型の密灰部。外面ミガキ。内面灰部付近はハケ目。	No.136
5	壺 土師器	B : (7.0) C : (2.1)	覆土下位 30% 普通	長石○	橙	厚手の底部で、粗いハケの上にヘラナデ。	No.140
6	壺 土師器	B : 5.2 C : 3.7	覆土下位 70% 普通	雲母○、長 石・石英○	明褐色 にぶい橙	外面胴部下端ヘラナデ。内面には新摩が見られる。	No.138
7	台付壺 土師器	B : (12.7) C : (5.2)	覆土 25% 普通	長石・雲母 ○	褐灰 明褐色	ハの字状に開く胴部。内・外面ハケ目。胴部先端細くなる。	No.141

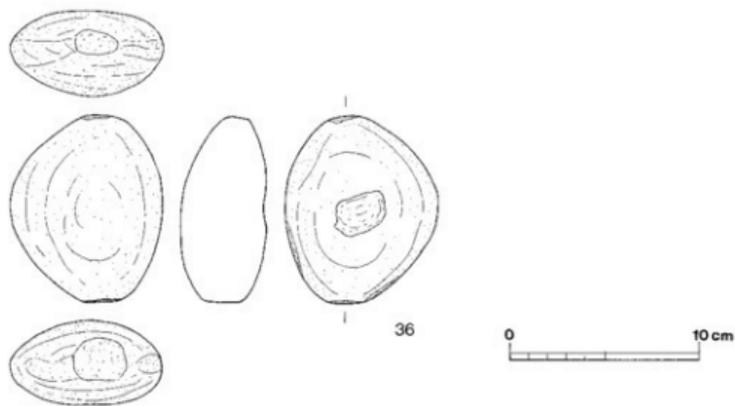


第51图 第10号住居跡出土遺物(1)



第52図 第10号住居跡出土遺物(2)

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 形成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
8	壺 土師器	A: (10.8) B: 5.9 C: 23.0	覆土下位 60% 普通	長石○、石 英・雲母△	橙	頸部は直筒し口縁部が外反。口縁部外面にはヘラミガキ、内面にはハケ目。胴部内外面には輪積痕が残る。底部にヘラ削り。	No.142
9	壺 土師器	A: (28.8) C: (10.0)	覆土下位 90% 普通	長石・石英 ○	明黄褐色	大部の二重口縁部の口縁部。内・外面の口縁はハケ状工具によるナデの後ミガキ。胴部ヘラナデ。口唇部面取り。	No.144
10	壺 土師器	C: (3.2)	覆土上位 20% 普通	長石○、石 英・雲母○	赤褐色	二重口縁部の口縁部。内・外面ミガキ。	No.143
11	埴 土師器	A: (10.2) C: (3.7)	覆土上位 40% 普通	長石・石英 △	にぶい黄褐色	体部は潰れ、口縁部が大きく外傾。口縁部外面ヘラナデ。体部上位ヨコナデ。口縁部内面丁寧なナデ。	No.463
12	小型壺 土師器	B: 3.2 C: (5.9)	覆土下位 60% 普通	長石○、石 英・雲母○	赤褐色	丸い胴部。外面胴部密なナデ。内面には輪積痕あり。底面ヘラ削り。	No.145
13	鉢? 土師器	A: (25.8) C: (6.1)	床面 10% 普通	長石・石英 ○、雲母○	にぶい橙	筒状の器形で、口縁部はやや内傾。口縁部ヨコナデ。口縁下縁に太い沈線 (10mm)。	No.134



第53図 第10号住居跡出土遺物(3)

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
14	高坏 土師器	A: (16.4) C: (5.1)	覆土上位 15% 普通	長石・雲母・ 石英○、緻 密	靑	坏部。内・外面ナデ。下側に襷を持ちやや内湾 気味に立上がる。	No.133
15	高坏 土師器	C: (8.3)	覆土下位 100% 普通	長石・雲母・ 石英○	にぶい黄橙	中央柱状の脚部。脚部ミガキ。	No.131
16	高坏 土師器	C: (7.0)	覆土上位 80% 普通	長石○	赤褐	柱状で中央の脚部でややラッパ状に開く。	No.132
17	高坏 土師器	B: (11.0) C: (7.0)	覆土下位 30% 普通	長石○、雲 母△、石英 ○	にぶい赤褐	脚部から屈曲する脚部。内面ハケ目。外面ミガ キ。	No.130

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
18	土製品	土玉	2.6	2.9	25.4	覆土	完形	No.146
19	土製品	土冢	2.1	2.7	8.9	覆土	完形	No.147
20	土製品	土玉	2.1	2	8.6	覆土	完形	No.148
21	土製品	土冢	2.9	3.5	30.1	覆土	完形	No.149
22	土製品	土玉	3	2.6	21	覆土	完形	No.150
23	土製品	土冢	2.5	2.3	12.4	覆土	完形	No.151
24	土製品	土玉	2.5	2.4	13.6	覆土	完形	No.152
25	土製品	土冢	2.8	2.9	22.2	覆土	完形	No.153
26	土製品	土玉	2.2	2.2	3.4	覆土	1/2	No.154 縦線状正板
27	土製品	土玉	2.6	2.6	17.7	覆土	完形	No.155
28	土製品	土玉	2.8	2.6	18.4	覆土	完形	No.156
29	土製品	土冢	2.8	2.5	13.3	覆土	完形	No.157
30	土製品	土玉	2.9	2.9	21.3	覆土	完形	No.158
31	土製品	土冢	2.7	2.9	21.7	覆土	完形	No.159
32	土製品	土玉	2.8	3	21	覆土	完形	No.160
33	土製品	土玉	2.6	2.9	22.5	覆土	完形	No.161
34	土製品	土玉	2.1	2.2	9.1	覆土	完形	No.162

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
35	金属製品	刀子?	2.1	1.86	0.4	1.3	鉄	No.623 下層は薄い
36	石器	敲打器	9.85	8.05	4.5	4800	砂岩	石10 敲打による凹みあり
37	石器	敲打器	9.7	9.2	5.45	7300	砂岩	719 敲打による凹みあり

第12号住居跡 [SI-12] (第54・55図 P L13・39)

位置 調査区中央で標高25m地点。S・T-15・16区。第11号住居跡と切り合っており当住居の方が古い。

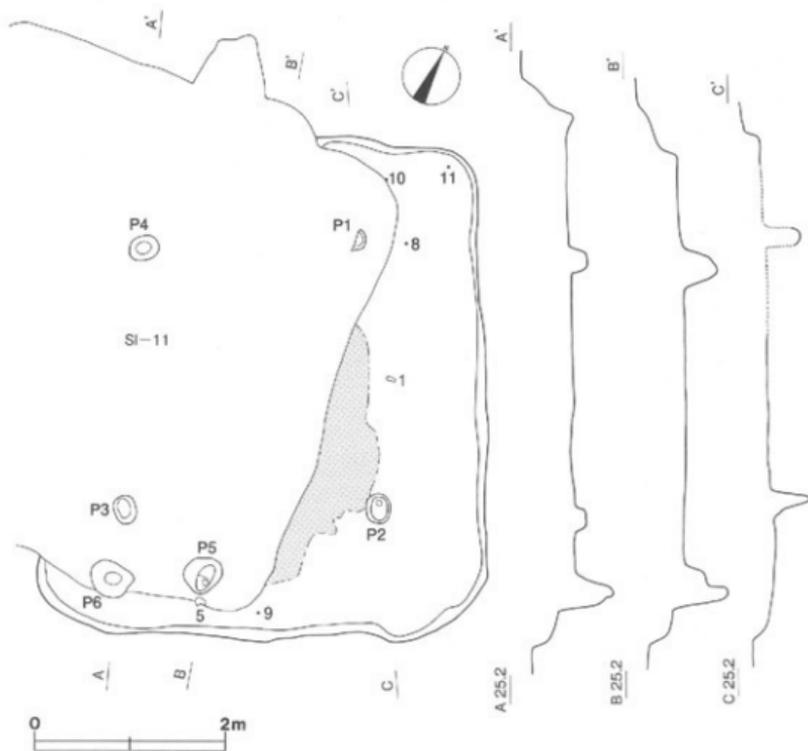
規模・形態 主軸長5.3m、幅約4.8mの方形。面積25.4㎡。

主軸方位 N-30°-W

壁 基底部を残すのみで削平されている。約17cmの高さで緩く傾斜している。

床 平坦で明瞭に検出された。第11号住居跡に西半分が壊されているが内区および入り口部付近は硬化している。

ピット P1～P4は支柱穴である。うち3本は新住居に壊され基部しか残っていない。P1は



第54図 第12号住居跡

新住居の貯蔵穴に壊され半欠状態である。この中でも最も旧状を残すと思われるP2は径32cm、深さ42cmを測る。内区の復元面積は約7.3㎡となる。P5は入り口ピットであるが基底部しか残っていない。壁から約50cm離れ、住居中心線より左に寄っている。径40cm、深さは44cmである。P6は貯蔵穴であろう。入り口左側コーナーに設けられる、これも基底部を残すのみで径45cm余りの円形を呈し、深さ39cmである。

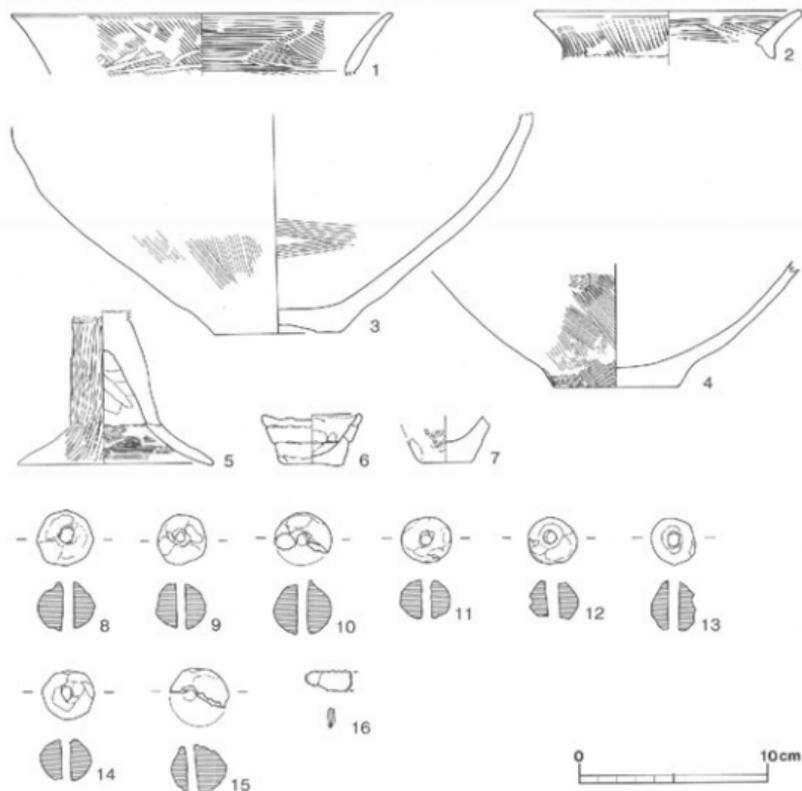
炉 検出されなかった。第11号住居に壊されたものと考える。

覆土 東から南側にかけて焼土混じりの層が壁際から内区に向け傾斜して堆積していた。

遺物 土器以外の出土品として、8～15の土玉があり住居北隅付近からまとまって出土した。

遺物 覆土中から土玉、甕、高坏等の破片が出土しているが遺構との相関関係は不明である。

所見 切り合い関係や出土遺物を総合的に判断して4世紀後半の住居ではないかと考える。



第55図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 状況	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	A: (23.0) C: (3.2)	覆土 30% 普通	長石粒○、 石英○	明褐色	口唇部やや外傾。内面ハケ目。外面ハケ目の 後傾位の雑なミガキ。	No.200
2	甕 土師器	A: (14.2) C: (2.6)	覆土上位 20% 普通	長石粒・石 英・雲母ハ	にぶい褐色	外傾する口唇部。外面粗いハケ目。内面ハケ目。	No.169 SI-11・13 組合
3	甕 土師器	B: (7.0) C: (21.3)	覆土下位 40% 普通	長石粒・小 石○	褐色	内・外面一部ハケ目あり。底部は上げ底。	No.199
4	甕 土師器	B: (6.6) C: (6.2)	床直 20% 良好	長石粒・石 英・雲母△	にぶい褐色	外面ハケ目、内面ナラ。底面平坦。	No.171 SI-11 出土
5	高坏 土師器	縦径 (10.4) C: (8.1)	覆土 60% 普通	長石粒・雲 母○	赤褐色 明褐色	中空でラッパ状に高く。器内・粗かいハケ目。 脚内に僅かに巻き上げ底を残す。外面ミガキ。	No.198
6	手押お 土師器	A: (5.2) B: 2.6 C: 3.4	覆土 70% 普通	長石粒○、 石英○	にぶい黄褐色 にぶい褐色	外面は輪筋痕を明瞭に残す。器形はゆがみ雑な 作り。外面の多くは脱炭し黒色。	No.201 焼土層上
7	ミニチュ ア 土師器	B: 3.0 C: (2.0)	覆土中位 40% 普通	長石粒・小 石○	褐色	内・外面一部ハケ目あり。	No.177 SI-11 出土

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
8	土製品	土玉	2.6	3	20	覆土	完形	No.202
9	土製品	土玉	2.4	2.6	18.3	覆土	完形	No.203
10	土製品	土玉	2.8	3	12.5	覆土	1/2	No.204
11	土製品	土玉	2.9	3.5	30.1	覆土	完形	No.206
12	土製品	土玉	2	2.6	10.4	貯蔵穴	完形	No.585
13	土製品	土玉	2.6	2.3	13.5	焼土層上	ほぼ完形	No.586
14	土製品	土玉	2.2	2.7	14.2	焼土層中	完形	No.587
15	土製品	土玉	2.7	2.9	10.4	焼土層下	1/2	No.588

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
16	金属製品	刀子?	2.4	1	3.5	1.0	鉄	No.615 2区出土

第13号住居跡 [SI-13] (第56~60図 P L 14・39~41)

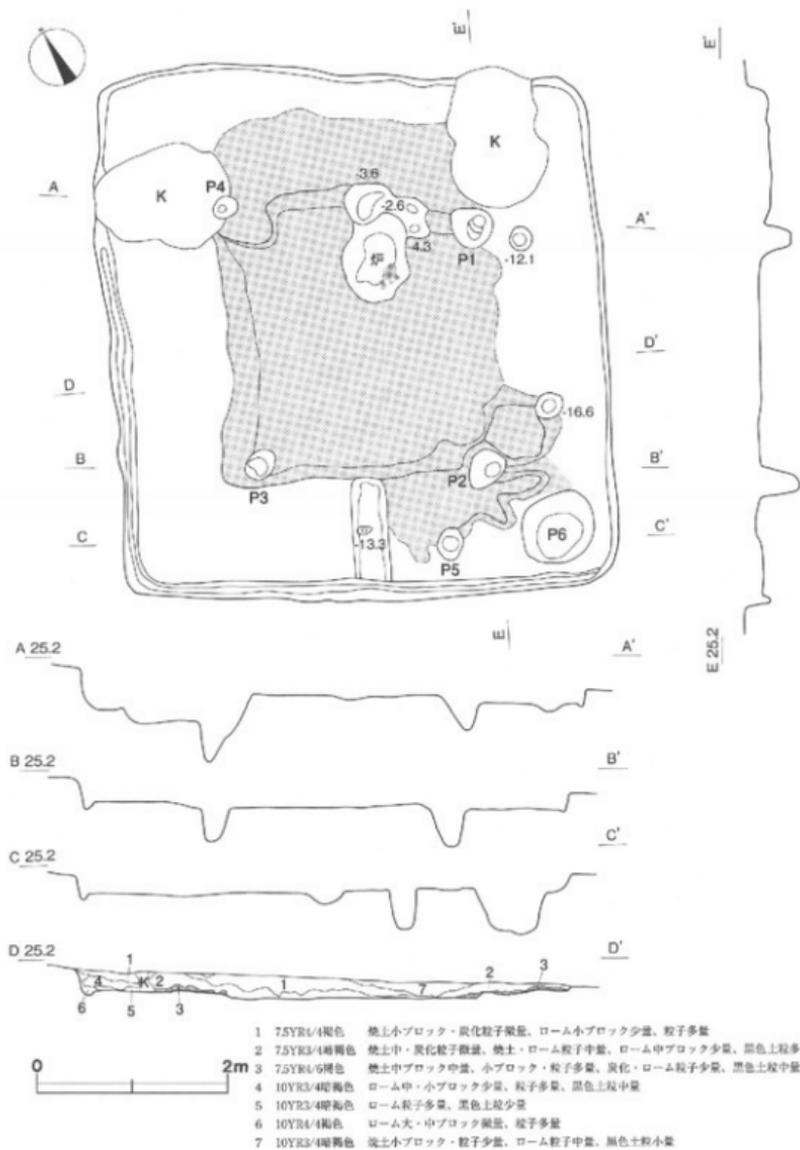
位置 調査区中央の遺構集中地で、標高25m地点。T・U・V-15・16区。

規模・形態 主軸長5.7m、幅5.3mの方形で、面積30.2㎡

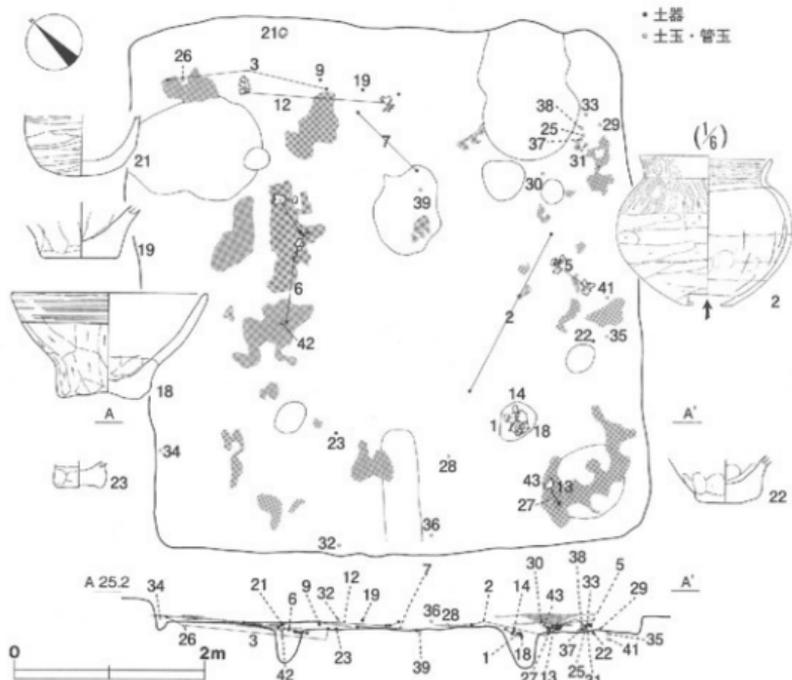
主軸方位 N-35°-E

壁 北東側コーナー帯では削平が著しいが、他壁ではおおむね20~26cmを測る。ほぼ垂直の
良好な立ち上がりを示す。

床 平垣で明瞭に検出されたが、北側には2ヶ所攪乱が入る。特に内区及び炉の北側一帯、入り
口、貯蔵穴周辺は硬化している。内区は一段低くなり、2~4cmの微妙な高まりが外区をめぐ
って逆「コ」の字型のベッド状を呈する。またP2の東側には島状に硬化した高まりがみられた。
壁溝は南・西壁で明瞭に確認でき、幅10~12cm、深さ6~8cmを測る。南壁寄りには炉に正対



第56図 第13号住居跡



第57図 第13号住居跡遺物出土状況

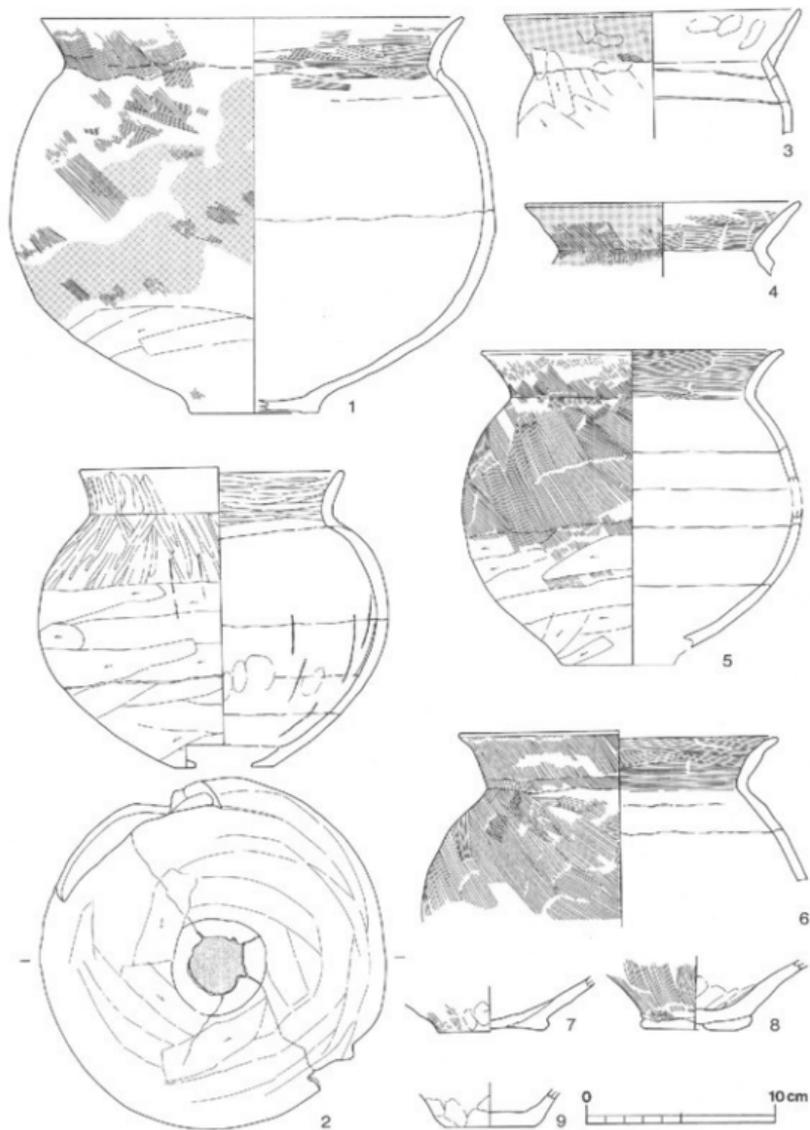
して間仕切溝が設けられる。幅40cm、深さ10cm、全長1.1mほどである。

ピット P1～P4は主柱穴である。径25～40cmで概して東側の2ヶ所が大きい。深さは36～72cmとまちまちである。P4覆土には焼土が多量に入り込んでいた。これらに囲まれた内区の内積は7.3㎡となる。

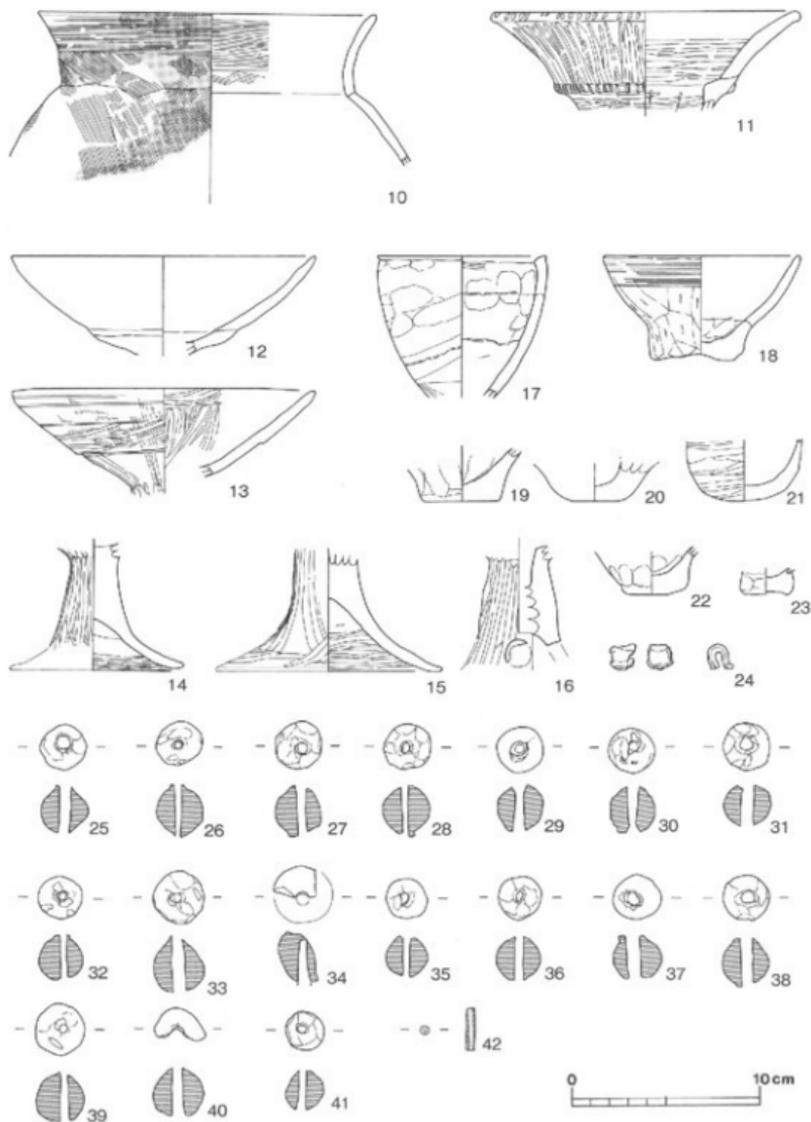
P5は入り口部ピットと思われる。壁からの距離50cm余り、住居中心線上より東側に掘削される。径25cm、深さ42cmほどである。P6は貯蔵穴で、入り口の右側コーナーに設けられる。径75cmの円形を呈し、底面は丸みを帯び、深さ約45cmである。北側は若干高まり硬化している。その他性格不明のピットが散見される

炉 住居の主軸方向に長軸を合わせて内区奥側に掘削される。90×70cmの規模で深さ9cm程度、入り口側に焼土ブロックの分布がみられた。

覆土 堅穴中央部を除く外区一帯に多量の焼土分布がみられ、位置的及び量的に上屋の焼却行為を考えてよいと思われる。ただし、炭化物の残存は極微量である。主として焼土を含むのは第3



第58图 第13号住居跡出土遺物 (1)



第59图 第13号住居跡出土遺物(2)

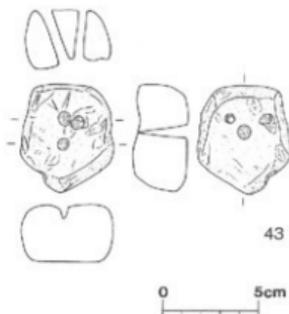
層で、外区のベッド状遺構の上に堆積している。

遺物 ここで特徴的なのは①小型の粗製土器(18・22・23)が目立つこと。②底部穿孔の甕(2)が見られること。③土玉の集中出土があり(25・29・30・31・33・37・38)、滑石製の完形管玉(42)も出土していること。④1・14・18は主柱穴内の上方からの出土で、少なくともP2では柱の抜き取りが行なわれていること。⑤土器の多くは焼土より下部からの出土で、破砕品が多く火入れ以前の廃棄遺物のように見受けられる。

このほか43は軽石製の砥石と考えられ、先端の尖った錐状のものを研いだ痕跡が残る。

所見 柱抜き取り後、土器類の投入と上屋の焼却が行なわれたものであろう。その際、何らかの祭祀行為が行なわれた可能性がある。出土遺物から4世紀後半の住居と考える。

第13号住居跡



第60図 第13号住居跡出土遺物(3)

図版No.	器種 種類	伏量 (cm)	出土位置 残存半 成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	A: [22.4] B: (6.9) C: 21.0	P 2 30% 普通	長石・石英・ 雲母△	橙 にぶい赤褐色	腹方向に流れた器形。胴部で屈曲し口縁部が外傾する。口縁部を中心にハケ目が施される。胴部外面に灰化物付着。	No.223
2	甕 土師器	A: [14.1] B: 5.1 C: 15.9	覆土下位 80% 普通	長石・石英・ 雲母△	明赤褐色	胴部上位に最大径を持つ。頸部の屈曲は緩く、口縁部が立上がる。口縁部の内外ヘラミガキ。底部の外側から穿孔。	No.214
3	甕 土師器	A: [15.8] C: (6.5)	覆土下位 30% 普通	雲母○	明赤褐色 にぶい赤褐色	外面は胴部へラ削り、口縁部僅かにハケ目残す。内面は輪模痕を残す。内外面並な調整。口縁部に灰化物。	No.220 焼土層下
4	甕 土師器	A: [14.6] C: (3.2)	覆土 20% 普通	長石粒○、 石英○	にぶい橙	胴部の屈曲が強く、口縁部が真直ぐ外傾する。口縁部の内外面ハケ目。外面に灰化物。	No.217
5	甕 土師器	A: 16.0 B: (5.8) C: (16.7)	覆土中位 80% 普通	長石○、雲 母△	明黄褐色	胴部中央に最大径を持ち、頸部は屈曲して口縁部が外傾。口縁部の内外と胴部外面上半はハケ目。胴部下半はへラ削り。	No.213 焼土層上
6	甕 土師器	A: 17.4 C: (7.7)	覆土下位 70% 普通	長石・石英△	橙	丸い胴部から頸部が屈曲して、口縁部が外傾し、口唇部が極く。外面と口縁部内面に繊細なハケ目。同内面に輪模痕。	No.222
7	甕 土師器	B: (3.6) C: (2.4)	仰上 30% 普通	石英△、長 石粒○	にぶい黄褐色	外面はハケ目を僅かに残す。内面は金属器の刃物を研いだ跡あり。	No.215
8	甕 土師器	B: 5.8 C: 3.5	覆土 80% 普通	長石粒○、 石英△、緻 密	にぶい黄褐色	外面はハケ目。底部は未調整のため胴下部より一回り大きくなり、継ぎ作り。	No.216
9	甕 土師器	B: 4.8 C: (1.8)	覆土中位 70% 普通	雲母△、長 石粒・石英 ○	にぶい黄褐色	やや丸みを持った底。小型の甕か?	No.218
10	甕 土師器	A: 17.4 C: (7.7)	覆土 50% 普通	長石粒○、 石英○	にぶい黄褐色	丸い胴部から頸部が屈曲して、口縁部が外傾し、口唇部が極く。外面と口縁部内面にハケ目。同内面に輪模痕。外面に灰化物。	No.219 焼土層上
11	甕 土師器	A: [16.0] C: (5.2)	覆土下位 30% 普通	雲母○、長 石粒○	橙 褐色	二重口縁部。口唇部は平皿で縁を削り、口縁内横ミガキ。口縁外横ミガキ。口縁部下層削り。胴部内ヘラナデ、胴部外ミガキ。	No.224

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 構成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
12	高坏 土師器	A: (16.2) C: (5.2)	覆上下位 60% 普通	雲母・小石 ○	明黄褐 緑	坏部下縁に接を持つ。内外面は磨滅している。	No.212
13	高坏 土師器	A: (16.1) C: (5.6)	床直 60% 普通	長石・石英・ 雲母○、小 石○	明黄 にぶい赤褐	継ぎ作りで胎土も無い。有段の坏部。ハケやヘラによるナデの後ミガキ。内肉気味に立上がる。	No.211
14	高坏 土師器	製: 9.6 C: (6.5)	P 2 70% 普通	雲母○	明赤褐 にぶい赤褐	やや柱状の脚部 (1/2中空)。裾部は脚部から強く回き、ラップ状に開く。外面ミガキ。内面上位ハケ状工具によるナデ。	No.210
15	高坏 土師器	額: (12.0) C: (6.5)	覆土 70% 普通	長石粒・雲 母○	緑	ラップ状に開く脚部。外面ミガキ。	No.209
16	高坏? 土師器	C: (4.4)	覆土 40% 普通	長石○、雲 母○	橙 にぶい橙	中実柱状 (1/2空) の脚部。透かし孔あり。坏部より脚部へ厚12mm程度の貫通しない孔の痕跡あり。裾部にも孔あり。	No.225 焼土層上
17	鉢または 皿 土師器	A: (9.0) C: (7.5)	覆土 30% 普通	長石○	焼灰 にぶい黄橙	小さな底部からやや内湾して立上がる。口縁部は押えられ潰れる。内外面に指痕や輪指痕が見られる。	No.208 焼土層上
18	鉢 土師器	A: (10.4) B: 4.5 C: 5.6	P 2 70% 普通	石英○、長 石・雲母○	にぶい橙	内面ヨコナデ。外面ヘラ削り。口縁ヨコナデ。底部は溝。	No.206
19	舟? 土師器	B: 6.2 C: (2.6)	覆土中位 80% 普通	石英・雲母 ○	にぶい黄橙 緑	底部縁部に丸みを持つ。内面ヘラナデ。外面ヘラ削り。	No.207
20	手押ね? 土師器	B: (4.0) C: (1.9)	覆土 25% 普通	長石○、石 英○	緑	底部縁部に丸みを持つ。底面より上部の方が器厚が厚い。	No.229
21	増 土師器	C: (3.2)	覆上下位 30% 普通	石英○、長 石・雲母○	明赤褐 にぶい赤褐	底面は丸底で、頸部に向かい内湾して立上がる。外面ミガキ。内面割縁が数しい。	No.226
22	手押ね 土師器	B: 3.3 C: (2.2)	覆土下位 60% 普通	長石・雲母 ○、石英○	にぶい橙	小形の土器底部で、割縁は丸まる。底部の器厚は器形のわりに厚い。	No.228
23	ミニチュ ア 土師器	B: 3.3 C: 1.2	覆上下位 100% 普通	石英・雲母 △	焼灰 品	底部ヘラ削り。器形のわりに器厚の厚い底部。やや上げ底。	No.227

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
24	土製品	焼成粘土塊	1.3	1.2	—	覆土	不明	No.230
25	土製品	土玉	2.5	2.5	12.0	覆土	完形	No.231
26	土製品	土玉	2.8	2.4	13.5	覆土	完形	No.232
27	土製品	土玉	2.7	2.4	13.4	覆土	完形	No.233
28	土製品	土玉	2.7	2.5	13.1	覆土	完形	No.234
29	土製品	土玉	2.4	2.5	13.8	覆土	完形	No.235
30	土製品	土玉	2.4	2.4	12.7	覆土	完形	No.236
31	土製品	土玉	2.2	2.6	13.5	覆土	完形	No.237
32	土製品	土玉	2.4	2.3	10.5	覆土	完形	No.238
33	土製品	土玉	3	2.8	18.0	覆土	完形	No.239
34	土製品	土玉	2.6	2.1	8.6	覆土	1/3	No.240
35	土製品	土玉	2.2	2.2	7.5	覆土	完形	No.241
36	土製品	土玉	2.4	2.3	11.0	覆土	完形	No.242
37	土製品	土玉	2.3	2.5	12.0	覆土	完形	No.243
38	土製品	土玉	2.6	2.5	12.4	覆土	完形	No.244
39	土製品	土玉	2.5	2.5	17.0	覆土	完形	No.245
40	土製品	土玉	2.5	2.7	8.0	覆土	1/2	No.246
41	土製品	土玉	2.1	2	7.4	覆土	完形	No.247

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
42	石製品	管玉	2.25	0.45	0.15	0.9	燧石	No.248 床面西側出土
43	石製品	砥石	5.75	4.9	3.05	15.0	輝石	石1

第15号住居跡 [SI-15] (第61~63図 P L 15・41・42)

位置 調査区南寄りで標高25m付近。U-18・19、V-18区。

規模・形態 長軸長4.2m、短軸長約4mで、南東コーナー付近を第42号土坑に壊されている。

復元面積は16.8㎡のほぼ正方形を呈する。

主軸方位 不明。

壁 立ち上がりが10~15cmで全面的に削平を受け、ほとんど基部しか残していない。

床 住居中央部付近に硬化面がみられたが明瞭なプランを示さず、木根による攪乱も入るなど残存状態は良くない。壁溝は検出されなかった。

ピット 10ヶ所余り検出されたが主柱穴、入り口部とも明らかでない。15~17cmの深さを測るものが多い中で、北コーナーに掘割されたピットは45cmの良好な深さを持ち、或いはこれが貯蔵穴かも知れない。上端径は40cmの円形を呈し、深さ45.9cmを測る。

炉 検出されなかった。

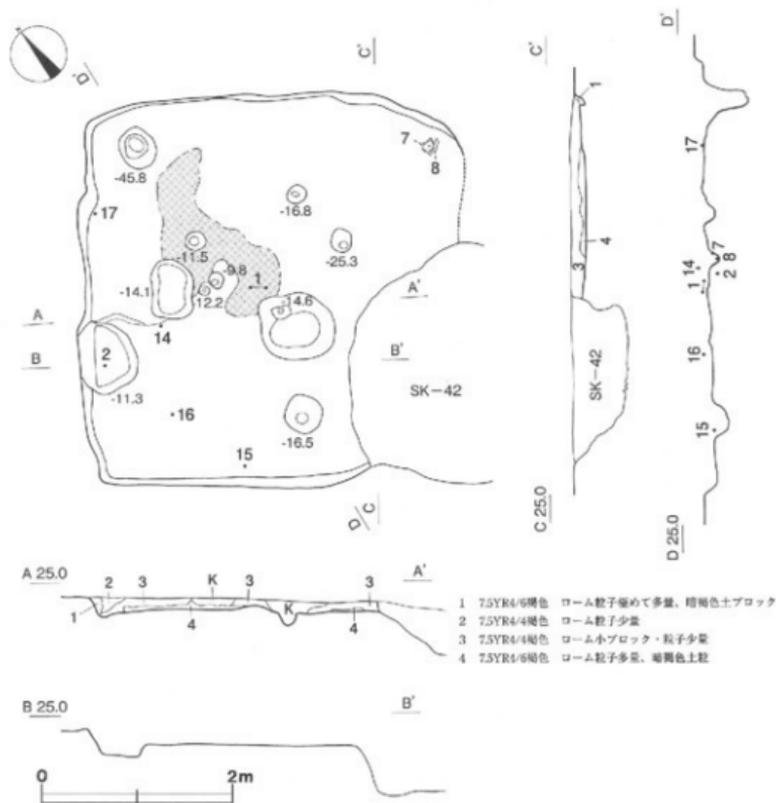
覆土 大幅な削平と攪乱でどの程度旧状を維持しているか疑問であるが、床を覆う第4層はローム粒子を多量に含み投入土の名残とも考えられる。各層とも焼土の混入は見られない。

遺物 床上から鉢や蓋(7・8)、滑石製の管玉(15)等が出土しているが、削平と攪乱により、原位置を維持しているか疑問である。

所見 上記遺物から古墳時代前期の住居としておく。

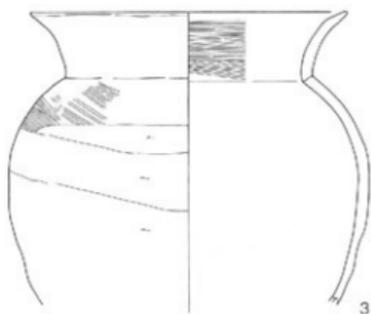
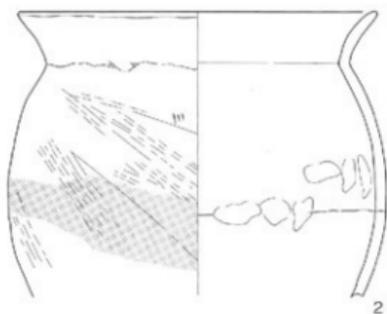
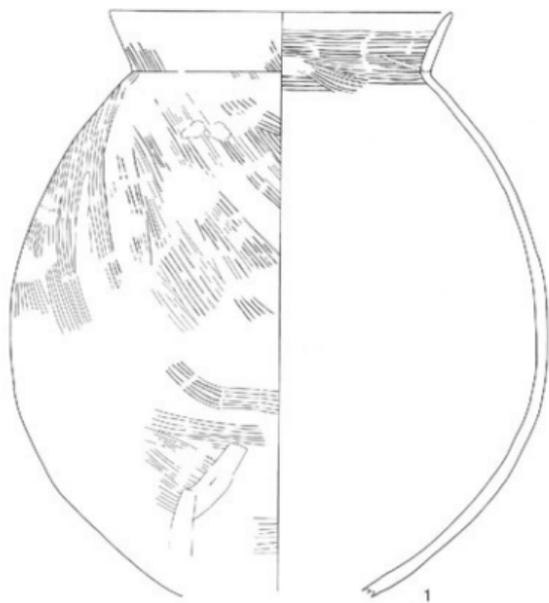
第15号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	素 土 鉢	A : (18.1) C : (31.0)	床直 30% 普通	石英・長石 △	にぶい橙	胴部下位に最大径を持ち、頸部は屈曲して口縁部が外傾する。胴部上平の外周と口縁部内面にハケ目。器面荒れる。	No.262
2	素 土 鉢	A : (19.0) C : (15.2)	床直 30% 普通	長石・石英 ○	にぶい橙 橙	丸い胴部で頸部は屈曲し口縁部が外傾する。胴部外周には広いハケ目が僅かに残る。胴部外面に覆付着。	No.263
3	素 土 鉢	A : 16.8 C : (31.5)	床直 40% 普通	長石・石英 ○	にぶい黄橙	胴部上位に最大径あり、口縁部は緩く湾曲して外傾。口縁部内面及び胴部外面上位にハケ目、中〜下位横のヘラ削り。	No.264
4	素 土 鉢	A : (19.4) C : (3.2)	床直 25% 普通	長石・石英 ○	橙	外傾する口縁部。内面ハケ目。外面ハケ目の後上位ヨコナデ。	No.261
5	素 土 鉢	B : (5.2) C : (2.1)	床直 30% 普通	長石・石英 ○	にぶい赤橙 にぶい橙	外面・底面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	No.260
6	素 土 鉢	A : (18.0) C : (7.5)	床直 30% 普通	長石・石英 ○、雲母○	にぶい橙 にぶい橙	三重口縁部の口縁部、外面ナデ。内外面磨滅し荒れる。	No.265

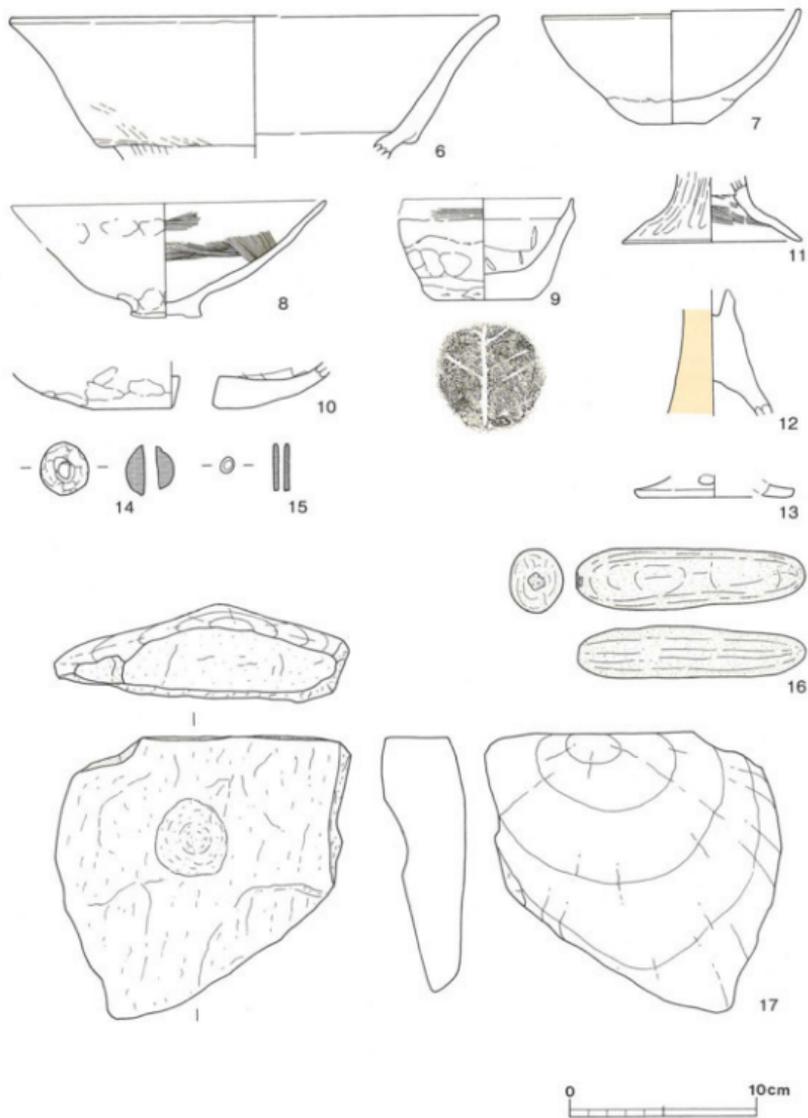


第61図 第15号住居跡・遺物出土状況

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色楽	器形・技法の特徴	備考
7	鉢 土師器	A : 13.7 B : 3.5 C : 6.0	東壁際際 90% 普通	石英・雲母 ○、長石○	にぶい橙	底部から緩く外傾する。内外面ナデ。外面下滴 ヘラ削り。	No.259
8	蓋? 土師器	A : 16.2	床直 70% 普通	長石○、石 英・雲母○	橙	つまみ部から緩く外傾する。内面上位はハケ目。 つまみは鮮な仕上げ。	No.257
9	手控ね 土師器	A : 9.0 B : 5.0 C : 5.4	版上 90% 普通	長石○、石 英・小石○	明赤地	外面側上半に輪積痕を残す。指頭ナデ。側部下 半はヘラ削り。内面壁なヘラナデ。底部木葉痕。	No.258
10	瓶 土師器	口径 (2.0) C : (2.0)	版上 30% 普通	長石・石英 ○	明黄	およそ丸底の底部で、緩く外反して立上がる。 底面に孔の痕跡が1つ見られる。底部の作りは 緑。	No.266
11	高坏 土師器	口径 (9.6) C : (3.5)	床直 30% 普通	長石○、石 英○	にぶい黄橙	緩く外反する頸部の途中に弱い段が見られる。 内面側のハケ目。外面ミガキ。	No.267



第62図 第15号住居跡出土遺物(1)



第63图 第15号住居跡出土遺物(2)

図記No	容器種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
12	高坏 土師器	C : (6.6)	覆土 80% 普通	長石・石英 ○	にぶい赤 にぶい黄緑	裾部が広がる群部。外面細かい横ミガキ。坏部を挿入するほぞ穴あり。中実柱状。ラッパ状。外面赤影。	No.265
13	器台 土師器	照径:(8.4) C:(0.7) 孔径:(0.8)	覆土 20% 普通	小石凸、長 石○	橙	孔にわずかに赤影らしい痕跡あり。	No.268

単位: cm・g

図記No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
14	土製品	土玉	2.6	2.5	14.2	覆土	完形	No.269

図記No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
15	石製品	管玉	2.5	0.8	0.2	3.0	滑石	南東壁際床面
16	石器	敲打器	12.05	3.2	2.7	166.0	砂岩	石12 端部に敲打痕
17	石器	台石	14.6	14.8	4.3	1140.0	雲母片岩	石13 痕跡による凹み

第16号住居跡〔SI-16〕(第64図 P L15)

位置 調査区中央部で標高25m付近。地形は東から西へ傾斜している。O・P-15・16区。

規模・形態 削平を受け北・西・南壁は下端を検出したのみである。主軸方向は明瞭でないが、仮に炉を住居奥側、貯蔵穴らしきP1を手前として考えると、主軸長約3.3m、幅3.5mのほぼ正方形で復元面積は11.6㎡となる。

主軸方位 不明。

壁 東壁で約5cmを検出したのみで残存状況は非常に悪い。

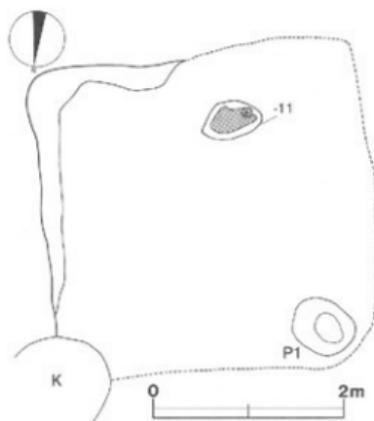
床 かなり削平を受けているものと推定する。壁溝は検出されなかった。

ピット P1は住居北西コーナー付近に検出され、径65cm、深さ25cmを測り貯蔵穴と考える。柱穴は検出されなかった。炉 遺構検出時にすでに炉が露呈していた。南壁寄りの床を7cmほど掘り窪め、焼土の堆積が見られる。底面は凸凹して焼土が入り込んでいるが、赤変・硬化は見られない。

覆土 ほとんど残っていない。

遺物 図示できるようなものは出土していない。

所見 炉の存在から見て古墳時代前期の住居かと考える。



第64図 第16号住居跡

第18号住居跡〔SI-18〕(第65・66図 P L 16・42)

位置 調査区南寄りで標高25.5m地点。M・N・O-21・22・23区。

規模・形態 主軸長6.9m、幅6.9mの正方形を呈し、面積47.6㎡で当遺跡では第1号住居跡に次ぐ大型の住居である。

主軸方位 N-73°-W

壁 覆土中や壁には後世のピットが多数掘り込まれるなど全体的に残りがよくない。比較的旧状を知ることのできる東側でも高さ20cm弱で、立ち上がり部を残すのみである。

床 後世のピット群にかなり壊されているが、西半分を中心に硬化面がみられ、炉の周辺、入り口ピット付近、また西側外区まで及んでいるようである。壁溝は検出されなかった。

ピット P1～P4は主柱穴である。上端径は40～50cmと大きい、掘り方中位ですばまり底部近くでは15cm余りとなり、これが実際の柱径をおおむね反映しているものと考え。深さは75～80cmと非常に深い。柱間距離も長く、内区の面積が16.7㎡と大きい。

P5は入り口ピットと考える。壁から130cmほど離れたP2・3の中間で、内・外区境付近に掘削されている。径25cm、深さ35cmを測る。P6は貯蔵穴で、入り口左側のコーナーに設けられる。75×65cmの楕円形を呈し、深さ80cm、狭く平坦な底面から急に立ち上がる。埋土中には遺物の混入が全く見られず人為的埋め戻し土と考える。

炉 内区中央寄りに検出された。径およそ65cmの不整形円で、深さ2cm程の浅い窪みに焼土が充満していた。

覆土 削平を受けて浅いうえに後世のピット群で寸断され、旧状をとどめていない。

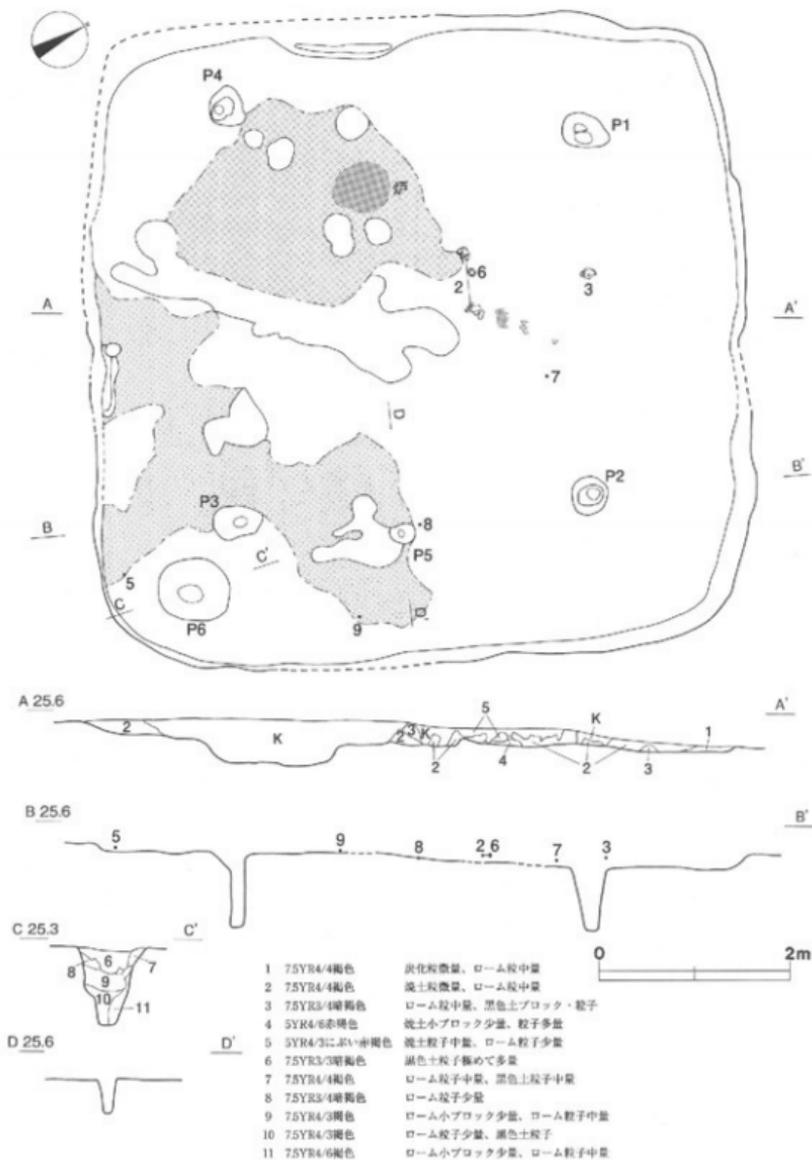
遺物 土器小片が散乱しているが原位置をとどめないことは確実で、遺構に伴うものは不明と言わざるを得ない。このほか混入品として後世の土師質土器の小皿が出土している。

土器以外の上用品として8～10の土玉が出土している。

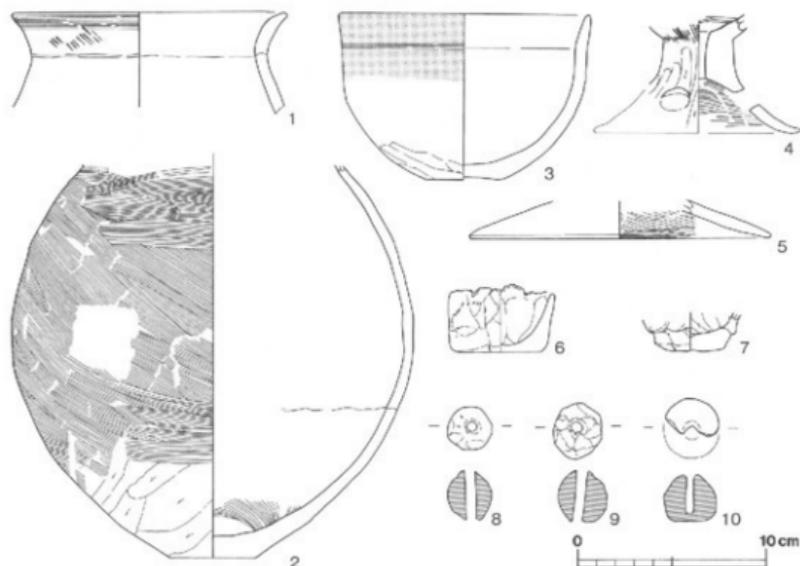
所見 住居構造や覆土中遺物を総合的に判断して当期の住居跡と考える。

第18号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	漆土胎器	A: {13.6} C: {5.4}	覆土上位 30% 普通	長石・石英 ○	橙	胴部が緩く外反して口縁部に至る。口縁部外面にハケ目が僅かに残り、口唇部はナデられる。	No.284
2	漆土胎器	B: 4.6 C: {20.8}	覆土上位 40% 普通	長石○、石英 灰△、雲母粒△	明赤褐色	やや左右に潰れた球形で、胴中に最大径を持つ。外面は底部がヘラ削り、胴部が短かなハケ目。内面はヘラナデ。	No.285
3	漆土胎器	A: {13.4} B: 4.9 C: 8.8	覆土上位 60% 普通	長石・石英 ○	箱 にぶい褐色	平底の底部から内筒し、口唇部が立ち上がる。口縁部内面に線を保持。底部外面はヘラ削り。口縁部に厚付着。	No.283
4	器台 土胎器	縦径: {10.8} C: {6.2}	覆土上位 50% 普通	長石○、石英○	橙	胴部は緩く広がり、肩部は外反する。下部から脚部中央に1孔、胴部に3孔が貫く。外面はナデ、内面にはハケ目。やや大ぶり。	No.286



第65図 第18号住居跡・遺物出土状況



第66図 第18号住居跡出土遺物

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
5	高坪 土師器	額径: (16.0) C: (1.0)	腹上下位 % 普通	長石・石英 △	橙	扇面して広がる唇縁。内面にハケ目が見られる。	No.282
6	手捏ね 土師器	A: 5.6 B: 4.4 C: 3.6	腹土中位 100% 普通	長石○、石 英○	にぶい橙	底部から口縁部がつまみ上げられている。内外面に指痕が見られる。器面に指紋が残る。	No.287
7	手捏ね 土師器	B: 3.1 C: (1.9)	腹土下位 80% 普通	長石○、石 英○	橙 にぶい橙	底部がやや厚手で雑な作りである。	No.288

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
8	土製品	土玉	2.7	2.4	12.8	腹土	定形	No.289
9	土製品	土玉	2.8	2.6	16.1	腹土	定形	No.290
10	土製品	土玉	2.4	2.4	10.5	腹土	1/2	No.291

第19号住居跡【SI-19】(第67~70図 P L16・42・43)

位置 調査区南寄りて、谷津を臨む標高25m付近。P-24、Q-23・24・25区。

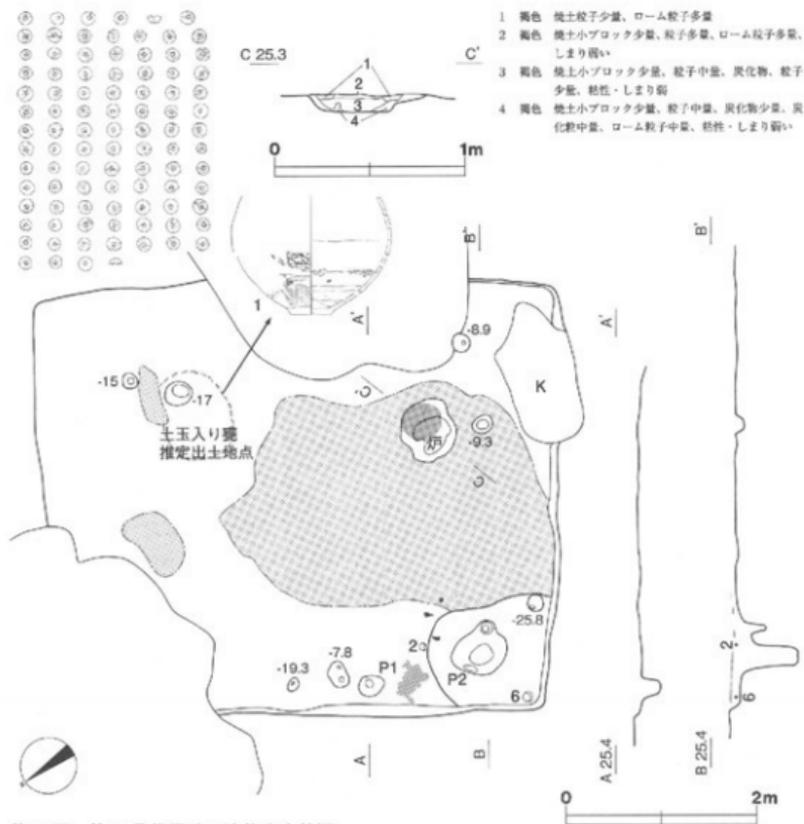
規模・形態 主軸長4.6m、幅5.6mの横長方形を呈する。面積25.8㎡。

主軸方位 N-124°-E

壁 大幅な削平を受けておりほとんど立ち上がり部しか残っていない。残存状況のよい南壁でもわずか6~10cmの高さしかない。

床 北西コーナーや東壁は重機により大きく壊される。硬化面は内区を中心に検出され、炭化物・焼土粒子が散って非常に硬化している。壁溝は検出されなかった。

ピット 小型ピットがいくつか散見されるが主柱穴は明確でない。P1は入り口部にかかわるも



のと考える。径25cmほどの不整形円形を呈し、深さ22cmである。P2は貯蔵穴である。上端は60×40cmほどの楕円形を呈し、深さ56cmで壁は直立する。周辺は床より窪む。

炉 P1にはほぼ正対して検出された。70×60cm、深さ10cm弱の不整形の掘り込みがあり粘土混じりの焼土の散布がある。底面には赤変など著しい被熱の痕跡は残っていない。

覆土 ほとんど残っていない。床面に焼土・炭化物が散っているのが焼失家屋の可能性もある。ただし、入り口部の焼土は床から若干浮いていた。

遺物 試掘調査では甕の中に大量の土玉など(93個、総重量1858g)が入った状態で発見されたが、この甕が当住居の出土片と接合し、またトレンチ調査時の概略図とも一致することから甕(1)と土玉など(7~100)が当跡に伴うのは間違いない。出土地点と目される場所は試掘調査時にすでに住居床が露呈しており、その時の攪乱で硬化面が一部失われている。甕は当初から口縁を失っており、土玉が完形品に入れられていたものかどうかは疑問である。

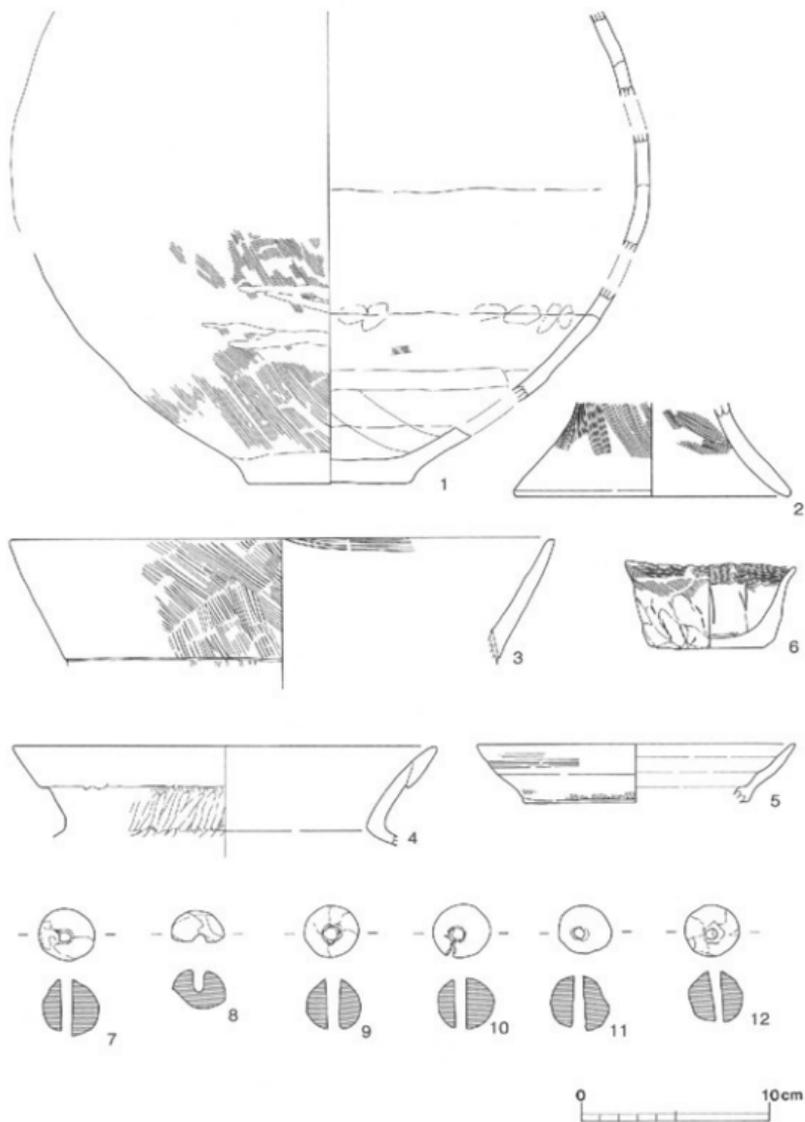
所見 遺物は原位置を動いていると見るべきであろうが、1はその重量を考慮して当跡に伴うものではないかとの可能性を捨てきれない。したがって、4世紀後半の住居かと考える。ほとんどの住居が南東側に入り口を持つのに対し、当跡は西北部から入る特異な例である。

第19号住居跡

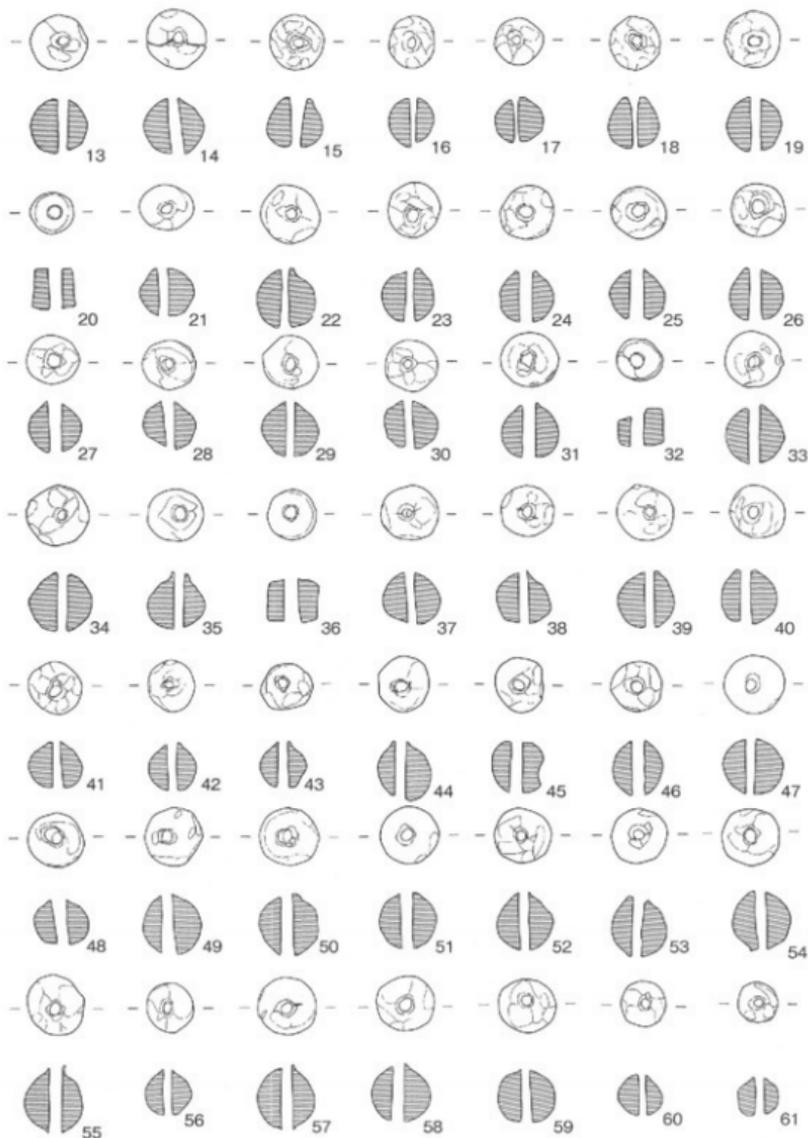
図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	B: 8.6 C: (25.0)	甕土下位 40% やや不良	砂粒○、雲 母細片△	橙 にぶい橙	球形の胴部で胴部中位に最大径を持つ。外面はハケ目の後ナデられ、内面には輪槽痕・指痕痕などが見られる。外面被熱。	No.293 試掘調査時の破片と接合
2	白付甕 土師器	胴径: (14.8) C: (15.2)	甕直 40% 普通	長石・石英 ・雲母粒○	にぶい赤褐	白付甕の高台胴部。ハの字状に広がる。内外面にハケ目が施される。背面赤褐色。	No.293
3	甕 土師器	A: (28.8) C: (6.7)	甕土下位 20% 普通	長石・石英 粒○	明赤褐 明褐	真直で外傾する口縁部破片。外面全面と内面の一部にハケ目。下縁は折り返し口縁状となり、甕の可能性もあろうか。	No.294
4	甕 土師器	A: (22.4) C: (4.9)	甕土下位 30% 普通	長石・石英 粒○、雲母 粒○	橙 にぶい黄橙	胴部が屈曲し口縁部が外反する折返し口縁。胴部外面にはヘラミダシ。内面はナデ。被熱し器面死れる。	No.295
5	甕 土師器	A: (16.8) C: (3.1)	甕土 20% 普通	長石・石英 △、赤色粒 ○	橙 明赤褐	二重口縁部の口縁部。外面下縁には溝を持ち、上部はナデられる。内面下縁にも溝を持ち、強いナデがなされる。	No.296
6	手捏ね 土師器	A: 9.0 B: 6.0 C: 4.7	貯蔵穴 100% 普通	長石・雲母 粒△	橙	平底の底部から口縁部が立上がる。口縁部はやや外傾し、積み上げられている。口縁部の内外面にハケ目が残る。	No.297

単位: cm・g

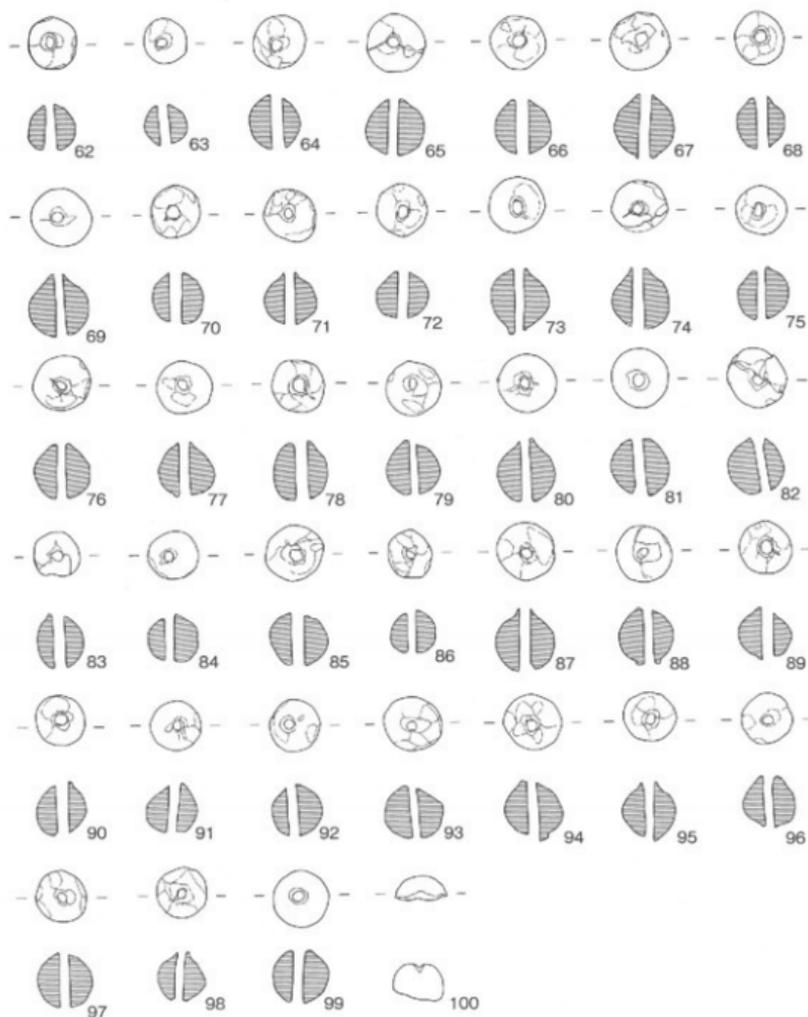
図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
7	十製品	土玉	3.0	3.0	21.8	1室内	完形	No.482
8	十製品	土玉	2.0	2.8	6.2	1室内	1/2	No.483
9	十製品	土玉	2.7	2.9	18.0	1室内	完形	No.484
10	十製品	土玉	2.7	3.0	20.6	1室内	ほぼ完形	No.485
11	十製品	土玉	2.9	2.7	12.5	1室内	完形	No.486
12	十製品	土玉	2.6	2.8	17.0	1室内	完形	No.487
13	十製品	土玉	2.9	3.0	23.5	1室内	完形	No.488
14	十製品	土玉	3.0	3.1	27.5	1室内	完形	No.489



第68图 第19号住居跡出土遺物(1)



第69图 第19号住居跡出土遺物(2)



第70图 第19号住居跡出土遺物(3)

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
15	土製品	土玉	2.6	2.9	18.9	1 室内	完形	No.490
16	土製品	土玉	2.6	2.4	13.5	1 室内	完形	No.491
17	土製品	土玉	2.3	2.6	11.8	1 室内	完形	No.492
18	土製品	土玉	2.7	2.7	15.8	1 室内	完形	No.493
19	土製品	土玉	2.9	2.9	22.7	1 室内	完形	No.494
20	土製品	管状土罐	2.2	2.4	12.5	1 室内	完形	No.495 管状
21	土製品	土玉	2.5	2.8	15.5	1 室内	完形	No.496
22	土製品	土玉	2.7	3.1	26.6	1 室内	完形	No.497
23	土製品	土玉	3.0	2.7	17.8	1 室内	完形	No.498
24	土製品	土玉	2.7	2.9	17.2	1 室内	完形	No.499
25	土製品	土玉	2.6	2.9	17.0	1 室内	完形	No.500
26	土製品	土玉	2.7	2.9	17.7	1 室内	完形	No.501
27	土製品	土玉	2.7	2.8	18.2	1 室内	完形	No.502
28	土製品	土玉	2.6	2.8	16.3	1 室内	完形	No.503
29	土製品	土玉	2.9	3.0	21.9	1 室内	完形	No.504
30	土製品	土玉	3.0	2.3	18.5	1 室内	完形	No.505
31	土製品	土玉	2.9	3.0	22.2	1 室内	完形	No.506
32	土製品	管状土罐	2.2	2.4	12.4	1 室内	ほぼ完形	No.507 管状
33	土製品	土玉	3.1	3.1	24.3	1 室内	完形	No.508
34	土製品	土玉	3.1	3.3	26.9	1 室内	完形	No.509
35	土製品	土玉	2.8	3.0	19.6	1 室内	完形	No.510
36	土製品	管状土罐	2.3	2.6	18.1	1 室内	完形	No.511 管状
37	土製品	土玉	2.8	3.1	20.2	1 室内	完形	No.512
38	土製品	土玉	2.8	2.8	18.8	1 室内	完形	No.513
39	土製品	土玉	3.0	3.0	23.9	1 室内	完形	No.514
40	土製品	土玉	2.9	2.9	20.1	1 室内	完形	No.515
41	土製品	土玉	2.4	2.9	14.5	1 室内	完形	No.516
42	土製品	土玉	2.6	2.5	15.0	1 室内	完形	No.517
43	土製品	土玉	2.4	2.7	14.0	1 室内	完形	No.518
44	土製品	土玉	3.1	2.6	21.1	1 室内	完形	No.519
45	土製品	土玉	2.8	2.7	21.0	1 室内	ほぼ完形	No.520
46	土製品	土玉	2.8	2.7	19.0	1 室内	完形	No.521
47	土製品	土玉	3.0	2.8	26.4	1 室内	完形	No.522
48	土製品	土玉	2.9	2.8	18.2	1 室内	完形	No.523
49	土製品	土玉	3.1	3.0	28.5	1 室内	完形	No.524
50	土製品	土玉	3.3	3.2	31.2	1 室内	完形	No.525
51	土製品	土玉	2.9	3.1	26.9	1 室内	完形	No.526
52	土製品	土玉	3.1	3.0	23.3	1 室内	完形	No.527
53	土製品	土玉	3.2	2.9	24.3	1 室内	完形	No.528
54	土製品	土玉	3.2	3.0	27.8	1 室内	完形	No.529
55	土製品	土玉	3.5	3.0	28.2	1 室内	完形	No.530
56	土製品	土玉	2.4	2.5	25.3	1 室内	完形	No.531
57	土製品	土玉	3.4	3.1	29.6	1 室内	完形	No.532
58	土製品	土玉	3.1	3.1	23.3	1 室内	完形	No.533
59	土製品	土玉	2.8	3.0	21.0	1 室内	完形	No.534
60	土製品	土玉	2.1	2.4	10.0	1 室内	完形	No.535
61	土製品	土玉	2.0	2.1	8.4	1 室内	完形	No.536

図版No.	種類	器径	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
62	土製品	土玉	4.8	2.6	15.5	1墓内	完形	No.537
63	土製品	土玉	2.1	2.2	10.0	1墓内	完形	No.538
64	土製品	土玉	2.8	2.7	20.4	1墓内	完形	No.539
65	土製品	土玉	3.0	3.1	26.3	1墓内	完形	No.540
66	土製品	土玉	2.9	2.9	19.7	1墓内	完形	No.541
67	土製品	土玉	3.1	3.1	27.8	1墓内	完形	No.542
68	土製品	土玉	2.8	2.6	15.9	1墓内	完形	No.543
69	土製品	土玉	3.2	3.3	29.4	1墓内	完形	No.544
70	土製品	土玉	2.8	2.6	17.5	1墓内	完形	No.545
71	土製品	土玉	2.7	2.7	18.5	1墓内	完形	No.546
72	土製品	土玉	2.8	2.7	17.5	1墓内	完形	No.547
73	土製品	土玉	3.4	3.0	25.0	1墓内	完形	No.548
74	土製品	土玉	3.2	3.1	20.7	1墓内	ほぼ完形	No.549
75	土製品	土玉	2.8	2.7	14.8	1墓内	完形	No.550
76	土製品	土玉	2.9	3.0	22.4	1墓内	完形	No.551
77	土製品	土玉	2.8	3.0	20.5	1墓内	完形	No.552
78	土製品	土玉	3.0	2.8	19.9	1墓内	完形	No.553
79	土製品	土玉	2.9	2.8	20.6	1墓内	完形	No.554
80	土製品	土玉	3.1	3.3	27.0	1墓内	完形	No.555
81	土製品	土玉	3.0	3.0	26.4	1墓内	完形	No.556
82	土製品	土玉	3.2	3.0	25.8	1墓内	ほぼ完形	No.557
83	土製品	土玉	2.8	2.4	14.2	1墓内	完形	No.558
84	土製品	土玉	2.5	2.7	14.8	1墓内	完形	No.559
85	土製品	土玉	2.8	3.0	24.0	1墓内	完形	No.560
86	土製品	土玉	2.2	2.3	10.8	1墓内	完形	No.561
87	土製品	土玉	3.0	3.1	27.8	1墓内	完形	No.562
88	土製品	土玉	0.9	3.0	23.7	1墓内	完形	No.563
89	土製品	土玉	2.9	2.8	18.5	1墓内	完形	No.564
90	土製品	土玉	2.6	2.9	17.5	1墓内	完形	No.565
91	土製品	土玉	2.6	2.7	16.0	1墓内	完形	No.566
92	土製品	土玉	2.7	2.7	18.2	1墓内	完形	No.567
93	土製品	土玉	2.8	3.0	21.9	1墓内	完形	No.568
94	土製品	土玉	3.2	3.1	23.1	1墓内	完形	No.569
95	土製品	土玉	2.6	2.8	20.0	1墓内	完形	No.570
96	土製品	土玉	2.7	2.8	18.5	1墓内	完形	No.571
97	土製品	土玉	2.6	2.7	15.2	1墓内	完形	No.572
98	土製品	土玉	2.7	2.6	15.1	1墓内	完形	No.573
99	土製品	土玉	2.8	2.9	20.6	1墓内	完形	No.574
100	土製品	土玉	1.9	2.7	5.7	1墓内	1/2	No.575

第22号住居跡 [SI-22] (第71・72図 PL17・43)

位置 調査区南方で標高26mの台地上。K-25、M-24・25区。

規模・形態 主軸長約6.6m、幅約6.4mで復元面積42.2㎡のほぼ正方形を呈する。

主軸方位 N-63°-W

壁 大幅な削平により基部しか残らず、西南コーナー付近でも僅かに6cm程の高さである。

床 削平のみならず後世の遺構により壊され状況は非常に悪い。内区に不整形に硬化面が残っているが床のほとんどは旧状をとどめていないと判断する。

ピット P1～P3は支柱穴と考える。住居の規模の割には径10～45cmと小型で、深さも13～50cmとまとまりがない。P3の柱穴上面にみられる炭化材は柱の残欠である可能性がある。これらに囲まれる内区の復元面積は9.6㎡で横長の方形となる。入り口部・貯蔵穴は検出されず、後世の遺構に壊されたものと思われる。

炉 P1-P3線上ほぼ中央に、長軸方向を住居に合せて8cmほどの深さに掘削されている。平面形は90×80cmの楕円形で、底面は凸凹しており内部とその周辺に焼土の分布が見られた。

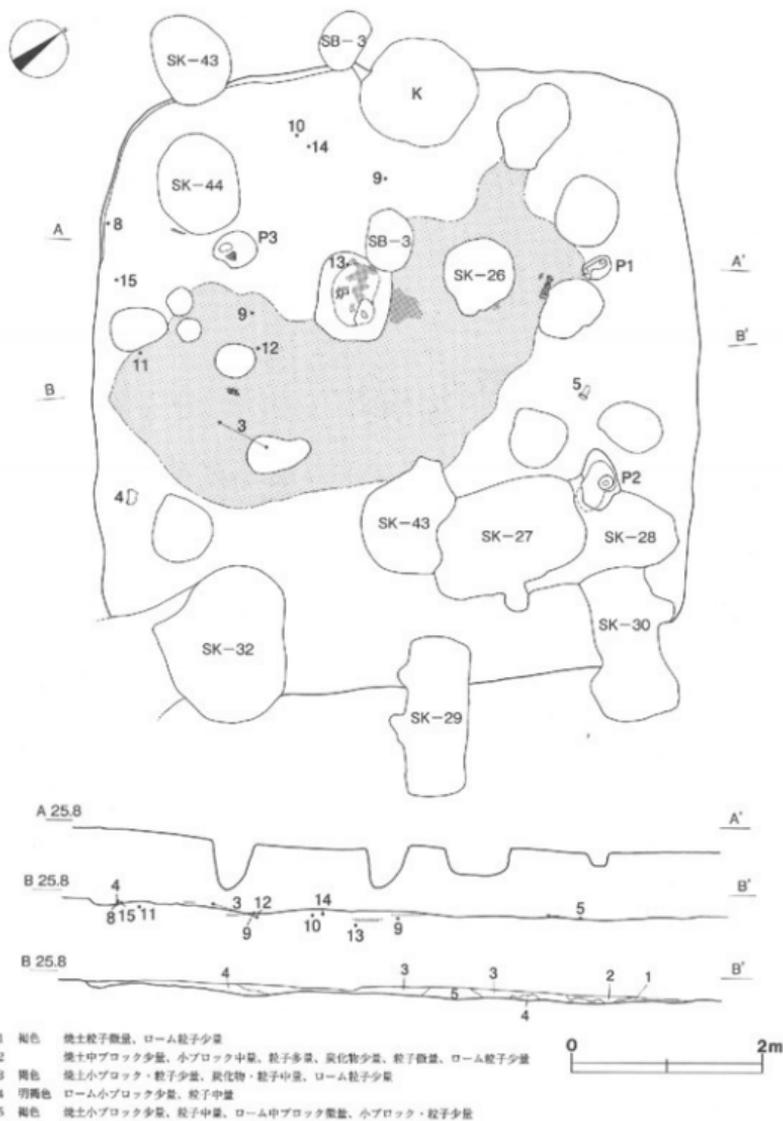
覆土 ほとんど残っていないが、どの層にも炭化物や焼土粒の混入があり、床上にも炭化物が検出されていることから上屋は焼失した可能性もある。

遺物 小片が出土しているが住居跡にともなう確証はない。原位置を動いているのは確実である。出土品には後世の混入品も見られた。

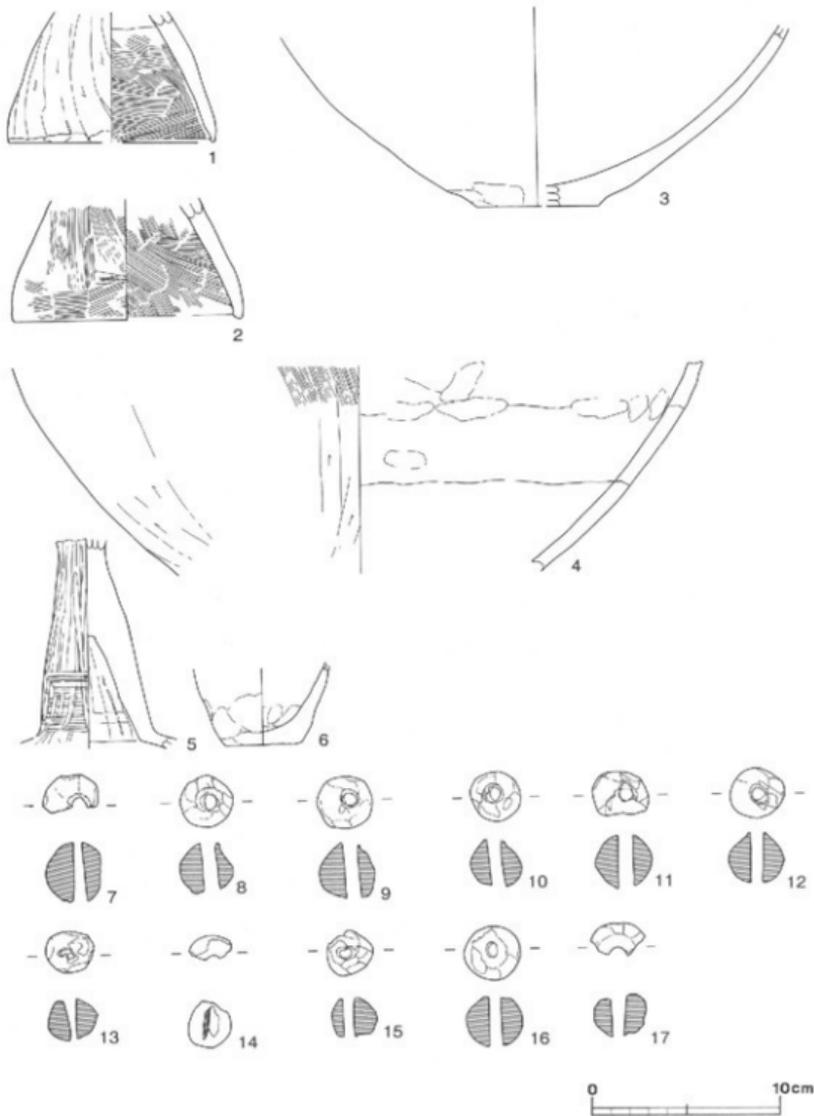
所見 出土遺物や住居の構造から当期の住居と考える。

第22号住居跡

区画No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	台付壺 土師器	縦径: (108) C: (6.9)	腰上下位 25% 普通	長石・石英 ○、雲母粒 △	にぶい橙 にぶい黄橙	ハの字状に開く脚部で腰部は突る。外面はヘラ削り、内面はハケ目。	No.307
2	台付壺 土師器	縦径: (122) C: (6.4)	腰直 25% 普通	長石・石英 ○、雲母粒 △	にぶい橙	ハの字状に開く脚部で腰部は丸まる。内外面共にハケ目。内面に輪痕あり。底部めくれ。	No.308
3	壺 土師器	B: (6.6) C: (9.2)	腰上下位 30% 普通	長石・石英 ○、雲母粒 △	にぶい橙	壺の底部。平底の底部から外傾して立上る。底部傾斜にヘラ削り。器面荒れる。	No.84
4	壺 土師器	C: (10.8)	腰上下位 30% 普通	長石○、石 英、雲母△	にぶい橙 にぶい黄	壺別下半部の破片。底部から外傾して立上る。外面はヘラ削りの後ハケ目。内面には輪痕痕や指痕痕が残る。	No.309
5	高坏 土師器	C: (11.0)	腰直 100% やや不良	雲母粒△、 板密	にぶい赤褐	中空の脚部。裾部が広がるラップ状。外面ハケ目の後、細かいミガキ。内外面に割痕あり。	No.306
6	ミニチュア 土師器	B: 4.1 C: (4.0)	腰上下位 50% 普通	長石○、石 英△	にぶい橙 にぶい黄	底部片で平底の底部から立上る。雑な作りで、内外面ナデ。内面には指ナデの痕跡あり。	No.310



第71図 第22号住居跡・遺物出土状況



第72図 第22号住居跡出土遺物

第22号住居跡

単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大径	最大額	重量	出土位置	残存率	備考
7	土製品	土玉	3.2	2.9	14.7	覆土	1/2	No.311
8	土製品	土玉	2.7	2.8	16.2	覆土	完形	No.312
9	土製品	土玉	2.4	2.9	22.7	覆土	完形	No.313
10	土製品	土玉	2.4	2.6	15	覆土	完形	No.314
11	土製品	土玉	2.8	2.9	14.8	覆土	2/3	No.315
12	土製品	土玉	2.6	2.9	16.8	覆土	完形	No.316
13	土製品	土玉	2.2	2.4	11.1	覆土	完形	No.317
14	土製品	土玉	2.3	2.2	5.4	覆土	1/3	No.318
15	土製品	土玉	2.1	2.4	9.7	覆土	完形	No.319
16	土製品	土玉	2.7	2.7	15.8	♀	完形	No.595
17	土製品	土玉	2.3	2.6	11.8	P 1	1/3	No.594

第23号住居跡〔SI-23〕(第73～75図 P L 17・44)

位置 調査区南寄り。眼下に谷津を臨む標高25m周辺。R-20・21区。

規模・形態 主軸長3.8m、幅4.2mの横長方形を呈する。面積16㎡。

主軸方位 N-51°-W

壁 全体的に削平を受けている。残存状態の良いところでは、ほぼ直に約30cmの高さで立ち上がるが特に谷津側は崩れが進行し浅い。

床 平坦で明瞭に検出された。炉の周辺及び入り口・貯蔵穴の回りは硬化している。特に貯蔵穴と入り口を囲うように、帯状の高まりが2.2mにわたって検出された。

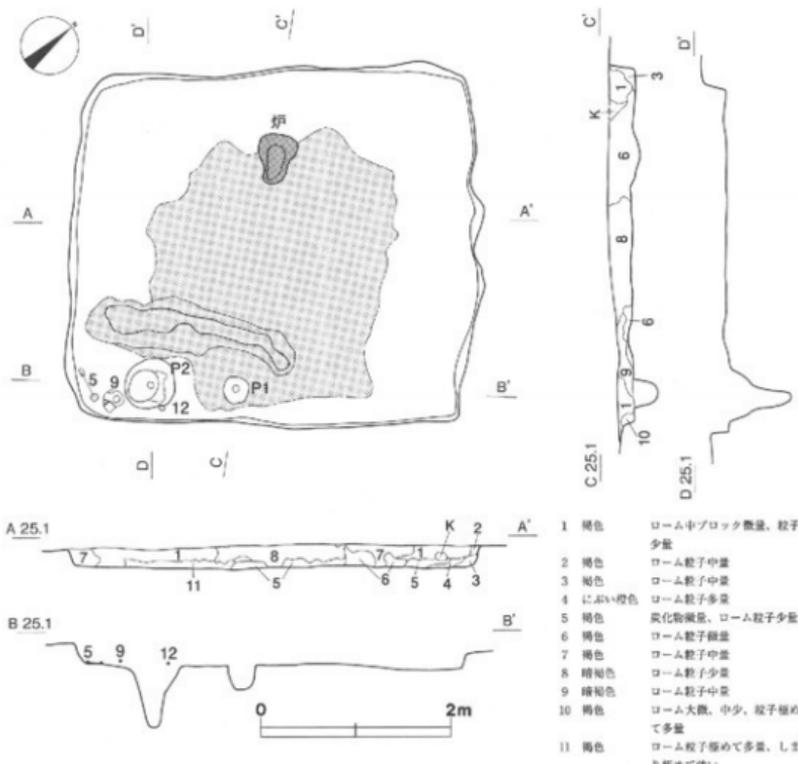
ピット 主柱穴は検出されなかった。P 1は入り口ピットと考える。径25cmほどの円形を呈し、深さ約25cmで、壁から35cmあまり離れて住居中央よりやや貯蔵穴寄りに掘削されている。P 2は貯蔵穴で、入り口の左側コーナーに設けられる。上端は径52cmの円形だが、途中に段を有して落ち込む。径30cmほどの掘り込みが本体と思われる。底面は丸みを帯び、急な傾斜で立ち上がっている。

炉 堅穴中央の奥寄りに50×30cmの不整楕円形、4～9cmの深さで掘削されているが底面に顕著な被熱の痕跡がなく、内部に多量の焼土も見られない。

覆土 どの程度旧状をとどめているか疑問であるが、床を覆う中でも第11層は貼り床のように固く締まったローム質土で人為堆積土である。

遺物 貯蔵穴すぐ脇の床に蓋(9)、甕(5)、埴(12)の破片が出土している。これらは廃棄遺物と考えるが当住居跡に伴う可能性がある。

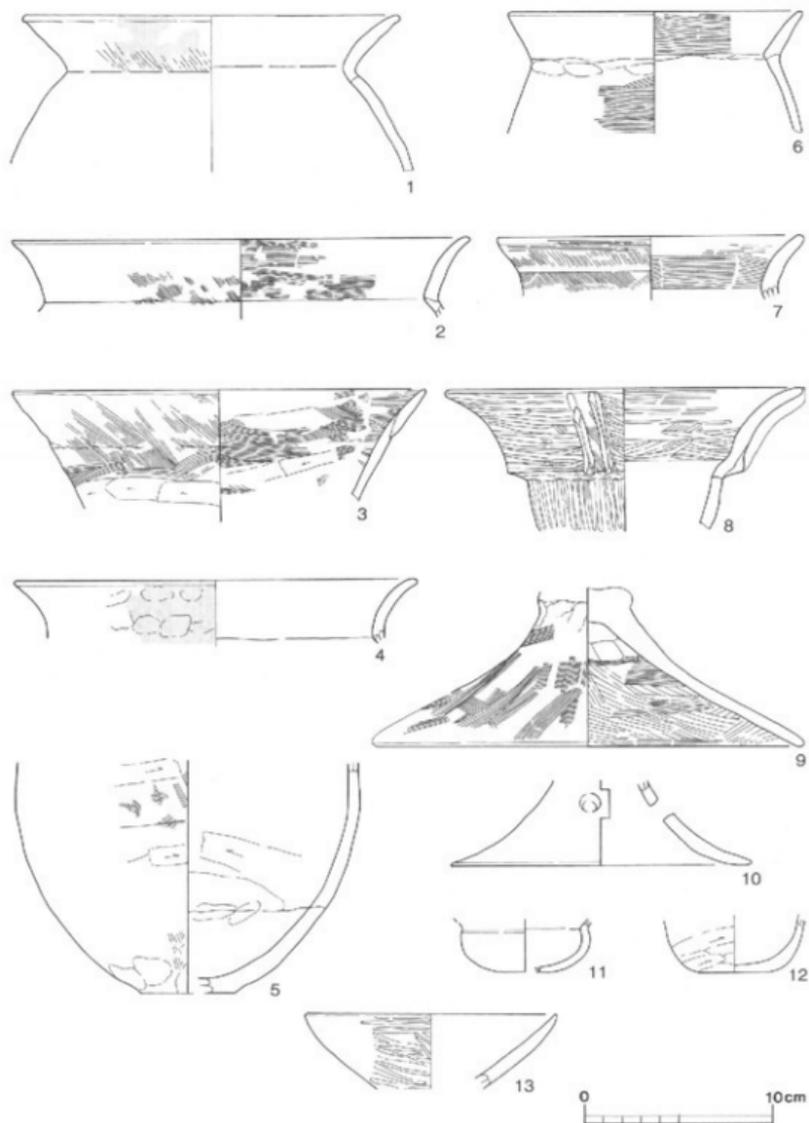
所見 上記出土遺物より4世紀後半の住居と考える。



第73図 第23号住居跡・遺物出土状況

第23号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 透成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	泥 土師器	A : (10.0) C : (8.3)	腹土中位 20% 普通	石英粒△	橙	頸部が屈曲し口縁部が外傾する。口唇部は丸い。口縁部外面はナデられる。口縁部外面に煤状の付着物が見られる。	No.322
2	泥 土師器	A : (23.7) C : (15.2)	腹土下位 20% 普通	長石・石英 ○、雲母粒 △	灰黄褐色 にふい黄褐色	頸部が屈れ、口縁部が強く外傾する。口唇部は丸い。内外面にハケ目が見える。	No.327
3	鉢? 土師器	A : (21.8) C : (6.2)	腹土下位 30% 普通	石英粒○、 小石	にふい黄	ハの字状に外反する口縁部で、その一部に輪轆痕を残し、折返し口縁状となる。内外面共に下位はヘラ削り、上位はハケ目。	No.325
4	泥 土師器	A : (21.4) C : (8.1)	腹土上位 20% 普通	長石・石英 ○	橙 にふい黄	口縁部がやや湾曲して外反する。頸部は丸い。外面には輪轆痕、内面はナデ。外面に煤付着。	No.328
5	泥 土師器	B : (5.0) C : (12.3)	床直 20% 普通	長石○、石 英粒○、雲 母粒△	にふい黄 にふい黄	底部からやや内湾して頸部へ立上る。外面にはヘラ削りとハケ目が見える。内面には輪轆痕・ヘラナデが見られる。	No.326



第74図 第23号住居跡出土遺物(1)



第75図 第23号住居跡出土遺物(2)

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
6	甕 土師器	A : (15.6) C : (6.4)	覆土上位 30% 普通	長石・石英・ 雲母粒△	にぶい橙	頸部は屈曲し口縁部は外反する。口唇部は尖る。 外面の胴部と内面の口縁部にハケ目。	No.323
7	甕 土師器	A : (16.2) C : (3.1)	覆土上位 20% 普通	長石・石英 △	橙	頸部が細く柄れ、口縁部が緩く外傾する。口唇 部は丸い。内外面にハケ目の後、口唇部はナ デ。	No.324
8	甕 土師器	A : (19.0) C : (7.5)	覆土中位 60% 普通	砂粒・石英 粒○、赤色	橙 にぶい橙	二重口縁造りの口縁部。口縁部の内外面にはハケ 目の上にミガキがなされる。外面には4単位二 重の條状浮文あり。	No.333
9	甕? 土師器	縦径 : (22.8) C : 8.4	床直 80% 普通	長石・石英 粒○	橙	横み部は雑な作り。横み部からハの字状に緩く 広がる。内外面ハケ目。内部のハケは荒い。脚 台の可能性もあろうか。	No.321
10	高坏 土師器	縦径 (16.0) C : (4.5) 孔径 : 1.0	覆土上位 30% 普通	長石○、石 英粒○	橙	頸部で頸部はハの字状に緩く大きく開き、端部 は外傾する。内外面磨減している。孔が1孔見 られる。	No.320
11	河 土師器	B : (2.8) C : (2.6)	覆土下位 40% 普通	砂粒○	橙	底部は丸底で、上下に潰れた器形。頸部は柄れ、 口縁部は外反する。内外面共にナデ。	No.335
12	河 土師器	B : (3.6) C : (2.7)	覆土下位 70% 普通	長石○、石 英粒○	にぶい橙 橙	やや丸底の底部から頸部が立上る。胴部外面は ヘリ割り。内面はナデとミガキ。	No.334
13	高坏 土師器	A : (13.4) C : (4.0)	覆土中位 40% 普通	長石・石英 ○	橙	坏部で口縁部が外傾する。口唇部は細く尖る。 外面ハミガキ、内面はナデ後ミガキで、柄裡が 見られる。	No.331
14	鉢 土師器	A : (46.8) C : (7.6)	覆土上位 10% 普通	長石・石英 粒○	橙	大型の鉢と考えられ、胴部から口縁部が緩く外 傾する。口唇部は雑な作りとなる。内外面ヘラ ナデ。	No.329

第24号住居跡 (SI-24) (第76・77図 P L 18・44)

位置 調査区南端では最も標高が高い26m周辺。F・G-28・29区。

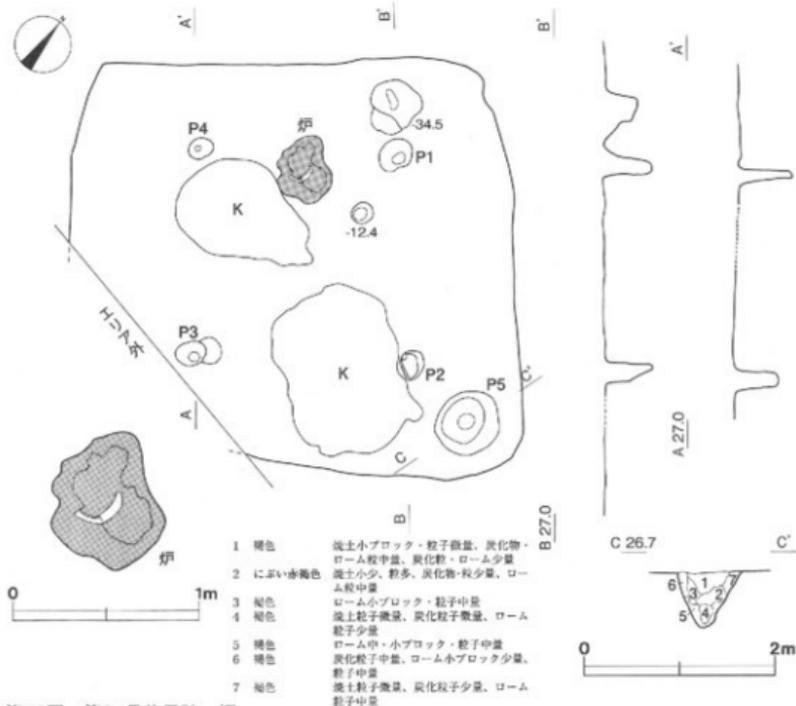
規模・形態 一部がエリア外に伸びる。主軸長4.2m、幅4.7mで、復元面積19.7㎡の方形を呈する。

主軸方位 N-33°-W

壁 大幅な削平を受け、極僅かな窪みと柱穴・炉等の施設により住居跡と確認した。

床 硬化面は明瞭でなく、壁溝もまた検出されなかった。

ピット P1~P4は支柱穴である。径25~35cmの円形を呈し、深さ50~56cmを測る。これらに囲まれる内区の面積は5.1㎡となる。入り口部ピットは検出できなかったが、炉に正対する南壁際に設けられたと見られる。P5は貯蔵穴で、上記位置に入り口を推定すると、入り口右側のコーナーに設営されたことになる。上端径70cm余りの円形で傾斜を持ってすぼまる。深さ60cmを測る。覆土のうち第4層は粘性・粘りとも顕著な粘質土である。



第76図 第24号住居跡・炉

炉 P1 - P4 線上の中央に設けられている。70×50cm程の不整形円形を呈し、深さ7cmほどに掘り窪められる。底面は凸凹して明らかな赤変がみられ、焼土の分布も著しい。

この焼土中に小形甕の胴部を接合帯で割つ

第77図 第24号住居跡出土遺物

た、幅6cm、全長30cm余りの帯状破片が埋設されていた。入り口側に外面に向けた設置状況は第1号・5号住居跡の炉に類例がある。

覆土 ほとんど残っていない。

遺物 当跡に伴うと考えられるのは上記甕片のみである。炉跡の焼土中に埋設された下部断面は割れ口が生々しいが、火に晒されていたと思われる上段面は摩滅し丸みを帯びる。

所見 出土土器や土器埋設炉の存在から第1・5号住居跡と類似時期と考え、4世紀後半の住居と推定する。

第24号住居跡

図版No.	器種 種類	注量 (cm)	出土位置 残存率 透成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	壺 土師器	A: 15.8 C: (4.7)	床直 100% 普通	長石・石英 粒〇	にぶい 橙	口縁部が緩く外転する。口唇部には刻み目が通る。外側ミガキ、内面丁寧なナデ。器面光る。	No.336
2	高坏 土師器	C: (1.6)	雑乱 50% 普通	長石・石英 粒〇	橙 黒	高坏の中空脚部。外面にはミガキ。内面は横されているのか黒い。	No.464

第25号住居跡 [SI-25] (第78図)

位置 調査区南端。付近では最も標高が高い26m周辺。B・C-28区。

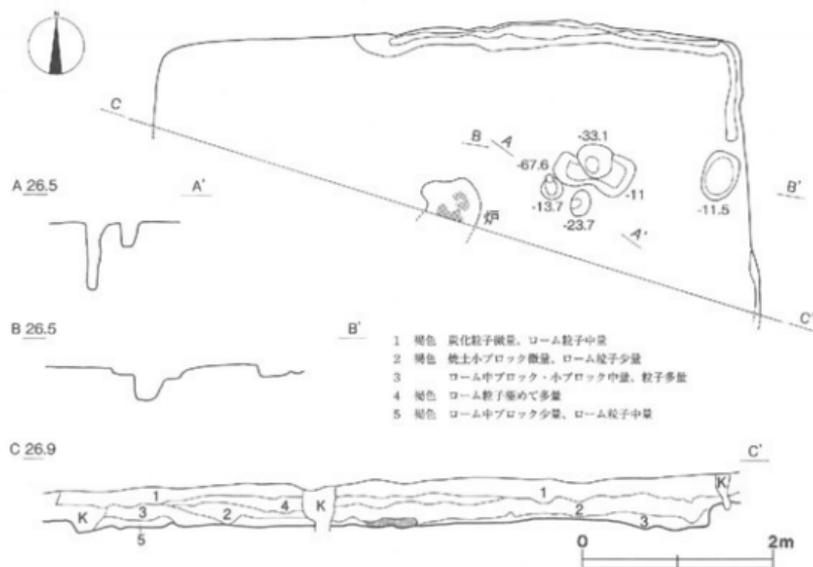
規模・形態 南半分がエリア外に伸びているが、幅6.2mの方形を呈するものとする。

主軸方位 N-1°-E

壁 大幅な削平を受け、比較的残存状況のよい北壁でも5cm程の高さしかない。

床 平坦に検出されたが全く硬化が見られず削平・攪乱が一部床に及んでいる可能性もある。北壁と北東コーナー付近に検出され、幅15~20cm、深さ5cm程である。

ピット 4ヶ所検出され、その中で集中する3個のうち最深のものが主柱穴の一本である可能性が強い。径35cm、深さ30cmほどである。入り口・貯蔵穴とも今回調査区には含まれず、エリア



第78図 第25号住居跡

外に設置されているものと推定する。

炉 堅穴のほぼ中央と目される場所に多量の焼土分布が見られる。

覆土 現状では表土排除時に削平してしまいほとんど残っていないが、エリア境界の土層図では5層の覆土が確認できた。

遺物 図示できる遺物はない。

所見 遺跡内での遺構の構造から見て当期の住居と考える。

2. 堅穴遺構

第1号堅穴遺構 (SX-1) (第79図 P L20・44)

位置 調査区北端で、第3号住居跡から4mの距離で標高25m付近。V・W-4区。

規模・形態 攪乱のため掘り込みがはっきりせず検出した平面形が小型・いびつで床面も柱穴も明瞭でないため堅穴遺構としたが、あるいは横長方形の小型住居跡かもしれない。

主軸方位 不明

壁 ほとんど残っていない。

床 凸凹しており硬軟の差も特に見いだせない。壁溝なども検出されなかった。

ピット 3ヶ所検出されたが明瞭に柱穴といえるものはない。P1は貯蔵穴に類するものかも知れない。55×45cmの不整形形を呈し、深さ20cmほどである。内部より小型小片が出土しているが図示できるようなものではない。

炉 床面に50×30cm程の不整形の焼土分布がみられこれが炉かと思われる。

覆土 ほとんど残っておらず旧状をとどめていないと考える。

遺物 明確に当跡に伴うといえるものはない。本遺構の覆土中とはいええないが、近接して台付甕(2)が出土しており本遺構出土として扱った。

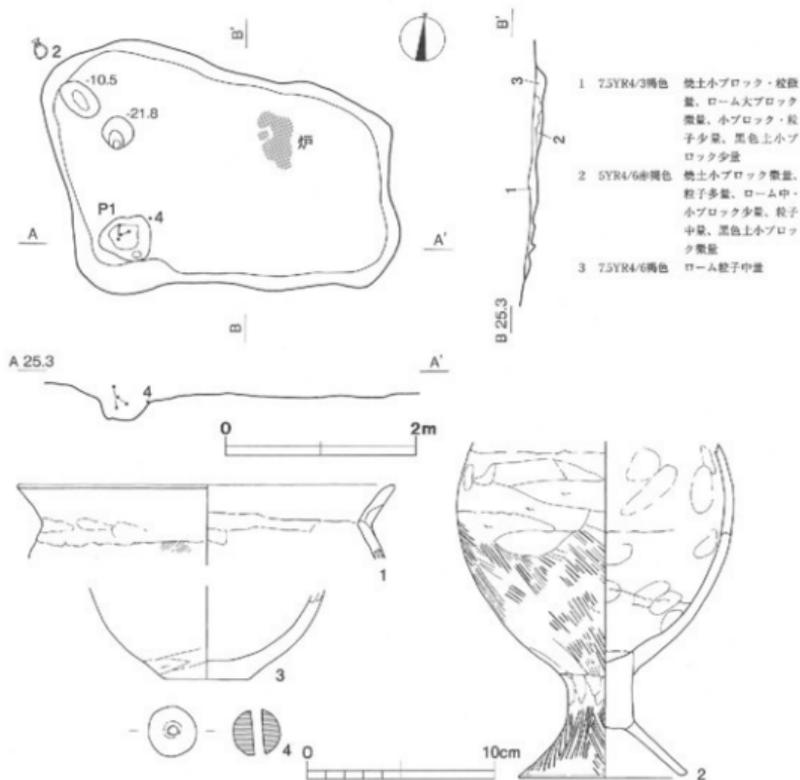
所見 覆土の色調や出土遺物から当期のものかと推定する。

第1号堅穴遺構

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	A: (19.7) C: (4.2)	覆土 10% 普通	長石○	橙	口縁部が彫曲する臺の口縁部。頸部の外面に輪積痕あり。内外面ナテ。	No.422
2	台付甕 土師器	器種: (8.9) C: (17.7)	遺構外 60% 普通	長石・石英 ○	橙	丸い頸部の臺に頸部が付く。頸部は上部が中実、裾部がハの字状に固く。外面にヘラ彫りとハケH。内面に担頭痕など。	No.389
3	甕 土師器	B: (4.2) C: (15.2)	覆土 10% 普通	長石・石英 靑○	靑	底部破片。底部輪縁にヘラ削り。内面荒れる。	No.423

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
4	土製品	上玉	2.6	2.5	15.9	貯蔵穴底	完形	No.424



第79図 第1号竪穴遺構・出土遺物

3. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡〔SB-1〕(第80図 P L19・44)

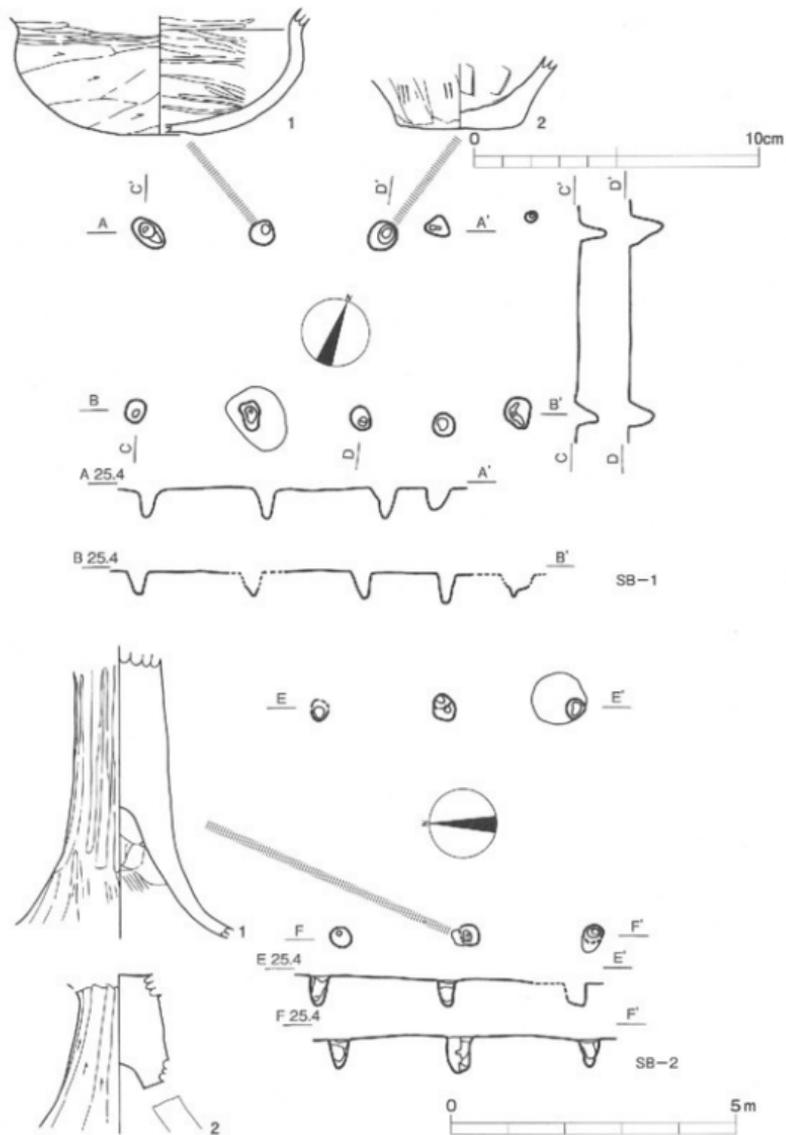
位置 調査区北寄りの台地上。Q-5、R-4・5区。

規模・形態 桁行4間×梁行1間の東西棟。柱間距離は一定でなく規格性を感じられない。総じて径40cm平均の円形を呈し、深さ50cm程である。床面積は約22㎡(7坪)余りになる。

主軸方向 N-20°-W

遺物 柱穴掘り方内より埴(1)、甕(2)等の破片が出土している。

所見 少なくとも遺物が出土したピットの柱は抜かれたものとする。覆土色調や出土物より当期の遺構と判断した。



第80图 第1・2号掘立柱建物跡・出土遺物

第1号掘立柱建物跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 或	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	増 土脚器	B : (2.6) C : (4.1)	覆土 40% 普通	長石・石英 ○	明赤褐 橙	底部から内湾し、頸部で括れ口縁部が外儀する。底面はやや凹む。外面は筒りが見られ、内面はナデ。	No.416
2	壺 土脚器	B : (4.3) C : (2.3)	覆土 70% 普通	石英粒△	灰褐	小型壺の底部か。外面ハケ目の後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	No.419

第2号掘立柱建物跡 (SB-2) (第80図 P L19・20・44)

位置 調査区はほぼ中央の台地上。R・S-13・14区。

規模・形態 桁行2間×梁行1間の南北棟。桁間2.3m均等で、梁間も広く4mほどを一気に渡している。掘り方は径35cmの円形で、深さ50cm程を測る。床面積は18㎡(6坪)程になろう。

主軸方位 N-6°-W

遺物 柱掘り方下部より高坏脚部(3)が出土している。

所見 覆土の色調及び出土物より当期の遺構と判断した。

第2号掘立柱建物跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 或	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	高坏 土脚器	C : (10.1)	覆土 90% 普通	石英粒○	橙	ほぼ柱状の脚部で中央部分が多い。頸部は幅広く広がる。外面は密なミガキ。内面はハケ目の後へら筒り・ナデ。	No.418
2	高坏 土脚器	C : (6.0)	覆土 70% 普通	長石・石英 粒○	橙	脚部破片で頸部は幅広く広がる。外面は縦方向のへら筒り。	No.417

第3節 古墳時代後期

当期の遺構は竪穴住居跡が5軒検出された。出土遺物から6世紀後葉に盛行する集落と考える。貯蔵穴の掘削位置、竪解体時に支脚だけを遺棄するあり方等共通点が多く、5軒全てが同時存在したものではないにせよ、ごく短い期間内に集中して営まれたものであろう。

1. 竪穴住居跡

第3a号住居跡〔SI-3a〕(第81~83図 P.L.21・45)

位置 調査区北端。標高25m付近で、地形は南から北へ緩く傾斜する。第3b住居と切り合い関係にあり当住居が新しい。U・V-2・3区。

規模・形態 主軸長5.3m、幅約5mの方形で面積は26.5㎡。

主軸方位 N-63°-W

壁 東壁では攪乱や崩れがみられ傾斜しているが、南・東壁はほぼ垂直に50~70cm立ち上がる。竪の左右ではテラス状の幅の狭い段が見られる。壁溝は南北壁の二辺で検出されたが極短く、幅20cm、深さ4~5cmである。この壁溝内のほぼ呼応する位置に1対小型ピットが検出され、支柱穴(P1、P4)とも並んでいるが相関関係は不明である。

床 平坦で明瞭に検出された。一部攪乱で壊されているが、よく踏み固められており特に竪付近にその兆候が著しい。

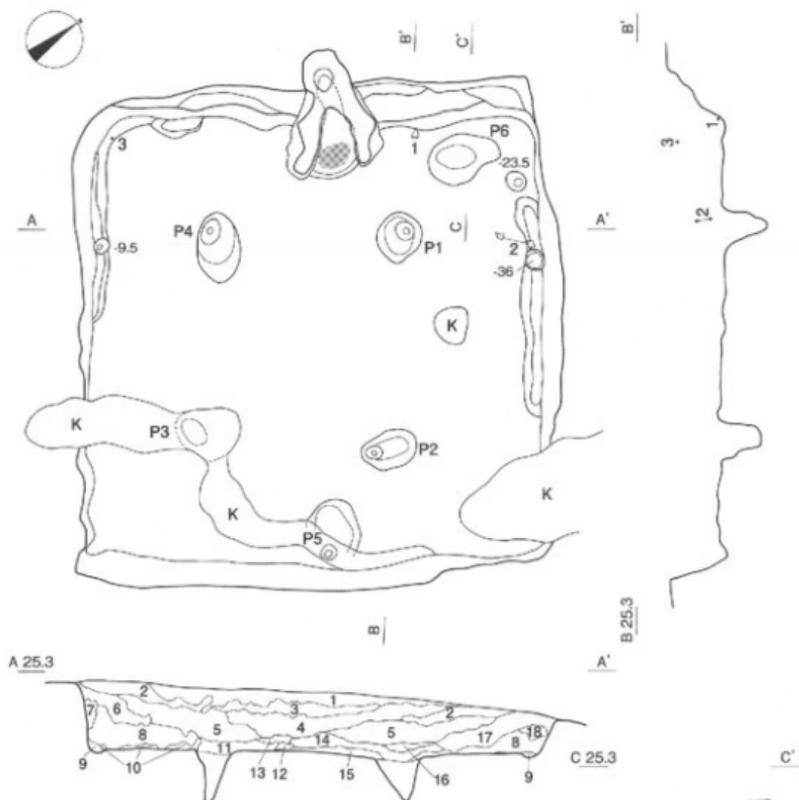
ピット P1からP4は支柱穴で、おおむね円形を呈し径40~50cm、深さ50~60cm余りである。これらに囲まれた内区の面積は4.8㎡である。

P5は入り口ピットと考える。壁から40cm離れ、竪と正対する。上方は攪乱を受けているが下端近くで径約16cm、深さ27cmである。P6は貯蔵穴である。80cm×50cmの楕円形を呈し、竪壁の右コーナーに掘削される。深さ32cmを測り、壁は緩く傾斜する。

竪 壁外へ40cm掘り出して、西壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築される。検出時は構築土が住居内側に流れ出し20cm程の厚さで堆積していた。全長135cm、残存袖部幅45cmである。奥壁は住居壁を若干掘り込み、ほぼ直に立ち上がる。また天井部の一部も残存しており、住居の内外境界付近に径20cmの煙出しの穴が穿たれる。燃焼部は2cm程の微妙な窪みで少量の焼土の分布が見られるが、堆積土というより床が焼けて赤化したものようである。図示できる遺物は出土していない。

覆土中には焼土混じりの第4層の堆積が見られ、これは天井部等からの崩落ではないかと考える。その上部は煙道部の開口部から入り込んだ土で埋まる。

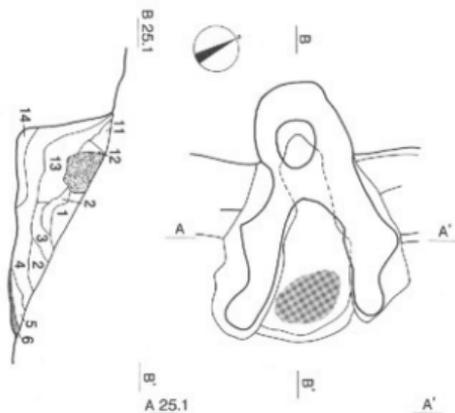
覆土 観察項目の内容により細かく分層されているが、あらまは以下のようなになる。床上に



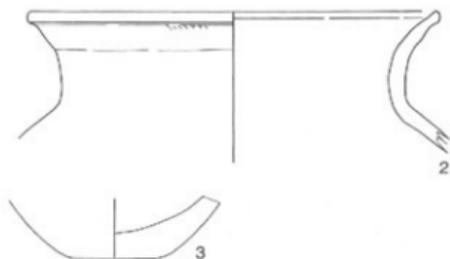
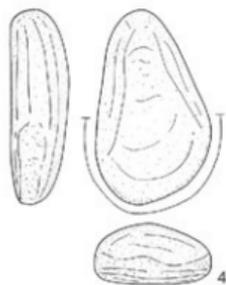
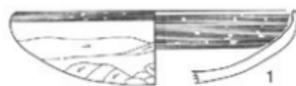
- | | | |
|----|--------------|---------------------------------------|
| 1 | 7.5YR6/6褐色 | ローム粒子中量、黒色土中ブロック中量 |
| 2 | 7.5YR3/4暗褐色 | ローム中ブロック微量、黒色土中・小ブロック多量 |
| 3 | 7.5YR4/4褐色 | ローム中ブロック微量、黒色土中・小ブロック微量 |
| 4 | 7.5YR3/4暗褐色 | ローム粒子微量、黒色土大・中・小ブロック多量 |
| 5 | 7.5YR3/4暗褐色 | ローム中・小ブロック・粒子微量 |
| 6 | 7.5YR4/4褐色 | ローム中微量、小少量、粒子微量 |
| 7 | 7.5YR6/6褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子多量 |
| 8 | 7.5YR4/4褐色 | 焼土中ブロック微量、ローム中・小ブロック・粒子中量 |
| 9 | 7.5YR5/6明褐色 | ローム大・中・小ブロック・粒子中量 |
| 10 | 7.5YR4/4褐色 | |
| 11 | 7.5YR4/4褐色 | ローム中・小ブロック微量 |
| 12 | 7.5YR4/4褐色 | ローム小ブロック少量、カマド積層土多量 |
| 13 | 7.5YR3/4暗褐色 | カマド積層土多量 |
| 14 | 7.5YR3/4暗褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 15 | 7.5YR5/4に赤褐色 | |
| 16 | 7.5YR4/3褐色 | 焼土小ブロック・粒子・ローム粒子少量、ローム大・小ブロック中量、炭化粒微量 |
| 17 | 7.5YR3/4暗褐色 | |
| 18 | 7.5YR3/4暗褐色 | |

第81図 第3a号住居跡・遺物出土状況

- 1 75YR4/4褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 75YR4/4褐色 焼土小・炭化殻ローム中・粒子少量、焼土粒中量
- 3 75YR4/4褐色 焼土中細量、小ブロック・ローム大・少量、粒子中量
- 4 75YR4/3褐色 焼土中・炭化殻ローム粒少量、焼土小・粒中量、炭化物微量
- 5 75YR4/4褐色 焼土中・小・粒・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 75YR3/2黒褐色 焼土粒少量、ローム粒子中量
- 7 75YR4/3褐色 焼土粒・ローム粒少量
- 8 75YR4/3褐色 焼土粒・ローム粒少量、カマド構築土多量
- 9 75YR4/3褐色 焼土・ローム粒微量、カマド構築土多量
- 11 75YR4/3褐色 カマド構築土多量
- 12 75YR4/3褐色 カマド構築土多量
- 13 75YR4/3褐色 流土粒子少量
- 14 流土小ブロック・粒子・ローム中・小ブロック中量、ローム粒少量



第82図 第3a号住居跡画



第83号 第3a号住居跡出土遺物

第9・10層が薄く堆積した後、壁際に厚く中央部には薄く粘性のある褐色土（第8・11・12層）が堆積する。その上部に締まり・粘性に欠ける暗褐色土（第14・17層）が堆積する。さらに、この住居跡の主たる埋上である第5層が堆積し、この時点で壁際はほとんど埋まり中央部が凹レンズ状に窪む。この窪みに黒色の強い第2・4層が溜まり、ごく浅い最後の窪みに第1・3層が堆積して埋没が完了したものである。

遺物 全て小片で廃棄物と考えられ、第8層からの出土が目立つ。1・3・4は第8層、2は第5層中からの出土。4は敲打器である。

所見 住居の構造や出土遺物を総合的に判断して6世紀末～7世紀初頭の住居跡と考える。

第3 a号住居跡

区画No.	層種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	坏 土師器	A: (14.8) C: (3.8)	覆上下位 40% 普通	極細砂粒△	褐 灰青褐	口縁は近く直立し、端部は尖る。内外共にナデ。外側は割り。内面はナデ。内外面黒彩。	No.53
2	甕 土師器	A: (21.8) C: (6.8)	覆上下位 20% 普通	石英・長石 小粒○	赤橙	頸部の屈曲は緩やかで、口縁端部は固取りして尖る。内外ともナデ。被熱しており器面荒れる。	No.56
3	甕 土師器	B: (5.8) C: (3.0)	覆上中位 40% 不良	石英・長石 小粒○	明赤褐 にぶい褐	平底。内外ともにナデ。底面は被熱している。	No.55

単位: cm・g

区画No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
4	石器	敲打器	102	61	32	248.0	砂岩	石3 頸部縁辺に敲打痕

第11号住居跡【SI-11】(第84~87図 P L22・23・45・46)

位置 調査区中央で標高25m付近。R-15・16、S-15・16区。第12号住居跡と切りあっており
当住居跡の方が新しい。

規模・形態 主軸長5.2m、幅4.7mの方形を呈する。面積24.4㎡。

主軸方位 N-3°-W

壁 一部崩れが見られるが総じて残存状態が良く、高さ50cm余りで、ほぼ垂直に立ち上がる。

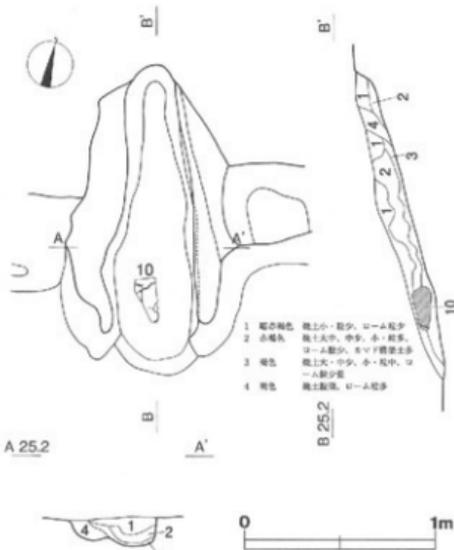
床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は竈部を除いて全周し、幅15~16cm、深さ6cmを測る。

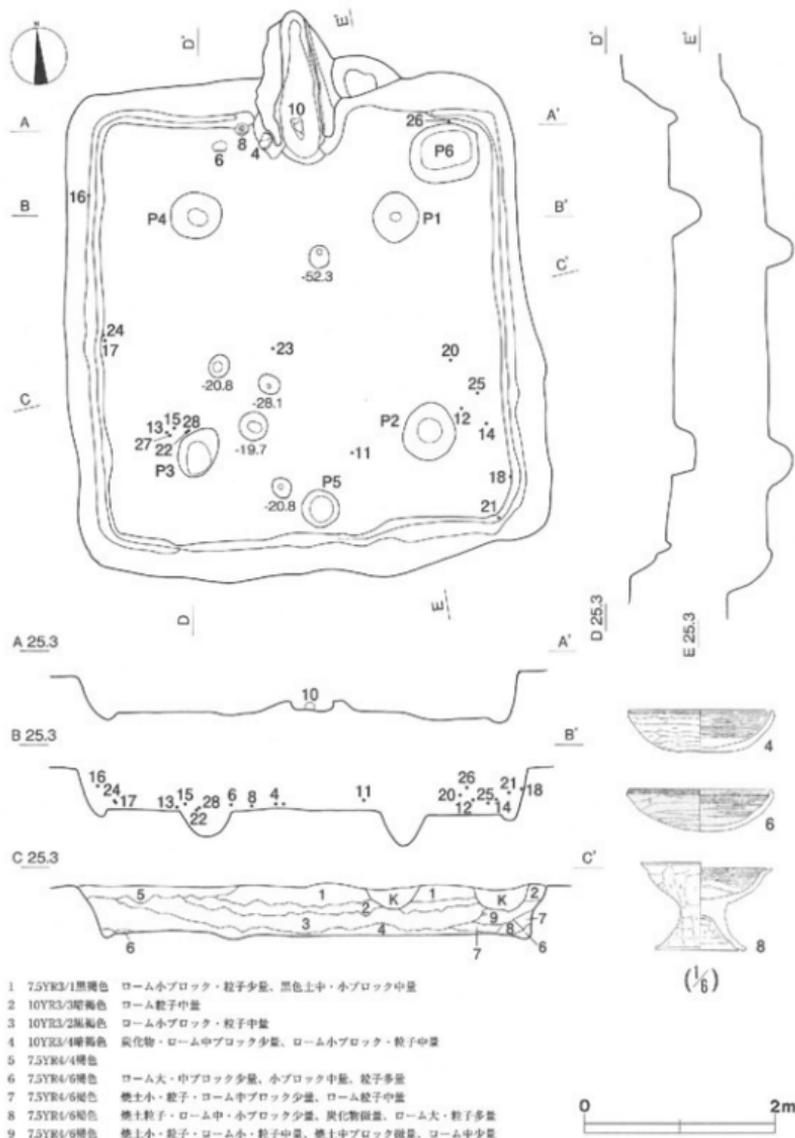
ピット P1からP4は主柱穴である。径45~58cmの円形で、深さ30~40cmである。これらに
囲まれた内区の面積は約6.5㎡となる。P5は入り口ピットと考える。壁から約60cm離れ、竈に
正対してP2・P3のほぼ中央に設けられる。径40cm、深さ12cmを測る。P6は貯蔵穴である。
住居奥の北東コーナーに掘削され、長軸70cm×60cmの楕円形で深さは28cmを測る。そのほか
竈の正面に主柱穴より深いピットなどがあるが性格は不明である。

竈 北壁中央部に外側へ80cm余り掘り出して、黄白色砂質粘土を使用して構築される。全長
163cm、残存袖部幅35cm。燃烧部の窪みは明瞭でなく東壁は多少抉れる。底面はあまり被熱痕
跡がなく奥側の傾斜は緩やかである。焚き口から40cmほどの内部には土製支脚(10)が横転し
ていた。第2層は天井部の崩落土と思われ焼土と構築土を多量に含むが、支脚はほぼこれと同レ
ベルで底面からは若干浮いた状態での出
土である。この支脚は廃棄されたものと
考える。類例が第14・20号住居跡に見ら
れる。

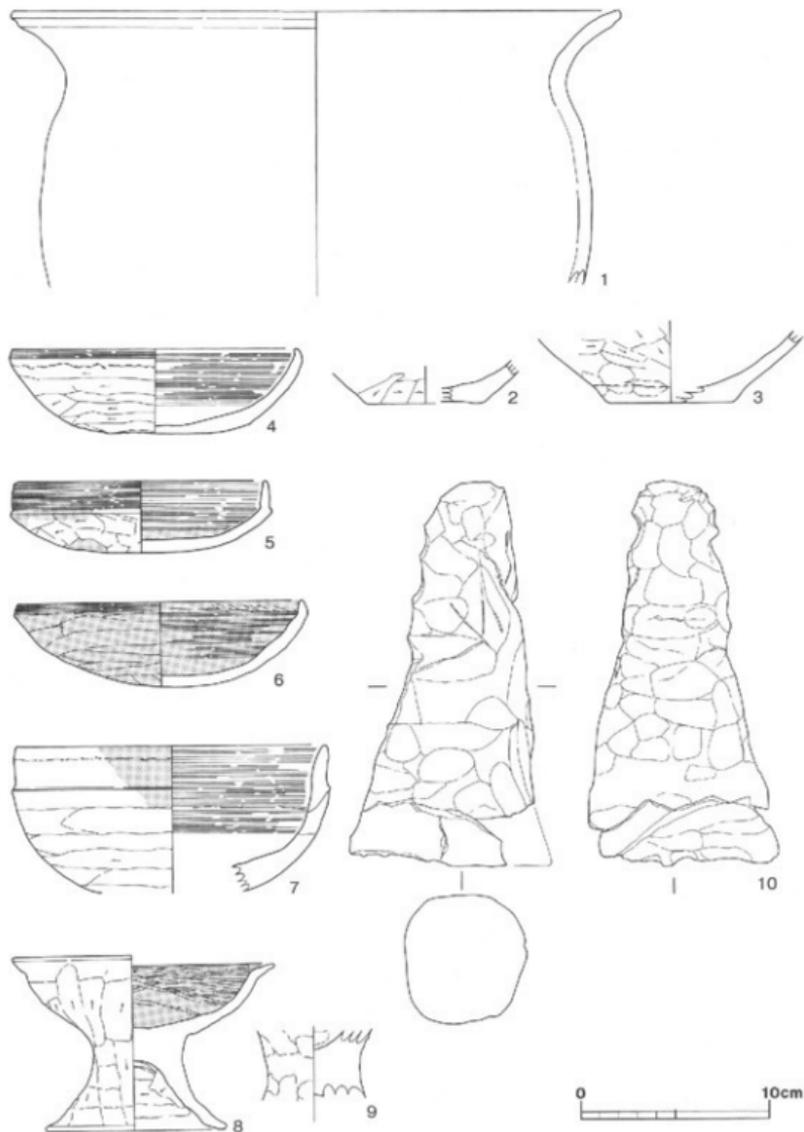
覆土 第7・8・9層は住居内の東外区
に集中する土で、特に第9層は東壁際に
堆積し赤変した焼土や竈構築土を多量に
含んでいる。広範囲に住居床を覆うのは
主に第4層、ロームを比較的多く含み褐
色を呈する土層である。

遺物 竈左袖に近接して坏(4・6)、
高坏(8)がほぼ床上から出土した。特
に8は逆位での出土である。第一次堆積
土に混入した可能性もあるが、竈解体後、
高坏を燃烧部や竈の周囲に逆位で遺棄す
る例もまた少なくないので注意を要す

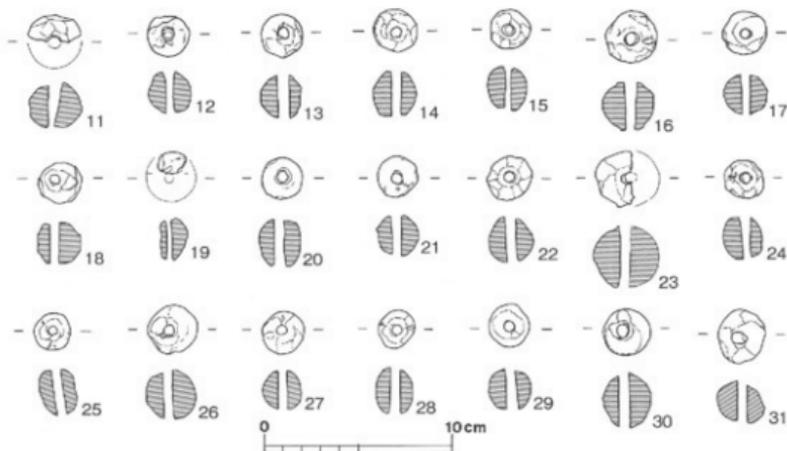




第85図 第11号住居跡・遺物出土状況



第86图 第11号住居跡出土遺物(1)



第87図 第11号住居跡出土遺物(2)

第11号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	A : (16.2) C : (14.5)	床直 20% 不良	石英・長石 小粒○	にぶい黄橙	胴部の張りは横かで、口縁部は長く外反、肩部は丸みを帯びる。内外ともにナデ、ただし風化・剥離が著しい。	No.175
2	甕 土師器	B : (6.2) C : (1.6)	床直 50% 良好	石英・長石 細粒○	橙 にぶい橙	平底。底部周辺を横位の手持ちヘウ削り。内面丁寧なナデ。	No.174
3	甕 土師器	B : (6.8)	覆土上位 50% 普通	細砂粒・玄 母像細片○	橙	平底。底部周辺は指頭圧痕、上部はヘウ削り。内面丁寧なナデ。	No.172 流入
4	坏 土師器	A : (15.2) C : 4.5	電鍋 65% 良好	砂粒△	にぶい橙	口縁は縦短く、内傾して肩部は丸い。内外ともにナデ。体部外面はヘウ削りの後ミガキ状のナデ。	No.164
5	坏 土師器	A : (13.4) C : 3.8	覆土上位 25% 良好	砂粒△	にぶい橙	口縁は丸みを帯びて直立し、内外共ナデ。体部は削り。埴の稜は明瞭だが、更く丸い。内外共に黒色処理。	No.163
6	坏 土師器	A : (15.0) C : 5.0	電鍋 65% 良好	砂粒△	黒	口縁は縦短く、内傾して肩部は丸い。外体部はミガキ状のナデ。口径は広く、底部は尖り気味。内外共に黒色処理。	No.165
7	埴 土師器	A : (16.4) C : (7.7)	床直 30% 普通	砂粒△	浅黄	口縁は比較的高く直立し、器厚は厚め。体部外面はミガキ状のナデ、稜は短く明瞭。内面丁寧なナデ。口縁外面に黒色処理。	No.166
8	高坏 土師器	A : 13.8 C : (9.3) 胴径 : 9.5	電鍋 ほぼ完形 良好	石英・長石 細粒○	明黄栗 黒	口縁は縦やかに外反。坏部内面はミガキ、外面は脚部から縦く縦位の削りが施される。脚は短く太め。坏部内面黒色処理。	No.168
9	高坏 土師器	C : (3.7)	床直 50% 不良	石英・長石 粗粒○	橙	太く短く脚部。器内は厚い。内面指頭によるナデ、脚内部ヘウナデ。	No.167

第11号住居跡

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
10	土製品	支脚	20.9	10.0	—	竈北面	ほぼ完形	指頭圧痕あり
11	土製品	土玉	2.4	(2.8)	6.5	覆土	1/2	No.180
12	土製品	土玉	2.2	2.2	9.3	覆土	ほぼ完形	No.181
13	土製品	土玉	2.2	2.2	10.6	覆土	完形	No.182
14	土製品	土玉	2.3	2.3	11.6	覆土	完形	No.183
15	土製品	土玉	2.4	2.1	9.3	覆土	完形	No.184
16	土製品	土玉	2.6	2.7	16.1	覆土	完形	No.185
17	土製品	土玉	2.1	2.3	11.6	覆土	完形	No.186
18	土製品	土玉	2.1	2.3	10.8	覆土	完形	No.187
19	土製品	土玉	(2.2)	(1.4)	(2.5)	覆土	小片	No.188
20	土製品	土玉	2.4	2.2	11.0	覆土	完形	No.189
21	土製品	土玉	2.0	2.1	10.3	覆土	完形	No.190
22	土製品	土玉	2.4	2.4	11.5	床直	完形	No.191
23	土製品	土玉	3.3	(1.9)	(12.9)	覆土	完形	No.192
24	土製品	土玉	2.2	2.0	8.8	覆土	完形	No.193 炭化物付着
25	土製品	土玉	2.4	1.9	8.9	覆土	完形	No.194 炭化物付着
26	土製品	土玉	2.6	2.6	16.4	覆土	完形	No.195
27	土製品	土玉	2.0	2.2	9.6	床直	完形	No.196
28	土製品	土玉	2.1	1.9	9.0	床直	完形	No.197
29	土製品	土玉	2.1	2.1	10.0	ピット1	完形	No.582
30	土製品	土玉	2.6	2.9	16.4	覆土	ほぼ完形	No.583
31	土製品	土玉	2.5	2.0	11.1	覆土	ほぼ完形	No.584

る。また初期の堆積土(第4層)に混じって20個余りの土玉が出土している。壁際では高く、住居中央部では床近くに散乱し、竈壁を除く三方の外区に分布する。第4層は人為的投入土と考えられ、土玉はこの土に伴って住居内に入り込んだかのような様相を呈する。

所見 上記の支脚、高坏、これに隣接して出土した坏もこの住居跡に伴う可能性が強いものと考え、6世紀末～7世紀初頭の住居跡と考える。

第14号住居跡〔SI-14〕(第88~90図 P L24・46)

位置 調査区はほぼ中央。全体的にやや窪んだ地形でローム層の堆積が明瞭でない。標高25m付近。O・P・Q-17・18区。

規模・形態 主軸長6.4m、幅6.4mの正方形で、面積約41㎡。

主軸方位 N-41°-W

壁 ほぼ垂直に40~45cm立ち上がり良好な残存状態である。

床 粘性の強いローム中に検出された。内区中央付近は微妙に窪む。特に竈の焚き口周辺のみで硬化面を検出した。壁溝は竈部を除いてほぼ全周し、幅10~12cm、深さ4~7cmである。

ピット P1~P4は支柱穴で、上端は広く底面はすぼまる。深さ25~40cm、径30~50cmの円形であり、P1・4が深い。これらに囲まれた内区の面積は7.8㎡となる。

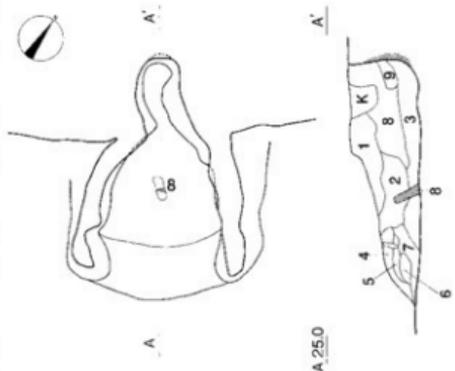
P5は入り口ピットと考える。壁から40cm離れ、竈に正対する住居中心線上に掘削される。径38cm、深さ25cmを測る。P6は貯蔵穴で住居の奥壁の右側隅に設けられ、横長の楕円形を呈する。その規模は75×55cmで、深さ20cm、底面は平坦で壁は緩やかに傾斜する。

竈 北西壁から40cm程煙道部を掘り出して、黄白色砂質粘土を使用して構築され、奥壁・両袖壁とも被熱で赤変、東壁は多少抉れる。全長130cm、残存袖部幅55cm。燃焼部はほとんど窪まず平坦で、焼土が混じり固く締まる。この燃焼部はほぼ中央に土製支脚(8)が正立して遺棄されていた。下部は生焼け状態で第3層中に埋没していた。使用時の焼土を多量に含むのは焚き口近くの第6層のみで、第3層は暗褐色を呈し中量の焼土と微量の炭化物を含む粘性の強い土層である。同様の例が第11・20号住居跡に見られる。

覆土 床を覆う第一次堆積土は第3層とこれに類似する第8層で、共にローム粒を中~多量に含む投入土と考える。

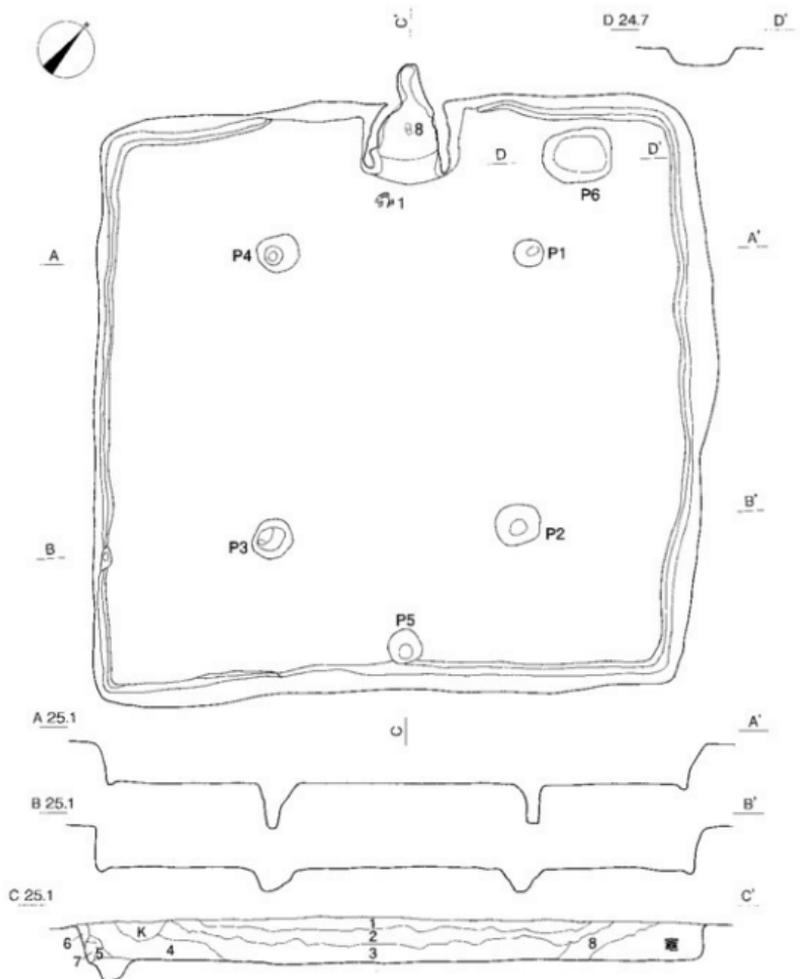
遺物 主として覆土中~上層に散乱する廃棄遺物で、その中には赤彩を施した須恵器(3)や鉄斧(7)が見られる。坏(1)は竈全面に横位で出土したが、明確に当跡に伴う遺物は上記の支脚(6)のみである。

所見 覆土中遺物を総合的に判断して、



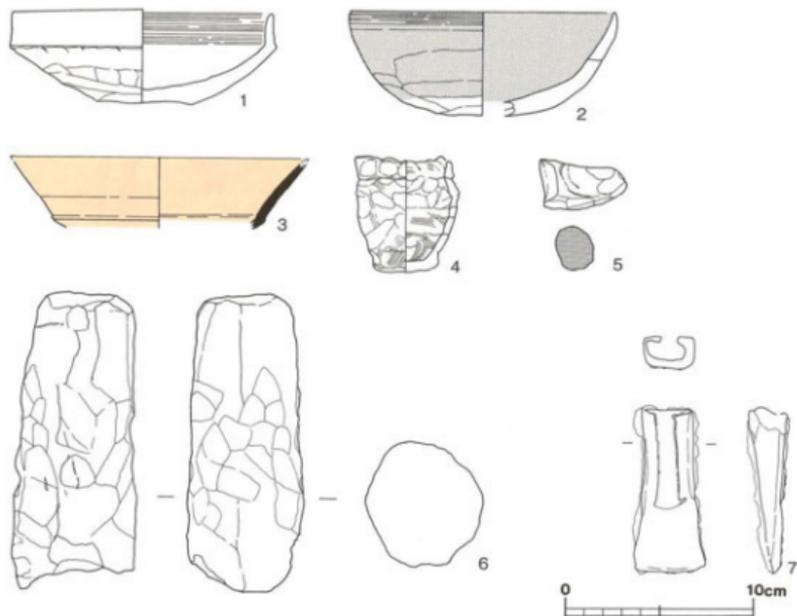
- | | |
|--------|--------------------------------------|
| 1 陶器 | 焼土中・小ブロック・粘土・ローム中ブロック少量、ローム粒下少量 |
| 2 焼色 | 焼土中ブロック少量、小ブロック・粘土中量、ローム中ブロック少量、粘土少量 |
| 3 陶器色 | 焼土大・中ブロック少量、小・粘土中量、黄化部・ローム中ブロック・粘土少量 |
| 4 焼色 | |
| 5 焼色 | 焼土粘土中量、ホマド礫礫土多量 |
| 6 須恵器色 | 焼土中・小ブロック・粘土多量、ローム粒下少量 |
| 7 陶器 | 焼土中ブロック少量、小ブロック中量、粘土多量、ローム粒下少量 |
| 8 焼色 | 焼土大ブロック少量、小ブロック少量、粘土中量、ローム粒下少量 |
| 9 須恵器色 | 焼土小ブロック・粘土多量、ローム粒下少量 |

第88図 第14号住居跡



- 1 75YR3/2黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量、ローム小ブロック・粒子少量、灰色土中・小ブロック
- 2 75YR3/2黒褐色 焼土粒子・ローム中ブロック微量
- 3 75YR4/3褐色 焼土小ブロック微量、ローム粒子中量
- 4 75YR3/4暗褐色 焼土中・小ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子中量
- 5 75YR4/4褐色 ローム粒子多量
- 6 75YR4/6暗色 ローム粒子多量
- 7 75YR4/4褐色 ローム粒子中量
- 8 75YR4/6暗色 焼土中ブロック少量、ローム粒子微量、砂質粘土中量

第89図 第14号住居跡



第90図 第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡

図版No.	器形種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	坏土師器	A : (13.8) C : 5.0	覆土 90% 良好	石英・長石 を微量に含 む	明赤褐	口縁は直立し内外共にナデ。体外部は乱雑な割り。縁は甘く緩い。器内が厚く、どっしりしている。	No.250
2	坏土師器	A : (14.0) C : (5.5)	覆土下位 30% 普通	石英・長石 粒△	浅黄	口縁は極短く直立し、内外共にナデ、体外面ハラナデ、内面丁寧なナデ。内外共に黒色処理。	No.249
3	ハソウ? 須恵器	A : (15.8) C : (3.8)	覆土中位 20% 普通	長石粒△	暗緑灰	口縁部は屈曲部からやや立上がる。内外共に赤影。	No.469
4	手捏ね 土師器	A : 4.36 B : 3.4 C : 6.2	覆土 100% 普通	砂粒△	橙	内面に明瞭な輪積み痕を残す。壺の形を模したものか。口縁には一条粘土帯を廻し、やや外傾させる。ハケ目の後ナデ。	No.254

6世紀後半の住居跡と考える。当期の住居跡の中では最大の床面積を持つ。

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
5	土製品	飯肥手	4.6	2.3	22.0	竪土	把手部	No.253
6	土製品	支脚	15.8	6.5	530.0	竪床直	定形	No.256 下部欠損

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	出土位置	材質	備考
7	金属製品	斧	8.9	3.8	1.7	竪土	鉄	No.629 保存処理済み

第17号住居跡〔SI-17〕(第91~94図 P L.24・46・47)

位置 調査区南寄り。眼下に谷津を望む標高24m付近。遺構確認面から下に20cmの厚みでロームが堆積し、下部の常総粘土層に至る。T・U-21・22区。

規模・形態 主軸長4.8m、幅5.0mのやや崩れた方形を呈し、面積は24㎡となる。

主軸方位 N-69°-W

壁 残りのよい西半分ではやや傾斜しつつも高さ40~50cmを測る。東側は攪乱で壊させる。

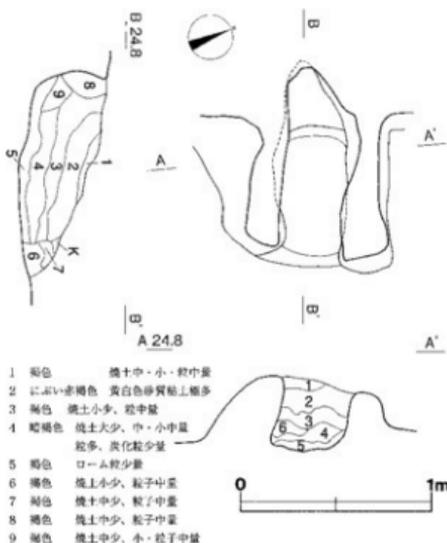
床 内区中央には攪乱が入り乱れるが、おおむね平坦で明瞭に検出され、一部硬化面も見られた。

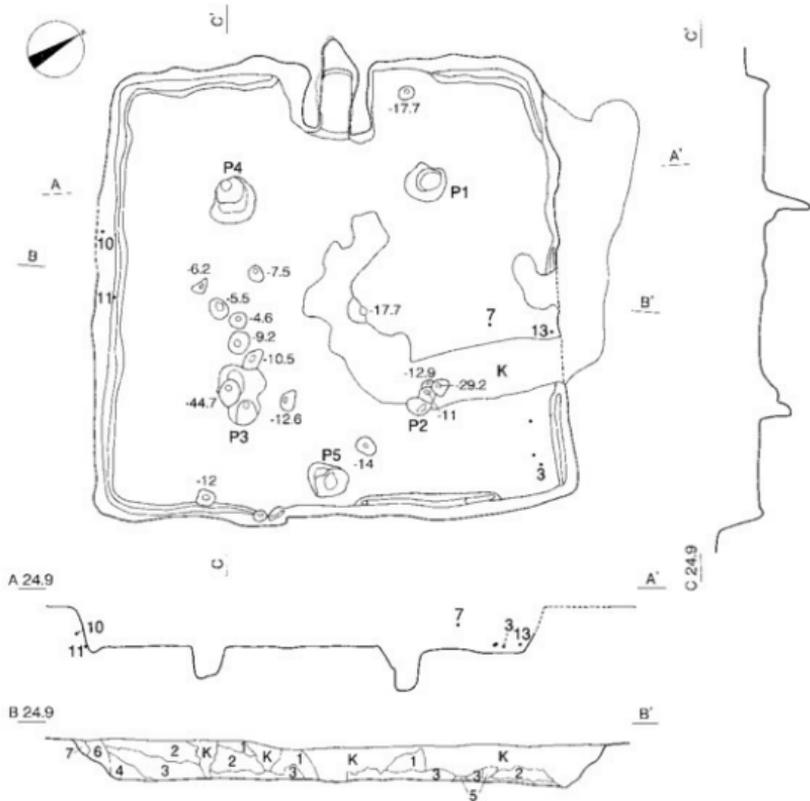
傾斜地に掘削されているためロームの堆積が薄く、下部の常総粘土層まで掘り込まれ、調査時よく濡水した。壁溝は竈・入り口部を除いてほぼ全周しており、幅10~15cm、深さ5~6cmである。内区は硬化しているようだが攪乱のため明瞭でない。

ビット P1~P4は主柱穴である。掘り方は全て段を有し上端のプランは径35~40cmの円形だが、下部ですぼまって12~14cmとなる。深さは若干ばらつきが有り30~50cmを測る。これらに囲まれた内区の面積は4.8㎡となる。

P5は入り口ビットである。壁から40cm程離れ、竈に正対する住居中心線上に掘削されている。径40cmと主柱の比べ遜色ない規模だが、深さは24cmで浅い。貯蔵穴は検出されなかった。その他P3の周辺に小型ビットが散見されるが性格は不明である。

竈 西壁中央部を25cmほど掘り出し、黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長110cm、残存袖部幅30cm。奥



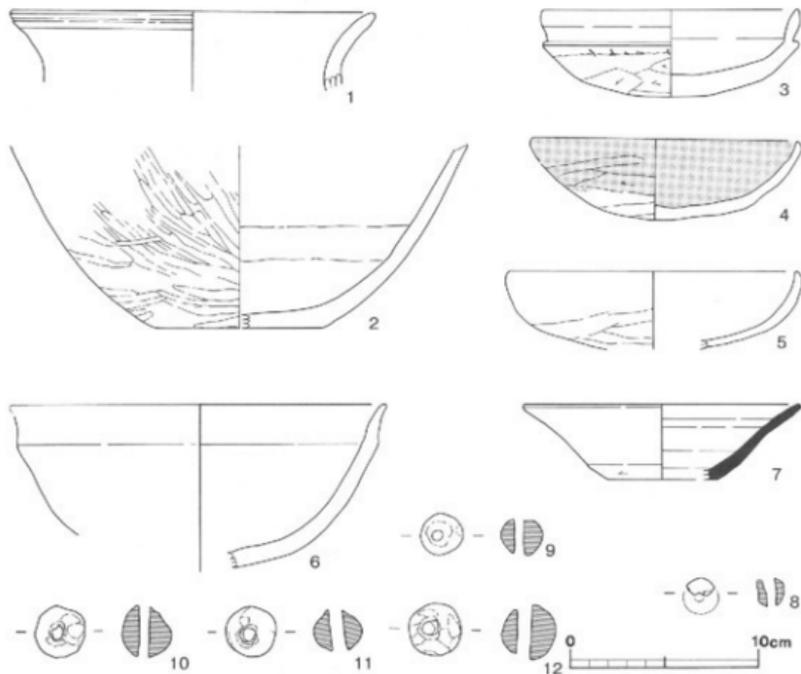


- 1 75YR3/3暗褐色 ローム大ブロック少量、黒色土中量
- 2 75YR4/4褐色 焼土粒子・炭化物微量、ローム粒子少量
- 3 75YR4/3褐色 焼土中ブロック・炭化物微量、ローム大ブロック・粒子少量、黒色土中量
- 4 75YR3/4暗褐色
- 5 75YR4/4褐色 焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック・黒色土大ブロック微量
- 6 75YR1/4暗色 ローム粒子少量
- 7 75YR4/6褐色 ローム粒子絶対的多量

第92図 第17号住居跡・遺物出土状況

壁は丸みを帯びて抉れ、立ち上がる。焼土部は長軸長75cmの楕円形を呈し僅かに窪む。覆土中には明瞭な焼土の堆積はなく、底面を覆う土（第5層）も焼土を全く含まない褐色土である。第1・2層は構築土を主体とする。

覆土 重機による攪乱を一部受けるが、基本的には第1・2・3層で埋没が完了したものであろう。



第93図 第17号住居跡出土遺物(1)

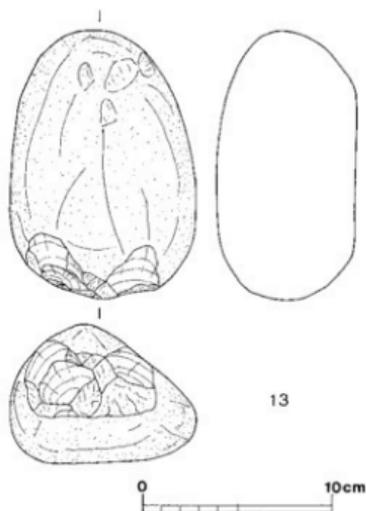
第17号住居跡

図版No.	器種 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率 遺	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	A:〔19.4〕 C:〔3.8〕	床直 5% 普通	石英・長石 細粒○	明黄褐色	口縁端部は面取りにより尖る。内外儀にナデ。	No.277
2	甕 土師器	B:〔9.0〕 C:〔9.7〕	覆土 40% 普通	石英・長石 雲母鱗片○	褐色	胴部外面縦位のミガキ。底面もミガキ。内面は 摩滅が進行し、調整痕は明瞭ではない。	No.278
3	坏 土師器	A:〔13.6〕 C:4.7	床直・覆 65% 普通	石英・長石 小粒△	明黄褐色	厚手粗製。口縁部は外反して丸く締められる。 内外共縁なナデ。体部はヘラナデ後ナデ。縁は 太く明瞭だが丸みを帯びている。	No.272
4	坏 土師器	A:〔13.6〕 C:4.3	覆 65% 普通	石英・長石 極細粒△	黒	口縁は極短く内彎し、内外儀ナデ、体部は割り 後上部をミガキ状のナデ。内面丁寧なナデ。内・ 外面上部黒製。	No.273
5	坏 土師器	A:〔17.2〕 C:〔2.7〕	覆土 20% 不良	極細砂粒△	褐色	口縁は極短く内彎し、内外儀にナデ、体部ヘラ ナデ。但し、摩滅が進行し調整痕が明瞭ではな い。	No.274
6	坏 土師器	A:19.9 C:〔8.6〕	覆土 65% 不良	石英・長石 雲母鱗片○	赤褐色	焼成不良で内外ともに摩滅。口縁と体部の境に 不明瞭な段を有する。	No.275
7	坏 須恵器	A:〔14.6〕 B:〔6.0〕 C:〔4.0〕	覆土上位 30% 普通	石英・長石 小粒○、雲 母△	灰黄褐色 褐色	底部切り離し後、一方向ナデ。底部周辺手持ち ヘラ割り。体部は薄手で大きく外反し、ナデ。	No.271 混入

床を覆う第3層はロームブロックや粒子を少量含み黒色土ブロックも少量含む等、投入土の可能性はある。

遺物 ほとんど覆土中の廃棄遺物で後世の遺物である(7)が混入している。

所見 竈には何ら良好な遺棄遺物を残さない。時期決定のための遺物に欠けるが竈の存在と覆土中の遺物を総合的に判断して当期の住居と考える。



第94図 第17号住居跡出土遺物(2)

単位: cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
8	土製品	土瓦	1.8	2.3	8.7	覆土	1/3	No.591
9	土製品	土玉	2	(1.4)	(1.7)	覆土	完形	No.590
10	土製品	土瓦	2.8	2.6	18.5	覆土中位	完形	No.279
11	土製品	土玉	2.2	2.6	11.0	覆土下位	完形	No.280
12	土製品	土玉	2.9	2.8	19.7	竈内	完形	No.589

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
13	石器	槌打石	14.2	9.8	7.3	1335.0	安山岩	右14 端部に敲打痕あり

第20号住居跡【SI-20】(第95~97図 P L25・47)

位置 調査区南寄り。標高25m地点。R・S-23・24区。

規模・形態 主軸長5.0m、幅5.2mで面積26㎡のほぼ正方形を呈する。

主軸方位 N-50°-W

壁 ほぼ直に40~65cm立ち上がり、良好な残存状況である。

床 平坦で明瞭に検出された。特に硬軟の差はみられない。壁溝は入り口部と竈壁を除いて巡らされ、幅15~20cm、深さ3~6cmである。

ピット P1~P4は主柱穴である。上端の平面形は径40~45cmの円形を呈すが、下部で段を持ち15~20cm程に細くなる。深さは38~50cmを測る。掘り方内には下部に柱根が検出され上部には住居の覆土が入り込んでいる。

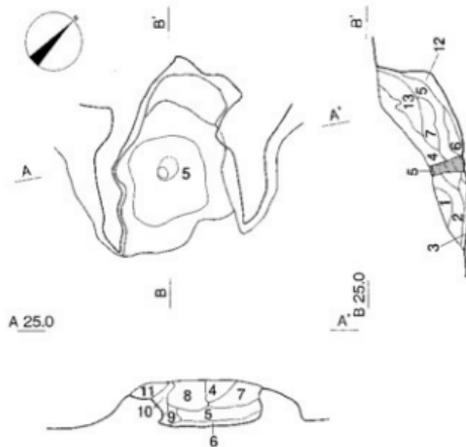
P5は入り口ピットで壁から約70cm離れ、竈に正対する位置に掘削されている。径30cmの円形で、深さ11cmである。P6は貯蔵穴である。竈壁の右コーナーに設けられ、当初は60×40cmほどの横長長方形の掘り方を意識したものと思われる。底面は平坦で壁は30cmの高さに直に立ち上がる。覆土中には住居最下層の土や竈内で見られる焼土粒が含まれていた。

竈 西壁はほぼ中央を壁外へ25cm掘り出し、黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長約100cm、残存部袖幅60cm、燃焼部は不整形円形に2cmほど窪むが被熱による底面の赤変・硬化などはみられない。埋土は構築土を若干含む粘土で占められ、使用時の明瞭な焼上の堆積は見られない。土器も小片を出土するのみだが燃焼部中央には

完形の上製支脚(6)が正立して遺棄されていた。直下の土層は2~3cmの厚さの被熱痕跡がない土である。同様の例が第11号・14号住居跡で見られる。

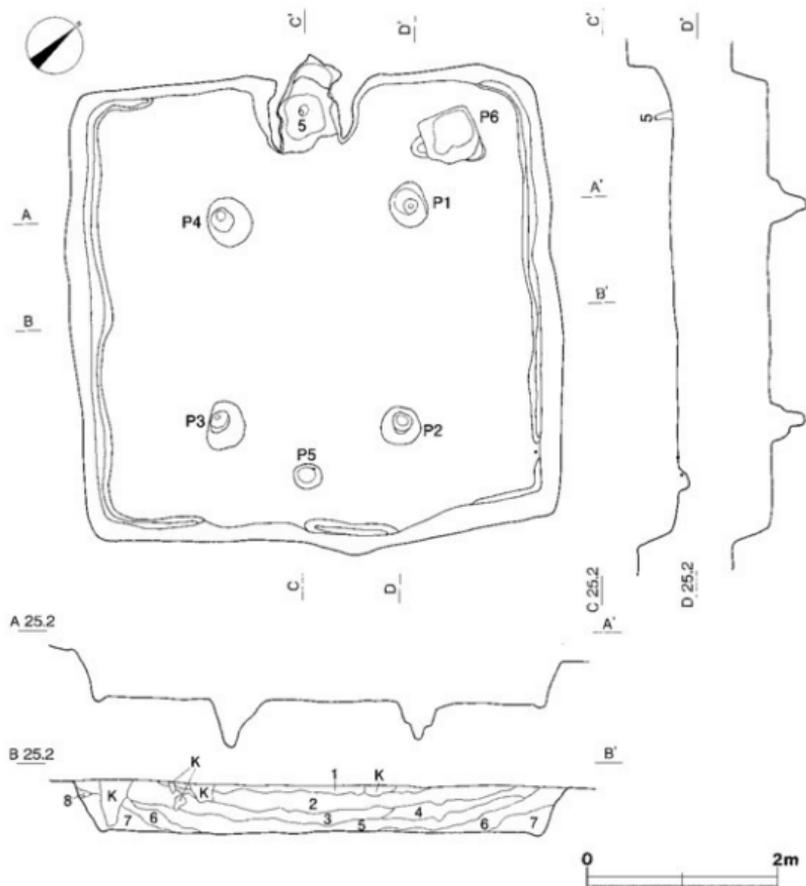
覆土 床面を覆う第5層は非常に粘性の強い暗褐色土で、その上部はレンズ状堆積を示す。

遺物 明瞭に当跡に伴うのは上記支脚



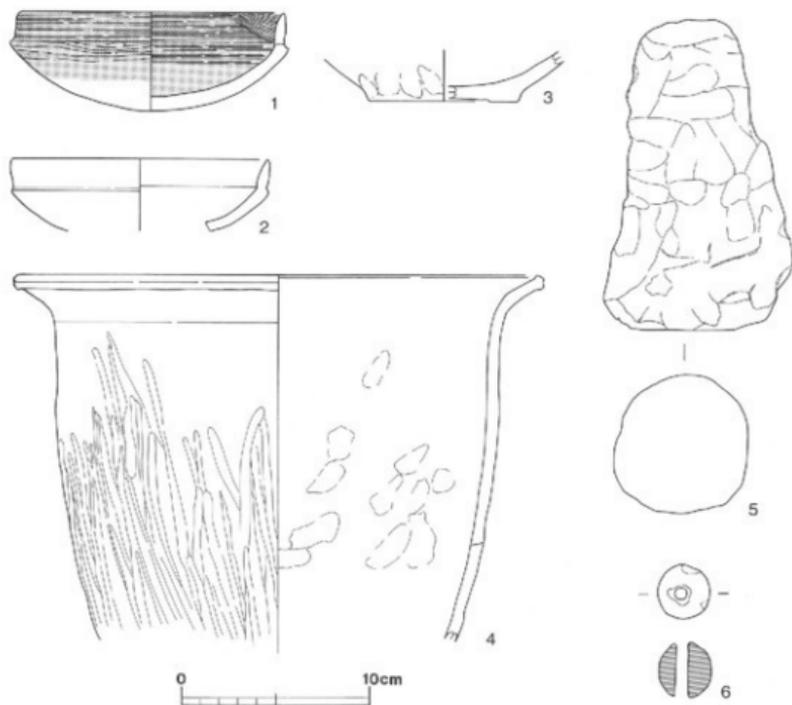
- | | | |
|----|-----|----------------------------------|
| 1 | 焼色 | 焼上小ブロック・粒子少量 |
| 2 | 褐色 | 焼土中・粒子少量、小ブロック中量 |
| 3 | 褐色 | 焼土大ブロック・炭化粒・粒少量 |
| 4 | 褐色 | 焼土粒子微量、炭化粒子少量、カマド構築土少量 |
| 5 | 褐色 | ローム小ブロック・粒子微量、カマド構築土少量 |
| 6 | 褐色 | カマド構築土中量 |
| 7 | 褐色 | ローム粒子微量 |
| 8 | 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 9 | 褐色 | 焼土大ブロック中量、粒子少量、ローム粒子微量、カマド構築土少量 |
| 10 | 褐色 | 焼土中・小ブロック中量、粒子少量、ローム粒中量、カマド構築土少量 |
| 11 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 12 | 褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒少量、ローム粒子少量 |
| 13 | 褐色 | 焼土粒了・ローム粒子少量、炭化粒子微量、カマド構築土少量 |

第95図 第20号住居跡竈



- 1 75YR2/2暗褐色 黒色十ハード大ブロック多量
- 2 75YR3/3暗褐色 ローム粒子少量、しまり弱
- 3 10YR2/2暗褐色 しまり弱
- 4 75YR3/4暗褐色 ローム粒子少量、褐色粘土ブロック中量、粘性強
- 5 75YR3/4暗褐色 ローム大ブロック・粒子少量、褐色粘土ブロック中量、粘性極めて強
- 6 75YR4/3褐色 ローム大ブロック・粒子少量、褐色粘土ブロック中量、粘性強
- 7 75YR4/3褐色 炭化粒子微量、ローム粒子少量、褐色粘土ブロック中量、粘性強
- 8 10YR4/4褐色 粘性強、しまり弱

第96図 第20号住居跡



第97図 第20号住居跡出土遺物

のみであるが、P5の覆土下部から土器小片が出土しており、これは梯子を抜いた後入り込んだものであろう。住居廃絶後の早い時期に入ったとすると当跡の時期をある程度物語るものと捉えられる。
 所見 出土遺物より6世紀後半の住居跡と考える。

第20号住居跡

図版No.	器形 種類	口径 (cm)	出土位置 残存率 状態	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	坏 土師器	A : (142) C : 5.2	覆土中位 90% 良好	石英・長石 △	黒	口縁部は直立し、内外ともにナデ。体部は上部に横位のミガキ。底の縁は明確で広く突り気味。内面丁寧なナデ。内外共に黒色地埋。	No.299
2	坏 土師器	B : (13.6) C : (3.8)	覆土上位 30% 不良	砂粒△	明黄褐色	口縁はやや外傾気味で、肩部は突る。内外共に準減し、調整痕は明らかでない。後は極短く短い。	No.298
3	甕 土師器	B : (8.0) C : (2.2)	覆土 40% 普通	石英・長石 極細粒○	にぶい橙 褐色	底部外周に粘土帯が廻り、僅かに上げ底となっている。内外面共ナデ。器面荒れる。	No.301 復入か
4	瓶 土師器	A : (27.2) C : (20.4)	覆土上位 30% 良好	石英・長石 小粒○	橙	胴部は極かに内彎しつつ横き、口縁で外反。肩部は段を持つ。ほぼ胴部外面全体に縦位のミガキ。内面閉江製ナデ。	No.302

単位：cm・g

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
5	土製品	支脚	16.5	9.9	1000.0	覆土直	完形	No.303
6	土製品	土玉	3.0	2.7	22.4	覆土	完形	No.592

第4節 平安時代

当遺跡の平安時代では、火葬墓3基・土墳墓1基・土坑1基を検出している。同時代の遺構は墓にかかわるものがほとんどで、当該期は「墓域」として認識されていたものと考えられる。立地は、およそ南から北東方向に向かって舌状に延びる小丘陵上の平坦面に構築される。3基の火葬墓は、調査区中央から北端にかけて約14～25mの間隔をおいてほぼ一列に並んでいる。土墳墓についても調査区の北端から確認された。このほかにやはり調査区北端から土坑が1基見つかり須恵器片が出土している。

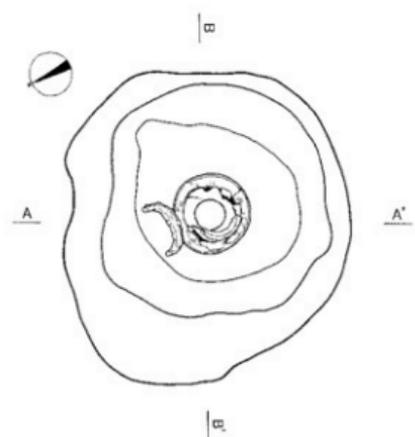
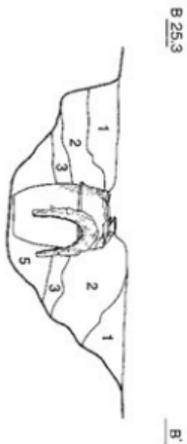
1. 火葬墓

第1号火葬墓〔CT-1〕(第98～100図 P L26・47・48)

遺構 調査区のほぼ中央に位置し、確認面では炭化物混じりの黒色土が径約1mの範囲に広がっている状況であった。土坑は、長軸1.15m、短軸0.98mの不整形円で、およそ2段の掘り込みを意識して作られている。確認面からの深さは、1段目までが20～30cm、土坑の底までが42cmである。骨蔵器は須恵器の甕と鉢を用いて、土坑の中央に正位に埋納されていた。また、骨蔵器に立てかけるように鉄製鋤先が先端を上に向けて添えられていた。覆土の状況は、土坑の底から骨蔵器の中位くらいまでを炭化材で充填し、その上には炭化物を含む黒色土と暗褐色土で満たす状況であった。鉄製鋤先は、骨蔵器を炭化材の層中に据えた際に一緒に差し込まれたものである。

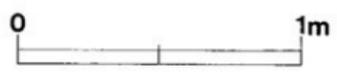
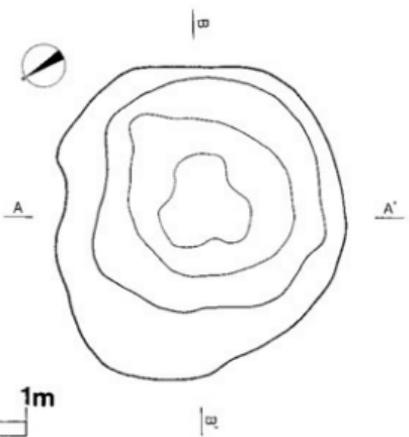
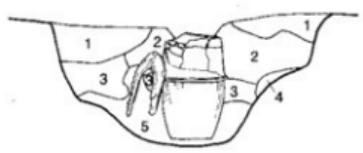
遺物 骨蔵器は須恵器の甕(2)と鉢(1)で構成される。副葬品として鉄製鋤先が完形で検出されている。甕及び鉢は、黒褐色でやや軟質な焼き締まりの、くすべ焼成に近い須恵器である。両者は、表面に縦方向の平行線の叩きが深く施されている点でも似ており、同一の窯で焼成されたものと思われる。骨蔵器への転用にあたって、色調や作りの似た組み合わせを選択したのであろう。鉄製鋤先(3)は、長さ24.6cm、幅21.45cmの比較的大型のU字鋤先である。袋部の内側に木質の付着が認められないことから、当鋤先は木製の身部から外されて副葬されたものと考え第1号火葬墓

図版No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	動土	色調		器形・技法の特徴	備考
						外面	内面		
1	鉢 須恵器	A: 27.4 B: 13.7 C: 18.3	完形	普通	径1mmの長石・石英粒、炭屑片を中量	黒褐色 灰青褐色		体部はやや丸みを帯びて立上がり、ハの字に近い口縁部と断面三角形の口唇部がつく。体部外面に縦方向の平行線の叩き、下位に無彫りを施す。内面は寛と齒による横方向の各でと若干の指摺圧痕がみられる。	No.635 色調や焼成は組み合う甕と近似している
2	甕 須恵器	A: 21.0 B: 14.6 C: 32.3	完形	普通	径1mmの長石・石英粒を中量、炭屑片を少量	黒褐色 黒褐色 部分的に赤褐色		最大径は体部中位や上上にあり、唇部の垂りは弱い。口縁部はハの字に開き、外反きみである。口縁部部に浅い沈線を入れる程度で独立した口唇部は作り出していない。体部外面に縦方向の平行線の叩き、下位に無彫りを施す。内面は横方向の寛なでと若干の細き足跡が見られる。	No.634 くすべ焼成に近い色調を呈する

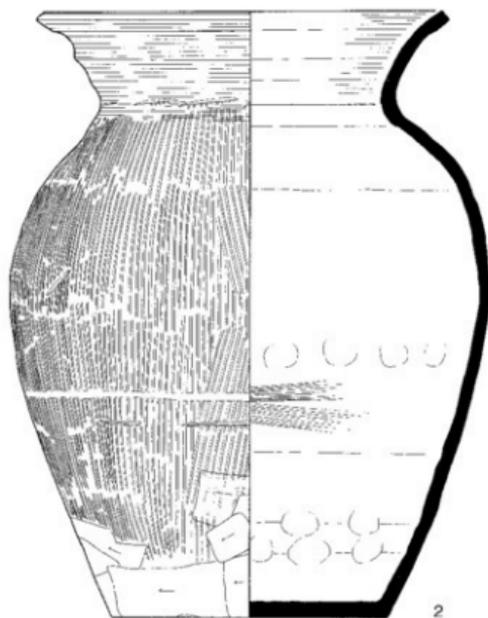
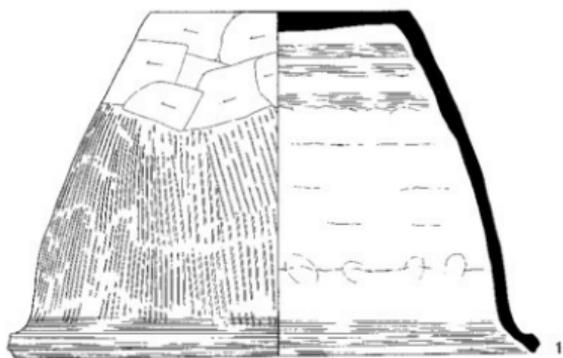


- 1 10YR4/6褐色 壤土粒・炭化物・ローム粒少、炭化粒中
- 2 10YR2/2黒褐色 壤土粒・炭化粒中、炭化物少、ローム粒微
- 3 10YR2/1黒色 炭化物中、炭化粒多
- 4 10YR4/6褐色 ローム中少
- 5 10YR1.7/1黒色 炭化材中、炭化物・炭化粒多

A 25.3

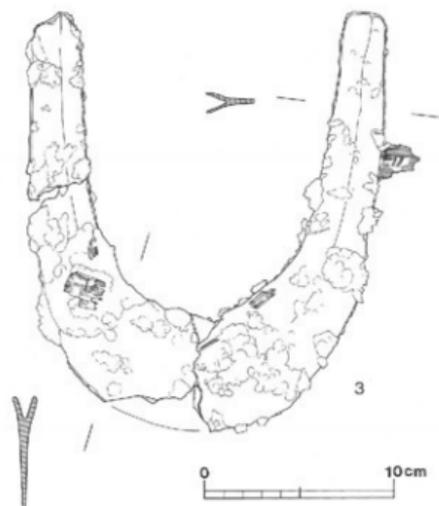


第98図 第1号火葬墓



0 10cm

第99図 第1号火葬基出土遺物(1)



第100図 第1号火葬墓出土遺物(2)

第1号火葬墓

単位: cm

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	出土位置	材質	備考
3	金属製品	鋤先	24.6	21.45	0.7	骨蔵器脇	鉄	No.60 保存処理済み

第2号火葬墓【CT-2】(第101・102図 P L26・27・48)

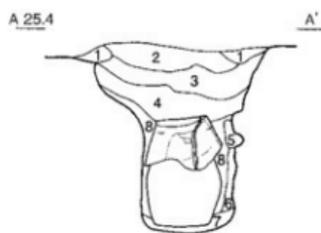
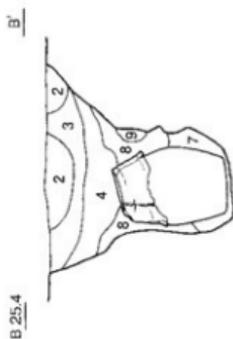
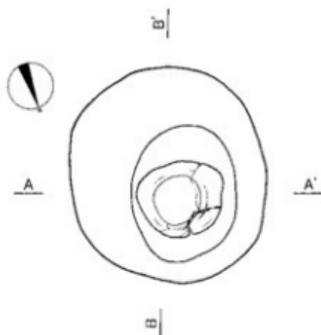
遺構 1号火葬墓からは北へ約14m離れて立地する。土坑は、確認面での平面形が長軸75cm、短軸65cmの楕円形である。断面形は上方がすり鉢状に開く漏斗形を呈しており、底までの深さは65cmである。骨蔵器は土坑の中央、柱穴状に狭く掘り込まれた部分に正位に埋納されていた。骨蔵器の本体は須恵器の甕(2)であり、これに鉢ないし甕の口縁部を打ち欠いたもの(1)を被せて封をしていた。覆土は骨蔵器を挟んで上下に炭化物を含む黒色、暗褐色土を充填した状態である。上位の土層には細い炭化材も含まれている。

遺物 骨蔵器は須恵器の甕(2)と鉢ないし甕の下半部(1)の二つによって構成されている。甕は大きく開口縁部をもち、比較的肩に張りがある。体部に縦方向の平行線の叩き目を施し、やや軟質の焼成である。この甕に伴う鉢ないし甕は、本体の口縁部に覆い被せるのに合わせて上半部を打ち欠いている。この割れ口には摩耗が見られないことから、甕に被せるに当たって意図的に打ち欠いたものと思われる。体部に斜め方向の平行線叩き目を有する一般的なもので、下位には焼削り調整が施されず、本体の甕に比べやや軟質な焼成となっている。

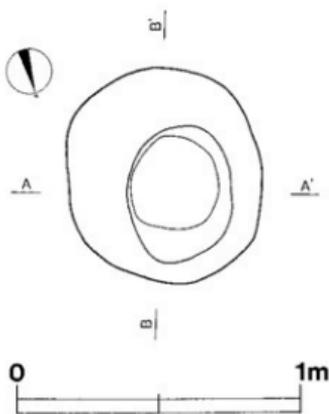
られる。表面には炭化物が錆と共に付着していた。

所見 火葬人骨の残存状況は良好で、3~5cm程の大きめの骨片を含み、計1.060gが検出された。成人男性のものとして鑑定されている(詳細は総集編で報告する予定である)。

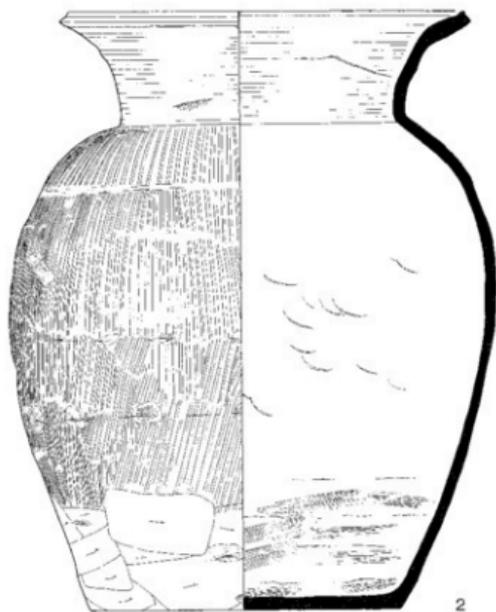
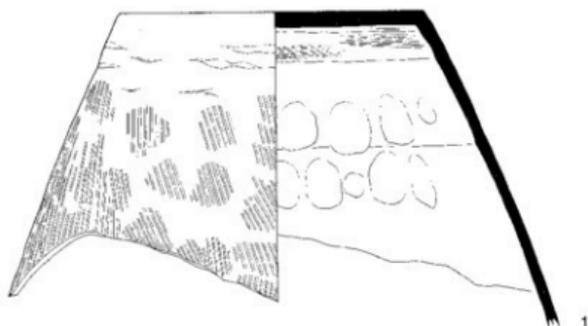
本遺構の帰属年代については出土遺物から9世紀中葉のものと考えられる。



- | | | |
|---|--------------|-------------|
| 1 | 7.5YR4/4褐色 | |
| 2 | 10YR3/3暗褐色 | 炭化物・炭化殻極めて多 |
| 3 | 10YR2/1黒色 | 炭化物多 |
| 4 | 10YR2/1灰色 | 炭化物少 |
| 5 | 10YR2/1黒色 | 炭化物多 |
| 6 | 10YR3/2黒褐色 | 炭化物少、ローム较多 |
| 7 | 10YR3/2暗褐色 | 炭化物中、ローム量中 |
| 8 | 2.5YR4/2暗灰黄色 | ローム中少、ローム小多 |
| 9 | 10YR4/6暗色 | ローム質土 |



第101図 第2号火葬墓



第102图 第2号火葬墓出土遺物

第2号火葬墓

図版No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	鉢か甕 須恵器	B: 16.2 C: (16.7)	完形	普通	径1-3mm の長石・石 英粒および 雲母片を中 量	灰色 灰色	鉢あるいは甕の体部下位の破片。体部外面に縦 方向の平行線の叩きを施す。下位は輪轆痕を溶 り消すように粗い面で行なっているが、窪ん だ部分が多く残されている。内面は横方向の指 などで押さえ跡が見られる。	No.637 割れ目に磨耗 は見られない
2	甕 須恵器	A: 20.8 B: 16.3 C: 31.8	完形	普通	径1mmの長 石・石英粒 を少量、雲 母片を多量	褐色色 褐色色 部分的に灰 白色	最大径は体部中位やや上にあり、肩が張りきみ である。外反しながらハの字に開く口縁部と断 面二角形の口唇部がつく。体部外面は縦方向の 平行線の叩き、下位に篋削りを施す。内面は横 方向の指と指による面を施し、押さえ跡が多 数みられる。また、各所に輪轆痕を消すための 指痕凹痕がみられる。	No.636 くすべ焼成に 近い色調を呈 し、焼き締ま りはやや軟質 である

所見 火葬人骨は密閉状態にあったため、比較的良好に残存している。3から5cm大の破片を多く含み計1,005gが検出された。成人女性のもので鑑定されている(詳細は総集編で報告する予定である)。

本遺構の帰属年代については出土遺物から9世紀中葉のものと考えられる。

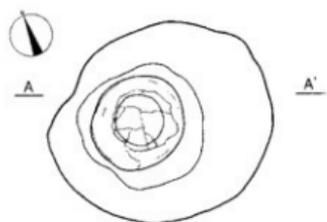
第3号火葬墓〔CT-3〕(第103・104図 P L27・48)

遺構 2号火葬墓の北約25mに位置する。確認面では炭化物を含む暗褐色土が径1mの範囲で広がる状態で発見された。土坑は径80cmの不整形で、深さが58cm、断面形は上部が開く漏斗状を呈している。骨蔵器は土坑のやや西寄りの、比較的狭く掘り込まれた部分に正位の状態で見納されていた。覆上は暗褐色土を主体とし、特に骨蔵器の上部を覆う土層に多く炭化物が含まれていた。

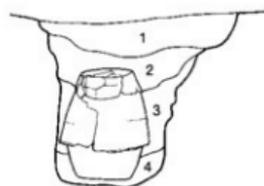
遺物 骨蔵器は須恵器の甕(2)と鉢(1)によって構成されている。甕は大きく開いた口縁部と最大径を体部中位にもつ安定感のある器形である。体部に縦方向の平行線の叩き目、下位に篋削り調整が見られ、やや軟質のくすんだ焼成である。鉢は大きな底部から比較的強く体部が立ち上がる胴長の器形である。甕の最大形のある部分までを覆うようにかぶせられていた。なお、鉢

第3号火葬墓

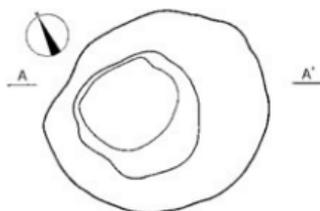
図版No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	鉢 須恵器	A: (30.1) ほぼ完形 B: 18.6 口縁部の C: 26.0 欠欠損	不良	普通	径1mmの長 石・石英粒 を少量、雲 母片を多量	黄灰色 灰色 一部黒褐色 と灰白色	口の開きが深く深い体部を持つ鉢。体部は若干 歪みながらも強い角度で直線的に立上がり、直 角に近い角度で外反する口縁部がつく。体部外 面は縦方向の平行線の叩きを施すが、二次的な 面を施したのか痕跡程度にしかみられない。 下位には篋削りを行い、内面は横・縦方向の指 などで強く残される。	No.639 軟質な焼成
2	甕 須恵器	A: 20.8 B: 19.6 C: 31.5	完形	普通	径1mmの長 石・石英粒 を少量、雲 母片を少量	褐色色 褐色色	最大径は体部中位にあり、肩が落ちる。口縁部 はハの字に張りきみに開く。口唇部は、口縁部 部内面に厚く粘土を貼り付けて隆起させた程度 の小さなものである。体部外面に縦方向の平行 線の叩き、下位に篋削り、内面は横方向の指な で施す。体部中位から口縁部内面にかけて器 面が弱く剥離している。	No.638 やや軟質な焼 成、器面の剥 離は骨蔵器へ の転用以前の ものである



A25.4



- 1 75Y2/4褐色 炭化粒少
- 2 10YR3/1暗褐色 炭化粒・ローム大少、ローム小中
- 3 75Y2/3暗褐色
- 4 10YR3/3暗褐色



第103図 第3号火葬墓

2. 土壌墓

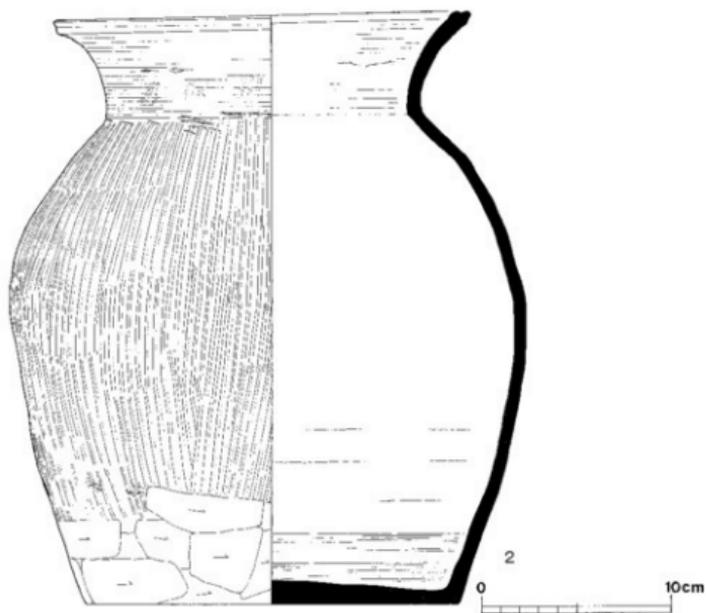
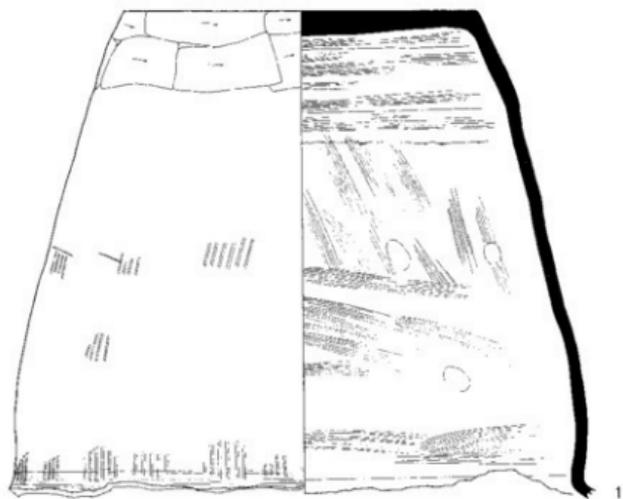
第1号土壌墓〔土壌1（旧SK-2）〕（第105図 P L28・47）

遺構 調査区の北西隅、第3号火葬墓からは西へ35mの地点に位置する。当遺構は南北に長い不整形円形で、長軸66cm、短軸42cm、深さは24cmを測る。そのほは中央部の底面近くから、土

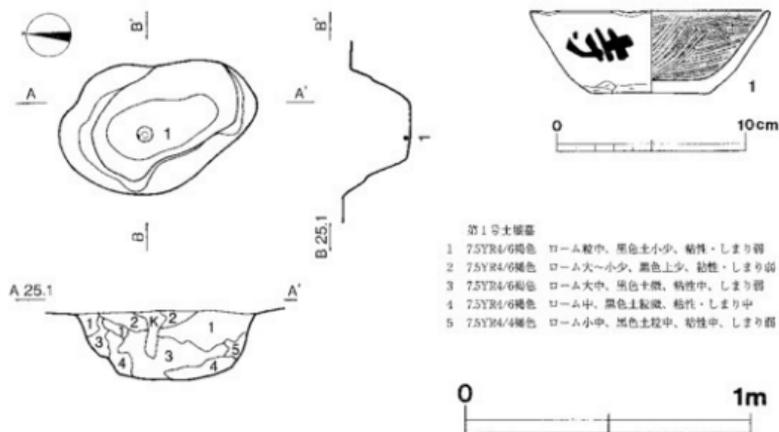
の口縁部は全周に亘って打ち欠かれていた。割れ口に若干の摩耗が見られることから、転用以前に行われたものと思われる。

所見 火葬人骨の残存状況は、密閉状態にあったために良好である。3～6cm大の破片を含み径1.270gが検出された。成人（壮年期）男性のものと鑑定されている（詳細は総集編で報告する予定である）。

本遺構の帰属年代については出土遺物から9世紀中葉のものと考えられる。



第104图 第3号火葬墓出土遺物



第105図 第1号土墳墓・出土遺物

師器の坏が口縁部を底に向けた状態で検出された。覆土は褐色土を基調としており、短期間に埋め戻された状態であった。この覆土の状態と伏せられた坏の検出などから、当遺構を土墳墓と判断することにした。なお、土壌内の土壌を数箇所サンプリングし、リン酸分析を行っている（詳細は総集編で報告する予定である）。当遺構を土墳墓と断定できる程のリン酸含有率を得ることは出来なかった。ただし、坏の内側からサンプリングした土壌には、土壌内の他の地点よりも比較的多くの含有率が認められている。したがって、実際に遺体を埋葬したのであれば、坏はその上に置かれたと考えることも可能である。当調査区における平安時代の遺構は火葬墓以外にはほとんどみられないことも合わせて、一応当遺構を土墳墓と認識しておくことにする。

遺物 完形の上師器坏（1）が1点である。比較的器壁が厚く、内面に磨きと黒色処理を施している。口縁部にわずかな欠損が認められ、日常に使用されたものと思われる。体部外面には横位に「寺」と墨書されている。

所見 本遺構の帰属年代は出土遺物から9世紀後葉のものと考えられる。

第1号土墳墓

図版No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調		器形・技法の特徴	備考
						外側	内側		
1	坏 土師器	A: 12.5 B: 6.4 C: 4.4	完形	普通	微細な長石粒を多量、雲母片を微量	にいい棕色 黒色		体部にはほぼ直線的に開き、口縁部付近でも外反せずによまっすぐである。体部外面に回転ナデ、下位に手持ちヘラ削りを行い、底部は切り離し後縦線方向からのヘラ削りを実施。内面は横・縦方向の磨きと黒色処理を施す。口縁部付近に数箇所小さな欠損があり、補れは若干磨耗している。	No.383 体部外面に横位に墨書「寺」。

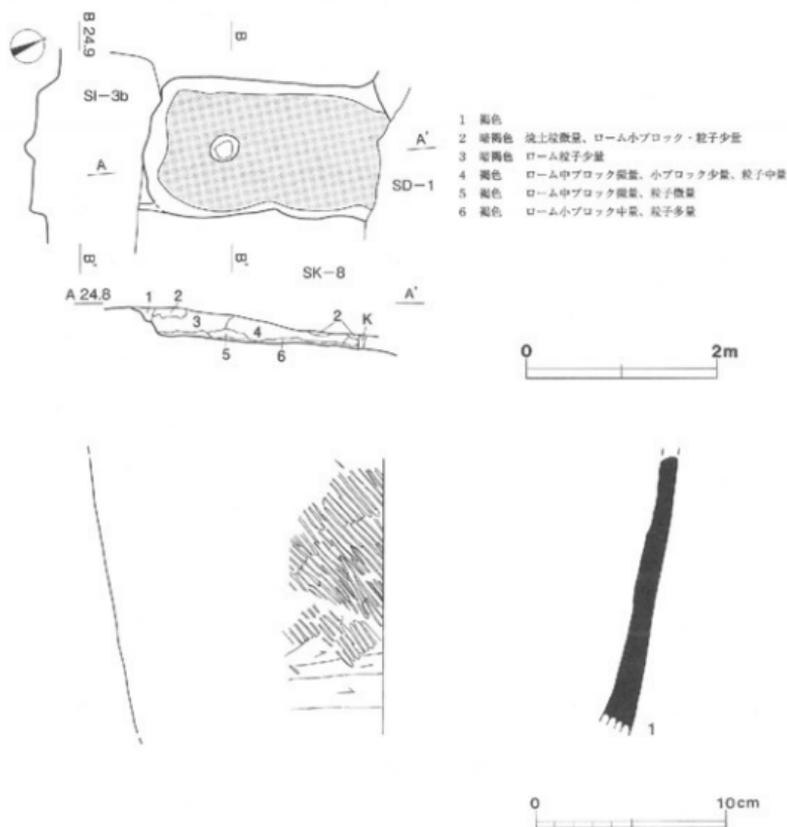
3. 土坑

同期の土坑は1基のみであった。調査エリア内でも上記の火葬墓や土壙墓と近い位置で確認されており、何かしらの関連性が窺われる。

第8号土坑〔SK-8〕(第106図 P.L.28)

位置 U-1・2区より発見された。

形状・規模 平面形は長方形で(245)×147cm、深さ30cmを測る。南側は第3b号住居跡と重複し、北側は第1号溝と重複している。これらの遺構の重複関係は前者よりは新しく、後者より古い。坑底は北側に向かって緩く傾斜しているが、平坦で良く踏み固められている。壁はわずか



第106図 第8号土坑・出土遺物

第8号土坑

図版No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調		器形・技法の特徴	備考
						外面	内面		
1	鉢 須恵器	C: 14.5	1/8	不真	微細な長石 粒を少量、 雲母片多量	明オリープ 灰		体部でも底部近くの破片である。体部はやや開きながら直線的に開く。体部外面は斜め方向の平行線の叩きを施す。口位には異形磨りを行う。内面は剥離し荒れている。	No.388 6片接合

に外傾し、浅い皿状となる。坑底の南側中央には径30cm・深さ15cmのビットが1ヶ所確認された。覆土 6層に分層され、北側は褐色土で南側は暗褐色土である。遺物は覆土上層より散在して破片が出土している。

出土遺物 1は須恵器鉢の体部片で全体の約1/8程度の破片であった。底部近くから立ち上がる様子が窺え、外面には斜位の平行線の叩き目が施される。器面や破面はやや磨れた感がある。所見 当遺構は浅い皿状の底面を持つ土坑である。底面はおおよそ平坦で硬化していることが特徴である。覆土中から須恵器の鉢の体部破片が出土していることから、平安時代のもと考えられる。本遺構の周辺には第1号土壌墓や第3号火葬墓が存在するが、本遺構についても同様な性格を持つものかは不明である。

帰属年代については出土遺物から9世紀代でも中葉以前のもと考えられる。

第5節 近世以降

調査区南側の平坦地を中心に近世の掘立柱建物跡1棟や竪穴遺構2基などが企画性を持った配置で確認され、これらは有機的な関係をもって存在していた可能性が考えられる。このほか、近現代の炭焼き窯2基や芋穴なども確認されている。

1. 掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡〔SB-3〕(第107図 P L29)

位置 調査区南半J~L-24・25区に位置する。東側が第22号住居跡と重複している。

主軸 N-71°-W

規模・形態 東西方向に桁行3間(約6m)×梁行1間(約4m)の規模を有し、床面積はおおよそ24㎡を測る。桁間の柱間距離はほぼ一定で2m内外であった。主柱穴は8本で平面形は円形を基調とし、規模は径40~65cm、深さ42~62cmで壁はおおむね直線的立ち上がっている。西側には1本補助柱穴が設けられ、径28cm、深さ22cmを測る。補助柱穴に隣接し径55cm、深さ17cmの炉又は火床が検出されている。覆土全てに焼土の混入が見られ、特に上層は多量であった。

さらに、建物跡西側には60cmほど離れて梁行に平行した柱列状に並ぶピットが5本検出された。平面形は円形を基調とし、規模は計55~60cm、深さ60~70cmであった。このピットの覆土全てに柱痕が見られ直線的に配置していることから、欄列であったと思われる。北側から2本目は底面が硬化していた。全長約8m(4間)、主軸はN-21°-Eで建物跡の主軸と直交しており、また柱穴間は約2mで建物跡の桁行柱間距離との近似が認められる。建物跡との位置関係、ピットの形状、柱間距離の近似等から建物跡に付随した欄列と想定される。

遺物 出土していない。

時期 覆土の状況やほかの遺構との関係から近世と考えられる。

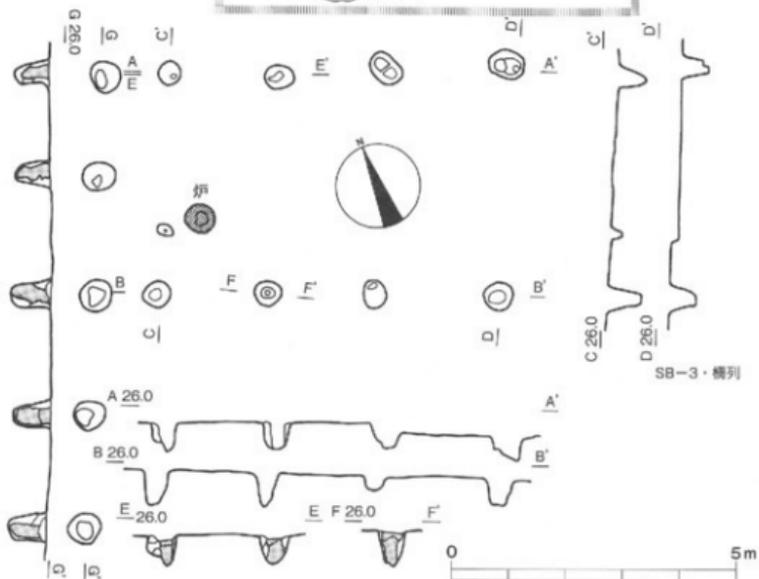
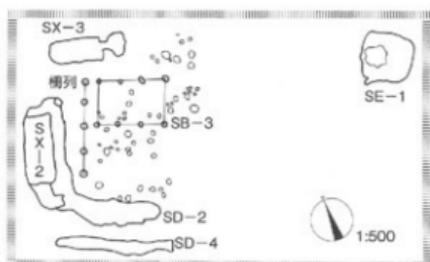
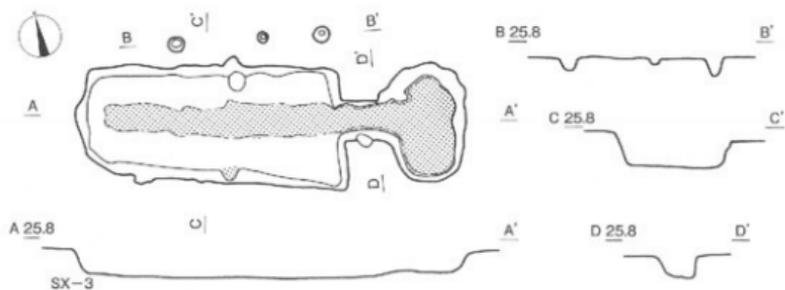
2. 竪穴遺構

調査区南半の第3号掘立柱建物跡と欄列を囲むように2基発見された。いずれも半地下式の構造で、平面形は大型の長方形である。また底面中央部に硬化面が見られ通路として使用されていたことを物語る。何らかの貯蔵を目的とした室のような施設と考えられる。

第2号竪穴遺構〔SX-2(旧SX-2a)〕(第108図 P L29)

位置 H・I-24~26区に位置する。南側の第2号溝跡とは一連のものと考えられる。

主軸 N-15°-E



第107图 第3号掘立柱建物跡・第3号竖穴遺構・櫛列

規模・形状 平面形は不整長方形で東側と南側は一部階段状を呈していた。長方形部から南側階段部へは一時細くなり連なっている。規模は全長8.1m、幅3.5m、深さ1.2mを測り、不整長方形部の坑底中央部が帯状に硬化していた。北端隅にピットを有し深さは確認面より95cmであった。大型の長方形を呈し、細くなる連結部を介して楕円部へと連なる点は第3号竪穴遺構と類似している。この階段状となる南側の施設が入口と想定できる。

覆土 中位はほとんどローム質土で下層は若干黒色土混じりであった。

遺物 陶器碗1点、土師質土器小皿2点、土錘4点、砥石2点が覆土から出土している。

時期 遺構覆土や出土遺物から近世17世紀後半から18世紀前半頃のものと考えられる。

第2号竪穴遺構

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	碗・陶器	(11.0)	—	—	(5.5)	No.435 30% 肥前系岩津?、胎土に細かな粒子。
2	小皿・土師質土器	8.0	4.6	—	1.8	No.436 90% 底面未切り張。
3	小皿・土師質土器	(8.7)	5.0	—	2.4	No.437 90% 底面未切り張。
4	土錘	長さ2.6、厚さ6.5、重量0.9g				No.438
5	土錘	長さ2.6、厚さ0.7、重量0.9g				No.439
6	土錘	長さ2.4、厚さ0.75、重量0.8g				No.440 欠損
7	土錘	長さ2.7、厚さ0.7、重量1.1g				No.441

第3号竪穴遺構 [SX-3] (第107図 P L29)

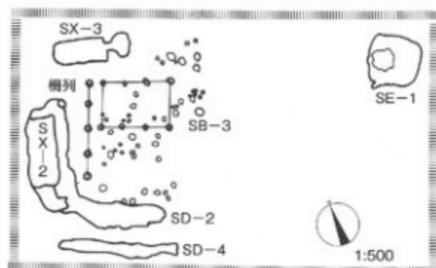
位置 調査区南半 J・K-23区に位置する。

主軸 N-78°-W

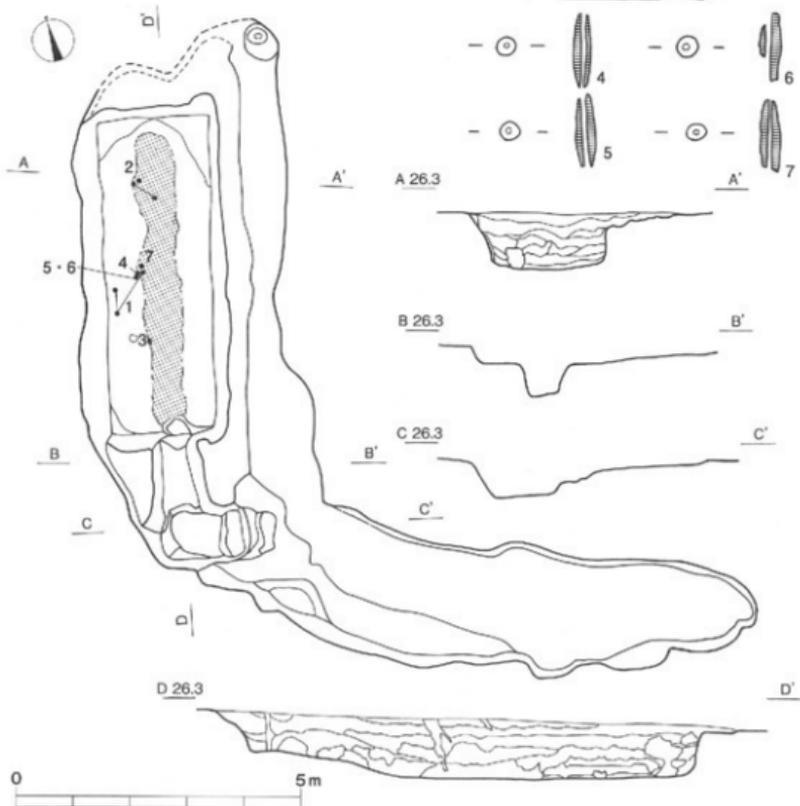
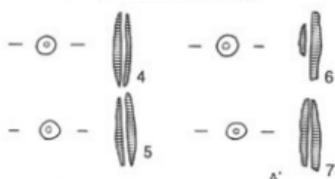
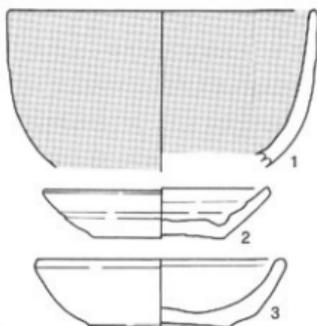
規模・形状 平面形は長方形と楕円形が幅を狭めて連続する形状である。規模は全長6.9m、幅1.9m、深さ0.5mで楕円形部と長方形部の中央底面が硬化していた。北側に3本の少ピットが並んでおり掘り込み部との関係が窺える。

遺物 出土していない。

時期 覆土の状況やほかの遺構との関係から近世と考えられる。



(1~7: 1/2)



第108図 第2号竖穴遺構・出土遺物

3. 溝跡

調査区北端より1条、南半より3条発見された。第2・4号溝跡はその配置から第3号掘立柱建物跡に関連したものと考えられる。

第1号溝跡【SD-1】(第109図)
位置 U・V-1区、舌状台地の先端部である。南側は第8号土坑を一部壊していた。

主軸 N-53°-Wで等高線にはほぼ平行していた。

規模・形状 規模は長さ5.1m、幅58~98cm、深さ27cmである。幅は細長いが両端部は調査区外に伸びている。壁は南側が緩く北側はやや直立して立ち上がっている。底面は12~65cmと幅があり一定ではない。用途は不明である。遺物 出土していない。

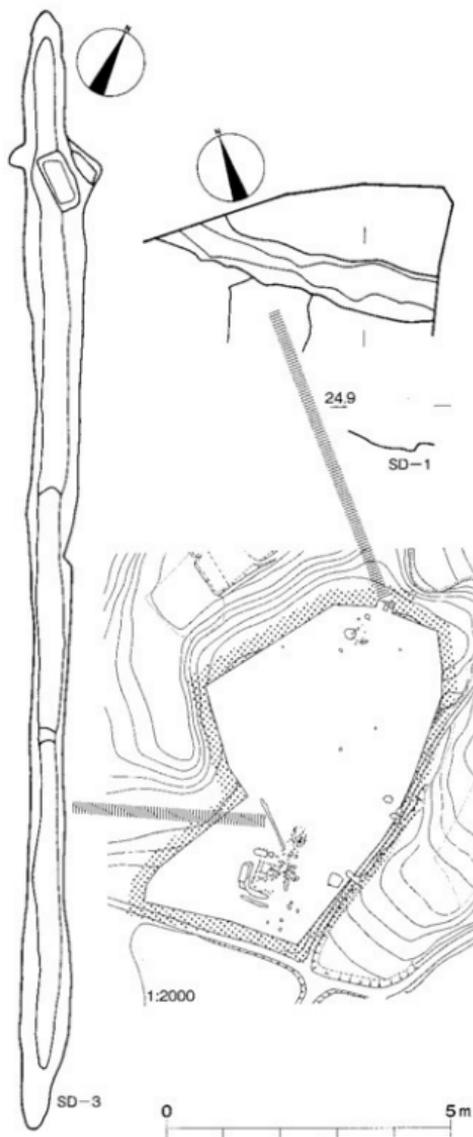
時期 時期不明である。

第2号溝跡【SD-2 (IBSX-2 b)】(第110図：P.L.49)

位置 I~K-27区に位置する。第2号竪穴遺構の南部と連なり、一連のものと考えられる。

主軸 N-65°-Wで等高線にはほぼ平行していた。

規模・形状 第4号溝跡と平行し、全長6.8m、幅0.9~1.2m、深さ22cmである。南側は一部テラ



第109図 第1・3号溝跡

ス状となるが、坑底部はほぼ相似形である。他の溝状遺構に比して幅広であった。

遺物 土師質土器小皿2点、土錘3点、金鈇状の鉄製品が1点覆土中から出土している。

時期 遺構の覆土や出土遺物から近世と考えられる。

第2号溝跡

図面No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	小皿・土師質土器	(9.0)	—	—	(1.8)	No.431 10%
2	小皿・土師質土器	8.8	5.6	—	2.1	No.432 90% 底面余切り直。
3	土錘	長さ25、厚さ0.6、重量0.8g				No.596
4	土錘	長さ17、厚さ0.8、重量0.7g				No.597
5	土錘	長さ20、厚さ0.65、重量0.7g				No.602
6	鉄製金鈇?	長さ(6.4)、厚さ1.1				No.621

第3号溝跡〔SD-3〕(第109図)

位置 K・L-19~23区に位置する。

主軸 N-25°-Wで等高線にはほぼ平行していた。

規模・形状 形状は細長く両端は丸みを帯びている。全長20m、幅0.56~1.36mであった。底面は上面にはほぼ相似形で、3面のテラス状を呈していた。深さは南側より5、10、20cmとなっており、北へ向けて順次深くなっている。等高線に直交して溝が深くなっていることから、降雨時の排水などに用いたものであろうか。

遺物 出土していない。

時期 検出位置からほかの遺構同様に近世か。

第4号溝跡〔SD-4〔BSX-2c〕〕(第110図)

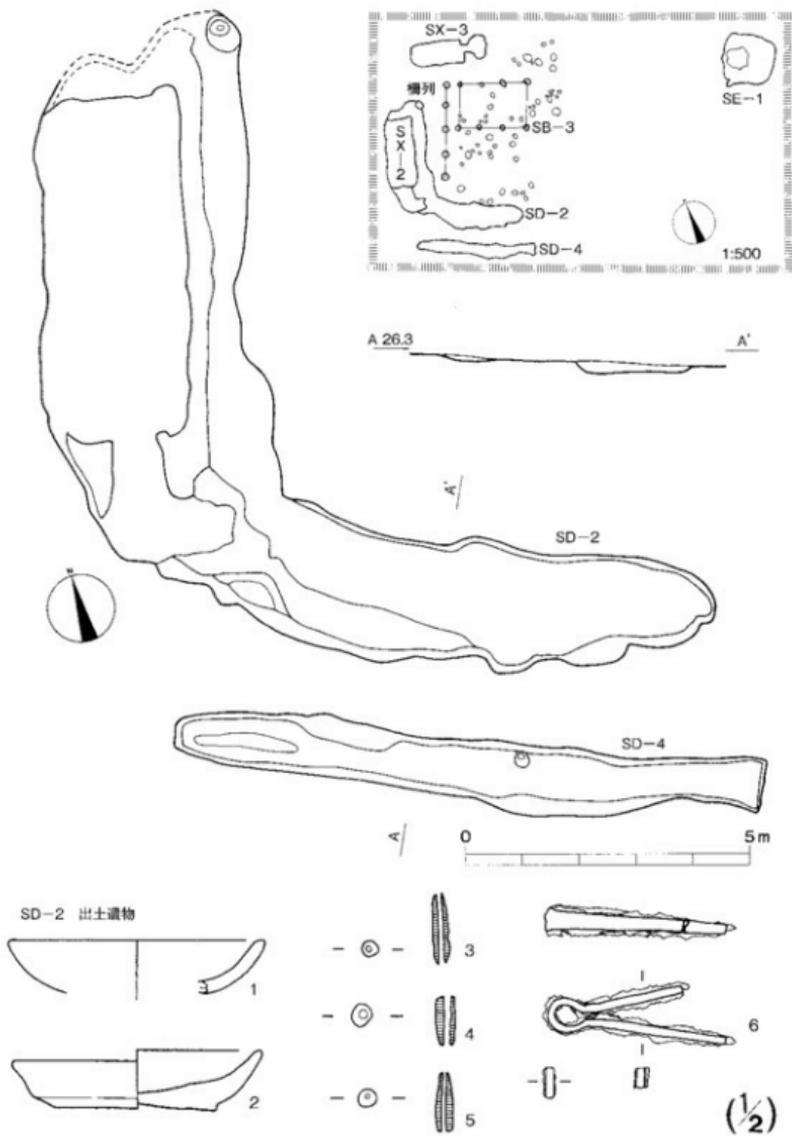
位置 H・K-27・28区に位置する。第2号溝跡の南側に平行し関連するものと思われる。

主軸 N-67°-Wで等高線にはほぼ平行していた。

規模・形状 平面形は細長く東側の端部は角を有し直線的である。西側は一部凹んでおり、ほぼ中央部に小ピットを有していた。全長14m、幅1.2m、深さ8cmである。

遺物 出土していない。

時期 遺構の配置から近世と考えられる。



第110图 第2・4号溝跡・出土遺物

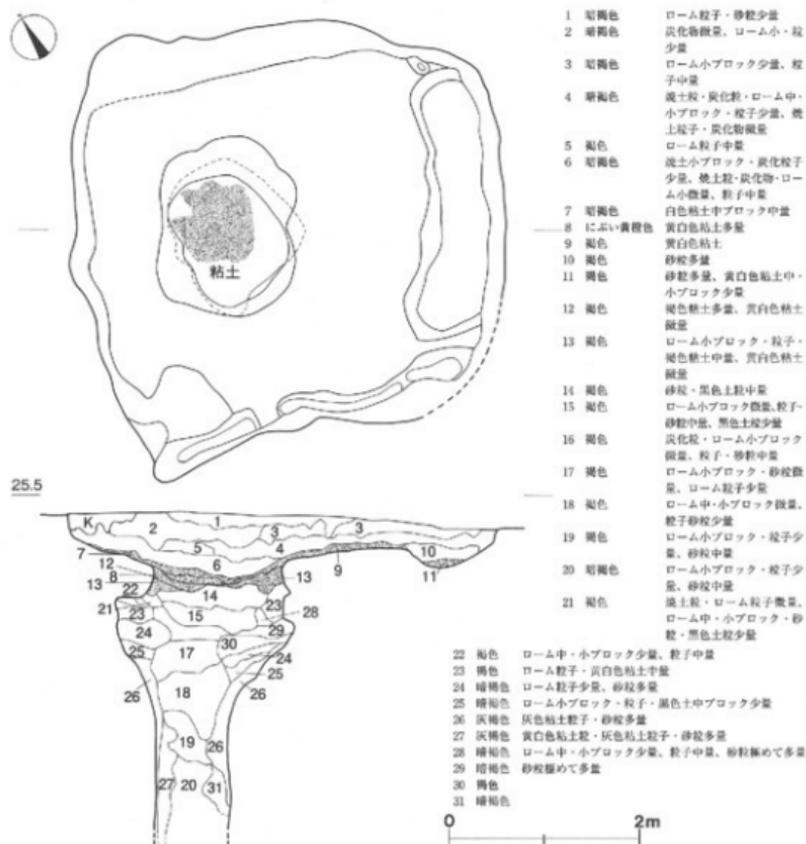
4. 井戸跡

第1号井戸跡〔SE-1〕(第111~116図: P L30・49・50)

位置 調査区南半東側P・Q-25・26区に位置する。

主軸 計測不能

規模・形状 井戸開口部の周囲には平面形が不整形で、規模4.5m×4.4m、深さ0.45m程の皿状の掘り込みが確認された。上屋を想定する柱穴などは検出されていない。井戸の開口部は不整形で規模は1.9m×1.4m、開口部より90cm付近でオーバーハングしながら底面に向かい垂直に



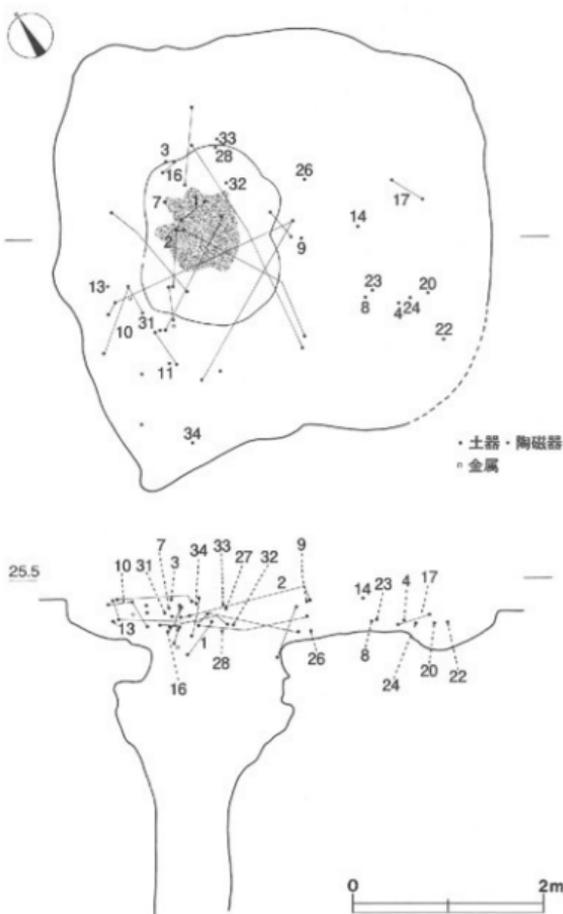
第111図 第1号井戸跡

掘られる。深さは3.4mまで調査を行なったが危険が伴うため未完掘である。

覆土 井戸周囲の皿状の凹んだ部分の底面から井戸の開口部にかけて粘土の堆積が見られた。オーバーハング部より下層では壁際に壁崩落土、第14～20層は全て褐色土であった。このことから、井戸廃棄時に土砂を投げ込み上方を粘土で塞いだものと思われる。

遺物 全て粘土層上層からの出土である。陶器では天目茶碗、播り鉢、皿などが多数出土している。特に瀬戸・美濃系の天目茶碗の出土が目につく。

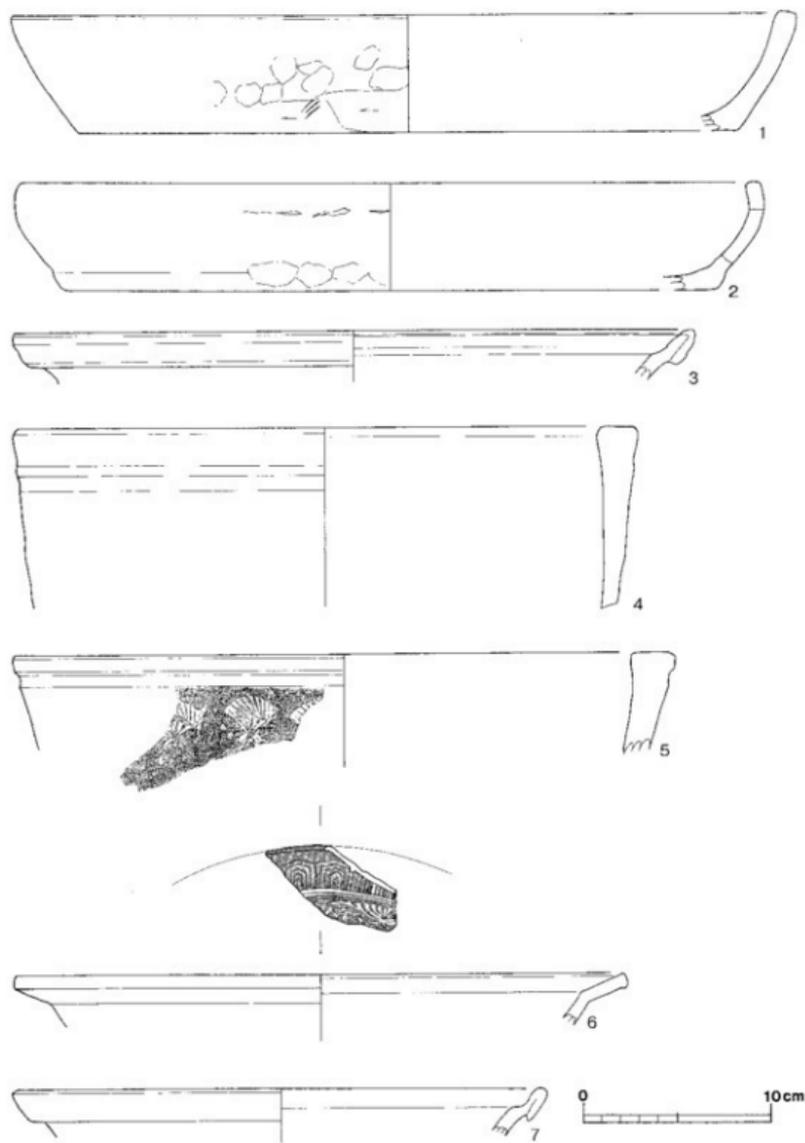
時期 出土遺物から近世の17世紀後半から18世紀前半頃のものと考えられる。



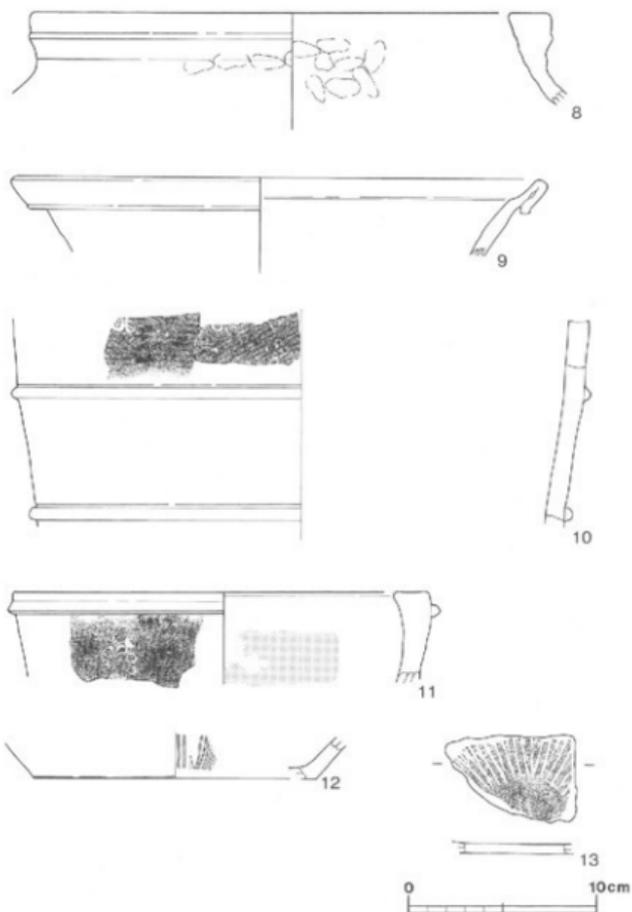
第112図 第1号井戸跡遺物出土状況

第1号井戸跡

図版No	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	焙烙・土師質土器	(41.0)	[35.0]	—	6.2	No.351 20% 雲母多量に混入。
2	焙烙・土師質土器	(39.4)	[34.6]	—	5.7	No.346 20% 外面スス付着。
3	播鉢・陶器	(36.0)	—	—	(2.7)	No.375 20% 瀬戸・美濃系、片持。
4	火鉢・瓦質土器	(32.0)	—	—	(9.5)	No.354 20% 長石多量に混入。器面剥離。刻文あり。

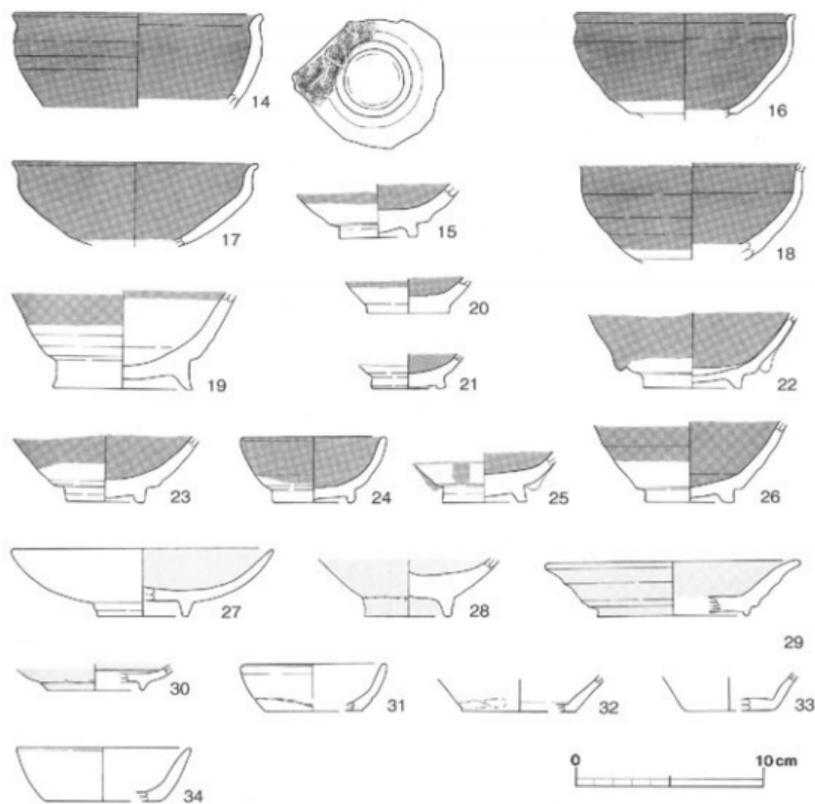


第113图 第1号井戸跡出土遺物(1)



第114図 第1号井戸跡出土遺物(2)

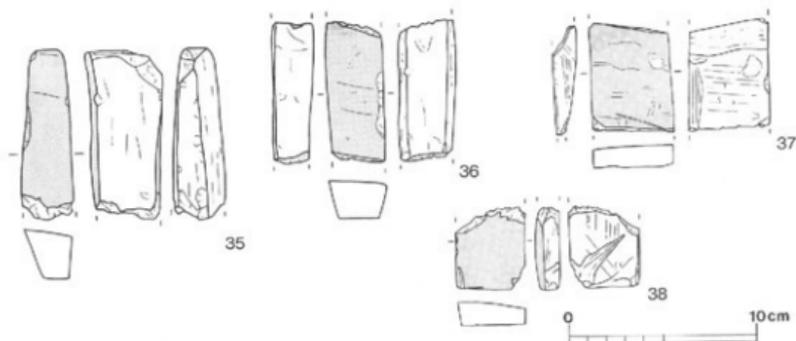
図版No.	器種・遺物	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
5	火鉢・瓦質土器	[35.2]	—	—	(5.0)	No.353 10% 外面沈痾一帯。その下に層の刻文。
6	鉢・陶器	[32.4]	—	—	(2.8)	No.339 5% 肥前系、三島手、白土象嵌。17C末~18C前半。
7	鉢鉢・陶器	[28.4]	—	—	(2.9)	No.344 5% 常滑系、蒲輪。
8	甕・土質土器	[27.3]	—	—	(4.3)	No.342 10% 長石・石英・雲母多量に混入。大甕。
9	鉢鉢・陶器	[28.4]	—	—	(4.0)	No.376 5% 瀬戸・美濃系、蒲輪。



第115図 第1号井戸跡出土遺物(3)

図No.	器種・素材	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
10	火鉢・瓦質土器	—	—	—	(11.0)	No.349 5% 菊印花文。
11	火鉢・瓦質土器	[21.8]	—	—	(4.6)	No.348 10% 内面に灰化物付着、菊印花文。
12	深鉢・陶器	—	[15.0]	—	(1.8)	No.374 5% 15と同一、無釉、焼締。
13	浅鉢・陶器	長さ4.7、厚さ0.6、巾7.0	—	—	—	No.373 5% 底面の一部、無釉、No.12と同一、焼締。
14	天目茶碗・陶器	[13.2]	—	—	(5.0)	No.361 20% 瀬戸・美濃系、鉄釉。
15	天目茶碗・陶器	—	[5.4]	4.2	(2.4)	No.356 30% 瀬戸・美濃系、鉄釉、外面にヘラ掻き。
16	天目茶碗・陶器	[11.6]	[5.7]	—	(5.5)	No.366 30% 瀬戸・美濃系、鉄釉、24と同一、18C代。
17	天目茶碗・陶器	[13.0]	—	—	(4.4)	No.359 20% 瀬戸・美濃系、鉄釉。

図版No.	器種・素材	法量 (cm)				備考
		口徑	底徑	高台径	器高	
18	天目茶碗・陶器	—	(6.0)	—	(4.0)	No.367 30% 瀬戸・美濃系、鉄胎。
19	鉢・陶器	—	8.0	7.4	(5.1)	No.364 40% 瀬戸・美濃系、鉄胎。見込無縁。18C代。
20	碗・陶器	—	4.4	—	(1.7)	No.362 20% 瀬戸・美濃系、鉄胎。見込に輪トチン痕。
21	天目茶碗・陶器	—	4.6	3.9	(1.6)	No.363 10% 瀬戸・美濃系、鉄胎。
22	天目茶碗・陶器	—	(4.6)	—	(5.2)	No.360 30% 瀬戸・美濃系、鉄胎。18と同一。
23	天目茶碗・陶器	—	5.9	4.1	(3.3)	No.357 30% 瀬戸・美濃系、鉄胎。18C。
24	碗・陶器	(7.4)	5.2	4.4	(3.5)	No.358 60% 瀬戸・美濃系、鉄胎。見込に胎土目痕2ヶ所。18C代。
25	天目茶碗・陶器	—	5.2	4.5	(2.1)	No.365 30% 瀬戸・美濃系、鉄胎。
26	鉢・陶器	—	5.6	4.7	(4.1)	No.368 20% 瀬戸・美濃系、鉄胎。
27	高台付皿・磁器	(13.8)	(7.8)	(4.8)	3.6	No.340 30% 肥前系?、青磁。17C後半~18C前半。
28	茶碗・陶器	—	6.3	4.6	(3.0)	No.355 30% 瀬戸・美濃系、透明胎。
29	反り皿・陶器	(13.2)	(8.9)	7.9	3.0	No.337 50% 瀬戸・美濃系、灰胎。18C代。
30	皿・磁器	—	(7.4)	—	(5.1)	No.338 5% 肥前系、輪付。見込に胎土目痕。
31	小皿・土師質	(7.6)	(5.2)	—	2.5	No.371 30% 長石多量に混入、底面赤切り痕。
32	小皿・土師質	—	(6.0)	—	(1.7)	No.372 30% 長石多量に混入、底面赤切り痕。
33	小皿・土師質	—	(5.0)	—	(1.7)	No.369 30% 底面赤切り痕。
34	小皿・土師質	(9.2)	(6.0)	—	2.8	No.370 30% 底面赤切り痕。



第116図 第1号井戸跡出土遺物(4)

第1号井戸跡

単位: cm

図版No.	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
35	石製品	砥石	8.7	3.8	2.3	130.0	凝灰岩	石15 SI-21
36	石製品	砥石	7.2	3.05	1.9	82.0	凝灰岩	石21 SI-21
37	石製品	砥石	5.7	4.3	1.1	39.0	粘板岩	石41 SI-21
38	石製品	砥石	4.25	3.65	1.25	28.0	凝灰岩	石16 鑄付着

5. 炭焼き窯

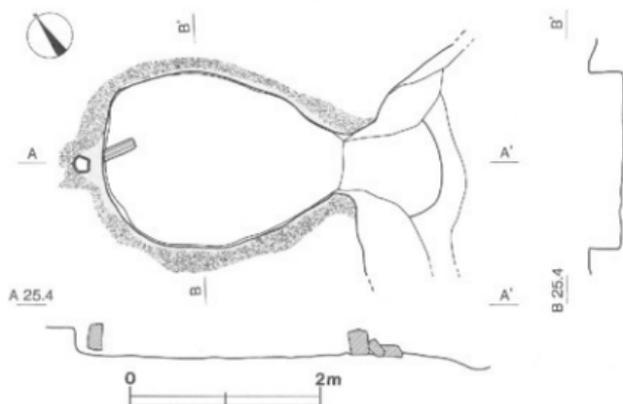
調査区南半東側に2基発見された。いずれも舌状台地の東斜面を利用して構築され、調査区外に前庭部が広がっている。言い伝えでは2基ともに65年前まで使用されていたようである。

第1号炭焼き窯〔炭1〕(第117図 P L.30)

位置 R-25区に位置する。

主軸 N-55°-W

規模・形状 地面を掘り込んだ窯で前庭部は緩やかに傾斜していた。燃焼室の形状は奥側が張る楕円形で、焚き口にかけてすぼまる。規模は全長3.8mで、燃焼室の奥行2.5m・最大幅1.8mを測る。焚き口付近には石やレンガが残り、これらは燃焼室閉塞の際に使用したものと思われる。排煙口には土管が使用され、燃焼室内にも飛出していた。燃焼室の壁面は砂質粘土で成形され、燃焼によって表面は黒色で内面は赤色を呈している。燃焼室の床面はほぼ水平で、炭化物付着による凹凸が著しく、全面硬化していた。炭化物層が床面から2~6cm程堆積し、その上に天井部崩落土の赤褐色土の堆積が見られた。覆土中位よりビール瓶が発見されている。



第117図 第1号炭焼き窯

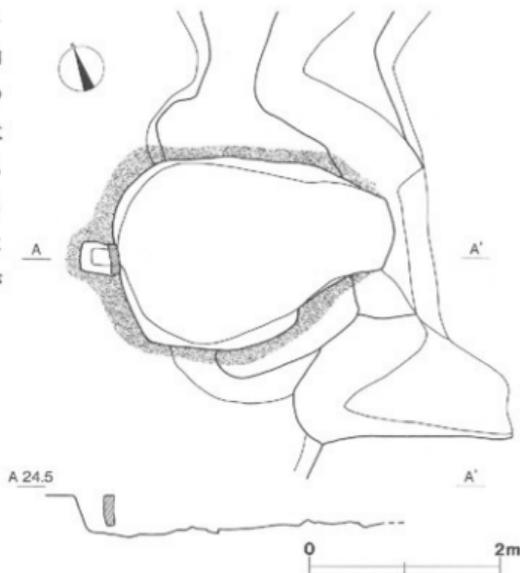
第2号炭焼き窯〔炭2〕(第118図)

位置 V-20区に位置する。

主軸 N-75°-W

規模・形状 地面を掘り込んだ窯で前庭部は緩やかに傾斜していた。燃焼室の形状は奥側が張る楕円形で、焚き口にかけてすぼまる。規模は全長3.6mで、燃焼室の奥行2.8m・最大幅1.9mを測る。

燃烧室の壁面は砂質粘土で成形され、燃烧によって表面は黒色で内面は赤色を呈している。燃烧室の床面はほぼ水平で、わずかな起伏が見られた。炭化物層が床面から10~15cm浮いて4~10cmの厚さで全面に堆積しており、その上に天井部崩落土の赤褐色土の堆積が見られた。

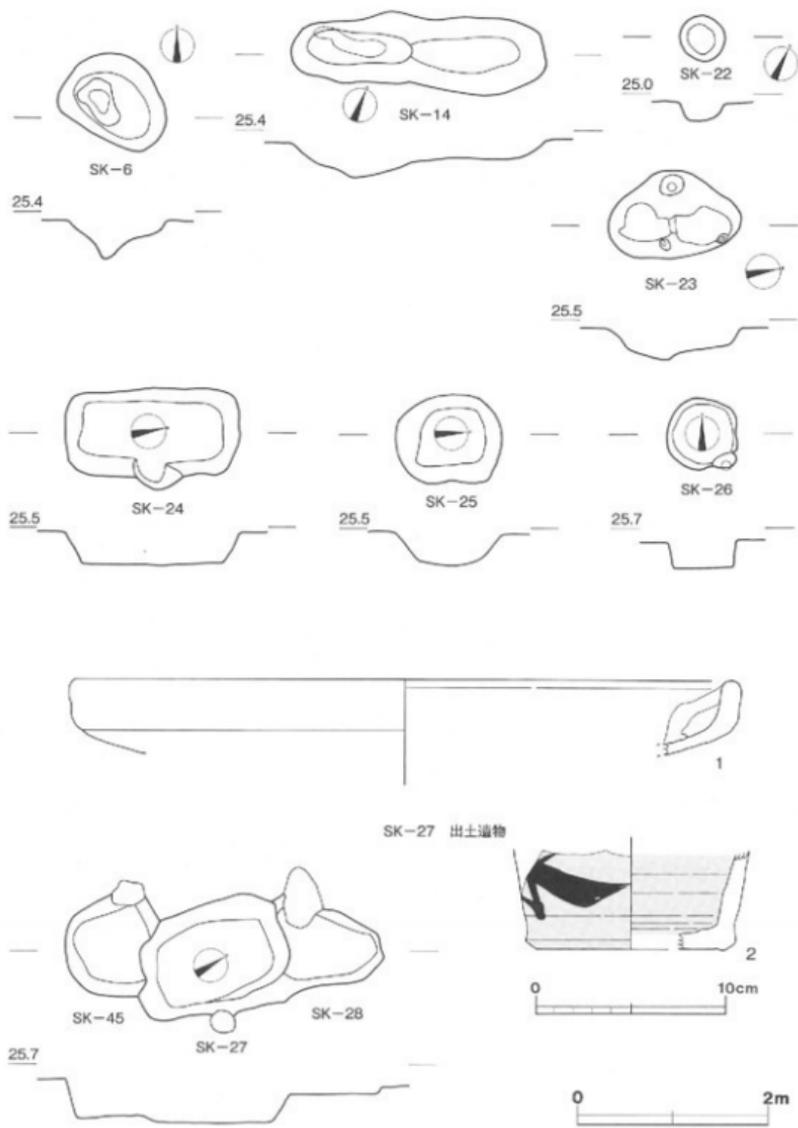


第118図 第2号炭焼き窯

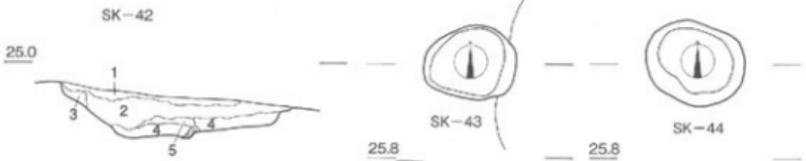
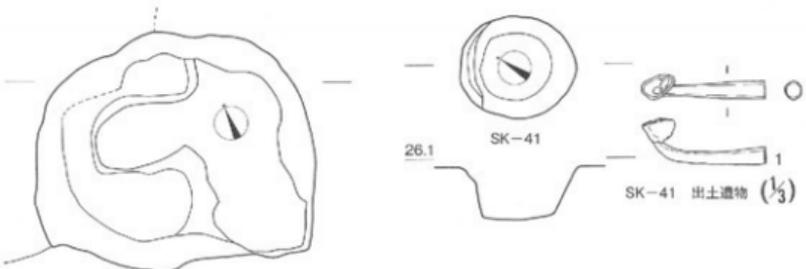
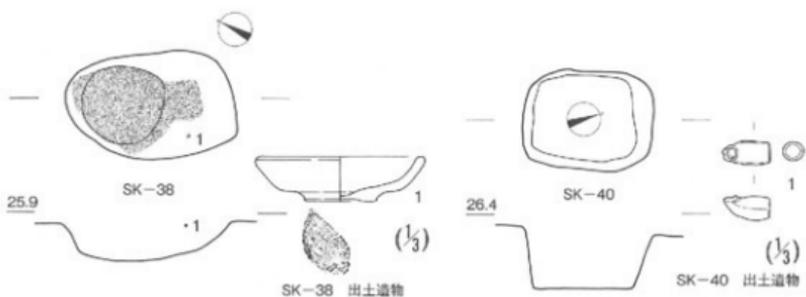
6. 土坑〔SK〕(第119~121図 P L30・50)

計27基の土坑が発見され、特に調査区南半で多く見られ、第3号掘立柱建物跡の東側に南北方向でおよそ並ぶように確認されている。形状は様々で最も多かったのは不整形で8基(第6・23・27・28・32・33・37・42号土坑)、次いで長方形6基(第24・29・30・31・34・35号土坑)、円形6基(第22・26・36・41・44・45号土坑)、楕円形5基(第14・25・39・43号土坑)、方形2基(第34・38号土坑)である。主軸は南北軸が11基、東西軸が5基で、前者が多かったが、特に形状との関連は見出せなかった。その中で第31・35号土坑は比較的大形の長方形で軸方向を同じくし、掘立柱建物跡を囲むような配置である点が注目されよう。また、覆土に白色粘土を有するいわゆる粘土貼り土坑と呼ばれるものが3基(第33・36・38号土坑)ある。これらは土坑の底部全面に2~15cmほどの厚みを持った白色粘土が貼られていた。遺物はいずれの土坑も貼られた白色粘土の上層から出土した。

出土遺物は第27・30・33・36・38・40・41号土坑でみられ、瀬戸・美濃系陶器碗が比較的多く見られた。このほか第33号土坑では瓦質土器の高台付碗がほぼ完形で出土し、被熱を受けているせいか器面は荒れている。そして、第40・41号土坑では銅製のキセルの雁首が出土している。



第119図 第6・14・22~28・45号土坑・出土遺物



- 1 暗褐色 ローム粒子豊富
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、粒子中量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック少量、ローム粒子多量
- 4 褐色 粘性極めて強い
- 5 褐色 ローム粒子少量、粘性極めて強い

第121図 第36~44号土坑・出土遺物



第27号土坑

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	竹節・土師質土器	(31.8)	—	—	(3.9)	No.399 20% 内外面スス付着。
2	惣柄・陶器	—	(10.0)	—	(5.3)	No.393 10% 瀬戸・美濃系、文字「水」か。

第30号土坑

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考	
		口径	底径	高台径	器高		
1	大目茶碗・陶器	—	—	(5.4)	(4.0)	(1.4)	No.404 10% 瀬戸・美濃系、鉄絵。
2	鉄製品	長さ(1.8)、厚さ1.5				No.631 幾?	

第33号土坑

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	碗・瓦質土器	14.2	—	—	3.7	No.407 90% 被熱し器面荒れる。
2	碗・陶器	(10.4)	(5.0)	—	6.7	No.411 40% 瀬戸・美濃系、灰胎、高台内施釉、17C末～18C前半。
3	大目茶碗・陶器	(10.2)	(6.2)	(4.9)	6.3	No.412 40% 瀬戸・美濃系、鉄絵、口縁部外反せず。
4	福鉢?・陶器	(32.0)	—	—	(5.3)	No.409 10% 瀬戸・美濃系。

第36号土坑

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	寛永通寶	径2.45、内0.5				No.621

第38号土坑

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	小皿・土師質土器	(9.0)	(3.8)	—	(2.4)	No.413 20% 底面糸切り肌。

第40号土坑

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	キセル瓶首	長さ2.5、厚さ1.3				No.622 銅製

第41号土坑

図版No.	器種・素地	法量 (cm)				備考
		口径	底径	高台径	器高	
1	キセル瓶首	長さ6.5、厚さ0.9				No.623 銅製

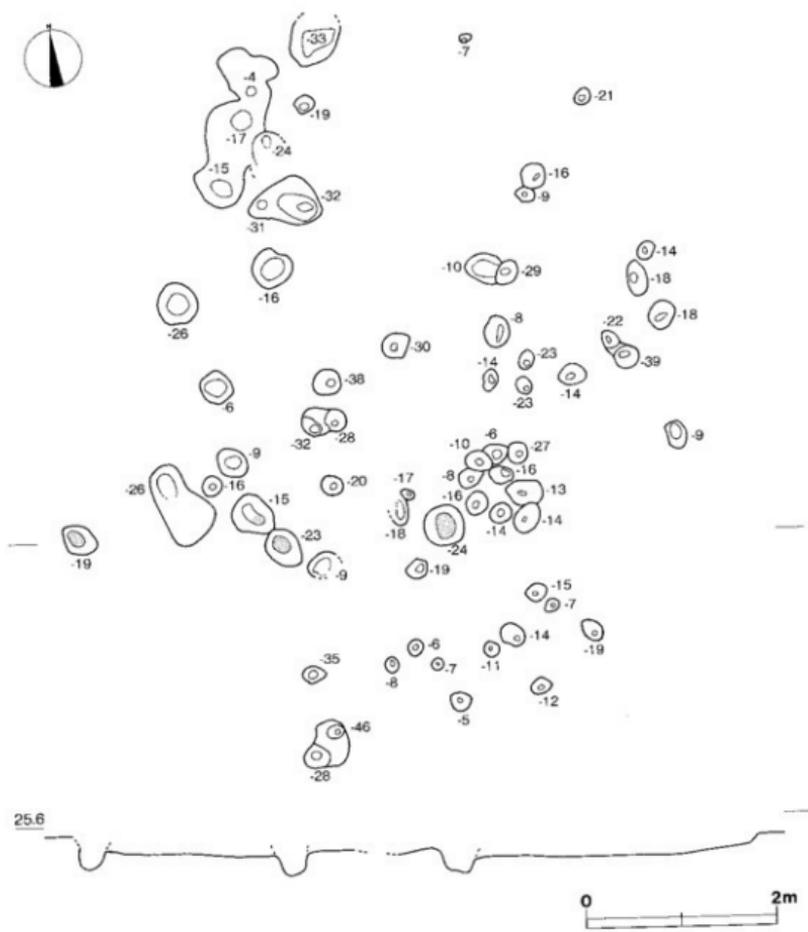
遺物の出土している土坑が少なく明確な時期決定は困難であるが、占地状況や覆土の状況などから大半は近世以降に属するものと考えられる。

近世以降の土坑一覧

名称	位置	長×短×深さ	平面形	主軸	備考
第6号土坑	Q-5	118×90-18 (40)	不整形	N-62°-W	
第14号土坑	S-T-5	268×81-39	楕円形	N-72°-E	
第22号土坑	L-5	49×48-20	円形	-	
第23号土坑	M-23・24	140×93-34	不整形	-	
第24号土坑	M-23	185×108-33	長方形	N-10°-E	
第25号土坑	M-23	113×90-35	楕円形	N-5°-W	
第26号土坑	L-24	76×72-28	円形	-	
第27号土坑	M-24・25	168×120-48	不整形	N-13°-E	焙烙・徳利出土。
第28号土坑	M-24	(95)×80-9	不整形	N-37°-E	
第29号土坑	M-25	169×84-48	長方形	N-92°-E	
第30号土坑	M-24	140×66-42	長方形	N-66°-W	天目茶碗・不明金属製品出土。
第31号土坑	L-27	238×117-29	長方形	N-17°-E	
第32号土坑	M-25	165×140-53	不整形	-	
第33号土坑	M-25・26	135×113-33	不整形	-	遺物は粘土層直上より出土。
第34号土坑	M-25・26	147×65-24	方形	N-72°-W	
第35号土坑	L・M-26	(420)×121-30	長方形	N-10°-E	磁石出土。
第36号土坑	M-28	120×112-16	円形	-	寛永通寶出土。
第37号土坑	M-28	108×97-25 (33)	不整形	-	
第38号土坑	M-28	178×111-42	方形	N-15°-W	小皿・硯・磁石出土。
第39号土坑	K-29	111×76-42	楕円形	N-18°-E	
第40号土坑	L-30	138×103-66	長方形	N-20°-E	キセル壺首出土。
第41号土坑	L-29	123×108-58	円形	-	キセル壺首出土。
第42号土坑	U・V-18・19	295×254-56	不整形	-	杭成直上に粘土層。
第43号土坑	K-25	98×78-24	楕円形	N-40°-E	
第44号土坑	K・L-25	105×86-18	円形	-	
第45号土坑	M-25	109×104-41	円形	-	

7. ビット群 (第122図 P L16)

調査区南半M・N-21・22区で発見され、その多くは第18号住居跡と重複する。第3号掘立柱建物跡の北側20mほど離れて60基以上のビットで構築されている。形状は全て円形を基調とし径10～80cm、深さ4～46cmを測る。ビット底面に硬化面(図中の網のかかったビット)を伴うものが4基見られ、うち3基が東西方向に並んでいた。ビット間は東から1.3m、1.7m、深さ19～23cmと近似していた。柱が立っていた可能性が高い。ほかにこの先ビット列に直行して南北方向に深さ30cm前後のビットが6基並んでいる様子が窺えるが、間隔は不規則である。このようなビットから建物跡を想定することは困難である。



第122図 ビット群

第6節 古墳時代以降の遺構外出土遺物

ここで取り扱うのは古墳時代以降の遺物で、後世の遺構覆土内に混入したものや出土遺構が不明なものから選択したものである。

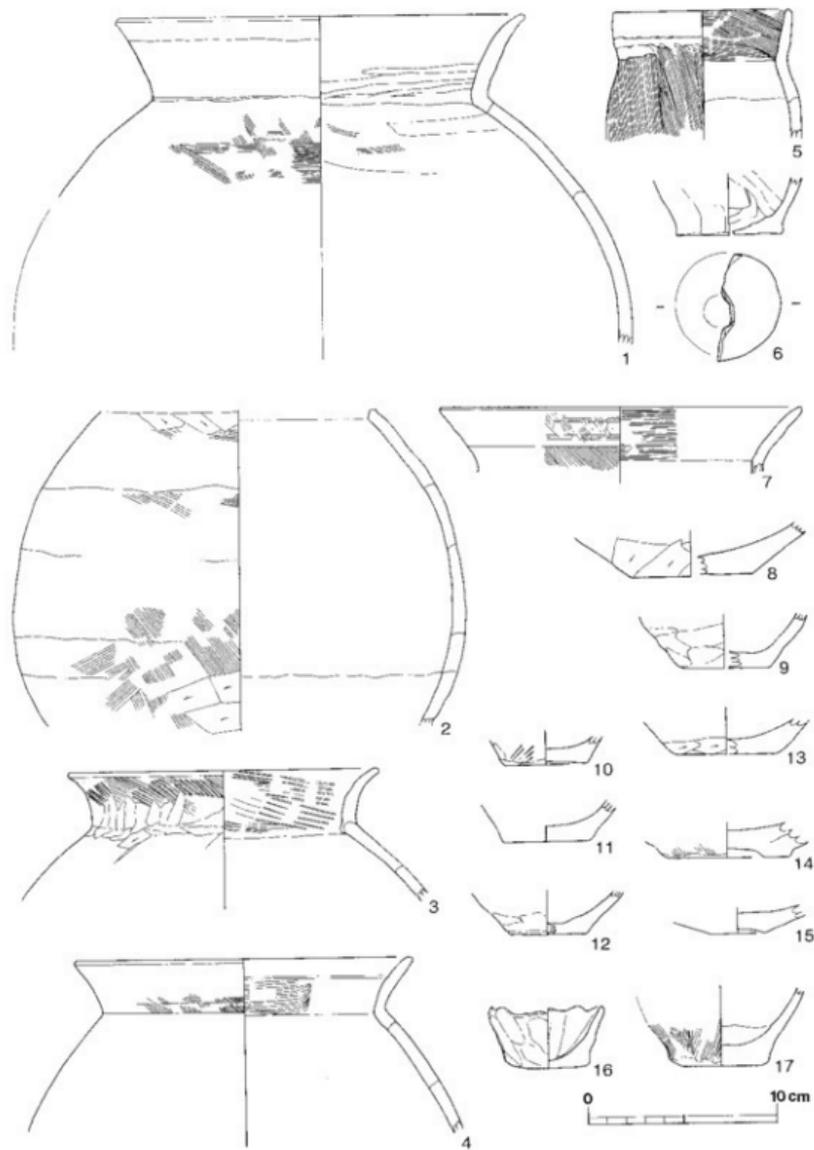
1. 古墳時代(第123・124図)

1～20は古墳時代の土師器である。1～19までが前期のものと思われ、20のみが後期のものである。前期の土師器のほとんどは甕であり、1・3・4は丸い胴部から頸部が屈曲し、口縁部が外傾し伸び口唇部はやや湾曲する。器面にはハケ目やナデが見られる。5は小型の甕で頸部の括れが緩く、口縁部が立上る特徴を持つ。胴部外面と口縁部内面にハケ目が見られる。7も甕の口縁部と思われる。6・8～15・17の大半は甕の底部と思われる。6の底部は焼成後の底部穿孔の可能性が考えられる。16は手捏ね土器で、口縁部が雑に摘み上げられている。18・19は高坏で、18ははの字状に裾部が開く脚部でありすかし穴が穿孔されている。19は大きく開く脚部である。20は坏である。

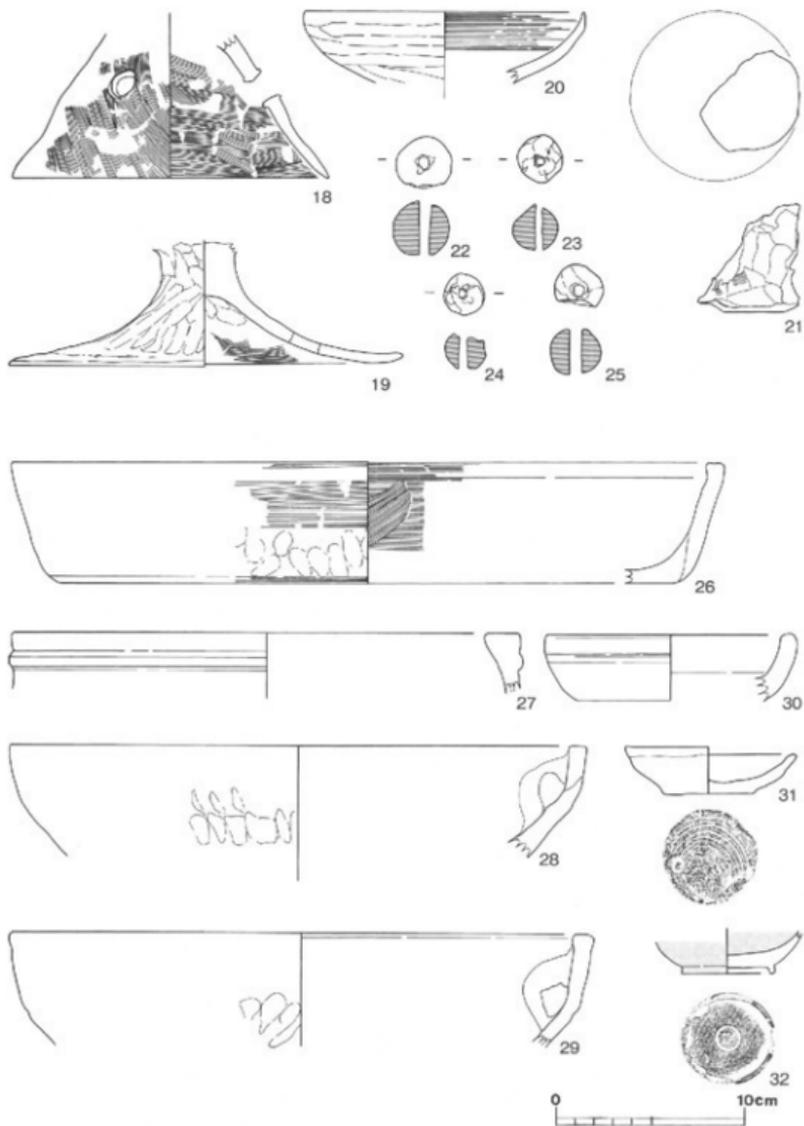
21～25は土製品で、21は上製支脚の裾部破片である。22～25は土玉である。これらについては、21が後期に帰属すると思われるが、土玉については時期が限定できない。

2. 近世以降(第124図)

26～31は近世の土師質土器である。26・28・29は焙烙であり、26は底部から口縁部へやや外傾して直立気味に立上る。器高が低くタライ状の器形となる。28・29は内面に把手が付き、胴部がやや内湾する。口唇部はいずれも端部が面取りされ平坦である。27は大甕の口縁部で、口唇部が肥厚し端部は平坦になる。30は鉢かと思われ器厚が厚い。31は小皿で底面に回転糸切り痕が残る。32は瀬戸・美濃系陶器の碗底部である。



第123図 古墳時代以降の遺構外出土遺物 (1)



第124図 古墳時代以降の遺構外出土遺物（2）

第4章 総 括

本遺跡の調査では縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認された。本遺跡をめぐる土地利用方法は時代により特徴が見られる。以下では各時代の特徴を述べまとめとする。

縄文時代

縄文時代には、調査区内の北側を中心に遺物・遺構が確認されている。明確な遺構としては第4号竪穴遺構や第1号土坑などがあげられる。いずれの遺構も出土土器から縄文時代前期前半の花積下層式から関山式期に位置付けられる。第4号竪穴遺構についてはその規模から竪穴住居跡とも考えることが可能かも知れないが、炉が確認できないことから竪穴遺構とした。また、第1号土坑底面では底部・胴部上半を欠損する土器胴部が正位の状態で出土し、中には礫が入れられていた。特異な出土状況といえ、土器内の礫は意図的に土器内に入れられたものと思われる。

このほか、特徴的な出土品として遺構外出土石器の中には、縄文時代草創期に位置付けられる長脚鎌が2点出土している。これらの石鎌は完形品であり、その石材についても他の出土石鎌(前期)に帰属するであろう)がチャート製であるのに対し、頁岩やフォルンフェルス製であることから特徴的である。この長脚鎌は草創期でも爪形文土器に伴うとされているが、本遺跡では同時期の土器の存在は未確認である。市内における長脚鎌の出土類例は向原遺跡で頁岩製のものが1点出土している。

古墳時代前期

この時期は本遺跡が所在する台地上一帯に竪穴住居が20軒や掘立柱建物跡2棟等によって集落が形成されている。集落内の住居跡同士の近接状況や主軸の異なり具合から数時期にわたる変遷が窺える。集落内で検出された住居跡の1軒は鍛冶工房としての性格を兼ね備えた遺構である。

以下は、①竪穴住居跡などの特徴、②鍛冶遺構の特徴、そして③出土遺物の时期的な特徴などについて述べる。

①竪穴住居跡などの特徴

検出された住居跡の規模については、第1号住居跡が最も大型であり、一辺7.7mの正方形を呈し集落内の中心的存在であったことが窺える。そして、最小規模のものは第16号住居跡であり一辺3m強のものである。大多数の住居跡は一辺が4～6mのものであった。

住居跡内の特徴的な屋内施設としては、ベッド状遺構や土器埋設炉があげられる。ベッド状遺構が設けられていたのは第1、2、5、8、13号住居跡であり、これらの住居跡では4本の主柱

穴で囲まれた内区が明瞭に踏み固められていることが観察された。この硬化面の広がりが入り口ピットや貯蔵穴の位置と関連を有している状況が確認できた。そして、土器埋設炉は第1・5・24号住居跡から検出され、その埋設方法は壘などの湾曲した胴部片の外面を入り口側に向け、炉の入り口側に埋め込んでいる。このような古墳時代前期の土器埋設炉は、市内の五斗落遺跡や和台遺跡で各1例ずつ確認され、本市とかすみがうら市にまたがる戸崎中山遺跡でも確認されている。この戸崎中山遺跡では土器埋設炉のほかに土製炉石と呼ばれる棒状の土製品を炉に埋め込んだものも確認されている。県内では茨城町南小割遺跡で土器埋設炉が確認され、加えて土製炉石を埋め込んだ炉が確認されている。

集落内の建物構成で注目されるのは掘立柱建物跡2棟の存在である。市内の同期の集落跡においては初めての検出例となった。いずれも竪穴式住居跡とは重複関係を持たず、集落の変遷の中でそれぞれが存在したものと考えられる。県内の事例としてはやはり先にも取り上げた南小割遺跡で前期の同遺構が複数確認されている。

②鍛冶遺構の特徴

本遺跡内の遺構で特筆されるのは、第7号住居跡と呼称した鍛冶工房としての性格を兼ね備えた遺構である。同住居跡床面には鍛冶炉と鍛冶関連ピットが近接して検出された。床面近くから採取した土壌の水洗選別の結果、鍛冶作業によって生み出される微細な鍛造剥片や粒状滓などが検出された。その出土状況から、鍛冶関連ピットを中心に鍛造剥片の出土が目立ち、このピットに金床石を据え鍛冶炉で熟した鉄製品を鍛打した様子が理解できる。そして、鍛冶作業の廃棄物は当住居跡西方の第4号住居跡へ捨てられたことが、輪の羽口や鍛造剥片の検出から想定される。鍛冶作業に関わる道具類については先の輪の羽口が出土しているものの、金床石や槌などは未確認である。このような道具類については鍛冶工人が次ぎの作業を行なう場所へ持ち去ったことが考えられる。また、この遺構で生産された鉄器についても明確に得ないが、周辺の住居跡では鉄鎌や刀子状の鉄製品が出土し、遺跡内での鍛冶関連遺物の出土量、そして鉄製品にかかわる砥石の存在から、集落内の人々によって消費される小型の道具類を製作するために小規模な鍛冶作業が行われたものと思われる。

この第7号住居跡の時期を明確に示す土器などの遺物は少ないが、遺構の特徴や遺構間での鍛冶遺物の廃棄状況から、古墳時代前期後半の範疇のものと判断した。この時期の明確な鍛冶遺構としては県内でも最も古い事例の一つを言い、東国における鉄器生産技術導入期の状況を明確に物語るものであり貴重である。同様な時期の鍛冶遺構の検出例として同じ事業地内の八幡協遺跡出土例があり、同様な時期の集落内に鍛冶遺構が1基確認されている。現状では県内における同期の明確な鍛冶遺構の存在は知られていないが、茨城町南小割遺跡の第178号住居跡では羽口や

金床石破片が出土している。また、県外の周辺地域では千葉県八千代市沖塚遺跡や埼玉県宮代町山崎山遺跡などで前期の鍛冶遺構が確認されている。

第7号住居跡の鍛冶炉から出土した鍛冶関連遺物の金属学的調査や中性子放射化分析の結果では、遺構内での鍛冶作業に用いられた鉄素材は朝鮮半島産の鉄鉱石系の素材ではないかとの想定がなされている（詳細は総集編で報告する予定である）。

③出土遺物の時期的な特徴など

本遺跡出土土器の組成を概観してみるといくつかの特徴をあげることができる。1つには小型の埴形土器の存在であり、第1・2・5・8～10・13・23で出土している。2つ目には脚部が柱状になりその裾部が屈曲する高坏の存在である。脚部が中実・中空の区別はあるもの目だって出土している。このような高坏は第2・5・9・10・13・15・22・第2号掘立柱建物跡で見られる。このような柱状の高坏以外に第13号住居跡で比較的多く見られる裾部が緩やかに開くものも存在し、時間差を示すものかも知れない。

また、3つ目として小型の器台形土器の存在があまり明瞭でないことも本遺跡出土土器の特徴といえる。明確な器台としての特徴を持つものは、第18号住居跡の脚部（4）であり、そのほかは部分的な破片で高坏との区別が難しい。

上記のような土器組成の特徴については、市内の向原遺跡での調査成果の中でも若干指摘されており、栃木県でも類似する土器組成の存在が指摘されている。

このような本遺跡出土土器組成の特徴を、比田井克仁氏の編年基準を参考に捉えれば、およそⅢ段階の特徴と符合する部分が多分に見出せるように思える。比田井氏のⅢ段階の指標は「小型器台・小型高坏・元屋敷系高坏が消滅して、畿内系の柱状脚部高坏・X型器台が登場する」とされる。このようなことから、本遺跡内にⅢ段階を中心とする遺構が主体的に存在すると思われる。このⅢ段階の土器様相の年代観については比田井氏により4世紀後半との見方が示されている。そして、同氏のその後の研究では4世紀を前葉・中葉・後葉の3区分し、前葉・中葉をⅡ段階にあて後葉をⅢ段階にあてるという年代観も示されている。

このほかに今回の調査では遺構間の関連を示す遺物出土状況が確認されているので記しておく。それは複数遺構出土遺物の接合関係という形で示されている。今回の調査で把握できた遺構間の接合関係は、第2号住居跡⇔第4号住居跡、第2号住居跡⇔第5号住居跡、第4号住居跡⇔第5号住居跡、第8号住居跡⇔第10号住居跡である。このほか接合関係ではないが遺構間の関連を示す遺物出土状況として、第7号住居跡で生成された鍛冶関連遺物が廃棄物として第4号住居跡内に捨てられていることが想定できる状況をあげることができる。

今後本遺跡内の集落構成や変遷を考える上で、先に若干触れた各遺構出土土器の検討も去るこ

とながら、各遺構の関連状況も重要な意味を持つものと思われる。

最後に上記以外のこの時期の調査成果として、第8号住居跡に典型的な住居廃棄に伴う何らかの祭祀行為が想定される遺物出土状況が確認された。また、第19号住居跡では室内に多量の土玉や管状土錘が納められていたと想定できる出土状況があり興味深い。前期の集落跡出土土玉という視点でも県内でも有数の出土数を誇るのではないだろうか。

古墳時代後期

古墳時代後期には竪穴住居跡5軒による集落跡が形成される。これらの住居跡はいずれも北方または北西方向にカマドを構築し、4本の支柱穴で構築され、入り口に関わるピットが設けられている。4軒の住居跡で竈脇に貯蔵穴が設けられている。掘り込みは前期の住居跡に比べるといわずれもしっかりしている。これらの住居跡の中で、第11・14・20号住居跡の室内には土製の支脚が残され、特別な意味で残されたものであろうか。特徴的な出土品として、第14号住居跡の須恵器があり、須恵器でありながら表面を赤い顔料で塗っており興味深い。

これらの遺構は出土遺物から6世後半から7世紀初頭のものと考えられる。

平安時代

平安時代には本遺跡内から火葬墓3基、土壙墓1基、土坑1基が検出されている。いずれの遺構も調査区北側で確認され、南側で同時代の遺構遺物は出土していない。遺跡内では住居跡などは全く検出されず、この時期には墓域として土地利用されていたことが理解できる。

確認された3基の火葬墓はいずれも削平を受けておらず遺存状況が良好であった。骨蔵器を埋納した掘り方は第1号火葬墓が広い掘り方を持つが、ほかの2例は狭い掘り方となっている。覆土の状況はいずれも類似し、炭化物が多く含まれる土層が存在する。いずれの火葬墓も納められていた骨蔵器はプローションや技法の類似した須恵器の甕を用い、蓋には須恵器の鉢を用いていた。このような骨蔵器の類似性はそれぞれの被葬者の関係まで言及できる可能性を秘めたものかも知れない。そして、特筆すべきは第1号火葬墓のみに副葬品が見られ、骨蔵器脇に立てかけるように刃先を上にしたU字状の鉄製鋤先が添えられていた。この鋤先という副葬品の存在は第1号火葬墓の被葬者像を象徴するものと思われ、火葬人骨の鑑定結果では成人男性のものと鑑定されている。これらの火葬墓の帰属年代については、骨蔵器として用いられた須恵器甕などの特徴からいずれも9世紀中葉に取まるものと考えられる。

また、調査区北端で検出された土壙墓内からは逆位の状態で「寺」と墨書された土師器杯が出土した。先の火葬墓の存在とあいまって興味深い出土状況である。この土壙墓の帰属年代は出土遺物から9世紀後葉のものと考えられ、火葬墓の埋納よりも後出するものと思われる。

同一遺跡内での火葬墓と土塚墓の出土例として、同事業地内では石橋南遺跡出土例がある。

このほかのこの時代の遺跡内での痕跡は、調査区北端で確認された須恵器の鉢破片が出土している第8号土坑の存在や、第17号住居跡内の混入物として9世紀後半頃の須恵器坏が出土している。

今回の当遺跡に見るような平安時代に専ら墓域としての土地利用がなされる遺跡として、事業地内には前谷東遺跡・前谷西遺跡・東原遺跡や石橋南遺跡、八幡脇遺跡などが存在する。このほかにも上浦市東部の田村町や沖宿町を含む大津地区周辺からは数多くの火葬墓が畑の耕作などで出土しており、霞ヶ浦沿岸地域の中では特に火葬墓の出土が集中する状況が見られる。

近世以降

近世には調査エリア内の南側を中心として遺構の展開が見られた。特に第3号掘立柱建物跡を中心に棚列、竪穴遺構、溝跡、井戸跡などが検出され、それぞれの遺構が有機的な関係を持って配置されていたことが想定される。これらの遺構の組み合わせは屋敷を思わせるもので、その空間の中には火床を持つ掘立柱建物や井戸による作業や居住のための機能、竪穴遺構での貯蔵のための機能、また斜面に設けられた溝跡の存在により排水を思わせる機能の想定が可能である。近世におけるこのような台地上で検出された遺構群の存在は、市内における調査状況からすれば類例に乏しく一般的なあり方として認識することができない。

上記の遺構群のほかに同所では土坑群も確認され、長方形の土坑や底面に粘土を貼ったいわゆる粘土貼土坑も存在する。

出土遺物の観点でこれらの遺構群を眺めると、井戸跡からまともな遺物が見つかり、瀬戸美濃系の天目茶碗が目立ち、在地産の土器と考えられる土師質土器の焙烙や小皿なども出土している。また、生業にかかわる遺物として竪穴遺構では管状土錘も若干出土し、土坑群からはケセルの雁首などが出土している。

これらの遺構群の帰属年代については出土遺物からおおよそ17世紀後半から18世紀前半頃のもと考えられる。

このほかに、近現代の遺構として炭焼き窯が2基調査されている。

参考文献

- 鈴木道之助 「石鏃」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣 1983
- 財団法人 茨城県教育財団 「霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 五斗巻遺跡 大倉遺跡 弁ノ内遺跡 原ノ内遺跡 ゴリン山遺跡 真木ノ内遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第43集 1987
- 土浦市教育委員会 「向原遺跡」1987
- 土浦市立博物館 「開かれた古代の扉-田村・沖宿遺跡群の調査-」(企画展パンフレット) 1993
- 土浦市教育委員会 「田村・沖宿遺跡群」『平成5年度 第16回遺跡研究発表会資料』茨城県考古学協会 1994
- 栃木県立みなす風上記の丘資料館 「古代東国の産業-那須地方の産業と製鉄業-」1994
- 財団法人 千葉県文化財センター 「八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡 他」千葉県文化財センター調査報告書第245集 1994
- 吉澤 悟 「茨城県における古代火葬墓の地域性-土浦市立博物館保管の資料紹介および県内事例の集成から-」『土浦市博物館紀要』第6号 1995
- 土浦市教育委員会 「石橋南遺跡」田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 1997
- 土浦市教育委員会 「前谷遺跡群(東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡)・東原浸食塚」田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 1998
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 「第3回特別展 仏のすまう空間 -古代霞ヶ浦の仏教信仰-」1998
- 財団法人 茨城県教育財団 「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 南小割遺跡 権現堂遺跡 塚占墳 後原遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第129集 1998
- 財団法人 茨城県教育財団 (仮称) 堂丸地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 三度山遺跡 古屋敷遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第132集 1998
- 村上恭通 『倭人と鉄の考古学』シリーズ日本史の中の考古学 青木書店 1998
- 今平利幸 「下野における古墳時代前期外来系土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』第21集 栃木県考古学会 2000
- 比田井克仁 「第一章第二節 古墳時代前期の土器様相の展開」『関東における古墳出現期の変革』雄山閣 2001
- 比田井克仁 「第五章第二節 伝統性の継続と消失」『関東における古墳出現期の変革』雄山閣 2001
- 比田井克仁 「関東地方・東北部の土器」『考古資料大観第2巻 弥生・古墳時代土器Ⅱ』小学館 2002
- 宮代町教育委員会 『宮代町史 通史編』2002
- 荒井保雄 「茨城県内の鍛冶工房遺構集成(古墳時代)」『年報23』財団法人茨城県教育財団 2003
- 財団法人 茨城県教育財団 「戸崎中山遺跡 霞ヶ浦環境センター(仮称)整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告第218集 2004
- 吉澤 悟 「火葬のひろがり」と古代の東国社会」『第11回特別展 火葬と古代社会-死をめぐる文化の受容-』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2006

写 真 图 版



尻替遺跡発掘調査航空写真（南西から）



尻替遺跡調査前状況（国土地理院1961年撮影航空写真）



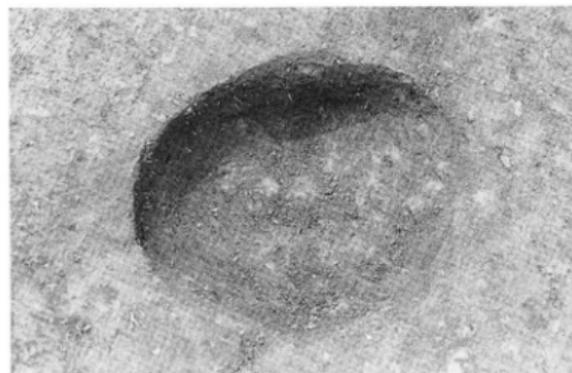
試掘調査状況



第4号竖穴遺構



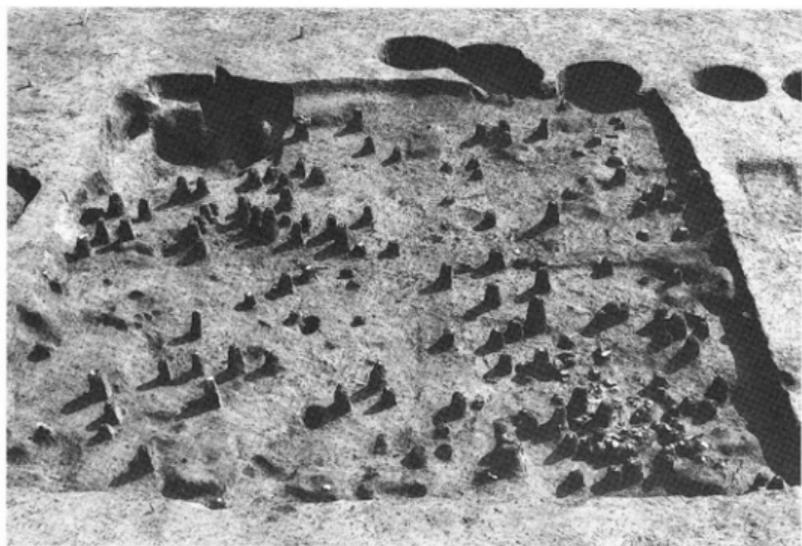
第1号土坑



第3号土坑



第1号住居跡



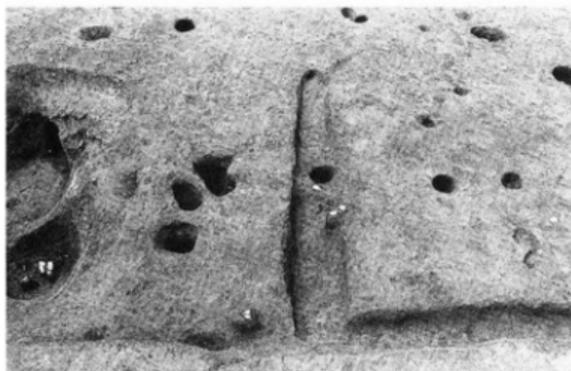
第1号住居跡遺物出土状況



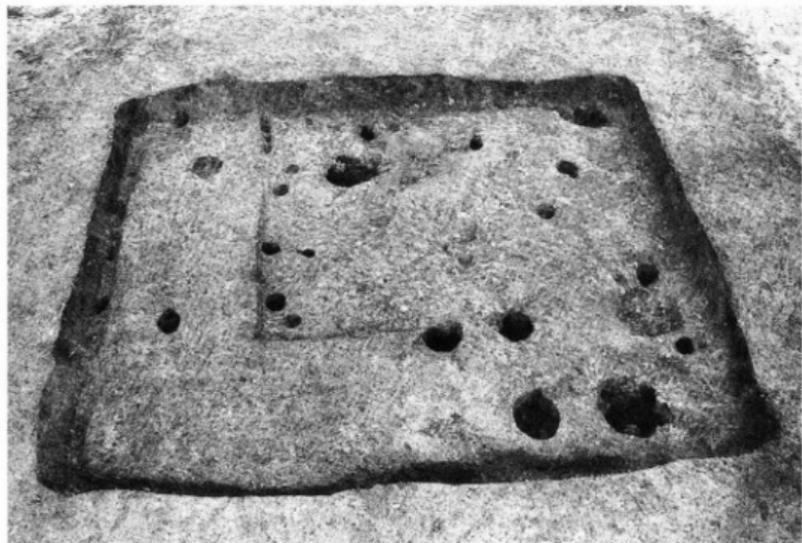
第1号住居跡
土器埋設炉



第1号住居跡
遺物出土状況



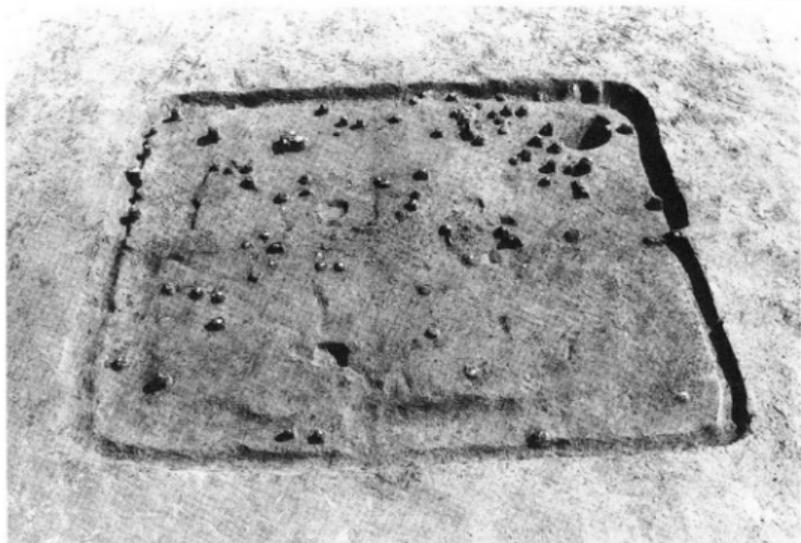
第1号住居跡
間仕切り溝



第2号住居跡



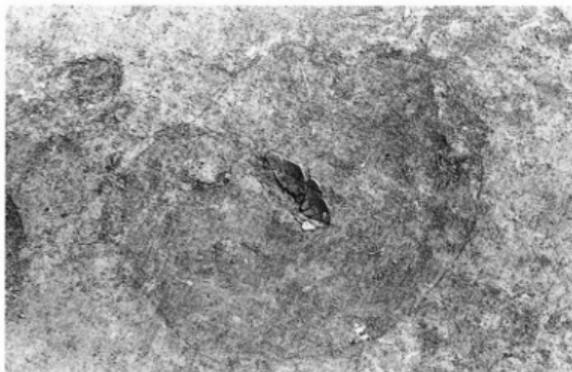
第4号住居跡



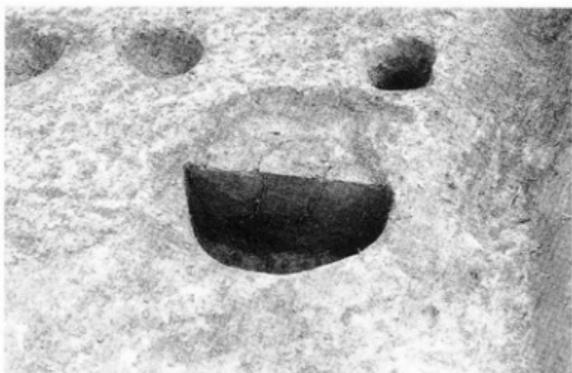
第4号住居跡遺物出土状況



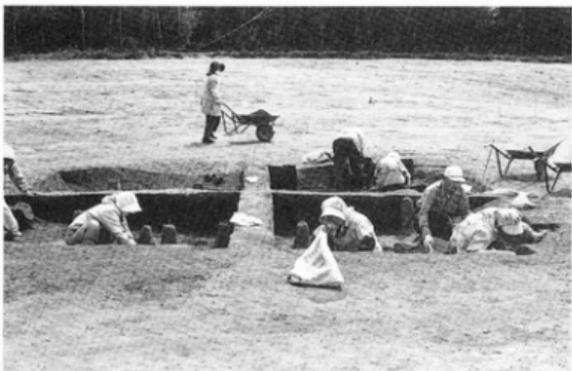
第5号住居跡



第5号住居跡
土器埋設炉



第5号住居跡
入り口ピット土層



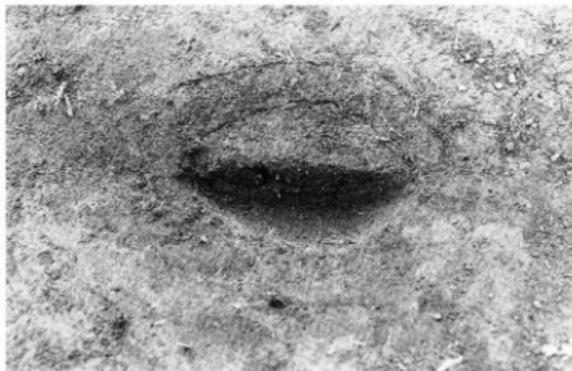
作業風景



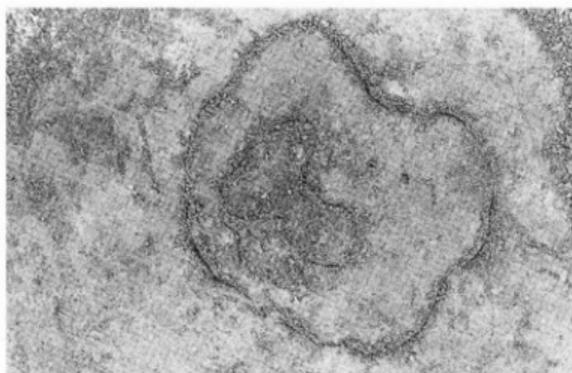
第6号住居跡



第7号住居跡



第7号住居跡
鍛冶炉内土層



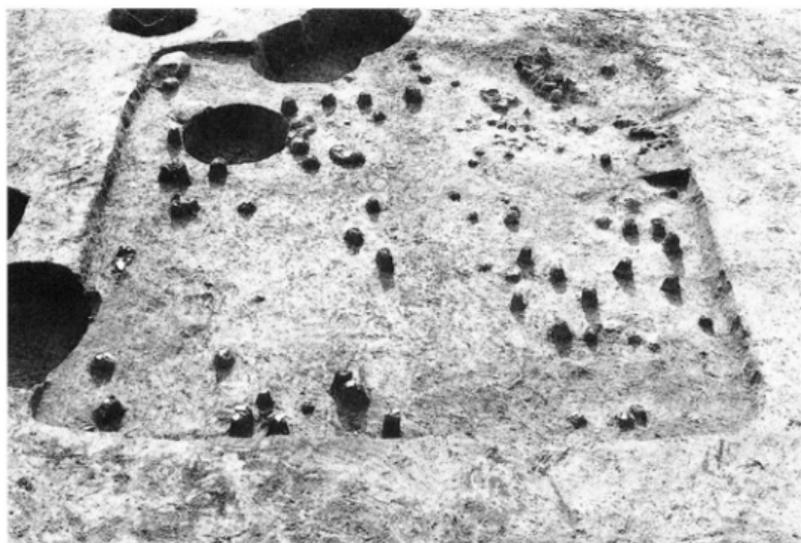
第7号住居跡
鍛冶関連ピット



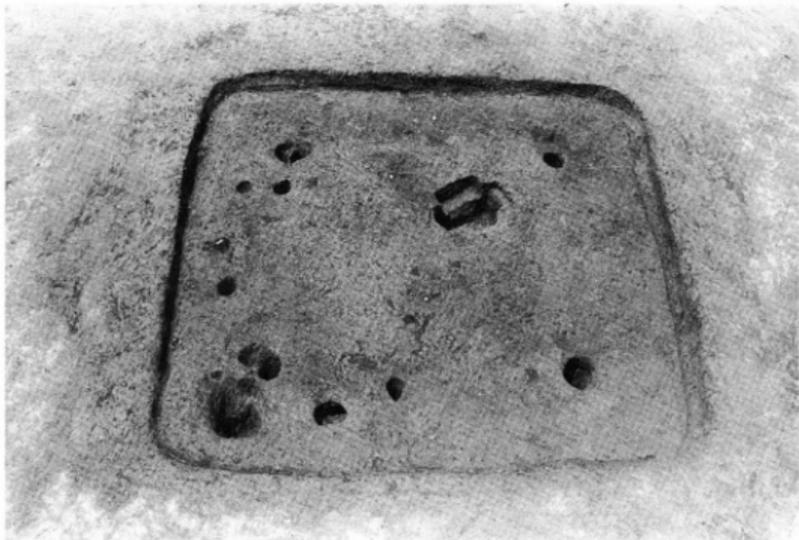
第7号住居跡
鍛冶炉等



第8号住居跡



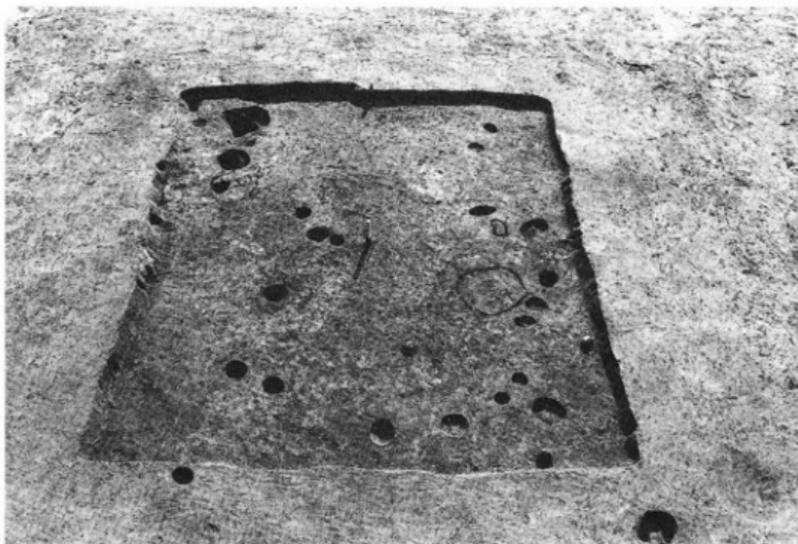
第8号住居跡遺物出土状況



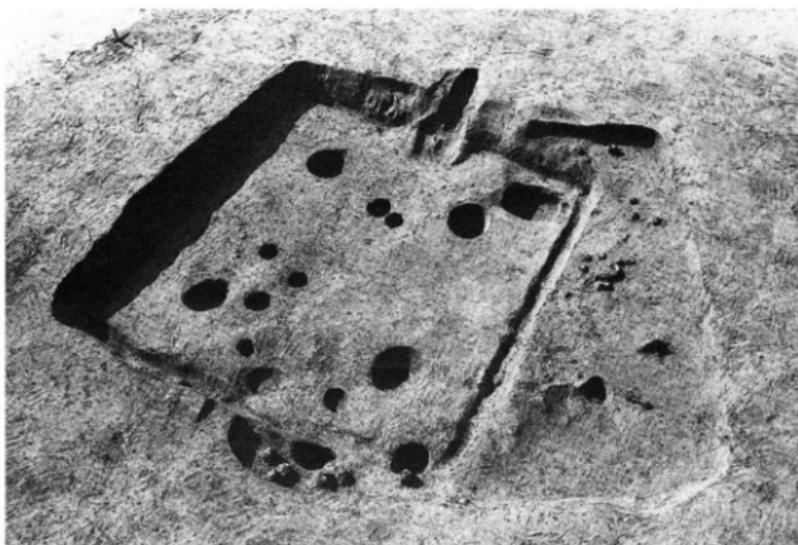
第9号住居跡



第9号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡



第12号住居跡



第13号住居跡



第13号住居跡遺物出土状況



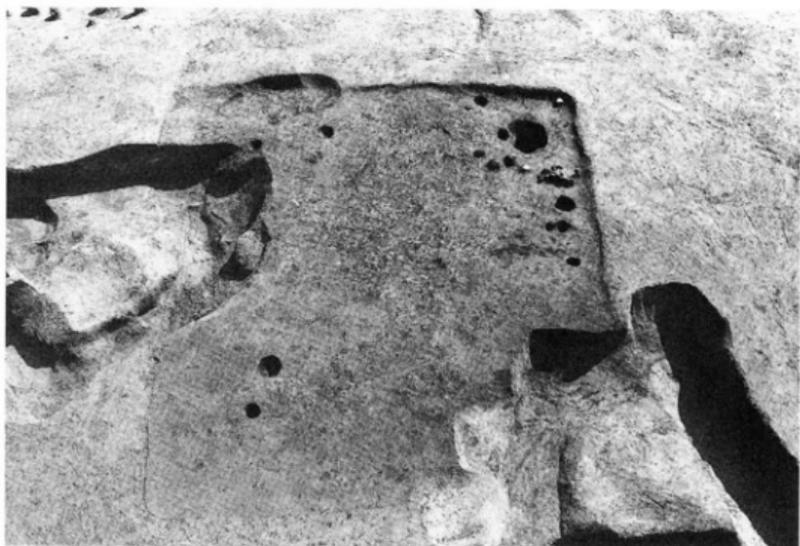
第15号住居跡



第16号住居跡



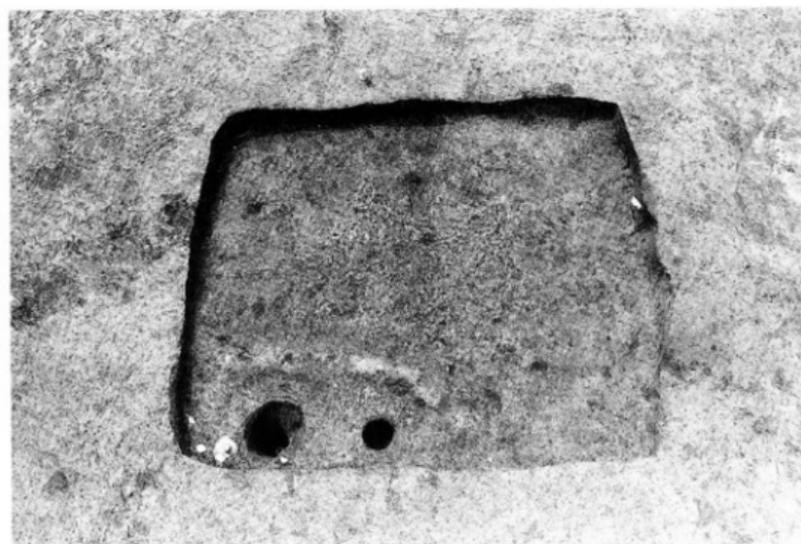
第18号住居跡 (近世以降のビット群を含む)



第19号住居跡



第22号住居跡



第23号住居跡



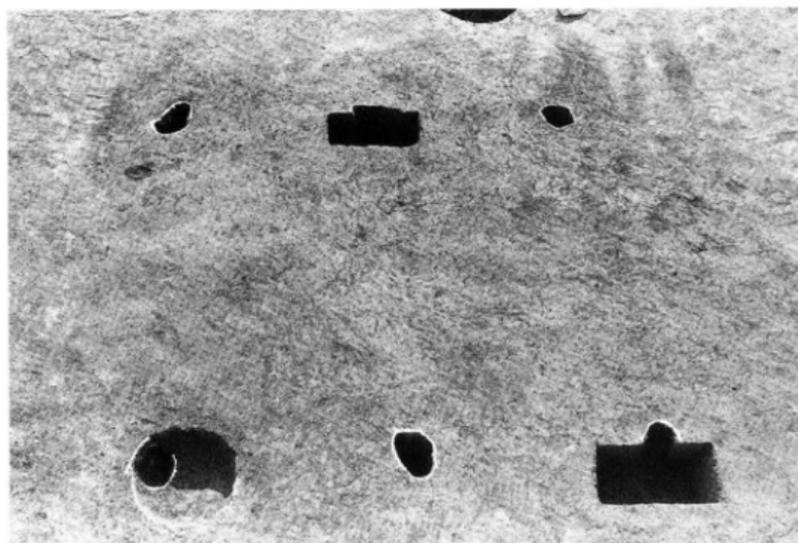
第24号住居跡



第24号住居跡土器埋設炉

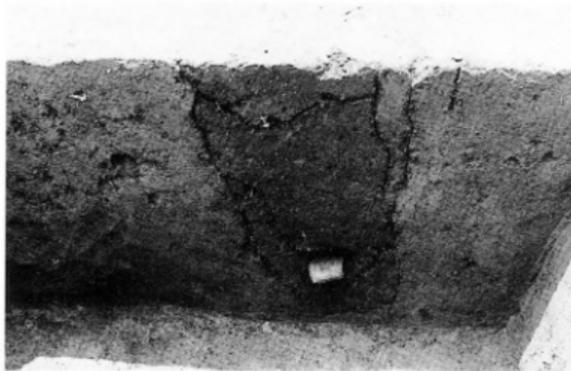


第1号掘立柱建物跡

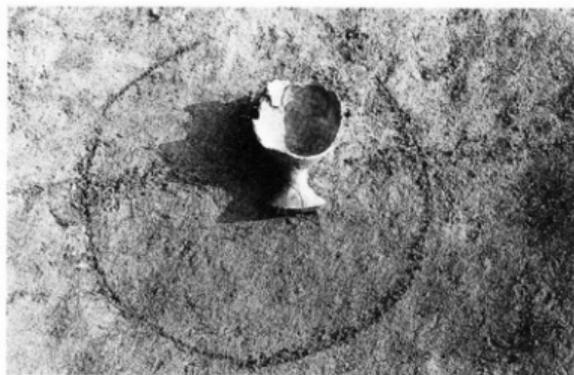


第2号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡
柱穴土層

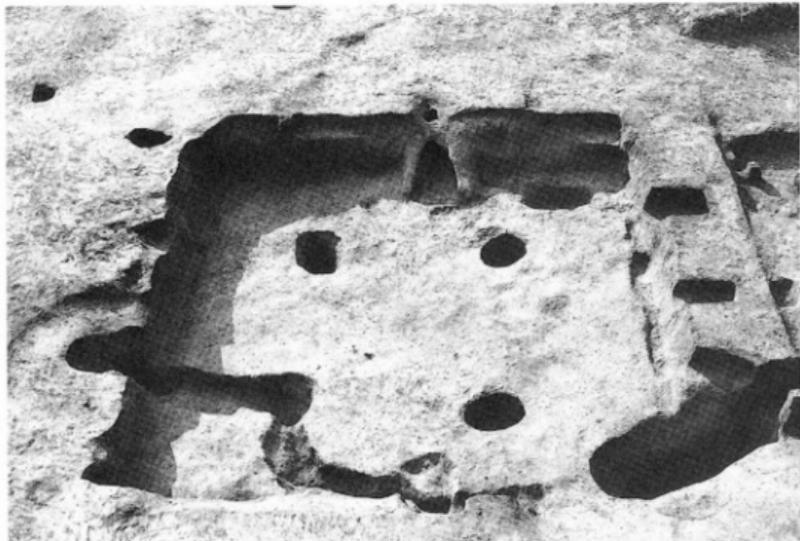


第1号竪穴遺構
遺物出土状況



作業風景

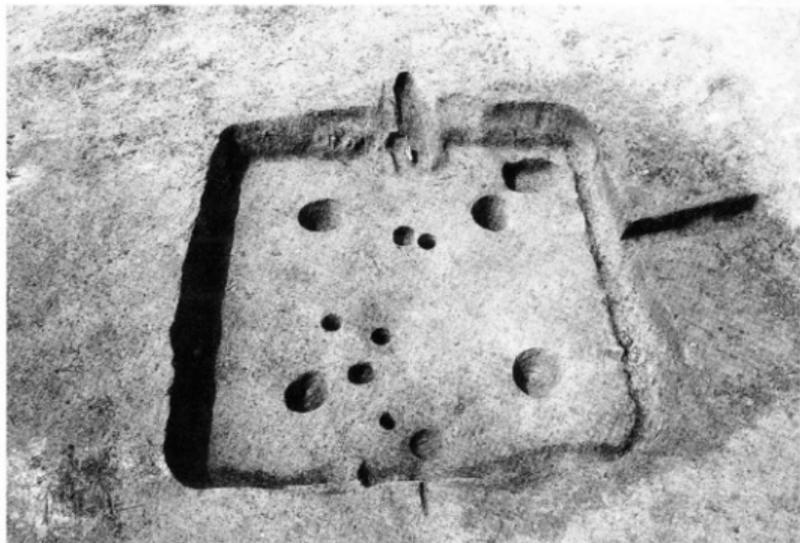




第3a号住居跡



第3a号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡



第11号住居跡遺物出土状況



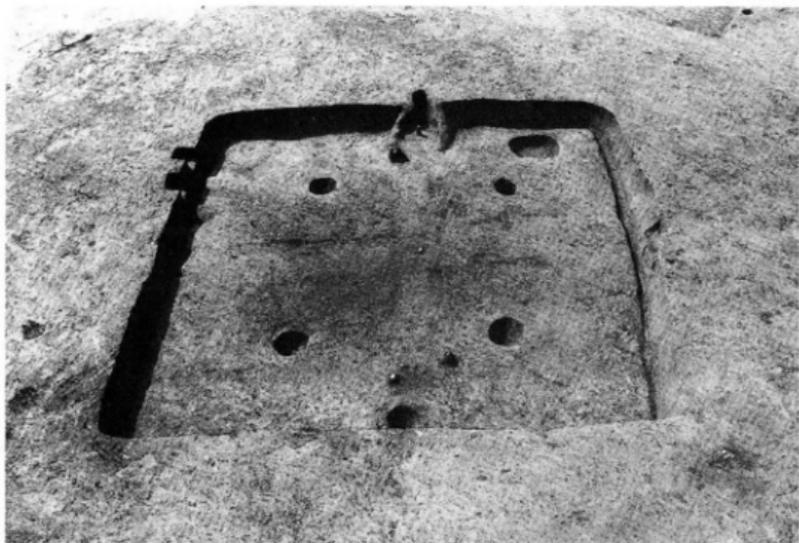
第11号住居跡
遺物出土状況



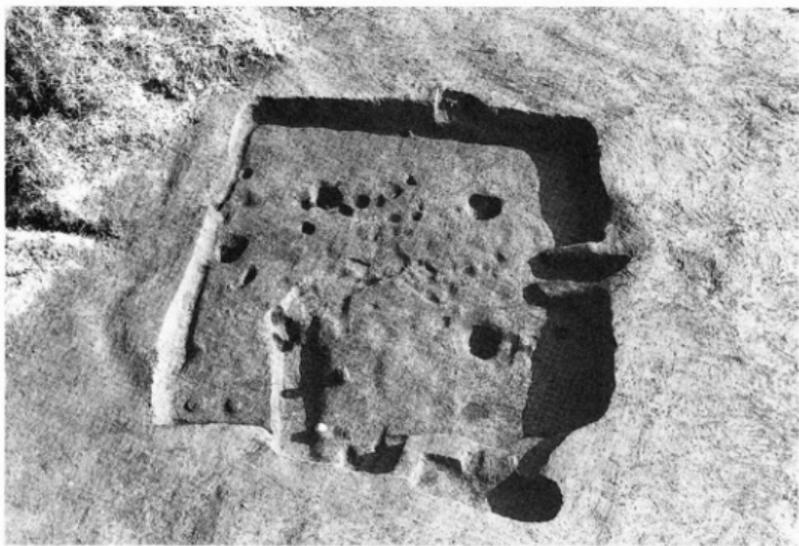
第11号住居跡
遺物出土状況



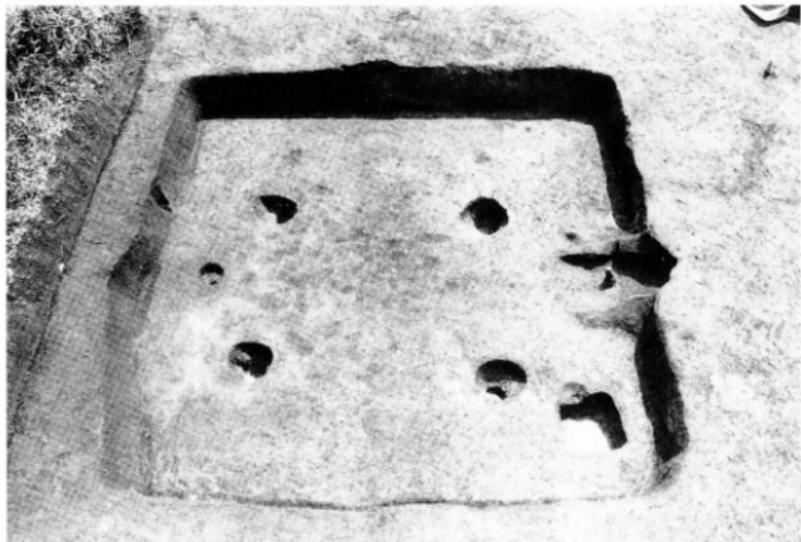
第11号住居跡
竈



第14号住居跡



第17号住居跡

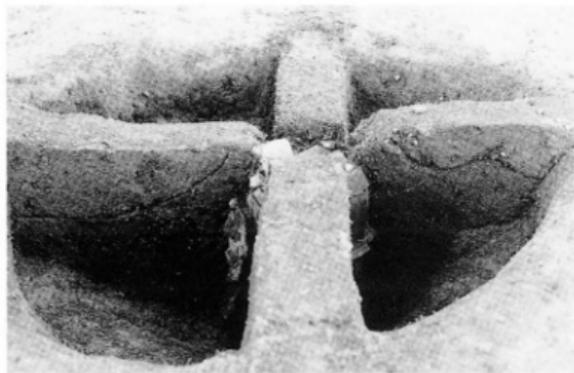


第20号住居跡



第20号住居跡竈

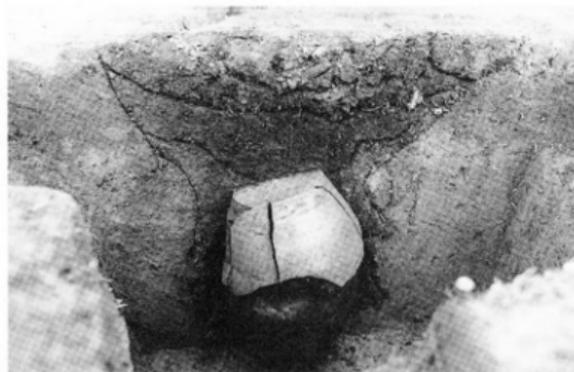
第1号火葬墓
土層

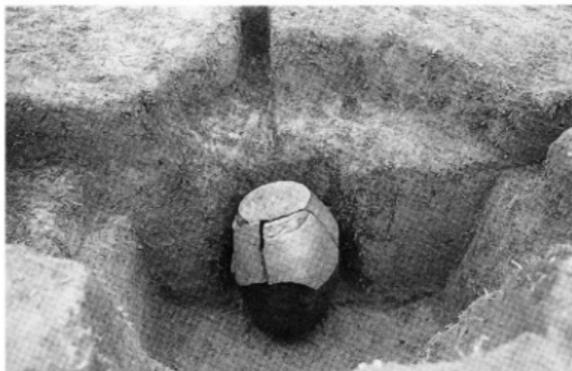


第1号火葬墓
遺物出土狀況

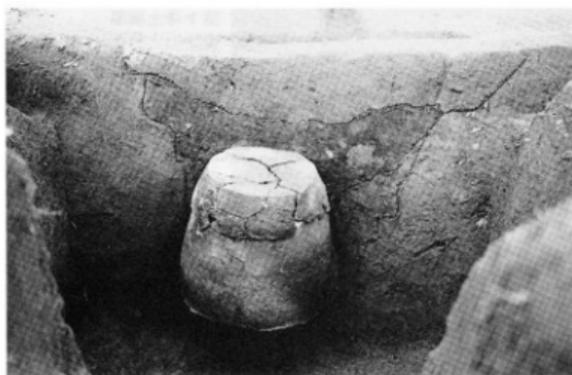


第2号火葬墓
土層





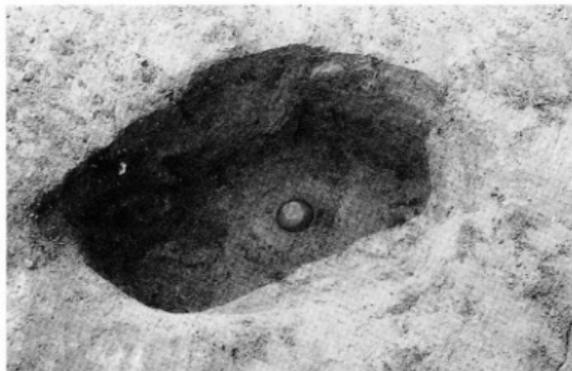
第2号火葬墓
遺物出土状況



第3号火葬墓
土層



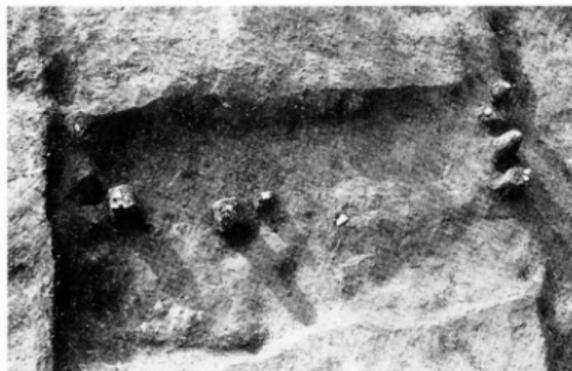
第3号火葬墓
遺物出土状況



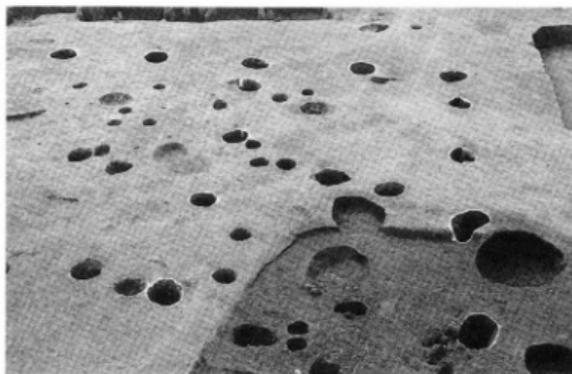
第1号土坑墓



第1号土坑墓
遗物出土状况



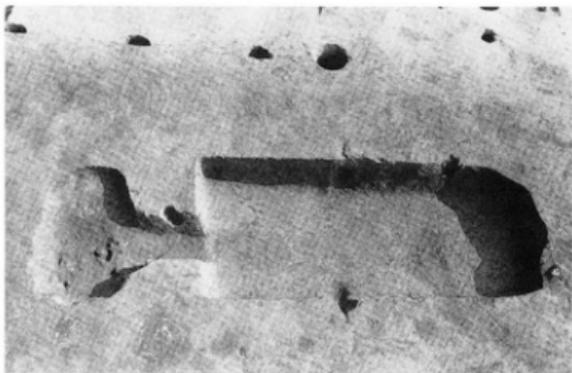
第8号土坑
遗物出土状况

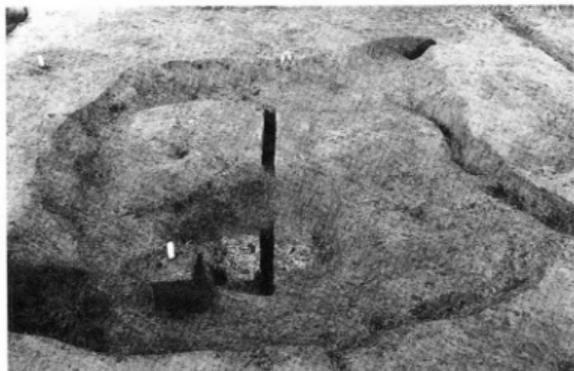


第2号竪穴遺構



第3号竪穴遺構





第1号井戸跡

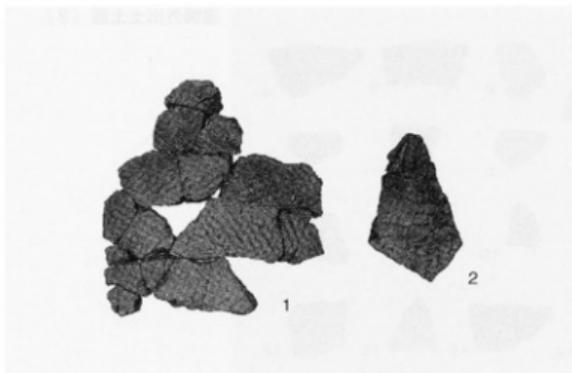


第33号土坑
遺物出土状況

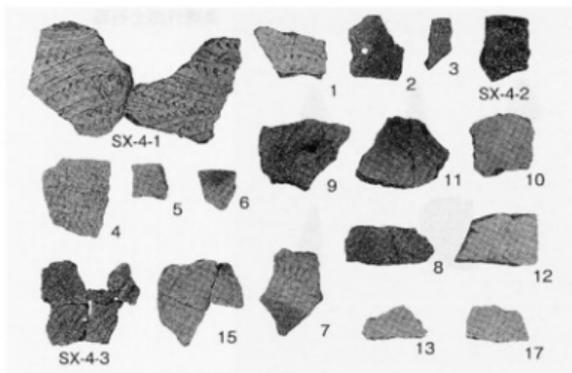


第1号炭焼き窯

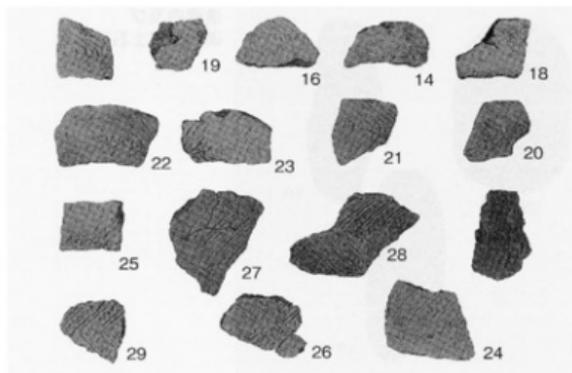
第1号土坑
出土土器



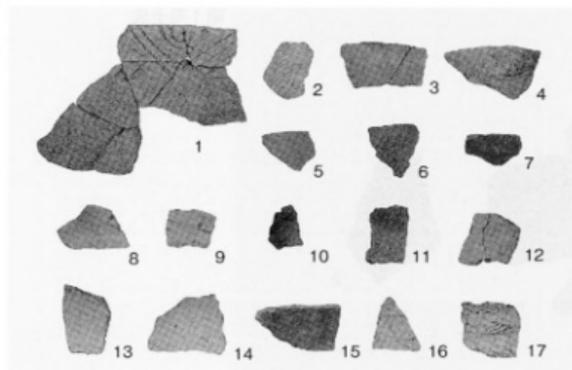
第4号竖穴遺構
及び遺構外出土土器(1)



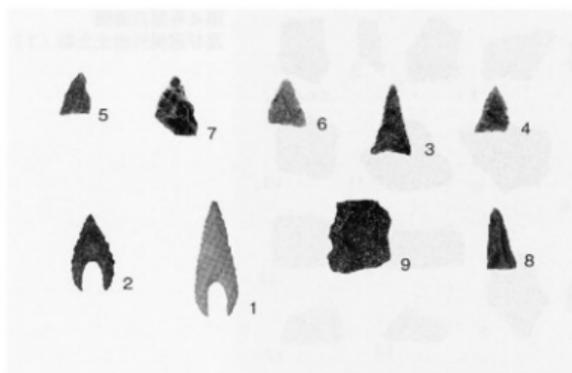
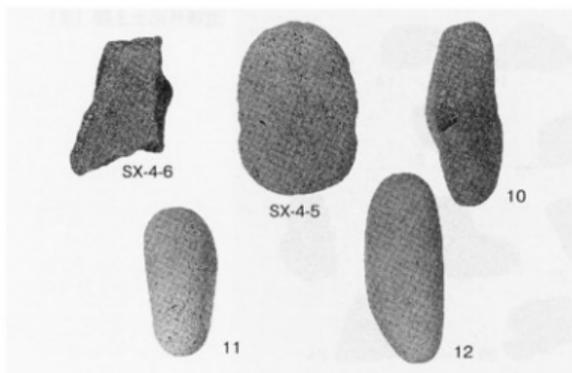
遺構外出土土器(2)



遺構外出土石器 (3)

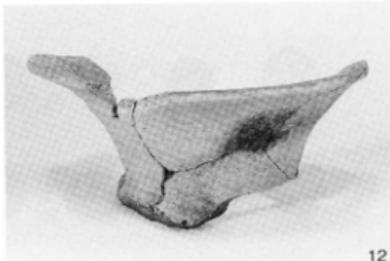


遺構外出土石器

遺構内及び
遺構外出土石器



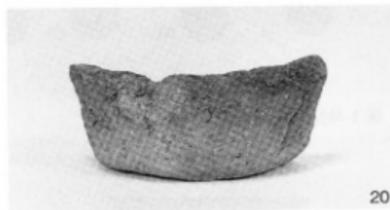
1



12



2



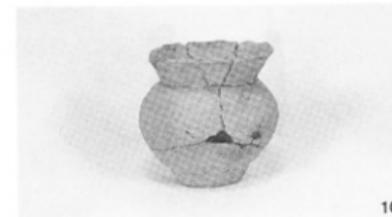
20



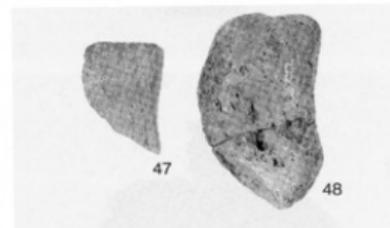
6



21

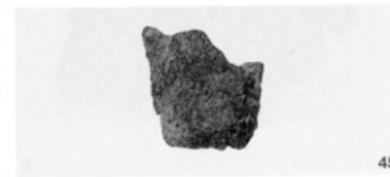


10



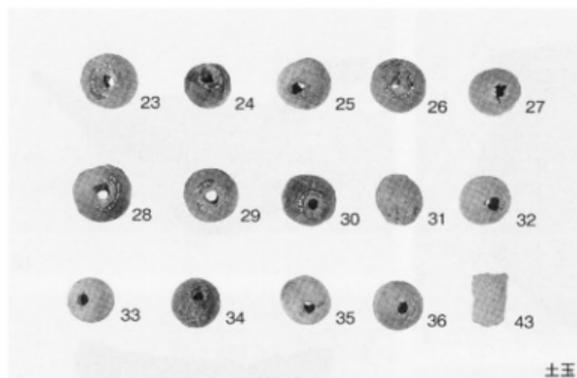
47

48



45

第1号住居跡出土遺物(1)



土玉

第1号住居跡出土遺物 (2)



44



1



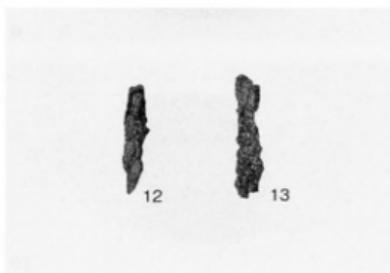
6



8



6



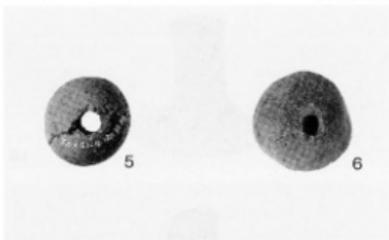
12

13

第2号住居跡出土遺物

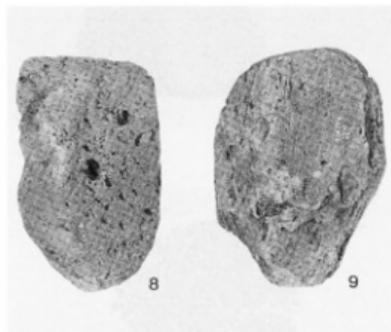


3



5

6



8

9



11



7

第4号住居跡出土遺物



1



3



9



14

第5号住居跡出土遺物 (1)



18



19

第5号住居跡出土遺物 (2)

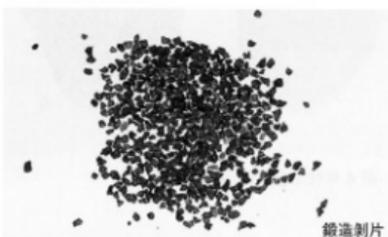


27



2

第6号住居跡出土遺物



鍛造剥片



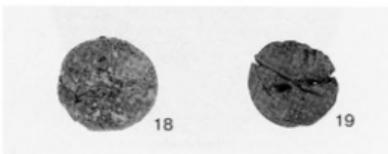
粒状滓

第7号住居跡出土遺物



9

第8号住居跡出土遺物 (1)



18

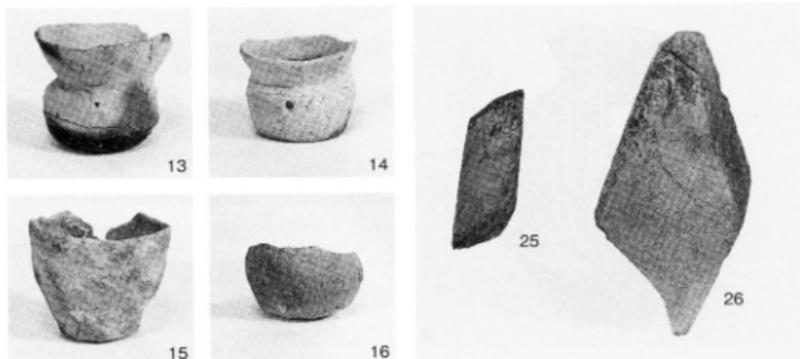
19



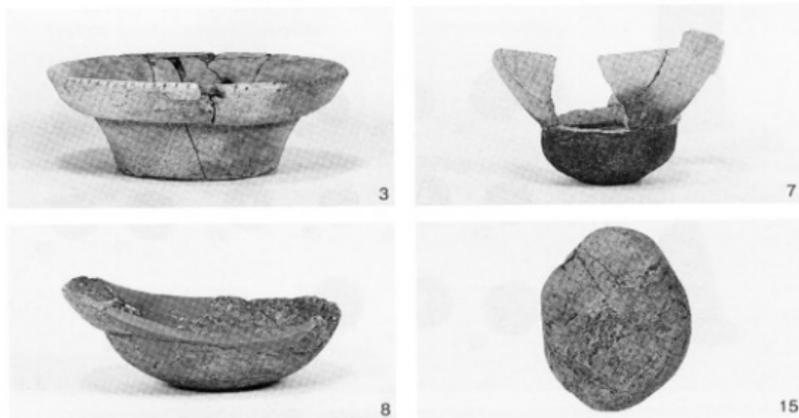
10



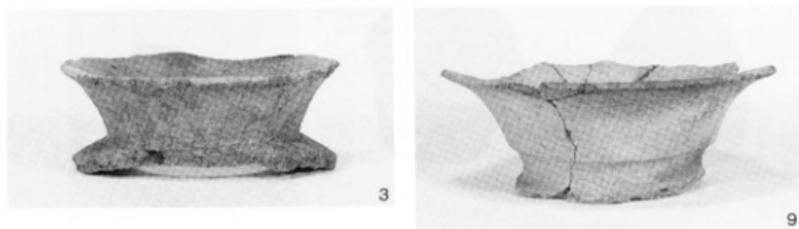
12



第8号住居跡出土遺物 (2)



第9号住居跡出土遺物



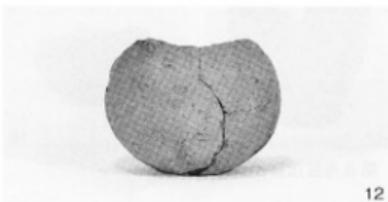
第10号住居跡出土遺物 (1)



8



11



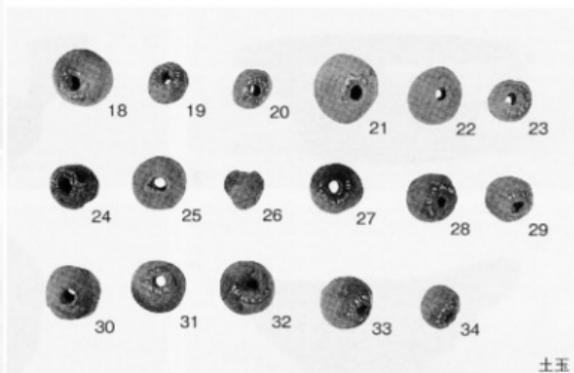
12



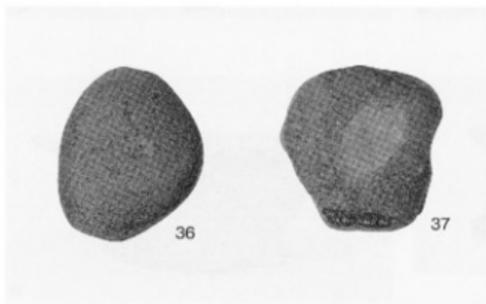
15



16

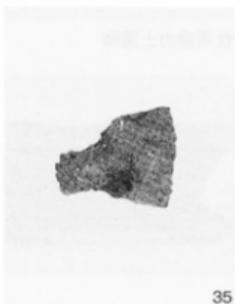


土五

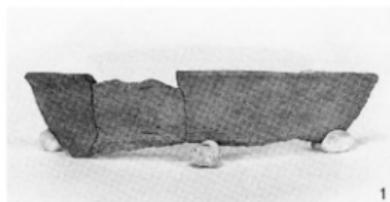


36

37



35



1



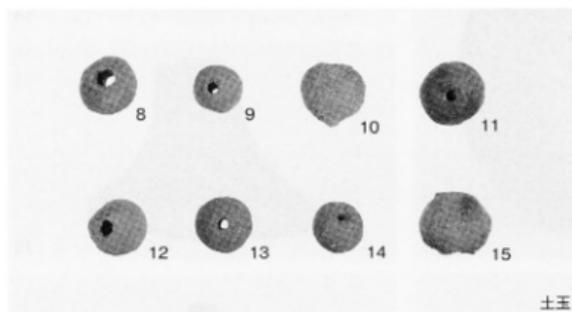
5



6



16



土玉

第12号住居跡出土遺物



1



5

第13号住居跡出土遺物 (1)



2



6



2 (底)



14



15



12



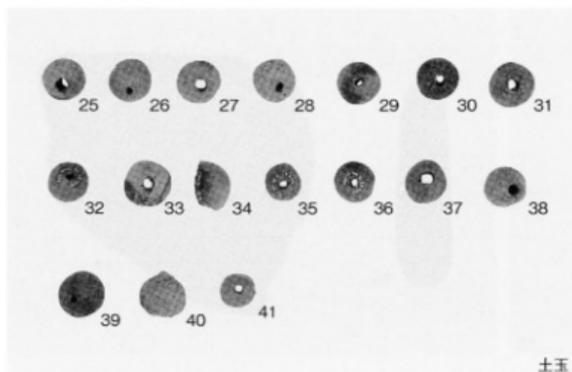
42



13



43



土玉

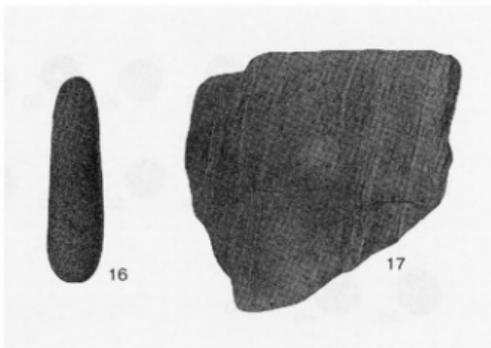
第13号住居跡出土遺物 (3)



第15号住居跡出土遺物 (1)



15



16

17

第15号住居跡出土遺物 (2)



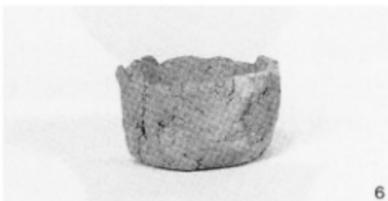
2



4



3



6



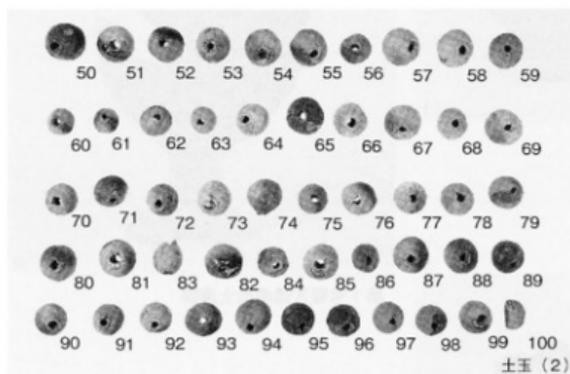
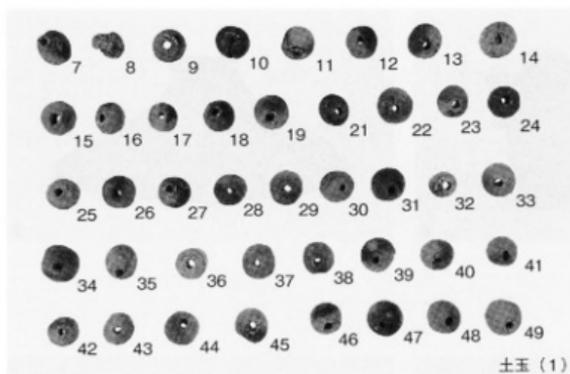
7



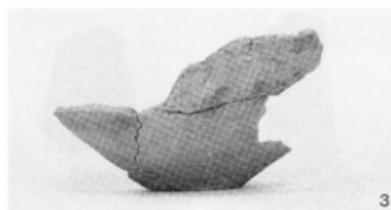
6

第18号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物 (1)

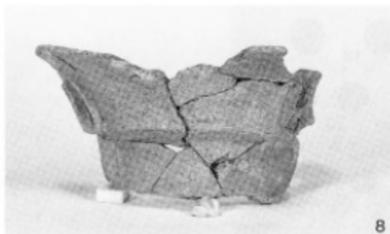


第19号住居跡出土遺物 (2)



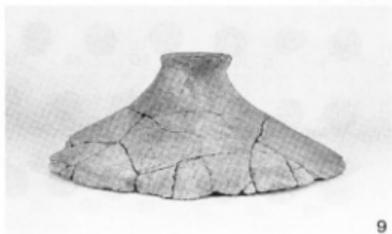
第22号住居跡出土遺物





8

第23号住居跡出土遺物

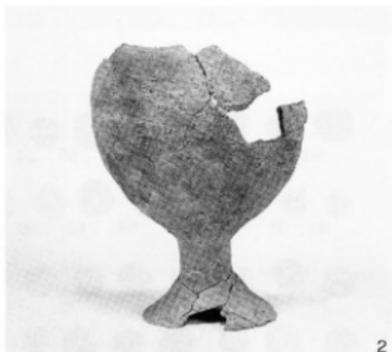


9



1

第24号住居跡出土遺物



2

第1号竖穴遺構出土遺物

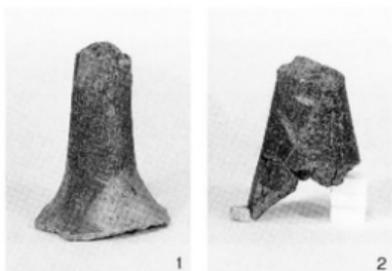


1



2

第1号据立柱建物跡出土遺物



1

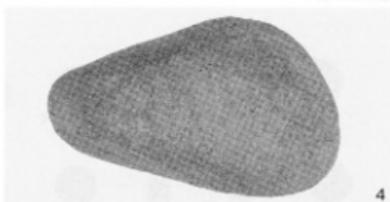
2

第2号据立柱建物跡出土遺物

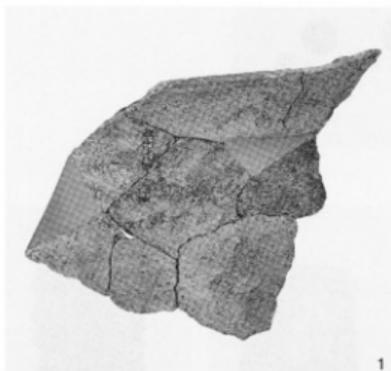


1

第3a号住居跡出土遺物



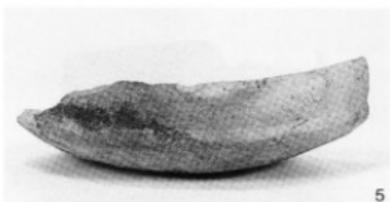
4



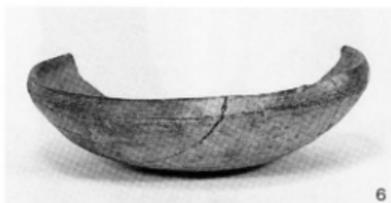
1



4



5



6



7

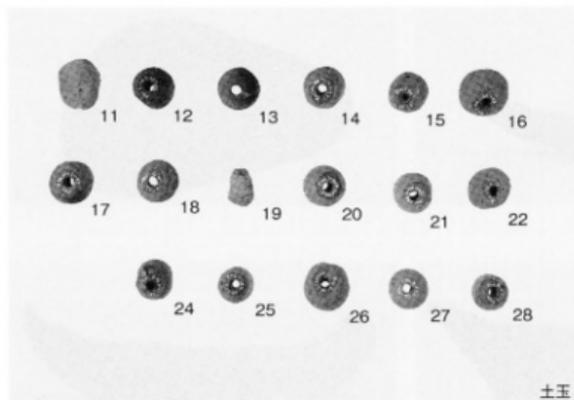


8



10

第11号住居跡出土遺物 (1)



土玉

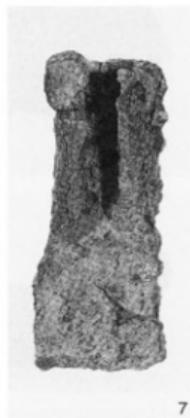
第11号住居跡出土遺物 (2)



1



6



7



4

第14号住居跡出土遺物



2



3

第17号住居跡出土遺物 (1)

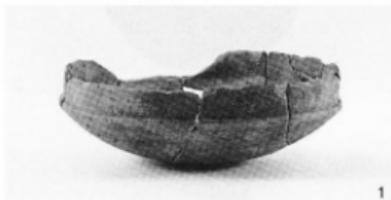


4

第17号住居跡出土遺物 (2)



13



1



5

第20号住居跡出土遺物



4



1

第1号土墳墓出土遺物



1

第1号火葬墓出土遺物 (1)



2

第1号火葬墓出土遺物 (2)



3



1

第2号火葬墓出土遺物



2

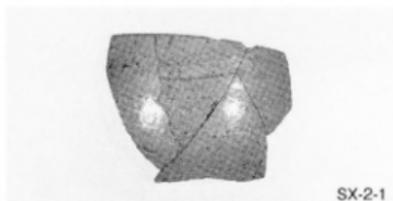


1

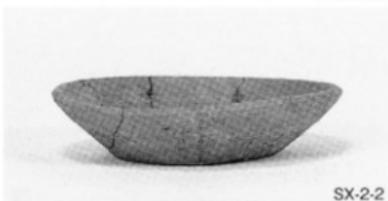
第3号火葬墓出土遺物



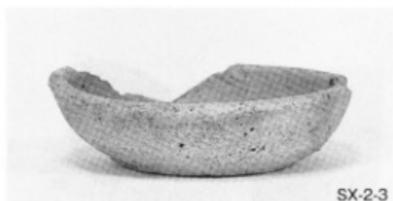
2



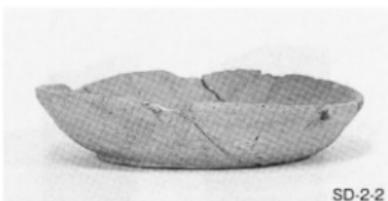
SX-2-1



SX-2-2



SX-2-3



SD-2-2



SX-2-6

SD-2-3

SD-2-4

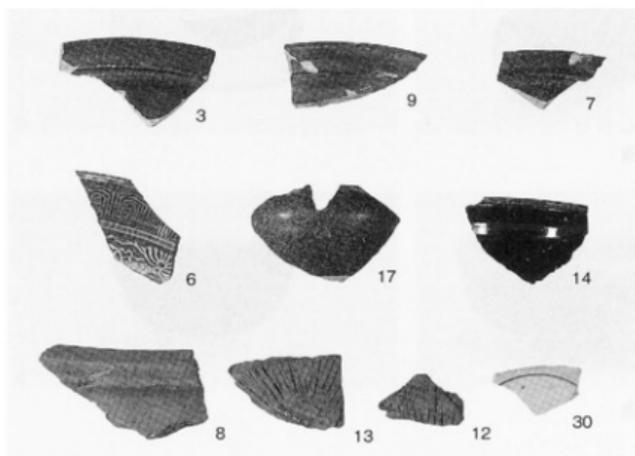
SD-2-5

SD-2等

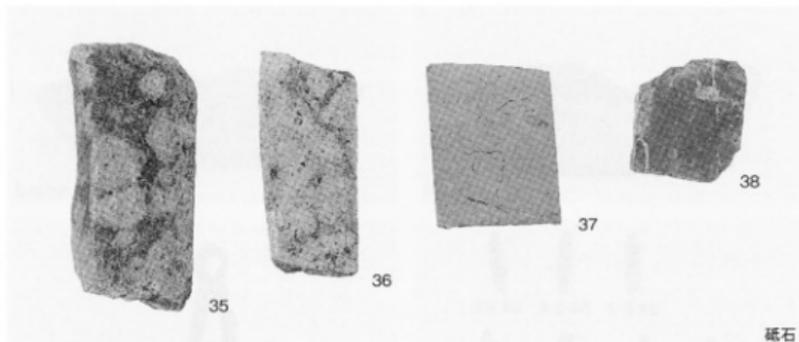


SD-2-6

第2号竖穴遺構・第2号溝跡出土遺物



第1号井戸跡出土遺物 (1)



砥石

第1号井戸跡出土遺物 (2)



第27号土坑出土遺物



第33号土坑出土遺物



報告書抄録

ふりがな	しりがえいせき							
書名	尻替遺跡							
副書名	田村・沖宿上地区面整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第10集							
シリーズ名								
編著者名	小松葉子 岡口 満 黒澤春彦 吉澤 悟 窪田恵一 福田礼子 小林孝秀							
編集機関	土浦市道路調査会							
問い合わせ先	〒300-0811 Iu029 (826) 7111 茨城県土浦市上高津1843番地 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内							
発行機関	土浦市教育委員会							
発行年月日	西暦2007年(平成19年)9月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ-ド 市町村	コ-ド 尾路番号	経緯度 北緯 東経		調査期間	調査面積	調査原因
尻替遺跡	土浦市沖宿町 字尻替2904 ほか	08203	442	36度 04分 44秒	140度 15分 44秒	1992 (平成4)年 2月12日～ 6月19日	約6,900㎡	土地区画整 理事業に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
尻替遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴遺構1基、土坑 2基		縄文土器、石器		本遺跡の中心は古墳時代 前期の集落跡である。その 中から鍛冶工房跡が1軒確 認された。県内の古墳時代 の鍛冶工房跡としては最も 古いものといえる。 このほか、平安時代には 墓域となり、火葬墓や土塋 墓により構成される。火葬 墓の1基には鉄製鋤先が埋 納されていた。	
		古墳時代	堅穴住居跡25軒(前期 30軒で内1軒は鍛冶工 房跡・後期5軒)、掘 立柱建物跡2棟など		土師器、土製品、 鍛冶関連遺物、鉄芥			
		平安時代	火葬墓3基、土塋墓 1基、土坑1基		須恵器、土師器、 黒書土器、鉄製鋤先			
		近世以降	掘立柱建物跡1棟、 堅穴遺構2基、井戸 跡1基、土坑27基など		陶磁器、土師質土器			
要約	<p>本遺跡から検出された遺構・遺物の中心は、古墳時代と平安時代そして近世であった。古墳時代には前期と後期の集落跡が形成され、前期の集落跡は堅穴住居跡や掘立柱建物跡と鍛冶工房跡などで構成される。特筆すべきは鍛冶工房跡の存在で、工房跡内に鍛冶がなどが設けられ、床面から採取した土の水洗い選別によって鍛冶断片や粒状滓が出土している。本遺構やその周辺からの鍛冶関連遺物の出土状況からすれば、小規模な鉄器生産がなされたものと考えられる。この鍛冶工房跡は県内でも最古例といえる。</p> <p>平安時代には火葬墓3基や土塋墓1基からなる墓域が形成される。火葬墓はいずれも須恵器の甕に火葬骨が納められ、この内の1基には鉄製鋤先が埋納されていた。また、土塋墓としたものは、土坑内に完形の土師器が埋納され、外面には「寺」墨書が見られる。</p> <p>近世には掘立柱建物跡や堅穴遺構、そして井戸跡などが検出され、全面的な配置が窺われる。これらの遺構は関連をもって存在していたものと考えられる。出土遺物として土師質土器小皿や瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗などが出土している。</p>							

屍替遺跡

— 田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第10集

発行日 2007年9月29日
編集 土浦市遺跡調査会
発行 土浦市教育委員会
問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 029 (826) 7111
印刷 朝あけぼの印刷社
